

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(63)

—— 新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 ——

S A N K A K U Y A M A

三角山遺跡群(2)

(三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡)

2004年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は新種子島空港建設に伴って鹿児島県立埋蔵文化財センターが行った三角山遺跡発掘調査の報告書です。

三角山遺跡は平成6年度から調査が行われ、縄文時代草創期・縄文時代早期の遺構・遺物の発見をはじめとして大きな成果をあげています。中でも縄文時代草創期の隆帯文土器や竪穴住居跡などについては全国的に注目を集めています。

本遺跡の所在する種子島は鉄砲伝来やロケット基地などで有名な島です。最近では南種子町の横峯遺跡、中種子町の立切遺跡などで3万年以上前の遺構・遺物が発見されて考古学的にも注目を集めているところでもあります。その中で本書が文化財をより深く理解していただくために活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にご理解とご協力をいただいた関係機関並びに発掘作業に従事された地元の方々に心から感謝いたします。

平成16年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 木原 俊孝

報 告 書 抄 録

ふ り が な		さんかくやまいせきぐん(2) (さんかくやまⅡ・Ⅲ・Ⅳいせき)						
書 名		三角山遺跡群(2) (三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡)						
副 書 名		新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻 次		第1集						
シ リ ー ズ 名		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第63集						
編 著 者 名		藤崎 光洋・大久保浩二・上床 真						
編 集 機 関		鹿児島県立埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地 1						
発 行 年 月 日		西暦2004年 1 月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
さんかくやまⅡいせき 三角山Ⅱ遺跡	かごしまけん 鹿児島県	46 80	59	30° 35′ 51″	130° 59′ 55″	19940509 ～	2600㎡ (Ⅱ)	新種子島 空港建設
さんかくやまⅢいせき 三角山Ⅲ遺跡	くまげけん 熊本県		60	30° 36′ 2″	130° 59′ 46″	19950321	200㎡ (Ⅲ)	
さんかくやまⅣいせき 三角山Ⅳ遺跡	なかつたねちよう 中種子町		61	30° 35′ 55″	131° 00′ 00″	19950508 ～	4000㎡ (Ⅳ)	
	すななかあざさんかくやま 砂中字三角山					19960318 ～ 19970506 ～ 19970924		
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構	主 な 遺 物			特記事項
三角山Ⅱ遺跡	遺物散布地	縄文時代早期		集石・土坑	吉田式土器・手向山式土器 ・妙見・天道ヶ尾式土器・ 平楸式土器・塞ノ神式土器 ・耳栓状土製品・石鏃・石 匙・スクレイパー・石皿・ 磨石・敲石 須恵器 ビール瓶・磨石			
三角山Ⅲ遺跡	遺物散布地	縄文時代早期		集石・土坑	土器・フレイク・礫器			
三角山Ⅳ遺跡	遺物散布地	縄文時代早期		集石・土坑	塞ノ神式土器・石鏃・スク レイパー・石皿・磨石・敲 石・円盤形穿孔石製品 春日式土器			
		縄文時代中期						

例 言

1. 本報告書は、平成7・8・10年度に鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略す）が鹿児島県土木部空港対策室の受託事業として実施した新種子島空港建設に伴う三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高に基づく。
3. 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
4. 遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修）2001年度版に従った。
5. 本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。土器は3分の1，須恵器は4分の1，石器については石鏃が原寸大，他の石器は特に大きなものを除いて基本的に3分の1とした。ただし，完形品の土器については2分の1とした。
6. 遺物の実測・製図は担当職員と整理作業員で行った。
7. 執筆は藤崎光洋と上床真が分担して行った。主として藤崎が石器を，上床が土器について執筆し，残りについては共同して執筆を行った。
8. 本報告書に使用した写真図版のうち，発掘調査の撮影は各年度の調査担当職員が行い，遺物撮影については鶴田静彦（埋文センター）と西園勝彦（埋文センター）が行った。
9. 出土した遺物は，報告書作成後，埋文センターで保管し，活用する予定である。

目 次

序文	1	第6節 D地点の調査	
報告書抄録	2	縄文時代早期(Ⅲ層)以降の調査	
遺跡位置図	3	(1) 遺構	44
例言	4	(2) 遺物	
目次	5	① 土器	53
第Ⅰ章 発掘調査の経過		② 石器	54
第1節 調査に至るまでの経過	8	第7節 E地点の調査	
第2節 調査の組織	8	縄文時代早期(Ⅲ層)の調査	
第3節 日誌抄	9	(1) 遺構	59
第4節 整理作業の概要	10	(2) 遺物	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境		① 土器	63
第1節 地理的・自然的環境	11	② 石器	69
第2節 歴史的環境	11	第8節 その他の調査	74
第3節 基本土層	15	第9節 小結	74
第Ⅲ章 発掘調査の概要		第Ⅴ章 三角山Ⅲ遺跡の調査	
第1節 確認調査の概要	16	第1節 概要	75
第2節 本調査の概要	20	第2節 層位	75
第3節 遺構・遺物の概要	20	第3節 縄文時代早期(Ⅲ層)の調査	
第Ⅳ章 三角山Ⅱ遺跡の調査		(1) 遺物	
第1節 概要	23	① 土器	75
第2節 層位	23	② 石器	75
第3節 A地点の調査		第4節 小結	75
縄文時代早期(Ⅲ層)以降の調査		第Ⅵ章 三角山Ⅳ遺跡の調査	
(1) 遺構	27	第1節 概要	78
(2) 遺物		第2節 層位	78
① 土器	29	第3節 縄文時代早期(Ⅲ層)の調査	
② 石器	29	(1) 遺構	78
第4節 B地点の調査		(2) 遺物	
1 縄文時代早期(Ⅲ層)の調査		① 土器	84
(1) 遺構	32	② 石器	100
(2) 遺物	32	第4節 縄文時代前期以降(Ⅱa層)他の調査	
① 土器	32	(1) 遺構	111
② 石器	32	第5節 小結	113
2 縄文時代前期以降(Ⅱa層)の調査		第Ⅶ章 科学分析結果	125
(1) 遺構	32	第Ⅷ章 まとめ	
第5節 C地点の調査		第1節 三角山Ⅱ遺跡	132
縄文時代早期(Ⅲ層)以降の調査		第2節 三角山Ⅲ遺跡	133
(1) 遺構	39	第3節 三角山Ⅳ遺跡	133
(2) 遺物		写真図版	135
① 土器	39	あとがき	161
② 石器	39		
③ 須恵器	39		

挿図目次

第1図	遺跡位置図	3	第47図	E地点の集石(3)	62
第2図	周辺遺跡位置図	13	第48図	E地点の集石(4)	63
第3図	土層柱状図	15	第49図	E地点遺物出土状況	64
第4図	三角山遺跡群(新種子島空港建設予定地)	17	第50図	E地点出土の土器(1)	65
第5図	三角山Ⅱ・Ⅳ遺跡トレンチ配置図	18	第51図	E地点出土の土器(2)	66
第6図	三角山Ⅲ遺跡トレンチ配置図	19	第52図	E地点出土の土器(3)	67
第7図	Ⅱ遺跡各地点配置図	23	第53図	E地点出土の土器(4)	68
第8図	土層断面図(1)	24	第54図	E地点出土の石器(1)	69
第9図	土層断面図(2)	25	第55図	E地点出土の石器(2)	70
第10図	土層断面図(3)	26	第56図	E地点出土の石器(3)	71
第11図	A地点遺構配置図	27	第57図	E地点出土の石器(4)	72
第12図	A地点の土坑	28	第58図	E地点出土の石器(5)・土師器	73
第13図	A地点遺物出土状況	29	第59図	Ⅲ遺跡土層断面図	75
第14図	A地点出土の土器	30	第60図	Ⅲ遺跡遺物出土状況	76
第15図	A地点出土の石器	31	第61図	Ⅲ遺跡出土の土器・石器	77
第16図	B地点遺構配置図	33	第62図	Ⅳ遺跡調査範囲	78
第17図	B地点の集石(1)・遺構内遺物	34	第63図	Ⅳ遺跡土層断面図(1)	79
第18図	B地点の集石(2)	35	第64図	Ⅳ遺跡土層断面図(2)	80
第19図	B地点遺物出土状況	36	第65図	Ⅳ遺跡遺構配置図	81
第20図	B地点縄文時代前期以降の集石・土坑	37	第66図	Ⅳ遺跡の集石(1)	82
第21図	B地点出土の石器(1)	37	第67図	Ⅳ遺跡の集石(2)	83
第22図	B地点出土の石器(2)	38	第68図	Ⅳ遺跡の集石(3)	84
第23図	C地点遺構配置図	39	第69図	Ⅳ遺跡遺物出土状況(土器)	85
第24図	C地点の集石	40	第70図	Ⅳ遺跡遺物出土状況(石器)	86
第25図	C地点の土坑	41	第71図	Ⅳ遺跡出土の土器(1)	87
第26図	C地点遺物出土状況	41	第72図	Ⅳ遺跡出土の土器(2)	88
第27図	C地点出土の土器・石器	42	第73図	Ⅳ遺跡出土の土器(3)	89
第28図	C地点出土の須恵器	43	第74図	Ⅳ遺跡出土の土器(4)	90
第29図	D地点遺構配置図	44	第75図	Ⅳ遺跡出土の土器(5)	91
第30図	D地点遺物出土状況(土器)	45	第76図	Ⅳ遺跡出土の土器(6)	92
第31図	D地点遺物出土状況(石器)	46	第77図	Ⅳ遺跡出土の土器(7)	93
第32図	D地点の集石	47	第78図	Ⅳ遺跡出土の土器(8)	94
第33図	D地点の近代環状土坑・遺構内遺物(1)	48	第79図	Ⅳ遺跡出土の土器(9)	95
第34図	D地点の遺構内遺物(2)	49	第80図	Ⅳ遺跡出土の土器(10)	96
第35図	D地点出土の土器(1)	50	第81図	Ⅳ遺跡出土の土器(11)	97
第36図	D地点出土の土器(2)	51	第82図	Ⅳ遺跡出土の土器(12)	98
第37図	D地点出土の土器(3)	52	第83図	Ⅳ遺跡出土の土器(13)	99
第38図	D地点出土の石器(1)	53	第84図	Ⅳ遺跡出土の石器(1)	100
第39図	D地点出土の石器(2)	54	第85図	Ⅳ遺跡出土の石器(2)	101
第40図	D地点出土の石器(3)	55	第86図	Ⅳ遺跡出土の石器(3)	102
第41図	D地点出土の石器(4)	56	第87図	Ⅳ遺跡出土の石器(4)	103
第42図	D地点出土の石器(5)	57	第88図	Ⅳ遺跡出土の石器(5)	104
第43図	D地点出土の石器(6)	58	第89図	Ⅳ遺跡出土の石器(6)	105
第44図	E地点遺構配置図	59	第90図	Ⅳ遺跡出土の石器(7)	106
第45図	E地点の集石(1)	60	第91図	Ⅳ遺跡出土の石器(8)	107
第46図	E地点の集石(2)	61	第92図	Ⅳ遺跡出土の石器(9)	108
			第93図	Ⅳ遺跡出土の石器(10)	109
			第94図	Ⅳ遺跡出土の石器(11)	110

第95図	Ⅳ遺跡縄文時代前期以降の集石	111
第96図	Ⅳ遺跡縄文時代前期以降の土坑	112
第97図	Ⅳ遺跡縄文時代出土の土器（14）	113
第98図	年代分析の結果を参考にした土器の変遷	133

表目次

第1表	周辺遺跡地名表	14
第2表	確認トレンチ結果表	19
第3表	A地点縄文時代前期以降の土坑観察表	28
第4表	B地点縄文時代早期・前期以降の 集石観察表	37
第5表	B地点縄文時代前期以降の土坑観察表	37
第6表	C地点縄文時代早期の集石観察表	41
第7表	C地点縄文時代前期以降の土坑観察表	41
第8表	D地点縄文時代早期の集石観察表	49
第9表	D地点近代の土坑観察表	49
第10表	E地点縄文時代早期の集石観察表	74
第11表	Ⅳ遺跡縄文時代早期・前期以降の 集石観察表	114
第12表	Ⅳ遺跡縄文時代前期以降の土坑観察表	114
第13表	土器観察表	115
第14表	石器観察表	120

写真図版目次

図版1	Ⅱ遺跡確認調査1トレンチ Ⅱ遺跡確認調査6トレンチ Ⅱ遺跡確認調査7トレンチ Ⅱ遺跡確認調査7トレンチ Ⅱ遺跡確認調査8トレンチ土層断面	135
図版2	Ⅱ遺跡確認調査10トレンチ Ⅱ遺跡確認調査11トレンチ Ⅱ遺跡確認調査17トレンチ Ⅱ遺跡確認調査43トレンチ Ⅱ遺跡確認調査32トレンチ土層断面	136
図版3	A地点土層断面 A地点近代環状土坑	137
図版4	A地点Ⅰ層検出土坑3 A地点完掘状況	138
図版5	B地点Ⅲ層遺物出土状況 B地点3号集石（配石遺構）	139
図版6	B地点Ⅲ層検出土坑1（1） B地点Ⅲ層検出土坑1（2）	140
図版7	C地点Ⅲ層遺物出土状況 D地点土層断面	141
図版8	D地点近代環状土坑 D地点Ⅲ層遺物出土状況（1） D地点Ⅲ層遺物出土状況（2）	

	D地点Ⅲ層土器出土状況 D地点Ⅲ層石斧出土状況	142
図版9	D地点1号集石 D地点3号集石	143
図版10	E地点Ⅲ層遺物出土状況 E地点1・2・5号集石	144
図版11	Ⅱ遺跡出土の土器（1）	145
図版12	Ⅱ遺跡出土の土器（2）他	146
図版13	Ⅱ遺跡出土の石器（1）	147
図版14	Ⅱ遺跡出土の石器（2）	148
図版15	Ⅲ遺跡発掘作業風景 Ⅲ遺跡完掘状況	149
図版16	Ⅲ遺跡出土の土器・石器	150
図版17	Ⅳ遺跡調査前の状況 Ⅳ遺跡トレンチ作業風景 Ⅳ遺跡土器出土状況（1） Ⅳ遺跡土器出土状況（2） Ⅳ遺跡発掘作業風景	151
図版18	Ⅳ遺跡1号集石 Ⅳ遺跡8号集石	152
図版19	Ⅳ遺跡出土の土器（1）	153
図版20	Ⅳ遺跡出土の土器（2）	154
図版21	Ⅳ遺跡出土の土器（3）	155
図版22	Ⅳ遺跡出土の石器（1）	156
図版23	Ⅳ遺跡出土の石器（2）	157
図版24	Ⅳ遺跡出土の石器（3）	158
図版25	Ⅳ遺跡出土の石器（4） 発掘作業員（平成7年度）	159
図版26	三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡全景（空撮）	160

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会文化課（以下県文化課）は、埋蔵文化財の保護・活用を図るため、工事着手前に当該事業区内における埋蔵文化財の有無、およびその取り扱いについて各開発関係機関と協議し諸開発との調整を行っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部空港対策室（以下空港対策室）は、熊毛郡中種子町砂中地内において、新種子島空港建設を計画し、工事予定地内の埋蔵文化財の有無について県文化課（平成8年4月以降県文化財課）に照会した。これを受けて文化課は、平成2年4月に工事予定地内の分布調査を実施したところ、土器片等の遺物の散布がみられた。これらが三角山Ⅰ遺跡、三角山Ⅱ遺跡であるが、ほかに分布調査不可能地でその後確認調査の実施が必要な区域6箇所が確認された。

分布調査の結果を受けて、空港対策室、熊毛支庁土木課、県文化課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）で遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、対象地域内の遺跡を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することになった。

調査は、まずはじめに三角山Ⅰ遺跡から行われた。最初の確認調査は平成7年1月23日から行われ、予定地内において遺跡が残存していることが確認された。そこで、空港対策室、熊毛支庁土木課、県文化課、埋文センターは再度協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための発掘調査（本調査）を実施することとなった。その結果緊急度の高いと判断された地点から一部本調査に切り替えて3月24日まで調査が行われた。

第2節 調査の組織

1 発掘調査の組織

事業主体者 鹿児島県土木部空港対策室（熊毛支庁土木課空港対策室）
調査主体者 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化課（平成7年度）
・文化財課（平成8年度から）
調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 内村 正弘（平成7年度）
吉元 正幸（平成8・9年度）
吉永 和人（平成10・11年度）
井上 明文（平成12～14年度）

調査企画者

次長兼総務課長 川原 信義（平成7年度）
尾崎 進（平成8～10年度）
黒木 友幸（平成11～13年度）
田中 文雄（平成14年度）
調査課長 戸崎 勝洋（平成7～11年度）
新東 晃一（平成12～14年度）
課長補佐 新東 晃一（平成8年度）
立神 次郎（平成12～14年度）
課長補佐兼第一調査係長 新東 晃一（平成9～11年度）
主任文化財主事兼第一調査係長 青崎 和憲（平成12・13年度）
池畑 耕一（平成14年度）
主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎（平成8年度）
主任文化財主事 新東 晃一（平成7年度）
青崎 和憲（平成10年度）
中村 耕治（平成11～14年度）

調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 井ノ上秀文（平成7年度）
大久保浩二（平成8・10～13年度）
藤崎 光洋（平成14年度）
文化財研究員 大久保浩二（平成7年度）
中原 一成（平成7年度）
中村 和美（平成8・9年度）
前田 誠（平成9年度）
桑波田武志（平成10年度）
西園 勝彦（平成11年度）
菅牟田 勉（平成12年度）
上床 真（平成13～14年度）

調査事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

総務係長 有村 貢（平成11・12年度）
前田 昭信（平成13・14年度）
主査 成尾 雅明（平成7～9年度）
前屋敷裕徳（平成8～10年度）
政倉 孝弘（平成9・10年度）
主事 追立ひとみ（平成7～9年度）
溜池 佳子（平成10年度）

2 報告書作成事業の組織

事業主体者 鹿児島県土木部空港対策室（熊毛支庁土木課空港対策室）
調査主体者 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井上 明文（平成13・14年度）
木原 俊孝（平成15年度）

調査企画者

次長兼総務課長 黒木 友幸（平成13年度）
田中 文雄（平成14・15年度）
主任文化財主事兼調査課長
新東 晃一（平成13～15年度）
課長補佐 立神 次郎（平成13～15年度）
主任文化財主事兼第一調査係長
青崎 和憲（平成13年度）
池畑 耕一（平成14・15年度）

調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 大久保浩二（平成13年度）
藤崎 光洋（平成14・15年度）
文化財研究員 上床 真（平成13～15年度）
調査事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長 前田 昭信（平成13・14年度）
平野 浩二（平成15年度）
主査 栗山 和己（平成13・14年度）
主事 池 珠美（平成13～15年度）
福山恵一郎（平成15年度）

報告書作成検討委員会

平成15年10月15日 所長ほか8名

報告書作成指導委員会

平成15年10月6日 調査課長ほか5名

企画担当者 黒川 忠広

第3節 日誌抄

調査の経過は日誌抄により以下略述する。調査指導者等の所属については当時のものとした。

◎ 平成6年度

<1月～3月> 1月24日Ⅰ遺跡及び①地点の確認調査開始。3月24日調査終了。

調査指導／成尾英仁（串木野高校教諭・2月24日）

◎ 平成7年度

<5月～6月> 10日から調査開始。Ⅰ遺跡の調査。確認調査。

<7月> Ⅰ遺跡の確認調査。

Ⅱ遺跡の調査。トレンチを設定し、確認調査を行う。

Ⅲ遺跡の調査。5月からの確認調査の結果、③地点を「三角山Ⅲ遺跡」と改称、引き続き本調査に入る。航空写真撮影（26日）（調査終了）

<8月> Ⅰ・Ⅱ遺跡の確認調査。

空港建設に伴う県道改良事業予定地（P地点）の分布調査実施。

成尾英仁（串木野高校教諭）・杉山真二（古環境研究所）来跡。（22・23日）

<9月> Ⅱ遺跡の確認調査。

<10月> Ⅱ遺跡・⑥地点（三角山Ⅳ遺跡）の確認調

査。

<11月> Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡・Ⅳ遺跡の確認調査。

調査指導／岡村道雄（文化庁記念物課主任調査官・7日・8日）

<12月> Ⅱ遺跡の調査。7月からの確認調査に引き続き本調査に入る。

○A地点 Ⅲ～Ⅴ層までの調査。磨製石鏃出土。

○B地点 Ⅲ～Ⅴ層までの調査。

○C地点 表土剥ぎ。

○D地点 Ⅲ層までの調査。打製石鏃出土。

Ⅳ遺跡の確認調査。

④地点・⑤地点の確認調査。遺構・遺物なし。

<1月> Ⅱ遺跡の調査。

○A地点 Ⅲ層～A T層までの調査。塞ノ神式土器出土。炭化物のある土坑検出。

○B地点 L-8・9区、K-9区Ⅲ層掘り下げ。局部磨製石鏃出土。集石・土坑検出。土層断面実測。

○D地点 Ⅲ層の調査。塞ノ神式土器出土。

<2月> Ⅱ遺跡の調査。

○A地点 土層断面実測。土坑底面に炭化した杭のあるピット発見。

○B地点 土坑底面でピット発見。

○C地点 Ⅲ層の調査。土坑（古代～中世）・集石発見。土層断面実測。

○D地点 N-4～6区のⅢ層～A T層の調査。近代環状土坑内から『キリンビール』の文字が書かれたビール瓶出土。

①地点の詳細分布調査。遺物なし。

②地点の確認調査開始。

調査指導／河口貞徳（鹿児島県考古学会会長・13・14日） 上村俊雄（鹿児島大学・27・28日）

<3月> Ⅱ遺跡の調査。

○A地点 土坑写真撮影。土層実測。

○C地点 集石実測。土層断面実測。拡張区の表土剥ぎ及び掘り下げ。須恵器出土。

○D地点 集石実測。土層断面実測。

②地点の確認調査終了。遺物なし。

暴風雨でプレハブ近くの電柱に落雷、停電。（15日）平成7年度の調査終了。（21日）

◎ 平成8年度

<5月～10月> 7日荷物搬入。9日からⅠ遺跡の調査開始。

<11月> Ⅰ遺跡の調査。

Ⅳ遺跡の調査。Ⅰ遺跡からプレハブを移動し、21日から調査開始。

<12月> D-7～10区 Ⅲ層の調査。磨石・石鏃・苦浜式土器出土。集石発見。E-7～8区 Ⅲ層の調査。磨製石鏃・台石・磨石出土。

調査指導／小林達雄（國學院大學・13日）

<1月> IV遺跡の調査と平行して、II遺跡E地点の調査を29日より開始。

○IV遺跡 D-10区、E・F-6区 II・III層の調査。苦浜式土器出土。集石実測。D-6区、E-9・10区、F-7・8区 IIa・III層の調査。石鏃・春日式土器出土。集石検出および実測。航空写真撮影（30日）

○II遺跡E地点 重機による表土剥ぎ取り。III層の調査。集石6基発見。

<2月> ○IV遺跡 D-7～10区、E・F・G-6区、E-7～10区、F-8区 III・IV層の調査。土坑発見。集石実測。土層断面実測。

○II遺跡E地点 P・Q-5・6区III層の調査。磨石・石匙出土。集石実測。

<3月> ○IV遺跡 E・F-7区、D-8区の調査。土坑および集石実測。

○II遺跡E地点 埋め戻し。

平成8年度の調査終了。（IV遺跡の調査終了）（18日）
調査指導／今津節生（奈良県立橿原考古学研究所・4～7日）

◎ 平成9年度

<4月> 21日調査開始。I遺跡の確認調査のみ。

◎ 平成10年度

<5月> 6日調査開始。I遺跡の調査。

<7月> I遺跡の調査と平行して、II遺跡E地点の調査を2日から開始。

<8月> I遺跡の調査。

II遺跡の調査。集石実測。一部埋め戻し。

中種子町少年団20名発掘体験。（10日）

<9月> I遺跡の調査。

II遺跡の調査。集石実測。

平成10年度の調査終了。（II遺跡の調査終了）（24日）

◎ 平成11年度～14年度

I遺跡の調査のみ。

第4節 整理作業の概要

1 報告書作成業務の経緯

三角山II・III・IV遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については、平成6年度から平成14年度の発掘作業中に、遺物の水洗・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成13・14年度に実施した。整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成13年4月～平成15年3月まで行った。

2 発掘調査および報告書作成業務従事者

（1）発掘作業従事者

秋田 了 朝熊昭一 阿比留ニジ子 有馬喜美枝

新 文江 有留香代子 池田憲三 石堂文子 磯俣美千代
岩崎スミ子 岩屋三男 牛原 忍 宇都美子 浦辺君江
榎原美樹 遠藤京子 遠藤松代 大坪用子 大山勇一
尾方教子 奥田和子 奥田直治 奥村アイ子 奥村圭一
門之園瀬津子 鎌田イツエ 鎌田加奈子 鎌田みち子
上敷領重俊 神近さち子 上村フユ子 川下広子
北園幸広 木原慎二 木原桃子 金城京子 金城サエ子
久木原幸子 久木原フサ子 隈崎タエ子 黒田キリ子
桑原一欽 小山田タミ 坂本盛安 笹川玲子 阪上修司
佐々木歌子 下平アツ子 城木峯子 末吉孝一 関 憲子
園田エツ 揃 昭雄 武田みどり 玉城みどり 月野イツ子
政 洋一 遠矢紀三枝 戸田和代 戸畑多要子 豊 コノエ
長田よし子 長野テイ 中村武雄 中村 忠 中島タカエ
中馬隆信 成 京子 西田和子 沼田民江 野辺ます子
昇 篤四郎 萩原良則 橋野いづ子 橋野さつえ
橋野奈々子 蓮子よし子 畠中栄子 林 昭代 馬場常子
馬場フミ子 馬場 勝 羽生イツ子 濱田 勝 春田政子
春田光男 日高カズエ 日高誠子 日高平太郎
深田スミエ 福 シヅ 藤原ナラ子 古市靖子 古田辰夫
本鍋田敏子 前田昭人 前田カツ子 前田幸子 牧瀬君代
牧元ソノ 松下国夫 松下友子 松下弘子 松田スヤ子
真戸原幸子 松原育代 峯下久美子 峯下ナミ子
美坐まち子 三原オリ子 向井一男 向井トシ子
武藤奈美枝 村添智代 森口瑤子 八木タエ 山口みつ子
山口由美子 山下早苗 山下数代 山本早志 吉留千恵美
吉永良秀 和田則子 和田満博

（2）報告書作成従事者

市蘭厚子 岡部安代 川路加代子 木村仁美
川東美登里 北上千津子 齊藤千鶴 四丸久美子
鶴みつ子 中村ひろみ 篠原香代子 末廣みゆき
西 清子

（3）報告書作成の過程でお世話になった方々

石堂和博 石原啓子 井ノ上秀文 上杉彰紀
大久保浩二 沖田純一郎 梶畑光博 迫田かおり
佐藤亜星 重留康宏 菅牟田勉 角南聡一郎
立神勇志 田平祐一郎 徳田有希乃 野平裕樹
深野信行

<50音順>

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・自然的環境

三角山遺跡群の所在する種子島は、佐多岬から南東に約40kmの海上に位置しており、鹿児島県内の離島としては甑島と並んで鹿児島県本土に近い。また、開聞岳からは約60km、屋久島からは約20kmの位置にあり、それぞれ目視が可能である。

この周辺は黒潮が対馬海流と分かれる所で、太古の昔からさまざまな物がうち寄せられてきたと考えられる。有名なところではポルトガル人漂着による鉄砲伝来、ドラメルタン号救助の返礼としてのインギー鶏伝来などがあげられる。面積は447.09km²、南北約50km、幅0.6～12kmの細長い島で、北から西之表市・中種子町・南種子町の1市2町がある。

種子島の地形は、丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地から成っている。島の最高点は西之表市古田十三番と中種子町との境界付近で、標高282.3mである。その中で中種子町は海岸面に緩やかな丘陵を呈し、北部はほとんどが山林地帯である。ちなみに三角山遺跡が所在する地点も島内では5指に入るほど標高の高い地点である。

種子島北部の基盤岩としては古第3期の熊毛層群が広く分布している。主に砂岩・頁岩・砂岩頁岩互層からなり、一般に走向は島軸とほぼ平行で、北西方向へ急角度で傾斜している。海岸段丘はこの熊毛層群を浸食して発達している。三角山遺跡群周辺は砂岩優勢で遺跡の基盤となっている。その上を新第3紀中新世の茎永層群（田代層・河内層・大崎層）が中部以南を中心に不整合に覆っている。鮮新世～更新世の増田層は中種子町から南種子町にかけて分布し、更新世の竹之川層は中種子町の西海岸沿いに分布している。また、西之表市住吉の形之山には、ナウマンゾウや豊富な魚類・植物化石を産する中期～後期更新世の形之山層がみられる。なお、北部を除いた海岸沿いは、古期および新期の厚い砂丘堆積物によって覆われている。

火山噴出物としては、中期～後期更新世と考えられる小瀬田火砕流堆積物や約10万年前の阿多火砕流堆積物が点々と分布し、約8万年前の西之表テフラ（＝西之表火砕流・西之表軽石）が全島の広い範囲に分布している。さらに、これらを覆って種Ⅰ～Ⅳ火山灰・A・T火山灰・アカホヤ火山灰等が堆積している。

三角山遺跡群は、鹿児島県熊毛郡中種子町砂中・十八番ほかに所在する。西之表市十六番に隣接する町の北端部にあたる。先述したが、この周辺は種子島で最も標高の高い地域である。その中でも三角山Ⅰ遺跡は標高約240mで太平洋と東シナ海との東西分水嶺にあ

たる。また、この遺跡から南東方向に谷を越えた台地上に三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡が存在する。三角山遺跡群の所在する台地にはいくつかの小さな谷が入り、いわゆる「八つ手状」を呈しており、尾根部分を中心とした生活が営まれたことが想定される。

なお、〇〇番という地名は県道76号（主要地方道西之表・中種子線、地元では「なかせん」と呼ばれる）建設時に付けられた地名で、それ以前もしくは開拓前にはほとんど人家はなく、周辺が牧とされたぐらいであり人々の生活がみられる場所ではなかったという。ただし、特に十八番のあたりは第2次世界大戦中に兵舎があったという記録があり、これに関連して高射砲の基礎が残っている。現在は三角山Ⅰ遺跡に隣接する西之表市十六番には集落がみられ、多くの人々が居を構えている。

第2節 歴史的環境

種子島では旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が発見されている。

旧石器時代では、南種子町の横峯C遺跡で種Ⅲ火山灰（約4万年以上前に堆積）と種Ⅲ火山灰（約3万年以上前に堆積）の間の層で礫群が発見されている。また、中種子町立切遺跡でもほぼ同じ状況でファイヤーピットなど生活に関係すると考えられる遺構も発見されており、当該時期の様相が注目される。

三角山Ⅰ遺跡（P地点）では旧石器時代末期～縄文時代草創期の時期のものとみられる細石核が出土しているが、大中峯遺跡（西之表市）・湊遺跡（西之表市）・立切遺跡（中種子町）・銭亀遺跡（南種子町）に続いて島内で5か所目の発見例となった。

縄文時代では、特に西之表市の奥ノ仁田遺跡で発見された縄文時代草創期の遺構・遺物が注目される。ここでは隆帯文土器が大量に出土しており、南九州圏の縄文文化が早くから栄えていたことを示している。平成11年3月には県の文化財に指定された。また、西之表市安城の鬼ヶ野遺跡でも、縄文時代草創期の竪穴住居遺構が多量の石鏃・隆帯文土器と共に発見されている。この時期の竪穴住居遺構は県内でもきわめて発見例が少なく、注目される場所である。なお、島内では草創期の遺跡が数か所確認されているが、三角山Ⅰ遺跡でも同時期の竪穴住居遺構が発見され、周辺から多くの隆帯文土器が出土している。

早期の遺跡は数多く存在しており、三角山遺跡群近隣の遺跡を挙げると、前葉では前平式土器出土の中平寺遺跡（中種子町）・吉田式土器・倉園B式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器出土の日守A・B・C遺跡（西之表市）・今平・清水遺跡（中種子町）がある。なお、三角山Ⅰ遺跡でも石坂式土器が出土しており、

この土器文化が少なくとも種子島まで及んでいたことがわかる資料である。中葉では下剥峯式土器の標識遺跡である下剥峯遺跡（西之表市）、後葉では塞ノ神式土器出土の牛之原遺跡（中種子町）・苦浜式土器出土の苦浜貝塚（中種子町）・横峯遺跡（南種子町）などがある。

前期では轟式土器出土の下剥峯遺跡（西之表市）・大園遺跡（中種子町）、曾畑式土器出土の二十番遺跡（中種子町）・千草原遺跡（同）などがある。

中期では春日式土器出土の宮田遺跡（中種子町）があるが、この時期は資料数・遺跡数ともに少ない。後期では指宿式土器出土の梶ノ本遺跡（中種子町）・大園遺跡（同）、市来式土器や丸尾式土器・一湊式土器出土の奥嵐遺跡（西之表市）などがある。そのなかで特に注目されるのは藤平小田遺跡（南種子町）で、66基の配石遺構が発見され、環状列石の可能性も指摘されている。

上記の縄文時代の各時期の土器については三角山遺跡群でもおおそ出土しており、縄文時代草創期の隆帯文土器、縄文時代早期の吉田式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器、縄文時代前期の轟式土器・曾畑式土器、縄文時代中期の春日式土器などがみられる。

弥生時代から古墳時代にかけては、縄文時代晩期から弥生時代にかけての生活跡である阿嶽洞穴（中種子町）、後期から弥生時代後半～古墳時代初頭の上能野式土器の標識遺跡で埋葬遺跡でもある上能野貝塚（西之表市）・鳥ノ峯遺跡（中種子町）などがある。特に広田遺跡（南種子町）は古代中国の青銅器に施されたものに酷似した文様をもつ貝札が出土し、全国的に著名な埋葬遺跡である。他に上能野式土器が多く出土した遺跡としては嶽ノ中野B遺跡（西之表市）がある。なお、この時代の集落跡については島内では未だ発見されていないようである。

古代では西俣遺跡（西之表市）があり、灰釉陶器を用いた蔵骨器と越州窯青磁・長沙窯青磁が出土している。天長7年（824）までは、種子島・屋久島周辺を含めた多嶺国が置かれていたので、国府（嶋府）・国分寺（嶋分寺）も種子島に置かれていたことが考えられる。その所在地については諸説あり解明に至っていないが、これらの出土品から中央に関係する人物の存在が考えられる。

また、この時期の遺跡としては他に松原遺跡（南種子町）があり、越州窯系青磁・須恵器・土師器が出土している。初期輸入陶磁器が出土する地域としては種子島が日本最南端であり、古代の様相を考えるうえでこれらの遺跡は注目される場所である。

中世では前半から後半にかけての遺構・遺物が発見された大園遺跡（中種子町）、後半の土師器等の遺物

が多く出土した本村丸田遺跡（南種子町）、中世後半の遺構・遺物が発見された藤平小田遺跡（南種子町）がある。

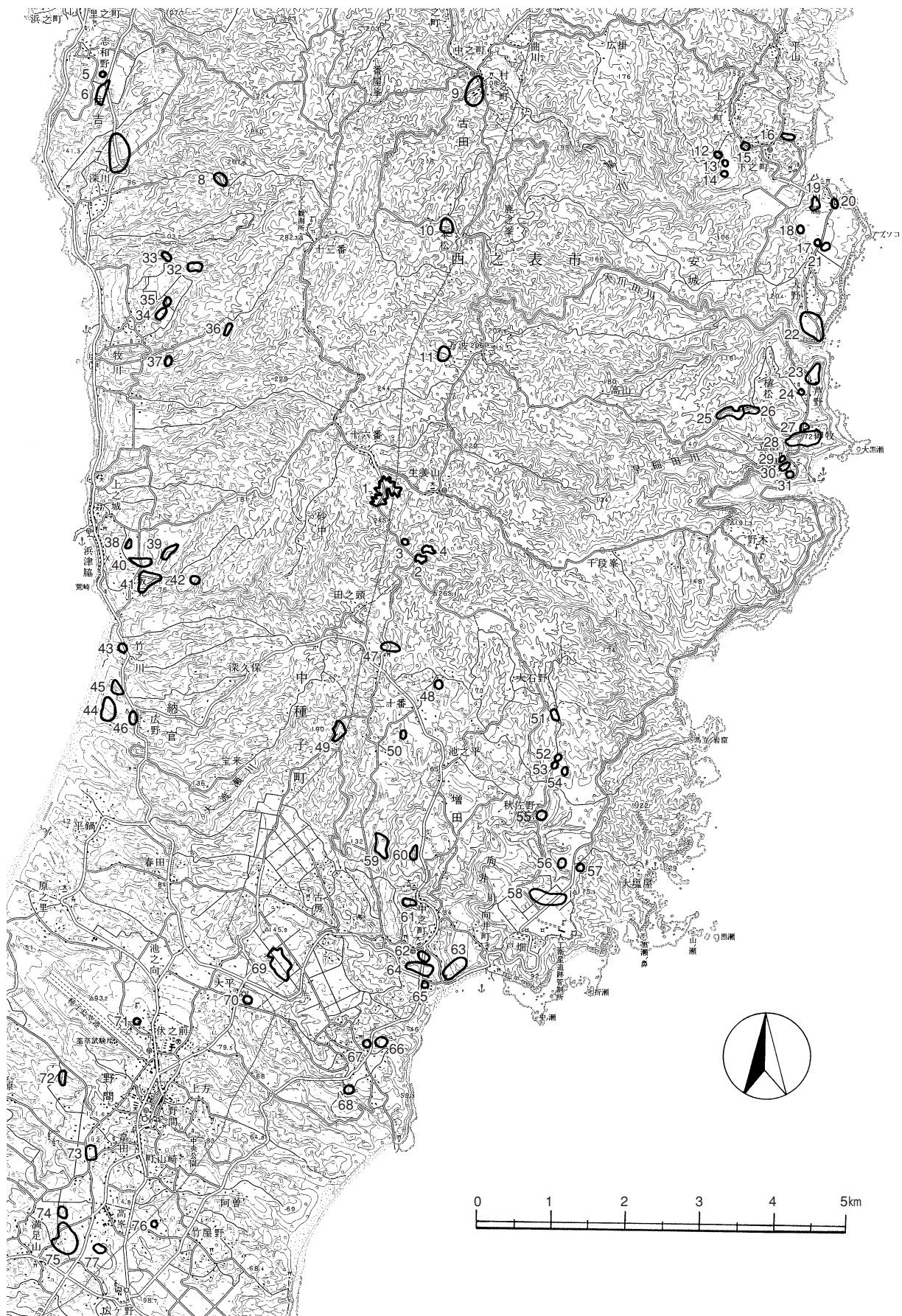
近世においては調査事例が少なく、明らかでない部分が多い。その中で窯業に目を向けると能野焼・野間焼（中種子焼）が当該時期の著名なものとしてあげられるが、詳細については明らかでない。

戦時中の昭和17年（1942）には中種子村（現在の中種子町）増田において海軍飛行場の建設が着手され、翌18年の末には未完成のまま海軍航空隊が開設されている。現在はこの飛行場は集落となっているが、当時の炊事場の煉瓦作り煙突が現在も残されており、記念碑的なものとなっている。これが代表例で、その他にも終戦までに種子島にもいくつかの部隊が陣地を構え駐屯している。三角山遺跡群周辺では、昭和20年6月に西之表古田において、西部第7074部隊の独立混成部隊第10109部隊（約12,000人）が陣地を構築し、駐屯している。

現在では海の玄関・経済の中心地区としての西之表市、空の玄関としての中種子町、宇宙への玄関としての南種子町の3市町それぞれが役割を担い、日々新たな歴史を刻んでいる。

参考文献

- 広田遺跡学術調査研究会『種子島広田遺跡』鹿児島県歴史資料センター黎明館 2003
- 鹿児島県教育委員会『指辺・横峯・中ノ峯・上焼田遺跡』鹿児島県教育委員会報告書（5）1977
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター『牛之原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（18）1996
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター『柿内・大園・西俣遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（24）1999
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター『三角山Ⅰ遺跡（P地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（46）2002
- 河口貞徳『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社 1988
- 橋口尚武『種子島の考古学』九州上代文化論集
- 中種子町郷土誌編集委員会『中種子町郷土誌』1971
- 南種子町郷土誌編纂委員会『南種子町郷土誌』1987
- 徳永和喜『種子島の史跡』和田書店 1983



第2図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地 形	時 代	遺 物 等	県遺跡番号
1	三角山Ⅰ	中種子町砂中	台地	縄文(草創・早・前)	住居跡・集石・隆帯文・塞ノ神式・苦浜式・竈式	80-58
2	三角山Ⅱ	中種子町砂中	台地	縄文(早),古代,近代	集石・吉田式・塞ノ神式・天道ノ尾式・手向山式・石鐮・耳栓・須恵器ほか	80-59
3	三角山Ⅲ	中種子町砂中	台地	縄文(早)	貝殻条痕文(縄文時代早期)	80-60
4	三角山Ⅳ	中種子町砂中	台地	縄文(早・中)	集石・塞ノ神式・苦浜式・春日式・石鐮・石斧・スクレイパーほか	80-61
5	俣江	西之表市住吉深川	台地	縄文	土器片	13-90
6	青野原	西之表市住吉深川	台地	縄文	土器片	13-91
7	高峯	西之表市住吉深川	台地	縄文(早・前)	塞ノ神式・竈式・磨石・敲石・石皿	13-46
8	深川	西之表市住吉深川	台地	縄文(早)	塞ノ神式	13- 4
9	古田城跡	西之表市古田村之町	丘陵	中世		13-44
10	二本松	西之表市古田二本松	台地	縄文(草創・早)	隆帯文・塞ノ神式・平櫛式	13- 5
11	中割	西之表市中割万波	台地	弥生	土器片	13-62
12	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	台地	縄文	土器片	13-96
13	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	台地	縄文	土器片	13-97
14	鬼ヶ野C	西之表市安城上之町	台地	縄文(草創・早),古墳	土器片・石鐮	13-98
15	三本松	西之表市安城川脇	台地	縄文	土器片	13-107
16	仮屋園	西之表市安城平山	台地	縄文	土器片	13-89
17	日守A	西之表市安城川脇	台地	縄文(早)	集石・吉田式・下剥斧式・桑ノ丸式・石鐮・石斧・磨石・敲石・石匙・石皿	13-68
18	日守B	西之表市安城川脇	台地	縄文(早)	土器片	13-69
19	日守C	西之表市安城川脇	台地	縄文(早)	土器片・石鐮	13-70
20	通利山	西之表市安城上之町	台地	縄文	土器片	13-115
21	長迫	西之表市安城川脇	台地	縄文	土器片	13-106
22	東前平	西之表市安城大野	台地	縄文	土器片	13-108
23	芦野	西之表市立山芦野	台地	縄文	土器片	13-109
24	九郎エ門	西之表市立山芦野	自然堤防		土器片	13-67
25	奥ノ仁田	西之表市立山楠松	台地	縄文(草創・早)	集石・隆帯文・苦浜式・平櫛式・石鐮・石斧・磨石・敲石・石皿ほか	13-66
26	奥嵐	西之表市立山楠松	台地	縄文(早・後)	土器片	13-104
27	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	台地	縄文	土器片	13-110
28	長崎	西之表市立山御牧	台地	縄文	土器片	13-111
29	中園A	西之表市立山立山	台地	縄文	土器片	13-112
30	中園B	西之表市立山立山	台地	縄文	土器片	13-113
31	下ノ平	西之表市立山立山	台地	縄文	土器片	13-114
32	福丸A	中種子町牧川	山頂緩斜面	縄文	縄文土器	80-63
33	福丸B	中種子町牧川	山腹緩斜面	縄文	縄文土器	80-64
34	太田尾	中種子町牧川	海岸段丘	縄文(早)	天道ノ尾式・塞ノ神式	80-65
35	太田尾B	中種子町牧川字太田尾	海岸段丘	縄文	縄文土器・石斧	80-32
36	赤豆野	中種子町牧川	山腹緩斜面	縄文・古墳	縄文土器・成川式	80-66
37	落ノ下	中種子町牧川	山腹緩斜面	縄文	縄文土器	80-67
38	中野	中種子町納官	山腹緩斜面	縄文	縄文土器	80-68
39	園田	中種子町納官	山腹緩斜面	縄文(草創・早)	岩本式・塞ノ神式・石槍	80-77
40	油久後	中種子町納官	海岸段丘	縄文	縄文土器・石斧・磨石・石皿	80-69
41	大園	中種子町納官坂元・大園	台地	縄文(前・後・晩),弥生(中),中世	竈式・市来式・一湊式・磨製石器・打製石斧・石皿・凹石	80- 3
42	大中峯	中種子町納官	山腹緩斜面	縄文,中世	土器片	80-78
43	塩釜神社	中種子町納官竹之川	海岸段丘	縄文	縄文土器	80-25
44	伏之平A	中種子町納官字伏之平	海岸段丘	縄文(早)	塞ノ神式	80-30
45	伏之平B	中種子町納官字伏之平	海岸段丘	縄文(早)	縄文土器	80-31
46	広野	中種子町納官字広野	海岸段丘	縄文	縄文土器	80-35
47	二十番	中種子町増田二十番・西川原	山腹緩斜面	縄文(早・前・後),弥生(後)	曾知式・一湊式・磨製石斧・凹石・敲石・弥生土器	80- 6
48	中平地	中種子町中平地	台地	縄文(早)	縄文土器	80-53
49	瀬戸口	中種子町増田字瀬戸口	台地	縄文(草創)	隆帯文	80-33
50	本願寺	中種子町本願寺	台地	縄文	縄文土器	80-57
51	増田大石野	中種子町増田大石野	台地	縄文(早)	塞ノ神式・磨製石斧・石匙	80-45
52	大石野	中種子町秋佐野大石野	台地	縄文(早)	塞ノ神式・石皿・敲石	80-46
53	中野大石野	中種子町秋佐野中野大石野	台地	縄文	土器片	80-47
54	東松原山	中種子町秋佐野東松原山	台地	縄文	土器片	80-48
55	梶ノ本	中種子町増田梶ノ本	台地	縄文(後),弥生	縄文土器・弥生土器・石斧・石皿・磨石	80-56
56	下ノ平	中種子町増田下ノ平	台地	縄文(後)	縄文土器・磨石・石斧	80-54
57	壱里塚	中種子町増田壱里塚	台地	縄文(早)	縄文土器	80-55
58	牛之原	中種子町増田向井町・牛原	台地	縄文(早・晩)	塞ノ神式・苦浜式・打製石斧	80- 7
59	増田城跡	中種子町増田古房・城ノ鼻	丘陵	中世		80-21
60	内山	中種子町増田内山	台地	縄文	縄文土器・石斧	80-82
61	東内園	中種子町増田東内園	山頂緩斜面	縄文	無文土器	80-83
62	前田	中種子町増田東前田・斧多田	低地	縄文,弥生	縄文土器・弥生土器	80-84
63	鳥ノ峯	中種子町野間	台地	縄文(早),弥生(後)	完形弥生土器・土城20基・人骨	80-18
64	西ノ園	中種子町増田	低地	縄文,弥生		80-85
65	下ノ園	中種子町増田下ノ園	砂丘	縄文,古墳,室町	縄文土器・成川式・青磁・土師器	80-52
66	野間太郎坊	中種子町野間太郎坊	台地	室町	須恵器・青磁	80-51
67	の場	中種子町野間	海岸段丘	中世	土師器	80-70
68	竹原田	中種子町野間	谷底平野	中世	青磁	80-71
69	千草原	中種子町増田郡原・千草原	台地	縄文(早・前)	塞ノ神式・竈式	80-13
70	太平園	中種子町野間太平園	山腹緩斜面	縄文		80-62
71	伏之前	中種子町野間伏之前	海岸段丘	縄文(後)	一湊式	80-15
72	上大角	中種子町野間	台地	縄文	縄文土器	80-79
73	畠田	中種子町野間畠田・明石牟田	台地	縄文(早)	苦浜式	80- 1
74	常牧	中種子町野間	台地	縄文(早)	塞ノ神式・天道ノ尾式・石鐮	80-80
75	池ノ久保	中種子町野間	台地	縄文(早)	塞ノ神式	80-81
76	上ノ平	中種子町野間上ノ平	台地	縄文(早)	縄文土器・石斧・凹石・磨石	80-34
77	高峯	中種子町野間高峯・東牧堀	台地	縄文(早),弥生(後)	塞ノ神式・苦浜式・弥生土器	80- 8

第3節 基本土層

本遺跡は古第3紀の熊毛層群の砂岩を基盤とした台地上に、指宿火山唐山起源とされる種Ⅰ・Ⅱ火山灰、鬼界カルデラ起源の可能性のある種Ⅲ・Ⅳ火山灰、始良カルデラ起源のA T火山灰（24,000y.B.P）、桜島起源の薩摩火山灰（11,500y.B.P）、鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（6,400y.B.P）など時代や噴出源の異なる火山噴出物が堆積している。このなかでも薩摩火

山灰は、本遺跡において種子島島内で初めて確認された物である。まばらなブロック状に産出し、はっきりした堆積層が見られる場所は少ない。これに対してアカホヤ火山灰はほぼ全域にわたって堆積している。これらの火山灰は本遺跡の性格を明らかにする上で貴重な資料となっている。

以下は基本的な層位である。

I	I層 表土（造成土）
★ II a'	II層 黄橙色火山灰 : アカホヤ火山灰。鬼界カルデラ起源の約6,400年前の噴出物。堆積物の状態でa.b.cの3層に分けられる。II a層は縄文時代前期の包含層である。
II b	
II c	
★ III	III層 茶褐色粘質土 : やや粘質をもつ。縄文時代早期の包含層である。
IV	IV層 黄褐色粘質土 : 薩摩火山灰。桜島起源の約11,500年前の噴出物。全体に広がらず、ブロック状に観察される。
V	V層 茶褐色粘質土 : 層厚が15～20cm程で、三角山Ⅰ遺跡では縄文時代草創期の包含層である。
VI	VI層 淡茶褐色粘質土 : 未詳火山灰。若干の砂を含み、ブロック状に観察される。
VII	VII層 淡茶褐色粘質土 : VI層と色調は同じだが、砂を含まず粘質が若干強い。
VIII	VIII層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強い。
IX	IX層 明黄褐色火山灰 : 始良丹沢火山灰。始良カルデラ起源の約24,000年前の噴出物。
X	X層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強く軟質である。
X I	X I層 淡茶褐色火山灰 : 種Ⅳ火山灰。鬼界カルデラ起源の約30,000年前の噴出物。非常に硬く締まっている。
X II	X II層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強く、硬く締まっている。
X III	X III層 黄褐色火山灰 : 種Ⅲ火山灰。鬼界カルデラ起源の約38,000年前の堆積である。
X IV	X IV層 淡茶褐色強粘質土 : 非常に粘質が強い。
X V	X V層 黄褐色火山灰 : 種Ⅰ・Ⅱ火山灰。場所によっては確認されない。
X VI	X VI層 淡茶褐色強粘質土 : 粘質が強い。
X VII	X VII層 砂岩混じり淡茶褐色強粘質土 : X VI層とX VII層の混在する層。
X VIII	X VIII層 赤色風化砂岩礫 : 基盤層が風化してできた層。
X IX	X IX層 基盤層 : 熊毛層群の砂岩。

第3図 土層柱状図

第三章 発掘調査の概要

第1節 確認調査の概要

三角山Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡・Ⅳ遺跡の調査は平成7年5月9日～平成8年3月21日（191日間）、平成8年5月8日～平成9年3月18日（161日間）、平成10年5月6日～9月24日（83日間）の期間中に埋文センターが実施した。

三角山遺跡群の確認調査は平成6年度から実施した。用地買収の遅れや、調査工程の都合により、平成7年度以降はほとんどの場合において確認調査から引き続き本調査を実施することとなった。以下に各遺跡ごとの確認調査の概要を述べる。

（1）三角山Ⅰ遺跡

平成6年度に21か所のトレンチを設定し、掘り下げた結果、ほとんどの場所が整地や掘り下げなどによって削平されてしまっていたが、三角山Ⅰ遺跡の21号トレンチで遺物包含層が確認され、縄文時代早期の土器片4点、礫11点が出土した。この時点で三角山Ⅰ遺跡は遺物が出土する範囲が200㎡と想定された。

平成7年度には12,520㎡を対象に4×2.5mを基本としたトレンチを29か所設定した。その結果、1・2・4・5・22・52の各トレンチで遺物が出土し、縄文時代草創期の遺物が出土する範囲約6,000㎡、縄文時代前期の遺物が出土する範囲約700㎡（縄文草創期と重複）の存在が確認された。

平成8年度には約2,000㎡について4か所のトレンチを設定し調査を行った結果、4トレンチで縄文時代草創期・縄文時代早期・縄文時代前期の3文化層から遺物が出土し、約1,000㎡に遺物出土範囲が確認された。

平成9年度には約13,000㎡について18か所のトレンチを設定し確認調査を行った結果、10・11・13・14・15の各トレンチで遺構・遺物が発見された。これらのトレンチ周辺約4,000㎡に遺物包含層が残存していることが確認された。

平成10年度には15か所のトレンチを設定し、約5,300㎡について調査した。このうち7か所で遺構・遺物が発見された。その結果あわせて2,100㎡の面積に遺物包含層が確認された。

平成11年度にはK～R-9～15区において約2,500㎡を対象範囲として確認調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。

平成12年度には約600㎡について確認調査を実施した。1か所のトレンチを設定して調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。

平成13年度には約9,000㎡について確認調査を実施

した。23か所のトレンチを設定して調査を行ったところ、6か所から遺構・遺物が発見された。D地点の緩斜面部分については周辺の調査結果から遺構・遺物の存在することが容易に判断できたためそのまま本調査に移行し、急斜面部分のみトレンチ調査を行った。

（2）三角山Ⅱ遺跡

平成7年度に約16,500㎡を対象に51か所のトレンチを設定して調査を行った。遺跡内は耕地の造成により既に削平された部分があったが、7・26・27・31・38・43・47・48・49の各トレンチで遺構・遺物が発見され、7トレンチ周辺（A地点）約500㎡、31トレンチ周辺（B地点）約1,000㎡、26トレンチ周辺（C地点）約300㎡、38・47・48・49トレンチ周辺（D地点）約300㎡、43トレンチ周辺（E地点）約500㎡の遺跡残存が確認された。なお、25トレンチからは表土（盛土とも考えられる）から土師器の甕が4点出土しているが、遺物包含層は確認できなかった。

（3）三角山Ⅲ遺跡

約2,200㎡を対象に7か所のトレンチを設定した結果、中央の3トレンチから縄文時代早期の土器が出土した。他の6か所は削平されており遺構・遺物ともに発見されず、遺跡残存部分は3トレンチ周辺の200㎡であることが確認された。

（4）三角山Ⅳ遺跡

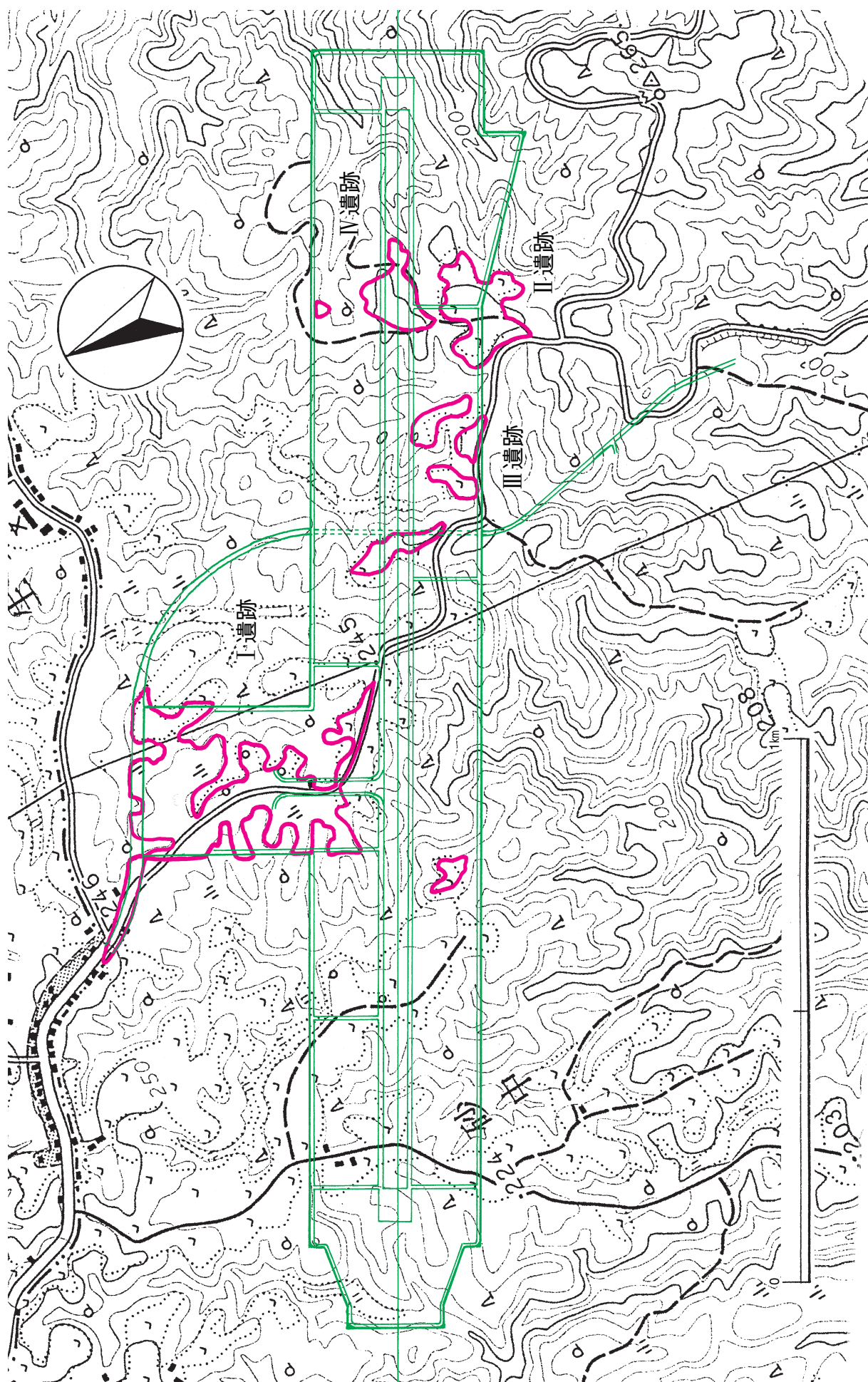
平成7年度に当初約2,100㎡を対象として確認調査に着手したが、調査の結果、周囲への広がりが予想されたため協議を行い、周辺の確認調査を実施した。確認調査対象面積は約8,000㎡で、22本のトレンチを設定し調査した結果、1～6・12・14・18・19・20の各トレンチから遺構・遺物が発見され、約3,000㎡の遺物出土範囲が確認された。

平成8年度に三角山Ⅳ遺跡は当初3,000㎡の予定で本調査を開始したが、工事用道路の下にも遺物包含層が広がっていたため最終的には4,000㎡の範囲に遺跡が広がった。

（5）①地点・②地点・④地点・⑤地点・⑦地点・⑧地点

平成6年度に①地点について、平成7年度に②地点・④地点・⑤地点・⑦地点・⑧地点について確認調査を行った。

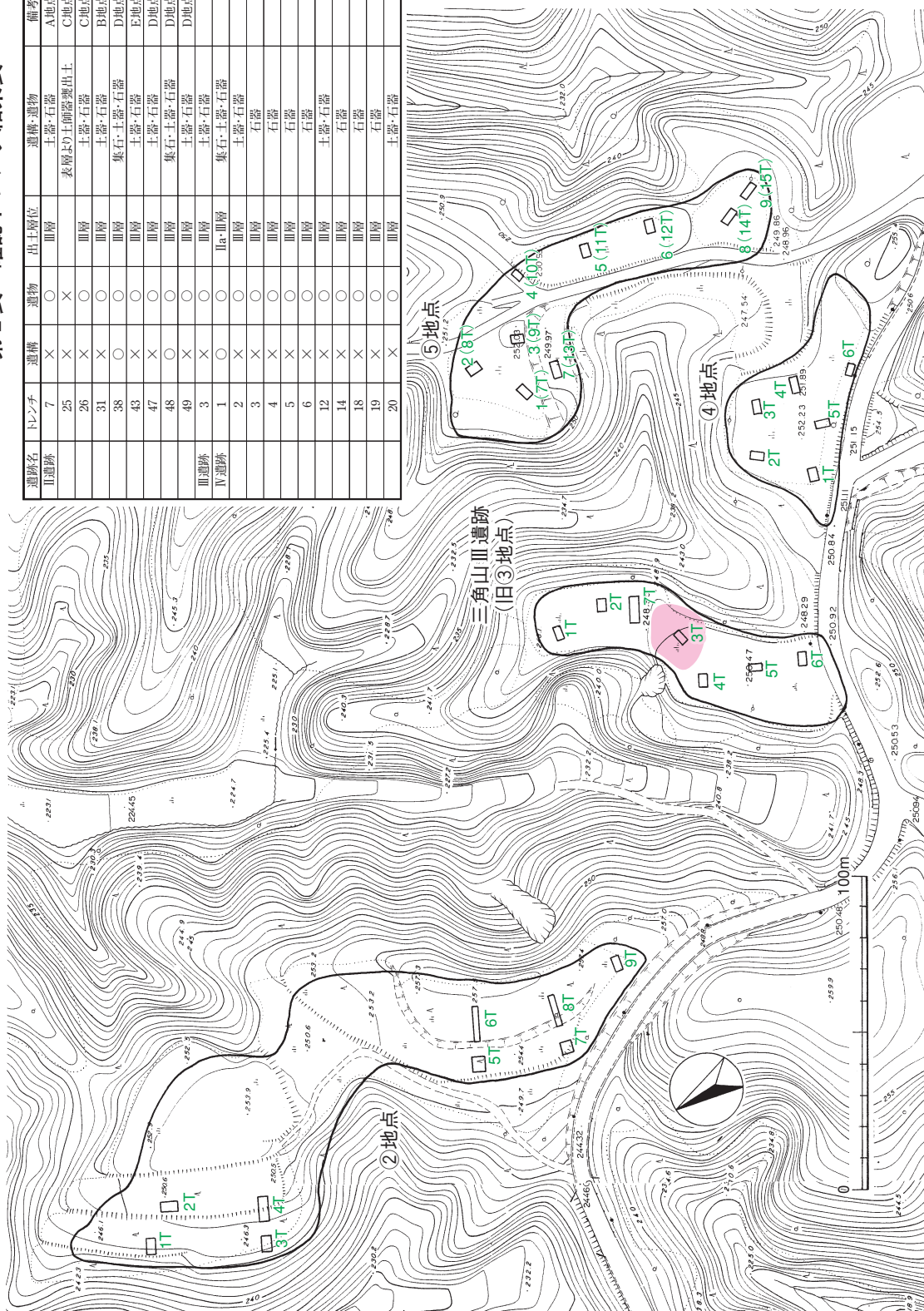
①地点は4か所、②地点は11か所、④地点は6か所、⑤地点は9か所のトレンチを設定し調査した。また、⑦地点は6か所、⑧地点は2か所について重機を使用した詳細分布調査を行った。これらの調査の結果、以上の地点では遺構・遺物は発見されなかった。



第4図 三角山遺跡群（新種子島空港建設予定地）

第2表 確認トレンチ結果表

遺跡名	トレンチ	遺構	出土層位	遺構・遺物	備考	年度
II遺跡	7	×	Ⅲ層	土器・石器	A地点	H7
	25	×	Ⅲ層	表層より土師器・土器・石器	C地点	H7
	26	×	Ⅲ層	土器・石器	B地点	H7
	31	×	Ⅲ層	土器・石器	D地点	H7
	38	×	Ⅲ層	土器・石器	D地点	H7
	43	×	Ⅲ層	土器・石器	E地点	H7
	47	×	Ⅲ層	土器・石器	D地点	H7
	48	×	Ⅲ層	土器・石器	D地点	H7
	49	×	Ⅲ層	土器・石器	D地点	H7
III遺跡	3	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
IV遺跡	1	×	Ⅲa・Ⅲ層	土器・石器		H7
	2	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	3	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	4	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	5	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	6	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	12	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	14	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	18	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	19	×	Ⅲ層	土器・石器		H7
	20	×	Ⅲ層	土器・石器		H7



第6図 三角山Ⅲ遺跡トレンチ配置図

第2節 本調査の概要

(1) 三角山Ⅰ遺跡

本調査は平成8年5月8日～11月22日、平成10年5月6日～9月24日、平成11年5月10日～9月21日、平成12年10月4日～平成13年2月26日、平成13年7月3日～11月27日、平成14年9月2日～平成15年1月28日の期間中に実施した。

縄文時代草創期・早期・前期の遺構・遺物が発見されているが、中でも特に注目されるのが縄文時代草創期の竪穴住居状遺構と隆帯文土器・磨製石鏃などの遺物である。特に隆帯文土器については明確に薩摩火山灰層の下から出土したものである。種子島では初めてのことで、かつ県内でもこれだけの量が出土する遺跡は少なく、重要なものである。

また、この他にも縄文時代早期の玦状耳飾り（県内では確実にアカホヤ火山灰の下から確認されたものとしては初の例）・トロトロ石器（平成14年12月時点での日本最南端の出土例）・磨製石鏃なども出土しており、数回にわたって新聞報道がされるなど三角山遺跡群の中でも特に注目される遺跡である。

調査最終年度の平成14年12月21日には現地説明会を実施し、約140名の見学者を迎えて好評を得ることができた。

なお、平成12年度に調査を行った三角山Ⅰ遺跡のP地点（県道付け替え部分）については平成14年度に報告書が刊行されている。

(2) 三角山Ⅱ遺跡

本調査を平成7年12月から平成8年3月まで、追加のE地点を平成9年1月から2月までと平成10年7月から9月までおこなった。

本来は三角山Ⅱ遺跡として広範囲にわたる範囲の遺跡であったと考えられるが、土地の造成や地下げなどにより虫食い状態で遺跡が破壊されていたため、確認調査により残存していることが判明したA・B・C・D・Eの5地点について調査を行った。以下に各地点の概要を述べる。

A地点では近代のものと考えられる環状土坑が発見されているが、この時点では明確な時期が判明していなかったため、D地点の近代の遺物を伴う環状土坑との関係は明らかではない。

縄文時代前期の土坑が3基発見されているが、このうち1基は落とし穴状である。

B地点では耳栓状土製品が出土している。Ⅲ層上面で検出した縄文時代早期の可能性のある土坑は落とし穴状であり、中央部底面に2つの逆茂木状ピットが検出されている。集石2基も発見されている。

C地点では、縄文時代早期の土坑と集石がそれぞれ1基ずつ発見されている。また、古代の須恵器が出土した。

D地点では縄文時代早期の集石が3基発見されている。また、近代の遺物を伴う環状土坑が発見されている。出土遺物の中にビール瓶があり、右側から『キリンビール』と書かれているので、戦前の遺構である可能性がある。この近辺の十六番には第2次世界大戦中に兵舎があったとされていることと、高射砲があることから、この遺構は戦跡遺構の可能性はある。

E地点の調査は平成8年度と平成10年度に行われたが、11基の集石が集中して検出されている。また、完形に近い形で復元される土器が3個体出土している。

(3) 三角山Ⅲ遺跡

平成7年7月に調査を行った。

確認調査の結果、遺跡残存部分は200㎡だったので、確認調査に引き続き本調査を実施した。出土遺物は縄文時代早期の貝殻条痕文土器、礫器で、遺構は発見されなかった。

(4) 三角山Ⅳ遺跡

本調査は平成8年11月から平成9年3月まで行った。

縄文時代前期以降の土坑が4基・縄文時代早期の集石8基・縄文時代前期以降の集石が1基発見された。

遺物は主に縄文時代早期の塞ノ神式土器、縄文時代中期の春日式土器が出土している。

第3節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要

(1) 集石

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡で発見された集石は、総数で28基である。

このうちⅡ遺跡で19基（B地点4基【うち1基は配石と呼称】、C地点1基、D地点3基、E地点11基）、Ⅳ遺跡で9基発見されている。掘り込みのあるものは12基認められた。

(2) 土坑

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡で発見された土坑は総数で8基である。

このうちⅡ遺跡で4基（A地点2基、B地点1基、C地点1基）、Ⅳ遺跡で4基発見されている。

(3) 落とし穴状遺構

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡で発見された落とし穴状遺構は総数で5基である。

このうちⅡ遺跡で1基（A地点1基）、Ⅳ遺跡で4基発見されている。

（4）その他の遺構

Ⅱ遺跡のA地点とD地点で1基ずつ環状土坑が発見されている。この中でD地点の環状土坑からは戦前のキリンビールの底部が出土しており、戦時中の遺構の可能性もある。

また記録化は行わなかったが、Ⅳ遺跡では戦時中の濠が発見されている。

2 遺物の概要

（1）土器

① 分類基準

三角山遺跡群における土器は、表土からⅤ層にわたって出土した。出土状況は層ごとに単独で出土する土器である縄文時代草創期の隆帯文土器（三角山Ⅰ遺跡のⅤ層出土）と、そうでないものとに区別される。よって土器は器形や文様などの属性分析を主に分類を行った。なお、三角山Ⅰ遺跡では縄文時代草創期以降の土器が、三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡では縄文時代早期以降の土器が出土したことから、ここでは便宜上縄文時代草創期の土器を第1群とし、縄文時代早期以降の土器を第2群、縄文時代前期以降を第3群などとして区分することとする。第1群の土器は今回報告する三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡ではⅤ層から出土したものはみられないので、第2群以下の土器を第1類から特徴を述べていきたい。なお、三角山Ⅰ遺跡でしかみられない土器についてもここで取り上げているが、詳細については次回に譲ることとしたい。また、今後の整理作業によっては、分類が以下のものと異なる可能性もある。

② 類別の概要

○第2群

1類

三角山Ⅰ遺跡では出土しているが、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡では出土していない。

既存の土器型式では前平式土器に該当する。

2類

器形は、口縁部が外反し、口唇部は平坦である。円筒形・角筒形のものなどがある。完形品に復元できるものは出土していない。円筒形のものが出土しているが、中には角筒形の可能性のあるものも出土している。文様は、口唇部に刻目を施し、口縁部には横位の貝殻刺突文がめぐる。胴部は貝殻押引文が施されている。

分布はⅡ遺跡のD地点に限られる。破片が数点出土したのみで出土量は少ない。

既存の土器型式では吉田式土器に該当する。

3類

三角山Ⅰ遺跡では出土しているが、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡では出土していない。

既存の土器型式では石坂式土器に該当する。

4類

器形は、口縁部が外反し胴部で屈曲する。底部は本遺跡では発見されていないが、通常は若干上げ底状を呈する。文様は押型文と捺糸文がある。

分布はⅡ遺跡のD地点とE地点に限られる。破片が数点出土したのみで出土量は少ない。

既存の土器型式では手向山式土器に該当する。

5類

器形は口縁部は外反する。口縁部や胴部に刺突をめぐらせ、部分的にフジツボ状の瘤状突起が付着する。文様は、沈線文・刺突文を組み合わせた多様な文様パターンがみられる。

分布はⅡ遺跡D地点のN・O－6区及びE地点のQ－5・6区でみられる。

妙見・天道ヶ尾式土器をはじめとする平樽式の前段階について一括している。

6類

器形は、口縁部が外反する。口縁部外面に粘土紐を貼付するなどして肥厚させ、文様帯をつくりだしている。文様は、口縁部に沈線文を羽状に施し、胴部には結節縄文が施文されている。

分布はⅡ遺跡のD地点のN－5・6区及びE地点のQ－5・6区でみられる。

既存の土器型式では、平樽式土器に該当する。

7類

器形は口縁部がラッパ状に外反し、短筒状の胴部を呈する。底部は比較的薄手で若干上げ底状を呈している。文様は網目捺糸文を間隔をもって縦位に施すものと、幾何学的に捺糸文を施しその上下を沈線で区画する2つのタイプがみられる。

分布はⅡ遺跡のC地点・D地点・E地点、Ⅳ遺跡の一部でみられる。

既存の土器型式では、捺糸文系の塞ノ神式土器（塞ノ神A式）に該当する。

8類

器形は口縁部が外反し胴部内面に稜線を残すものと口縁部が直行し胴部がわずかにふくらむものとがあ

る。文様は貝殻腹縁による刺突連点文，貝殻腹縁またはへう描きによる菱形格子文を口縁部および胴部に施すものなどがある。なお，形態的な特徴を考慮して無紋の塞ノ神式土器についても8類としている。

分布はⅡ遺跡のD地点・E地点，Ⅳ遺跡のD～F－6～9区でみられる。

なお，この中の完形復元できたものに付着していた炭化物・煤について年代分析を行っている。

既存の土器型式では，貝殻文系の塞ノ神式土器（塞ノ神B式）に該当する。

9類

器形は平底であるのは共通であるが，口縁部・頸部などについてはバリエーションがみられる。口縁部は外反するものと内湾ぎみに直行するものがみられる。頸部はゆるくしまるものと直線的なものがみられる。文様は口縁部にへうまたは貝殻腹縁による刻みを施し，胴部には貝殻による直線または波状の条線文を施す。縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を持つ。

分布はⅣ遺跡のD－6～10区，F－6～8区において集中してみられる。

なお，この中の完形復元できたものに付着していた炭化物・煤について年代分析を行っている。

既存の土器型式では苫浜式土器に該当する。

10類

既存の土器型式では特に設定されていないが，特徴的に認められるため類別した。器形は苫浜式土器に類似し，口唇部にはへうまたは貝殻腹縁による刻みを施し，胴部には頸部の痕跡と考えられるゆるいしまりがわずかにみられる。文様は胴部（口縁部下施紋帯）に棒状工具による鋸歯状文を施す。

Ⅳ遺跡のF－7・8区において出土している。

なお，この中の完形復元できたものに付着していた炭化物・煤について年代分析を行っている。

11類

既存の土器型式では特に設定されていないが，特徴的に認められるため類別した。器形は9類土器と12類土器に類似するものがみられる。文様は直線状と波状の押引文を横位方向に組み合わせたものである。

Ⅱ遺跡E地点のP－5・6区において出土している。

12類

三角山Ⅰ遺跡では出土しているが，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡では出土していないので詳細についてはここでは触れないこととする。

既存の土器型式では轟1式土器または右京西タイプ

とされるものに該当する。

13類

1類から12類までに，分類できなかったものを一括した。1個体程度の出土であるので，詳細は各地点ごとに報告中で述べたい。

○第3群

前期以降の土器を一括した。

既存の土器型式では轟式・曾畑式・深浦式・春日式などの縄文土器，土師器・須恵器などの古代の遺物等に該当するものが出土している。

三角山Ⅱ遺跡では古代（平安時代）の土師器・須恵器が，三角山Ⅳ遺跡では縄文時代中期の春日式土器が出土している。

第Ⅳ章 三角山Ⅱ遺跡の調査

第1節 概要

三角山Ⅱ遺跡は本調査が平成7年12月～平成8年3月まで、追加のE地点を平成9年1月～2月までと平成10年7月～9月まで行われた。

確認調査の結果、A・B・C・D・Eの各地点について遺物の出土が認められたため、各地点についての全面調査が行われた。以下に各地点の概要を述べる。

(A地点)

確認調査で遺跡の残存が確認された7トレンチ周辺の約500㎡について本調査が行われた。近代のものと考えると考えられる環状土坑などが発見されている。

遺物は縄文時代早期の土器・石器が出土している。

(B地点)

確認調査で遺跡の残存が確認された31トレンチ周辺の約1,000㎡について本調査が行われた。集石遺構・土坑が発見されている。遺物は耳栓状土製品・石器などが出土している。

(C地点)

確認調査で遺跡の残存が確認された26トレンチ周辺の約300㎡について本調査が行われた。集石が発見されている。遺物は縄文時代早期の土器・砂岩を石材とした礫石器・古代の須恵器などが出土している。

(D地点)

確認調査で遺跡の残存が確認された38・47・48・49トレンチ周辺の約300㎡について本調査が行われた。近代の遺物を伴う環状土坑・縄文時代の集石遺構が発見されている。遺物は縄文時代早期の土器・石器などが出土している。

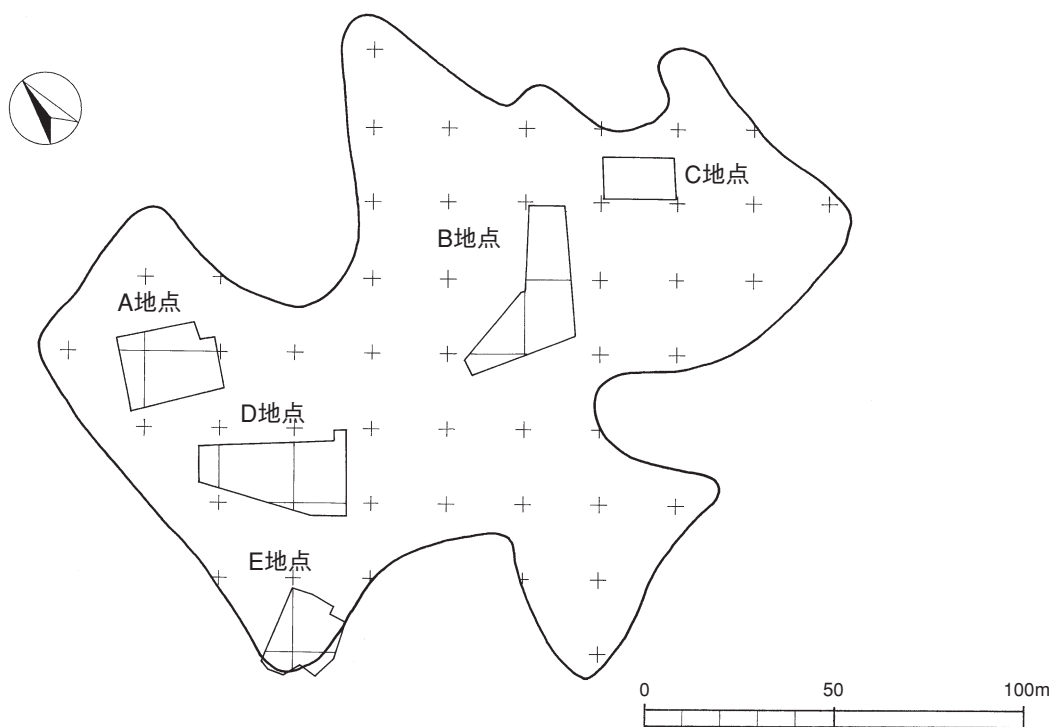
(E地点)

確認調査で遺跡の残存が確認された43トレンチ周辺の約500㎡について平成8年度と平成10年度に本調査が行われた。集石が集中して11基検出されている。完形に近い形で復元される土器や円盤形穿孔石製品（垂飾品と考えられる）などが出土している。

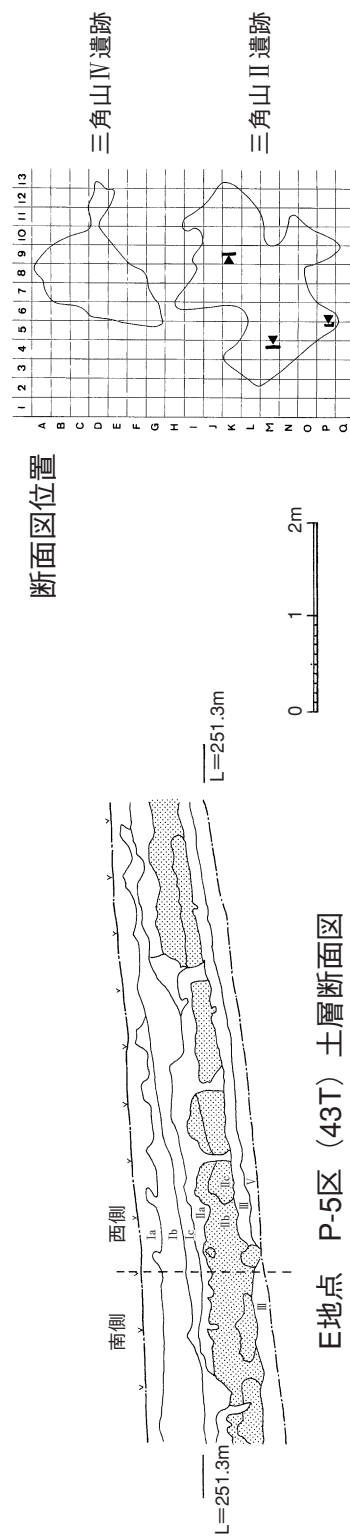
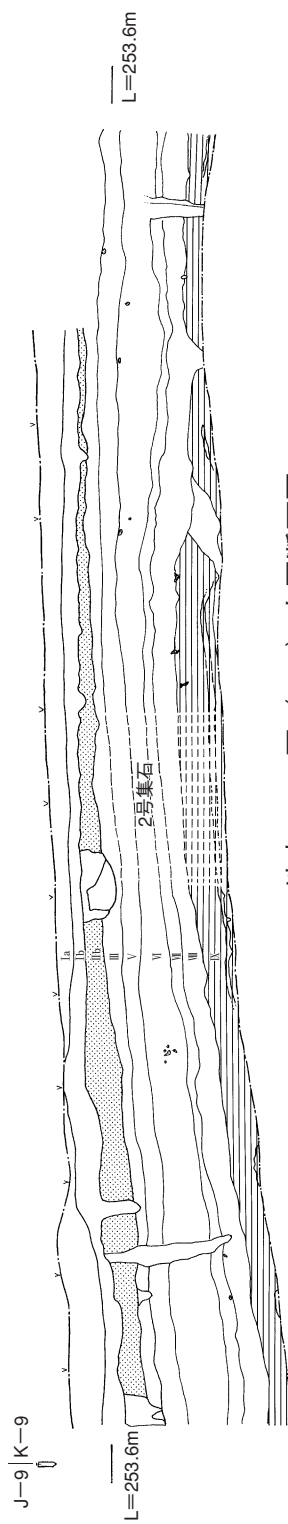
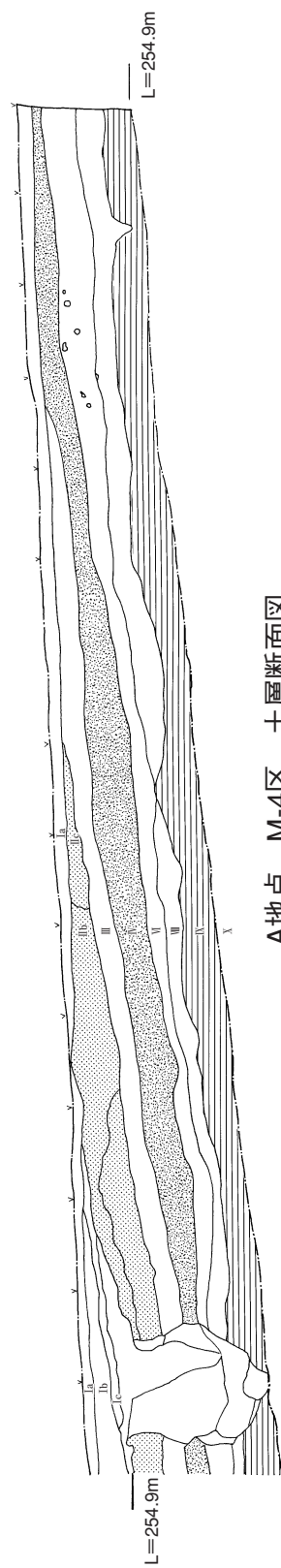
第2節 層位

層位は基本的に三角山遺跡群で共通であるので基本土層については第2章第3節で述べたとおりである。ただし、遺跡ごとに遺構・遺物のみられる層が若干異なる。本遺跡ではA・B・C・D・Eの5地点について3つの文化層から遺構・遺物が発見された。ほぼ表土に近い文化層であるⅠ層、縄文時代前期・中期の文化層であるⅡa層、縄文時代早期の文化層であるⅢ層である。

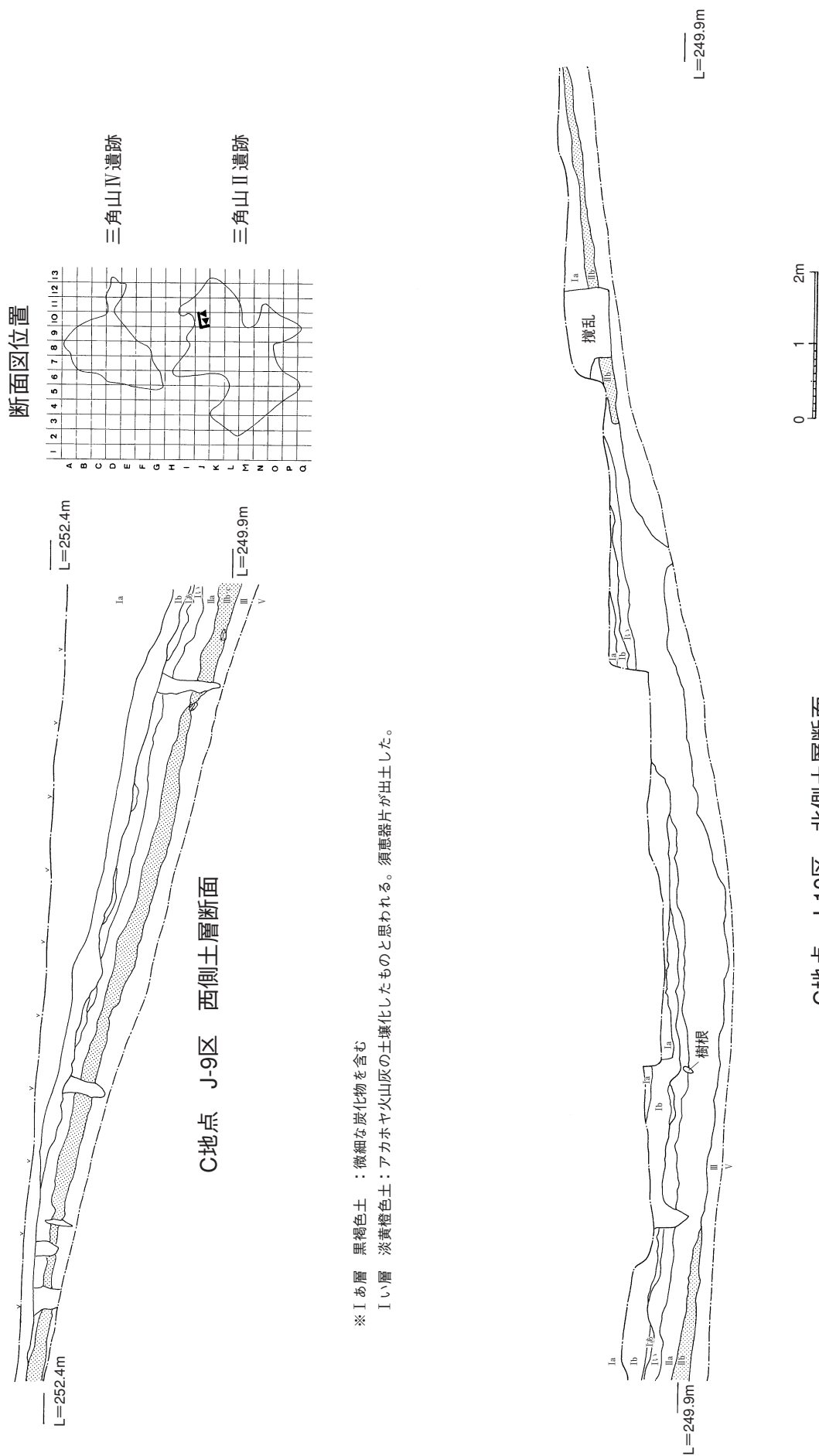
なお、32トレンチのⅡ層（種Ⅳの下層）から出土した炭化物（樹種同定によりスギと同定されている）の年代測定が行われており、 $26,430 \pm 400 \text{Y.B.P}$ （補正 ^{14}C 年代 $26,440 \pm 400 \text{Y.B.P}$ ）の値が出ている。



第7図 各地点配置図

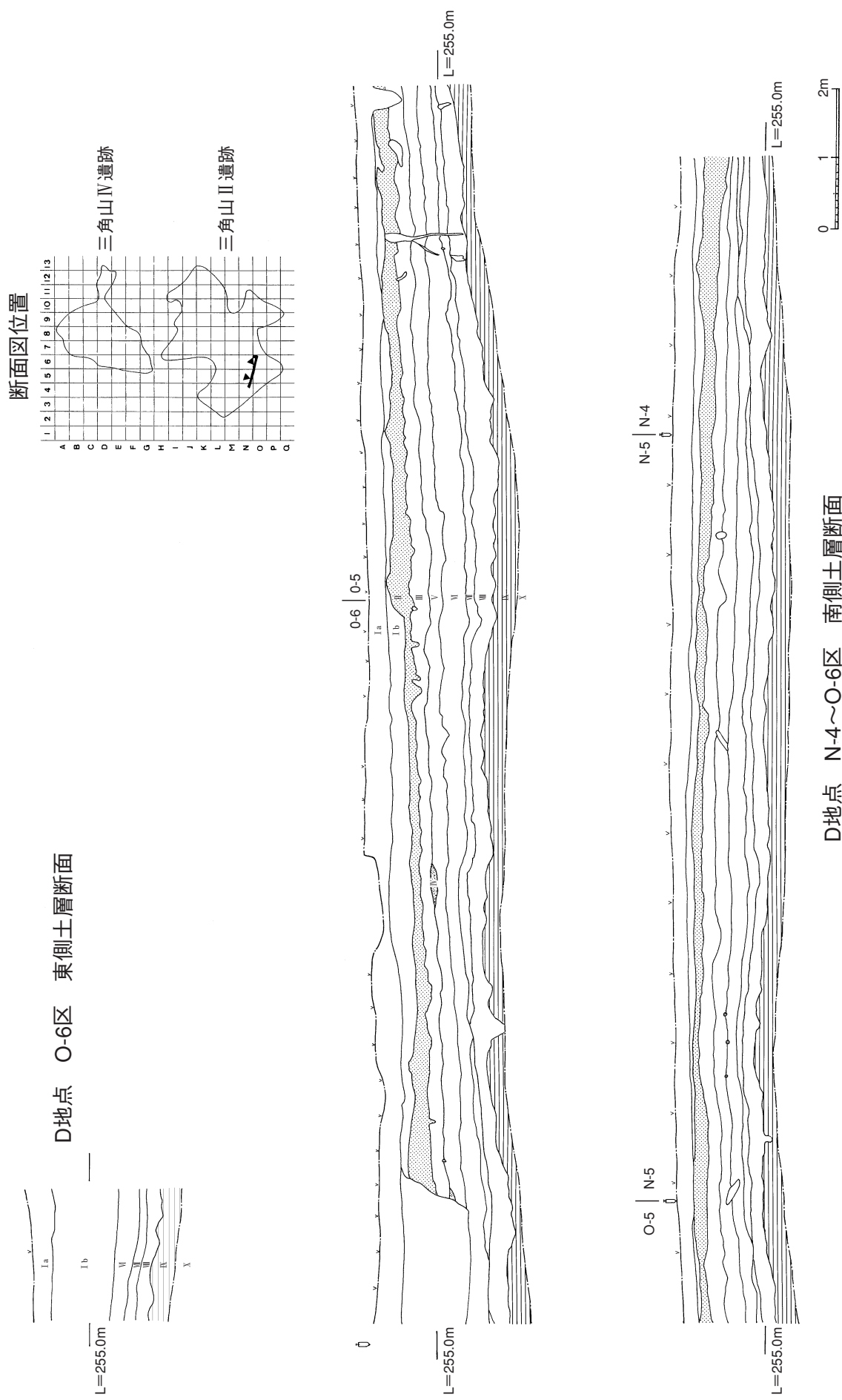


第8图 土层断面图(1)



※ I あ層 黒褐色土 : 微細な炭化物を含む
 I い層 淡黄橙色土 : アカホヤや火山灰の土壌化したものと思われる。須恵器片が出土した。

第9図 土層断面図 (2)



D地点 N-4~O-6区 南側土層断面

第10図 土層断面図 (3)

第3節 A地点の調査

A地点は三角山Ⅱ遺跡の中ではもっとも西に位置する。当該地は遺跡内において舌状に張り出した部分にあたる。西から東にかけてゆるやかに下降し、最高地の標高が256m、最低値の標高が253.2mの値を示す。遺物の集中はほぼ中央部にみられた。

縄文時代早期（Ⅲ層）以降の調査

（1）遺構

① 土坑

Ⅲ層上面で2基、Ⅰ層で1基の計3基検出された。

土坑1（M-4区）

Ⅲ層上面で検出された。境界ベルト上に半分かかっていたため、掘り込みがⅡ層からであることが確認できた。長辺127cm・短辺45cm・深さ71cmで平面形はほぼ長方形をしている。形態的にはB地点及びC地点で検出された土坑に類似する。覆土内には直径25cmの炭化物2つがみられた。

炭化物は樹種同定及び¹⁴C年代測定の結果、ヤブツバキで950±40年BP（補正¹⁴C年代）ということが判明している。また、暦年代交点はAD1040（AD1025～1165）の値を示している。

土坑2（L-4区）

Ⅲ層上面で検出された。長径96cm・短径64cm・深さ61cmで平面形はやや崩れた方形をしている。覆土は硬くしまった明褐色土に淡褐色の斑点が入る。また、黄橙色パミスや炭化物もまばらに入っている。底部のやや北東よりに逆茂木状のピットを持つ。ピットは直径22cm・深さ15cmのものと直径18cm・深さ10cmのものが2つである。

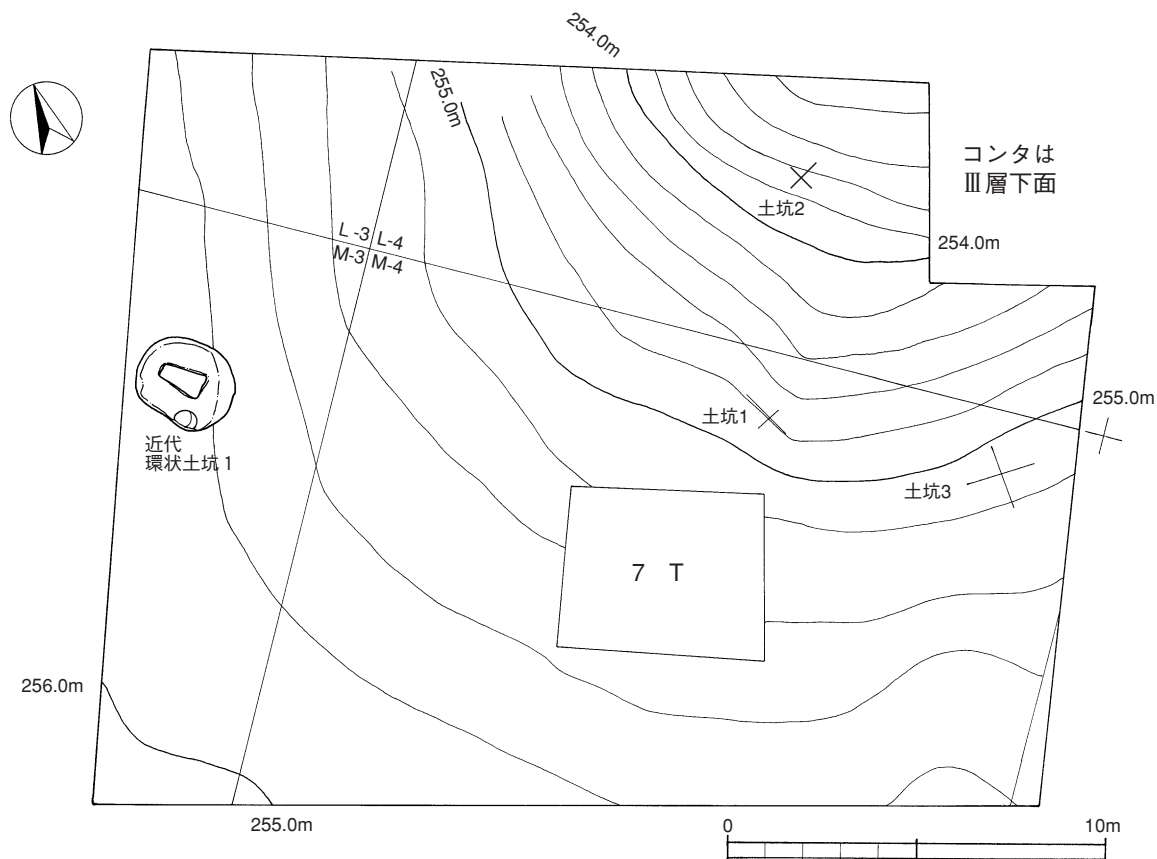
土坑3（M-4区）

Ⅰ層で検出された。長径143cm・短径142cm・深さ183cmの円筒状の土坑である。底部中央に直径20cm・深さ13cmのピット1基がある。このピットは逆茂木痕であると考えられることから落とし穴とみられる。

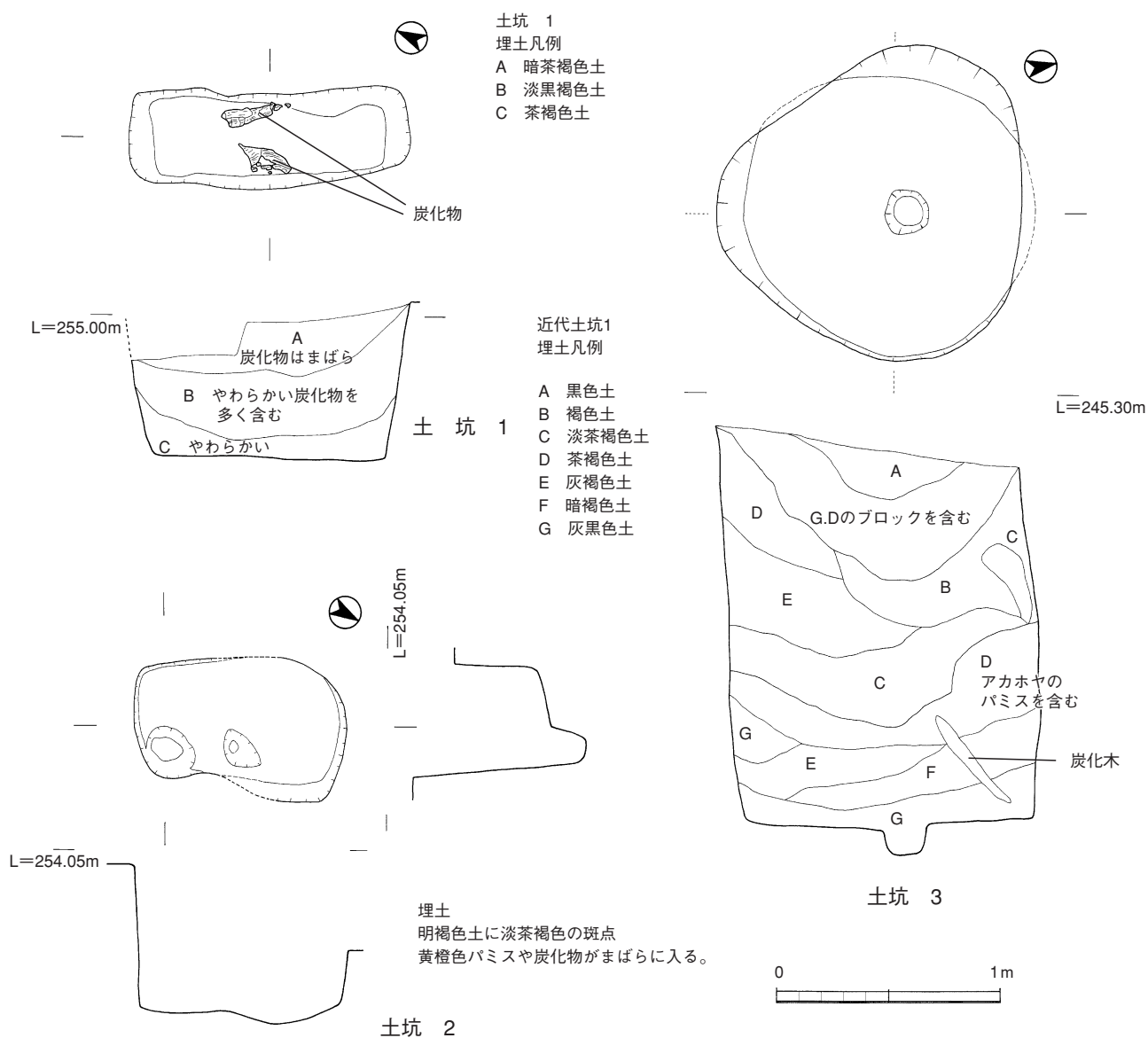
② 環状土坑

近代環状土坑（M-3区）

Ⅰ層で検出された。直径約3m、中央に台形状の掘り残し部分のある環状土坑である。D地点N-5区で検出されているものに類似する。



第11図 A地点遺構配置図

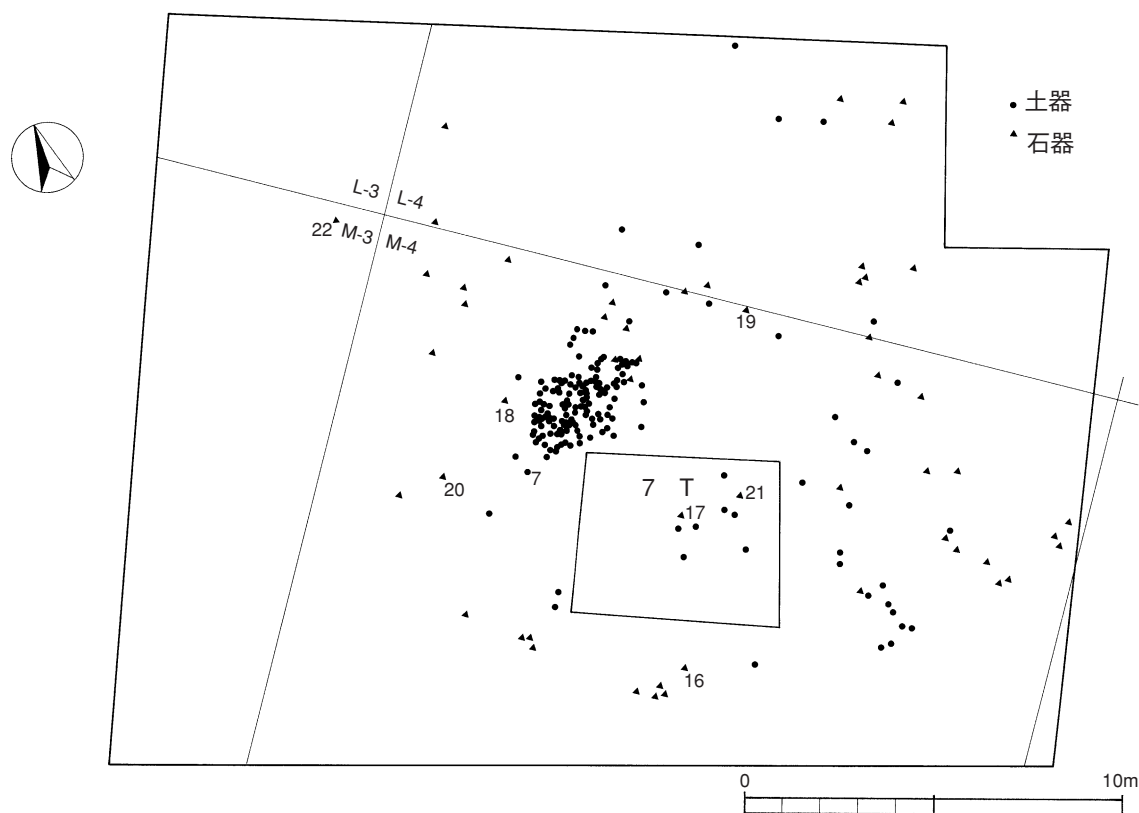


第12図 A地点の土坑

第3表 A地点縄文前期以降の土坑観察表

(単位cm)

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	長径	短径	深さ	小ピット	備考
12	土坑 1	M-4	Ⅲ	127	45	71	なし	20cm大の炭化物 2 個 (前期以降)
12	土坑 2	M-4	Ⅲ	96	64	61	2 基	ピットの深さ約15cm (前期以降)
12	土坑 3	M-4	I	143	142	183	1 基	落とし穴状土坑 ピットの深さ13cm (近代)
11 遺構配図	環状 土坑 1	M-3	I	270	225	記録 なし	なし	旧日本軍の遺構 (近代) (環状土坑 2 は D 地点 N-5 区)



第13図 A地点遺物出土状況

(2) 遺物(Ⅲ層)

① 土器(第14図 No.1~15)

Ⅲ層中から出土しており、15点を図化した。この地点で出土している土器はすべて無文のものであった。

1~10は無文であるが、器形は口縁部がラップ状に外反し、短筒状の胴部を呈するもの・口縁部が外反し胴部内面に稜線を残すもの・口縁部が直行し胴部がわずかにふくらむものがあり、8類土器に類似した特徴を持つ。器面調整は基本的に内外面ともにナデである。

8は頸部外面はゆるくしまっているが、内面には稜はみられずゆるやかなカーブをえがく。

11は大きく開いた口縁部に対して小さくしまった底部を持つ。粘土紐の積み上げが比較的明瞭に観察できるものである。12は小型の土器で厚い器壁を持つ。

11と12は特徴的な土器であるが他に類例があまりみられないものである。なお、この2つは同一個体の可能性がある。

13・14・15は底部である。いずれも平底を呈するも

のである。

② 石器

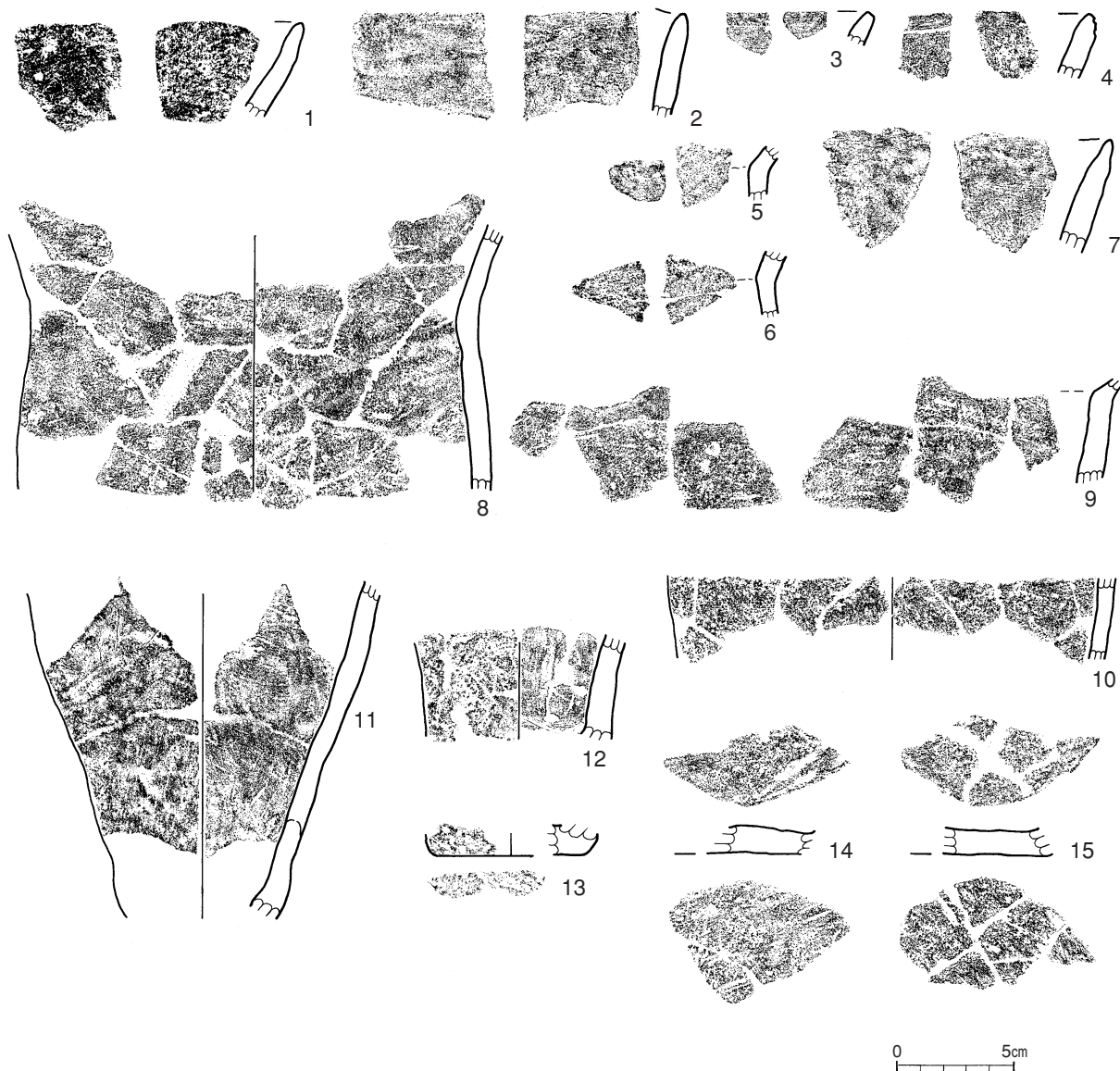
土器と同様にⅢ層から出土した。打製石鏃・磨製石鏃・磨石・有溝砥石・礫器で構成される。

打製石鏃(第15図 No.16・17・18)

3点出土し、全点を図化した。挟りや側縁の状態などで細分される。16は薄手のホルンフェルス製で風化が激しいが、側縁部に調整痕が観察される。僧帽状を呈し挟りは見られない。17は安山岩を素材とし、自然風化面を一部に残す。先端を欠くが、側縁部はわずかに内側に入り、挟りは直線的に入る。18も安山岩を素材とし、やや粗い剥離が左右対称的に施されるが、片側中央部に未剥離部が見られる。挟りは3点中最も深く入る。

磨製石鏃(第15図 No.19)

1点出土した。頁岩を使用し、全面を研磨、細長い二等辺三角形に仕上げているが、下部に穿孔跡2つが認められ、その部分で折れていることから、有孔磨製石鏃の可能性がある。



第14図 A地点出土の土器

磨石 (第15図 No.20)

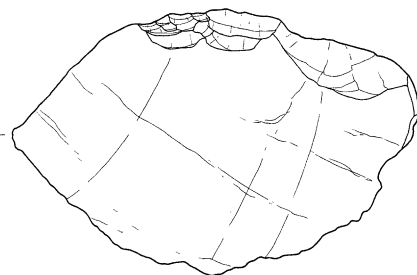
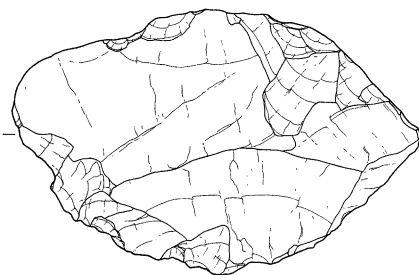
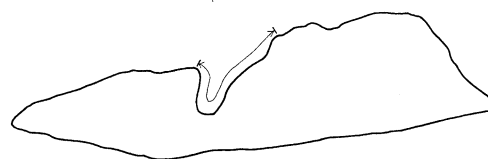
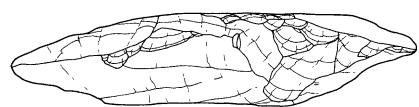
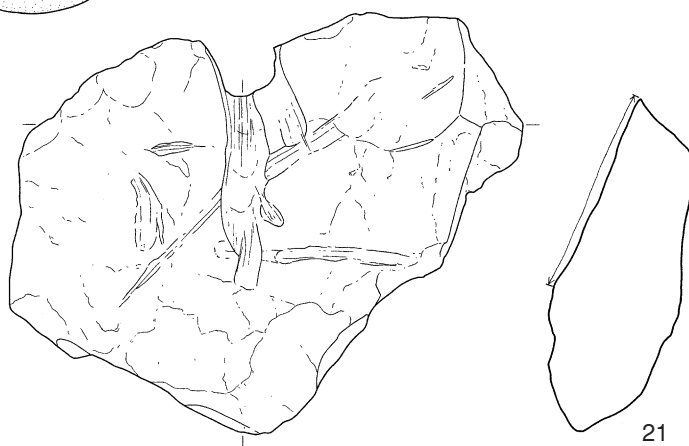
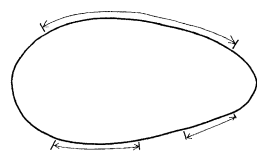
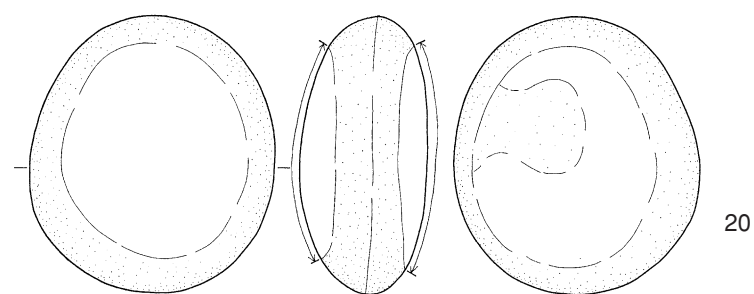
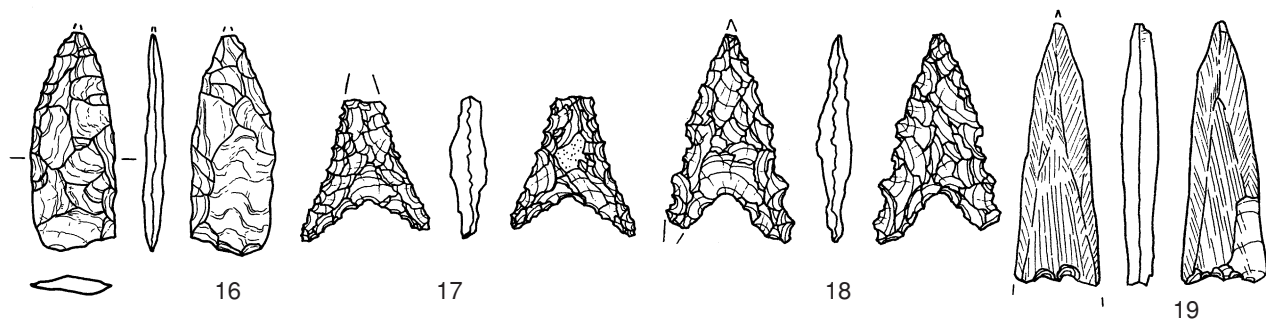
1点出土した。砂岩の円礫を素材とした磨石で2面を使用しているが、敲打痕は見られない。

有溝砥石 (第15図 No.21)

1点出土した。軟質の砂岩製で、一辺が20cmを超える大きく打ち欠いた礫を用いている。作業面である溝は8条観察され、幅は3mmの細いものから2cmを超える広いものまでの2種に分類される。

礫器 (第15図 No.22)

1点出土した。砂岩製で、やや扁平な剥片の刃部に調整痕が見られる。



22



第15図 A地点出土の石器

第4節 B地点の調査

B地点は三角山Ⅱ遺跡の東部に位置し、5つの地点の中でもっとも広範囲の遺跡である。北から南方向にかけてゆるやかに下降し、最高地の標高が254.6m、最低値の標高が252.3mである。遺物はほぼ全面にみられたが出土遺物のほとんどが石器であった。

1 縄文時代早期（Ⅲ層）の調査

（1）遺構

① 集石（第17・18図）

集石は2基検出された。石材は砂岩が主である。明確な掘り込みをもつもの1基と掘り込みの無いもの1基である。

1号集石（K-9区）

ゆるやかな傾斜面を掘り込んで設置している。径5～15cmの赤化した角礫で構成されている。また、周辺には同様な礫が散在している。なお23は有溝砥石である。

2号集石（K-9区）

直径約5cmの赤化した角礫で構成されている。これらの礫にはひび割れをおこしたものが多くみられる。掘り込みは確認できなかった。

3号集石（配石遺構）（K-9区）

ゆるやかな傾斜面に礫が散在した状態である。土製の耳栓が出土した部分を図示した。耳栓からほぼ同じ距離に直径20～35cmの角礫がある。1号集石との間にほぼ50cm間隔で一直線に並んだように見えるものもあるが、偶然の産物である可能性もある。

24は耳栓状土製品である。この遺構の中央で検出された。外面はナデと指押さえて、内面はナデによって整形されている。また25は礫器で大型の砂岩剥片を利用したものである。

（2）遺物

① 土器

Ⅲ層中から数点出土しているが、小破片であり図化できるものはなかった。

② 石器

土器と同様にⅢ層から出土した。打製石鏃・磨製石鏃・使用痕剥片・砥石・有溝砥石・礫器・フレイク（剥片）で構成される。

打製石鏃（第21図 No.26・27）

2点出土した。重量や挟りの状態などで細分される。26は姫島産の黒曜石製で明瞭な挟りが見られる。27は石英質の不純物があるため途中で製作を放棄した未製品であるが、剥離調整を頭部側縁から開始した様子が観察される。

磨製石鏃（第21図 No.28）

1点28が出土した。先端が欠けているが、頁岩を使用し、押圧剥離で周辺を加工した後、研磨を重ねたことが観察できる。

使用痕剥片（第22図 No.29・30）

2点出土した。いずれもヘラ状で、29は刃部1辺に使用痕があり、30は刃部周辺に使用痕が観察される。

砥石（第22図 No.31）

1点出土した。ほぼ直方体の砂岩を使用し、3面が磨面である。敲打痕は見られない。

有溝砥石（第17図 No.23）（第22図 No.32）

2点出土し、この内1点（23）は集石内遺物（前掲）である。ともに軟質の砂岩製で、32は握り拳大の礫を用いている。作業面である磨面は2面、幅3～6mmの溝が2条観察される。

礫器（第22図 No.33）

3点出土し、この内1点を図化した。すべて砂岩製で、剥片石器である。ホタテ貝状のものは一部自然面を残すものの全体形を整えた様子が観察される。他にヘラ状のものと切り出しナイフ状のものがある。

フレイク（剥片）（第22図 No.34・35）

数十点出土したが、この内2点を図化した。34は砂岩製で、自然面に磨痕が観察され、石皿破砕片の可能性はある。35は針尾系の黒曜石剥片であるが、使用痕は見られない。石器製作の過程でできたものであろう。

2 縄文時代前期以降（Ⅱa層）の調査

（1）遺構

① 集石（第20図）

1号集石（K-9区）

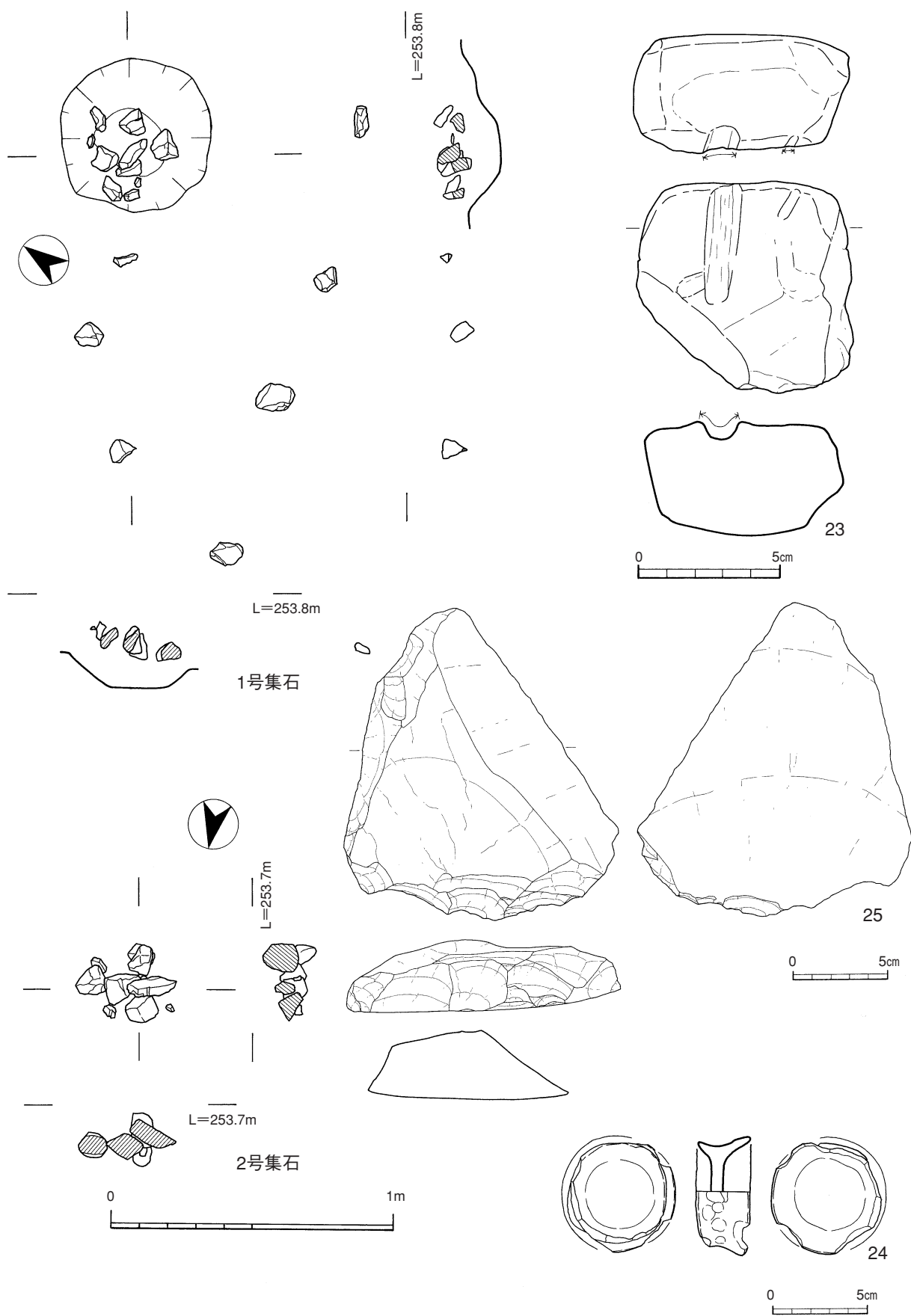
横転上で検出された。横転内ではあるが、火山灰状の黄灰色ブロックがまばらに入った暗黄褐色土上であったため、前期以降の集石と考えられる。赤化した5～15cm大の角礫で構成されている。掘り込みは確認できなかった。

② 土坑（第20図）

土坑はⅢ層上面で1基検出された。

土坑1（K-9区）

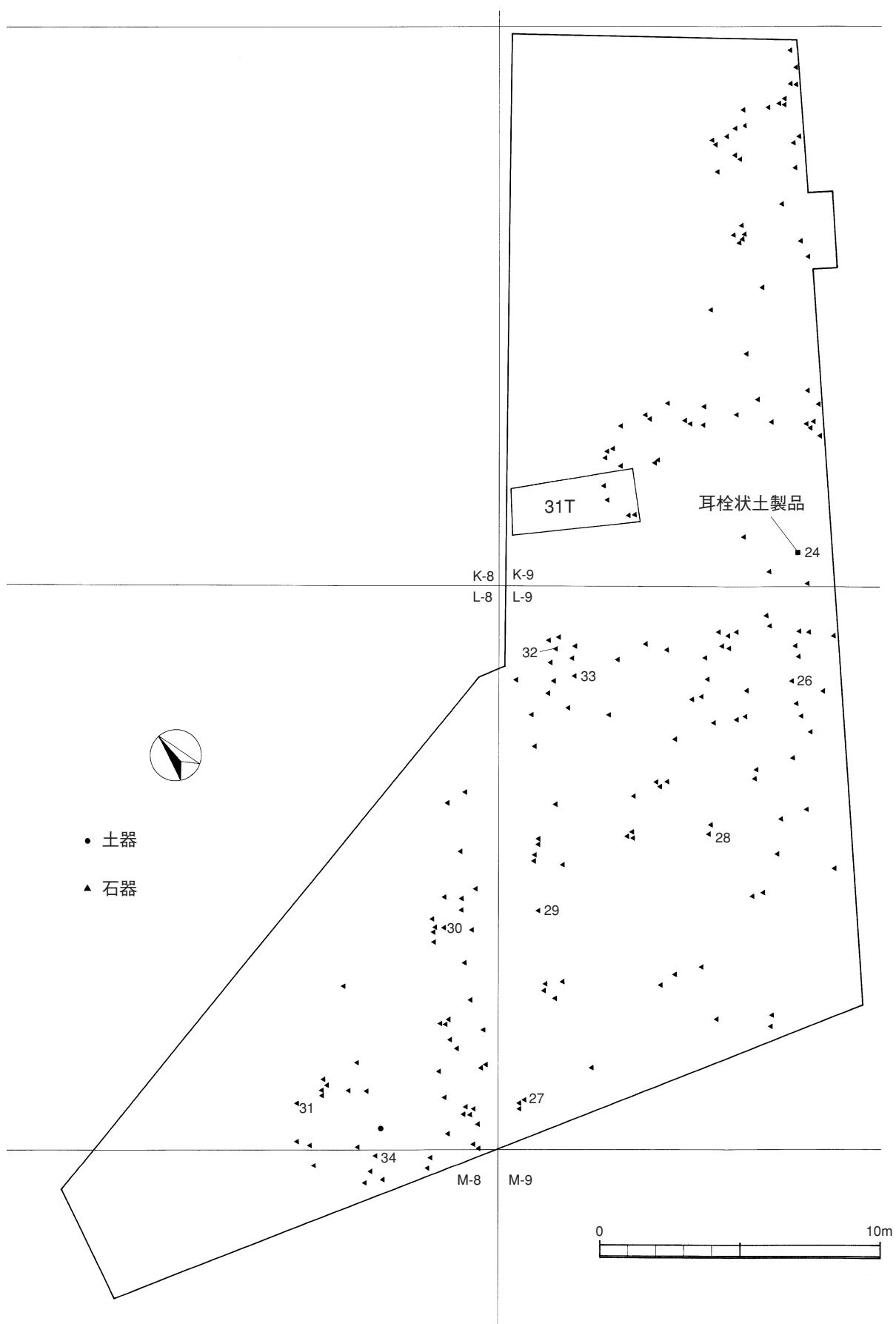
長辺127cm・短辺60cm・深さ34cmで平面形は長方形をなす。底辺部やや西よりに逆茂木状のピット2基をもつ。1基は直径14cmで、もう1基は直径5cm、深さは20cmある。



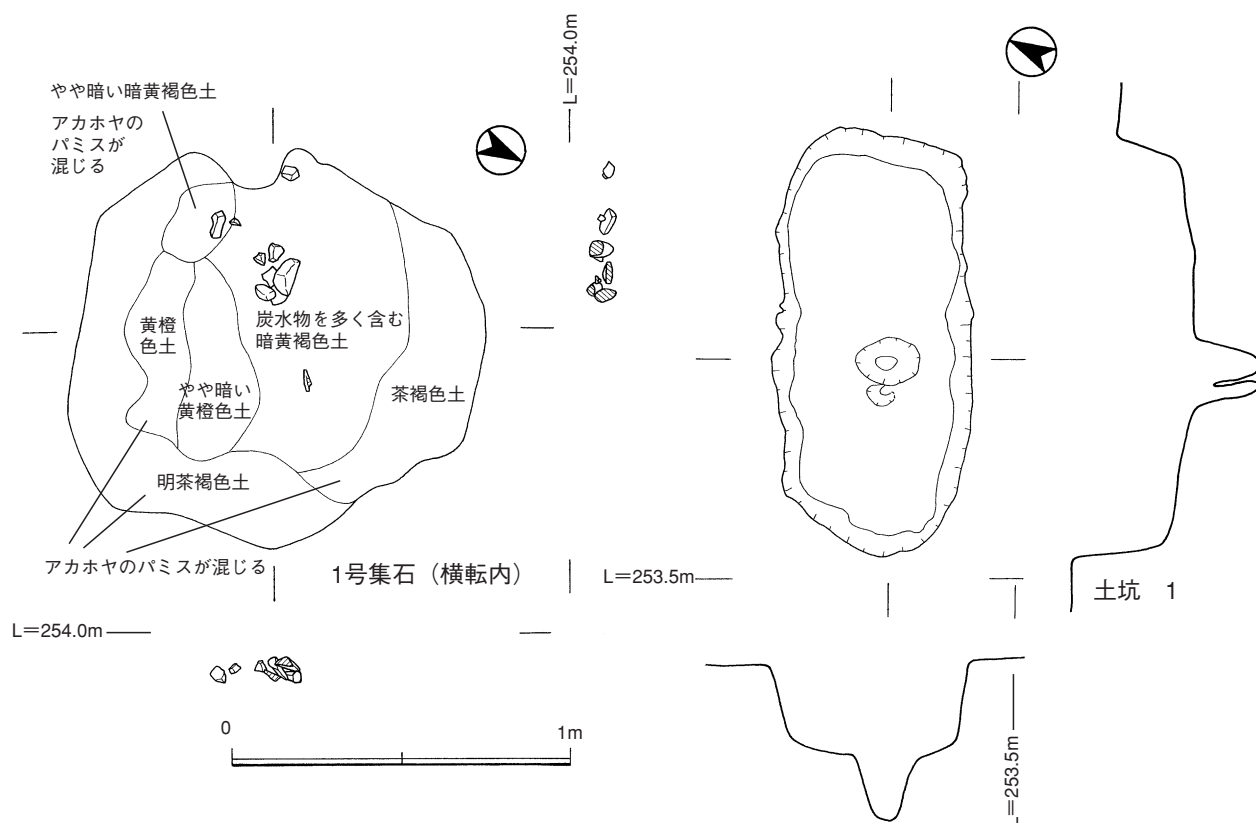
第17図 B地点の集石（1）遺構内遺物



第18図 B地点の集石 (2)



第19図 B地点遺物出土状況



第20図 B地点縄文時代前期以降の集石・土坑

第4表 B地点 縄文時代早期・前期以降の集石観察表

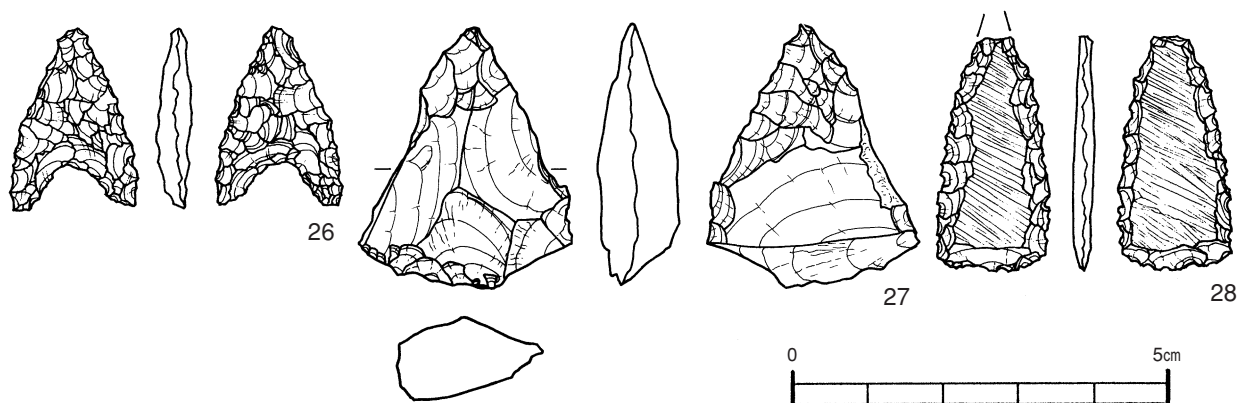
(単位cm)

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	時期	長さ	幅	礫数	石材	備考
17	1号集石	K-9	Ⅲ層	縄文早期	53	54	11	砂岩	掘り込みあり
17	2号集石	K-9	Ⅲ層	縄文早期	35	28	8	砂岩	掘り込みなし
18	3号集石	K-9	Ⅲ層	縄文早期	354	140	16	砂岩	耳栓出土・配石遺構か?
20	1号集石	K-9	Ⅱa層	縄文前期	18	15	10	砂岩	掘り込みなし

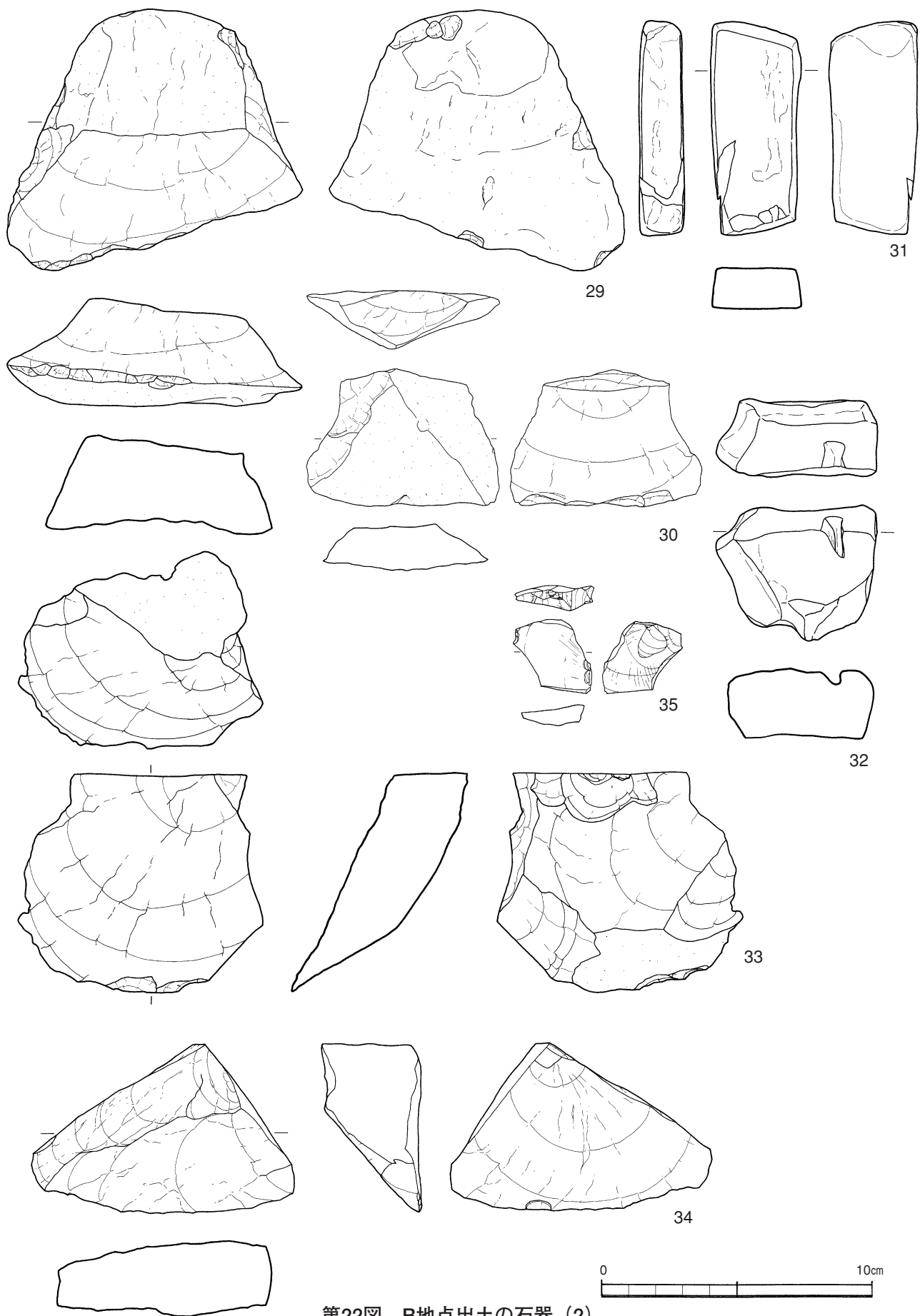
第5表 B地点 縄文時代前期以降の土坑観察表

(単位cm)

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	長辺	短辺	深さ	小ピット	備考
20	土坑1	K-9	Ⅲ	127	60	34	2基	ピットの深さ約20cm



第21図 B地点出土の石器 (1)



第22図 B地点出土の石器 (2)

第5節 C地点の調査

C地点は当遺跡の中でもっとも西側に位置する。遺物はほぼ全面から出土しているが、そのほとんどが石器であった。南東方向から北西方向にかけてゆるやかに傾斜し、最高地の標高が252.6m、最低値の標高が249.4mである。

縄文時代早期(Ⅲ層)以降の調査

(1) 遺構

① 集石

1号集石(J-10区)

Ⅲ層で検出された。ゆるやかな傾斜面を掘り込んで設置している。直径5～25cm赤化した角礫や破碎礫で構成される。また最下部には直径25cm石皿状の石がみられる。

② 土坑

土坑1(J-10区)

Ⅱa層で検出された。長辺147cm・短辺58cm・深さ55cmで、平面形は長方形である。

(2) 遺物

① 石器(第27図 No.36)

Ⅲ層中から数点出土しているが、1点のみ図化した。26トレンチから出土した。口唇部には貝殻腹縁による刺突がみられる。7類土器に類似した特徴をもつもので、文様は網目燃糸文を間隔をもって縦位に施すものである。

② 石器

土器と同様にⅢ層から出土した。土器の状況からⅢ層は前葉までさかのぼるとは考えにくく、後葉の可能性が高い。

発掘された石器は、使用痕剥片フレイク(剥片)で構成される。

使用痕剥片(第27図 No.37)

使用痕のある剥片は1点出土した。砂岩製の剥片石器で、刃部に欠けと稜線摩耗の使用痕が観察される。

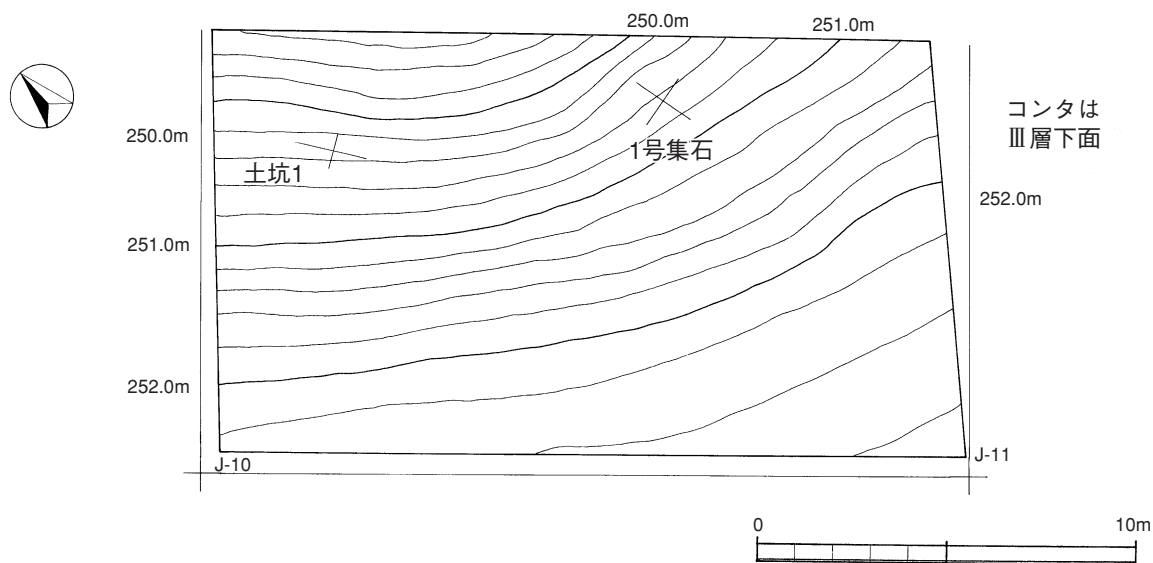
フレイク(剥片)(第27図 No.38・39・40)

フレイクは数十点出土したが、この内3点を図化した。すべて砂岩製で、38・39には使用痕の可能性があるが不確実である。40は使用に適した形状ながら、使用痕は見られない。

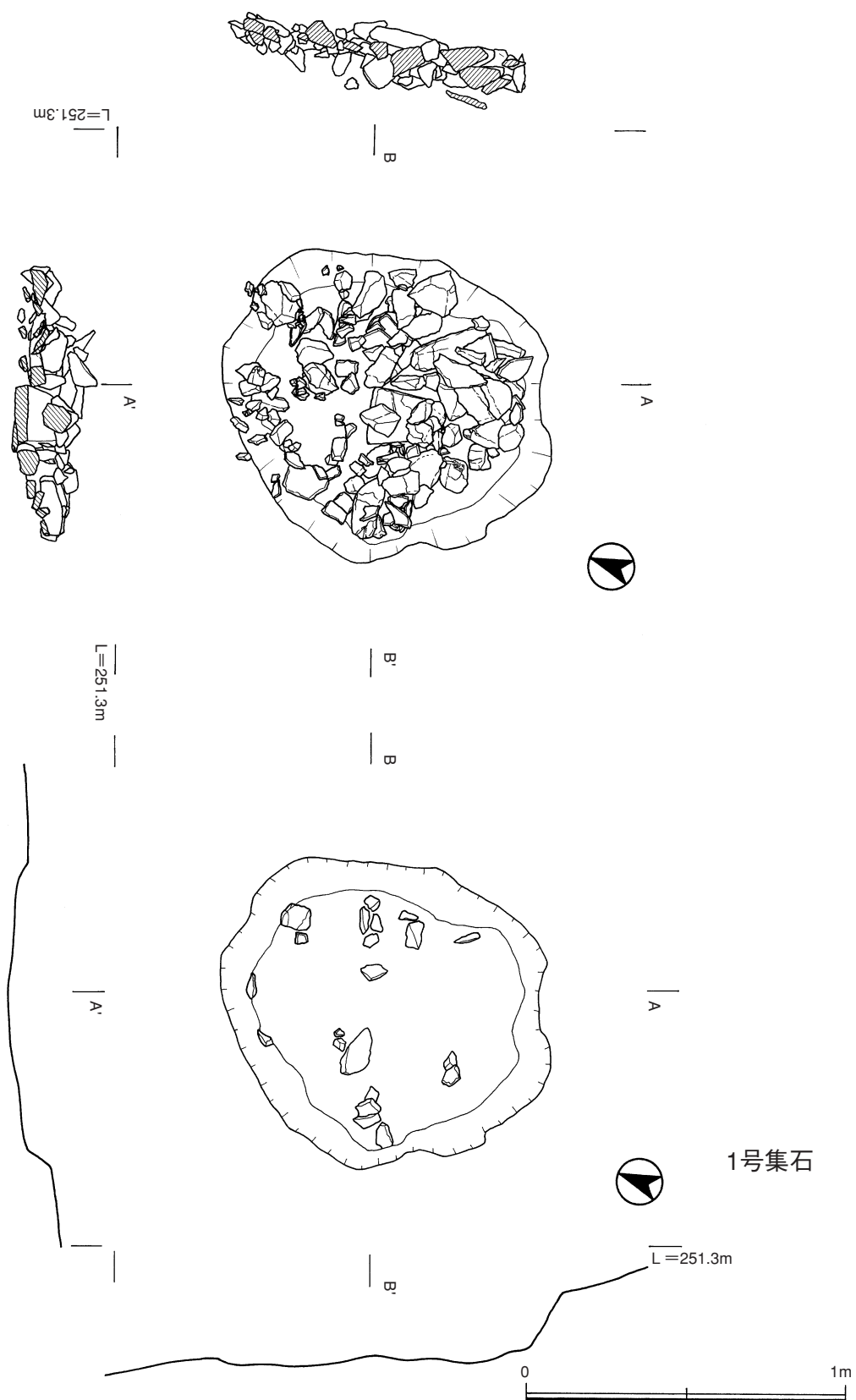
③ 須恵器(第28図 No.41・42)

アカホヤ火山灰層上部(やや炭化物を含む)のローム化した黄茶褐色土中から古代の甕が出土している。一個体であったものが割れたものと考えられる。当て具痕が明瞭に残るもので、ともに外面は格子目状タタキがみられる。41の内面は同心円状の当て具(同心円文)で、42の内面は残存部の上部が同心円当て具で下半部近くに条痕状の当て具が残るものである。

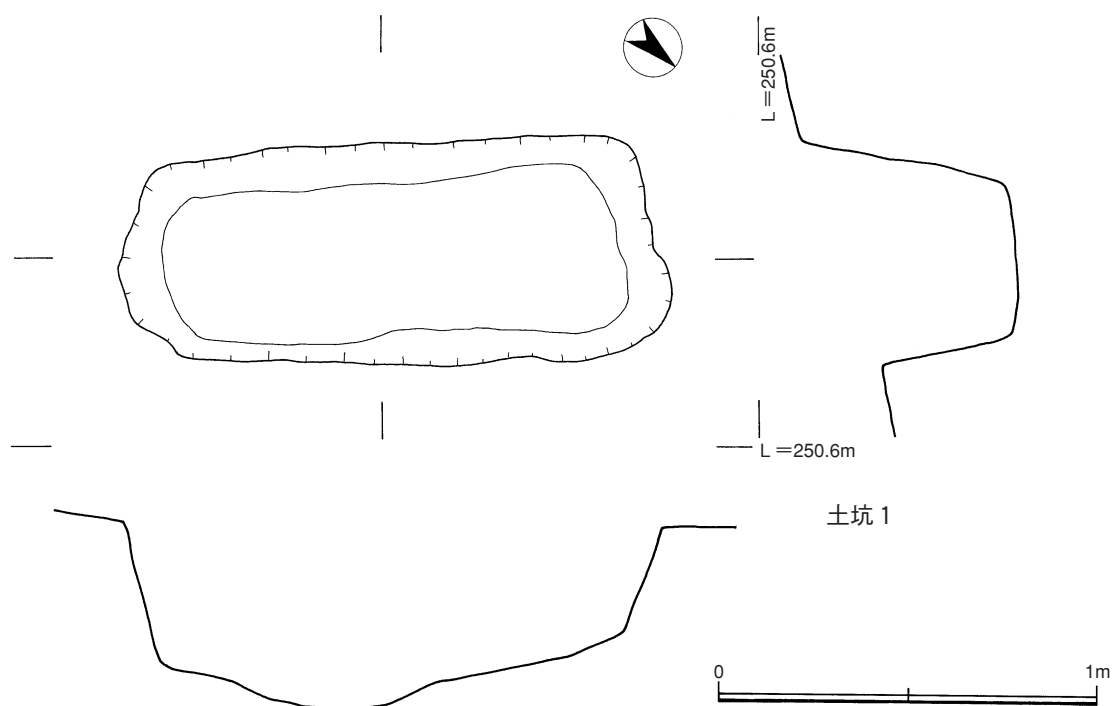
丸底で外面には直径12cmほどの円形に赤褐色化した部分がみられる。これは窯詰めの際に底部を安定させるため置かれた置台の痕跡とみられる。



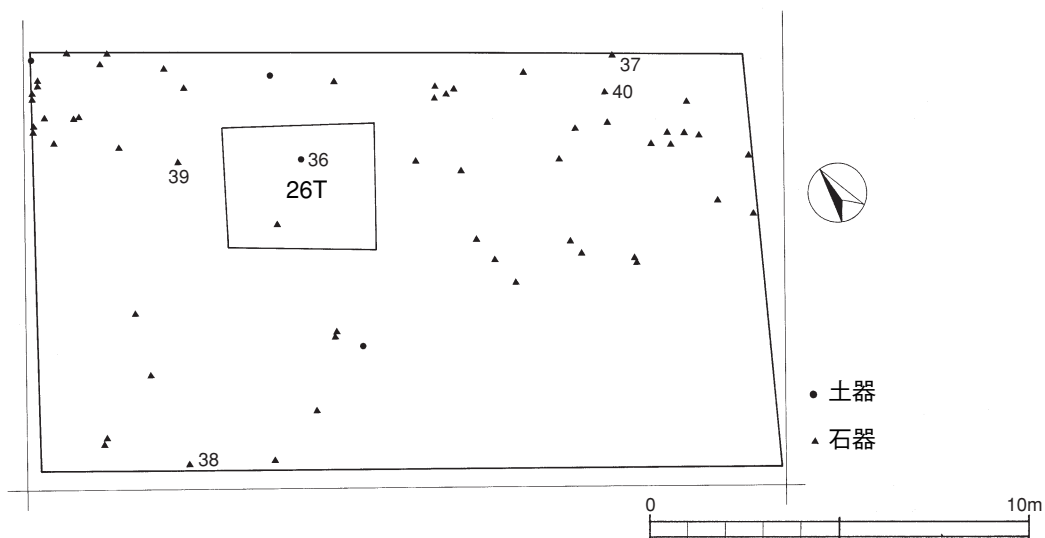
第23図 C地点遺構配置図



第24図 C地点の集石



第25図 C地点の土坑



第26図 C地点遺物出土状況

第 6 表 C地点縄文時代早期の集石観察表

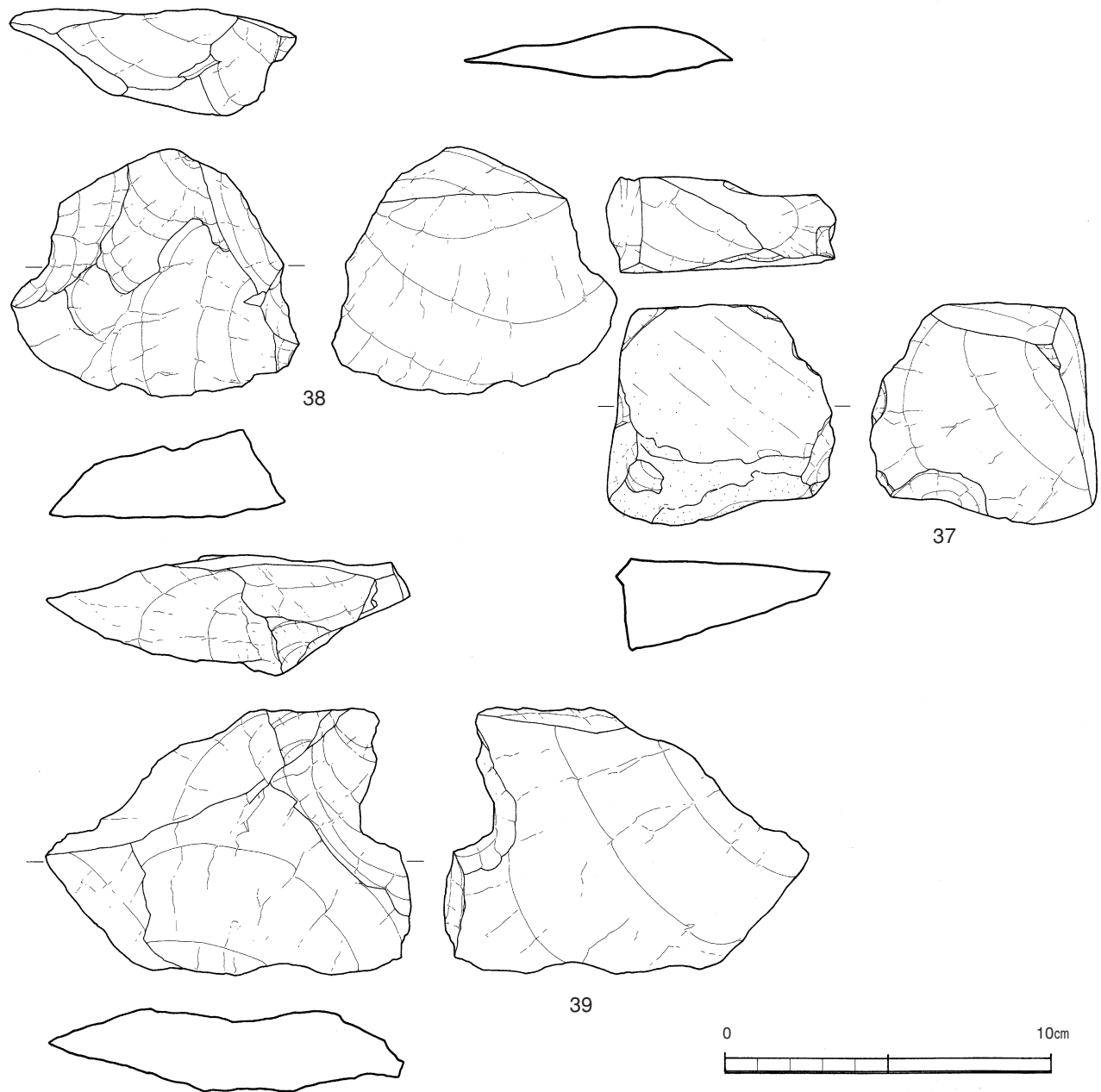
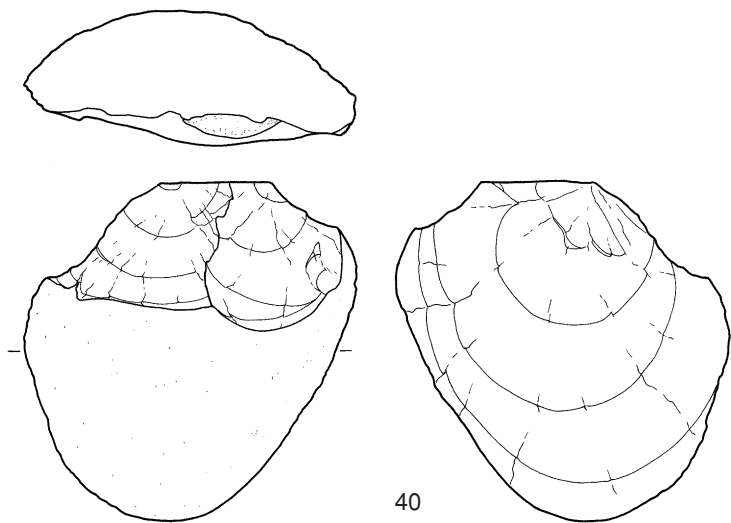
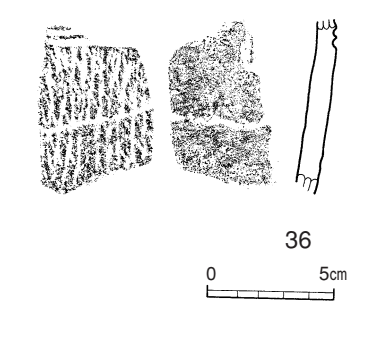
(単位:cm)

挿図 番号	遺構名	検出区	検出面	時 期	長さ	幅	礫数	石材	備 考
24	1号集石	J-10	Ⅲ層	縄文早期	130	98	166	砂岩	掘り込みあり

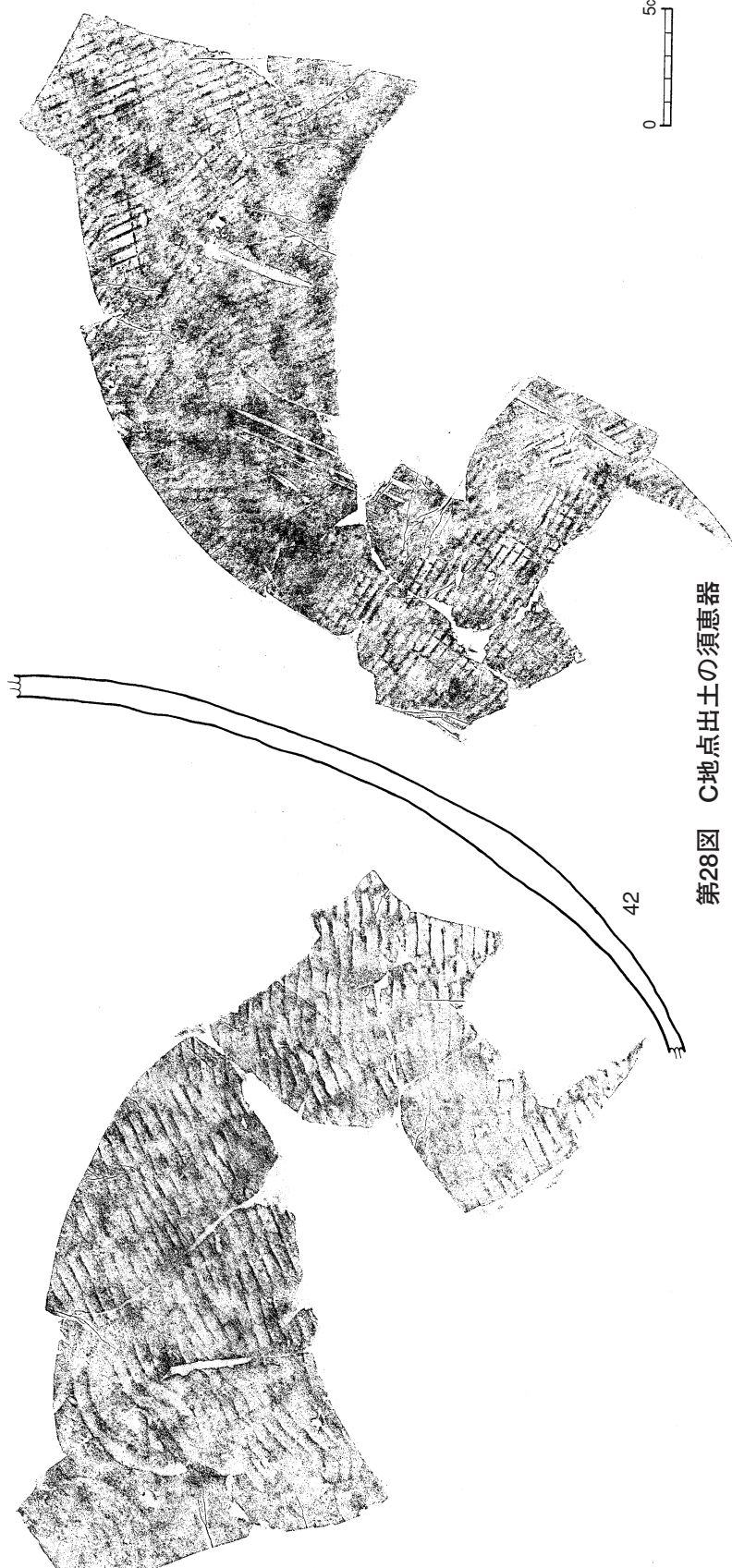
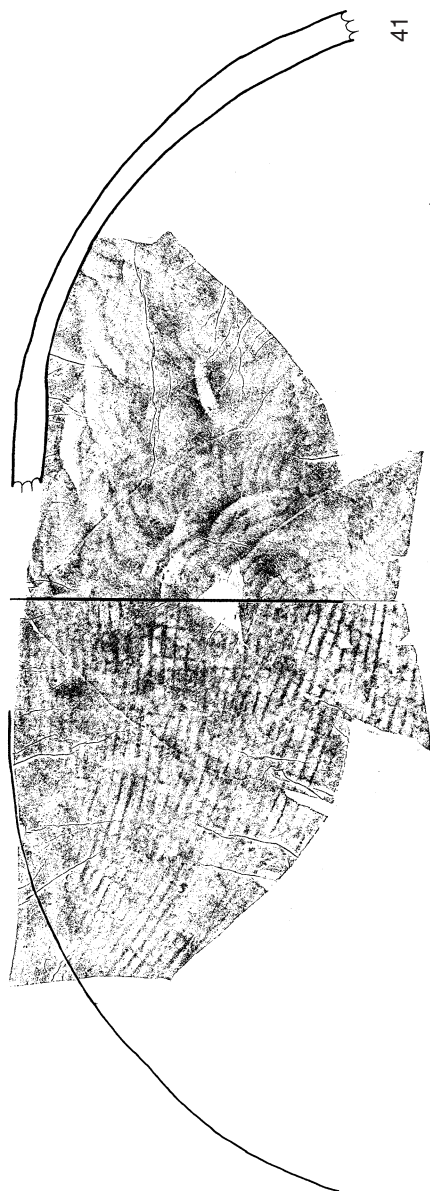
第 7 表 C地点縄文時代前期以降の土坑観察表

(単位:cm)

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	長辺	短辺	深さ	小ピット	備 考
25	土坑1	J-10	Ⅱa層	147	58	55	なし	平面形は長方形



第27図 C地点出土の土器・石器



第28図 C地点出土の須恵器

第6節 D地点の調査

三角山Ⅱ遺跡の南部に位置する地点で、ここでは多くの縄文時代早期の遺物が出土している。

縄文時代早期（Ⅲ層）以降の調査

（1）遺構

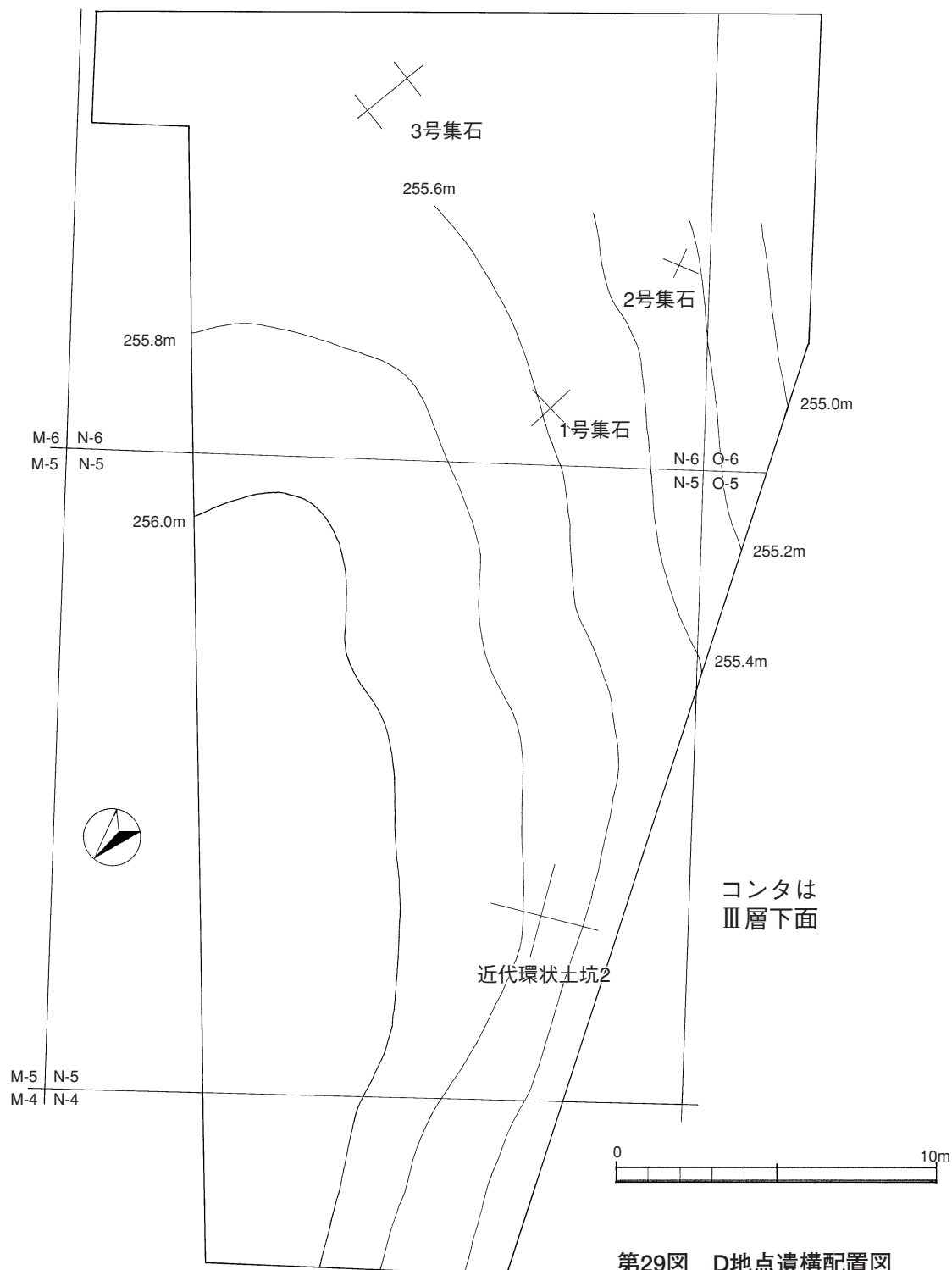
① 集石

集石はⅢ層で3基検出された。いずれも明確な掘り

込みをもつものであった。

1号集石（N-6区）

掘り込みがみられるもので、大部分は直径5～30cmの角礫と熱破砕礫とで構成されている。礫はもろくなっているものが多い。中央部には礫が無く上部の礫は掘り込み部分より南南西にずれている。また、集石中には炭化物が含まれ、くぼみの底面は土がやや硬化している。



第29図 D地点遺構配置図

2号集石（F－8区）

掘り込みがみられるもので、直径5～15cmの角礫と熱破碎礫とで構成されており、掘り込みの底にはやや大きめの石が配置されている。礫は熱と風化により、もろくなっているものが多い。掘り込み部分は西側に広がっている。

3号集石（E－10区）

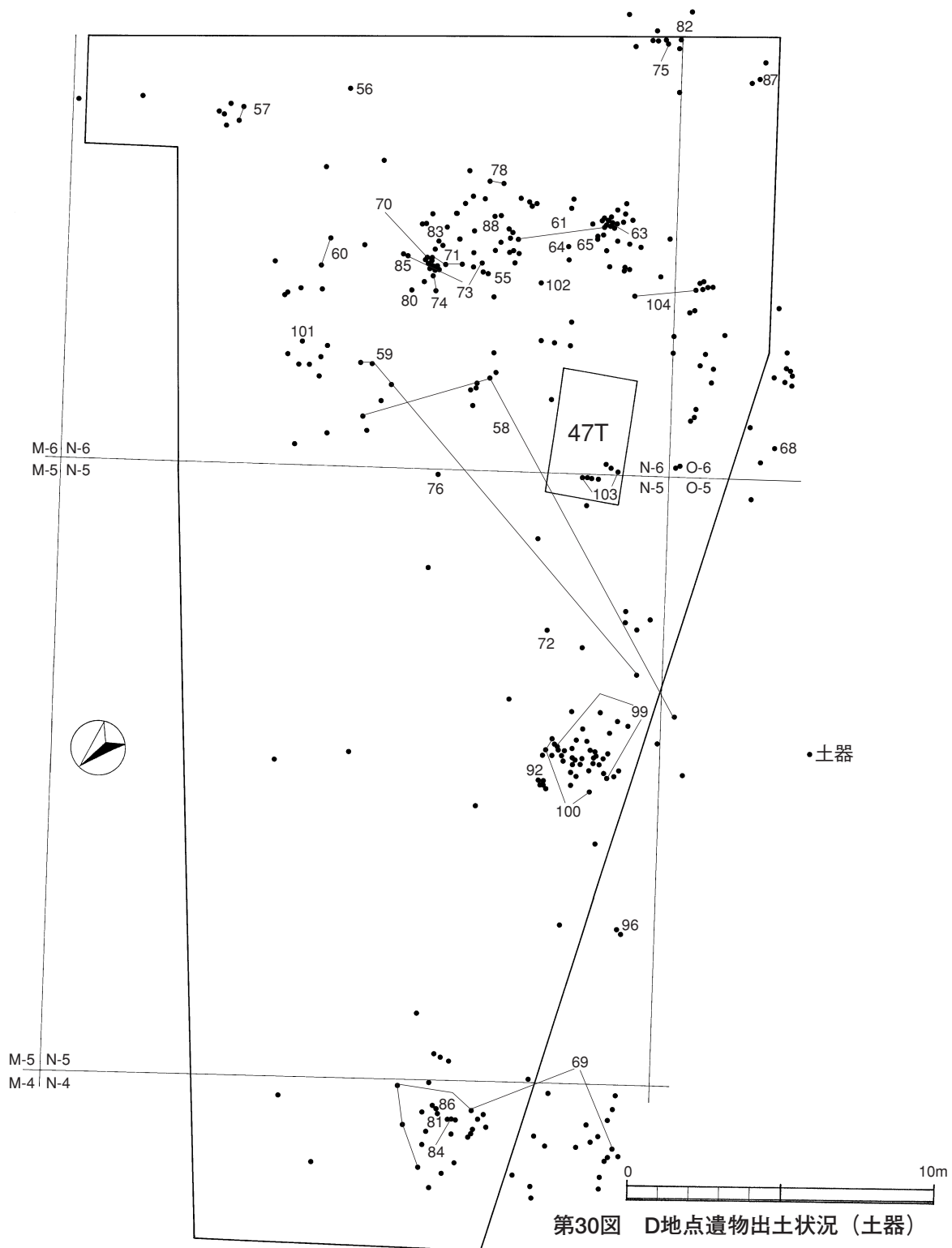
掘り込みがみられるもので、大部分は直径5～15cm

の角礫と熱破碎礫とで構成されている。主体部から約1 m離れて礫の集中が見られる。礫はもろくなっているものが多い。

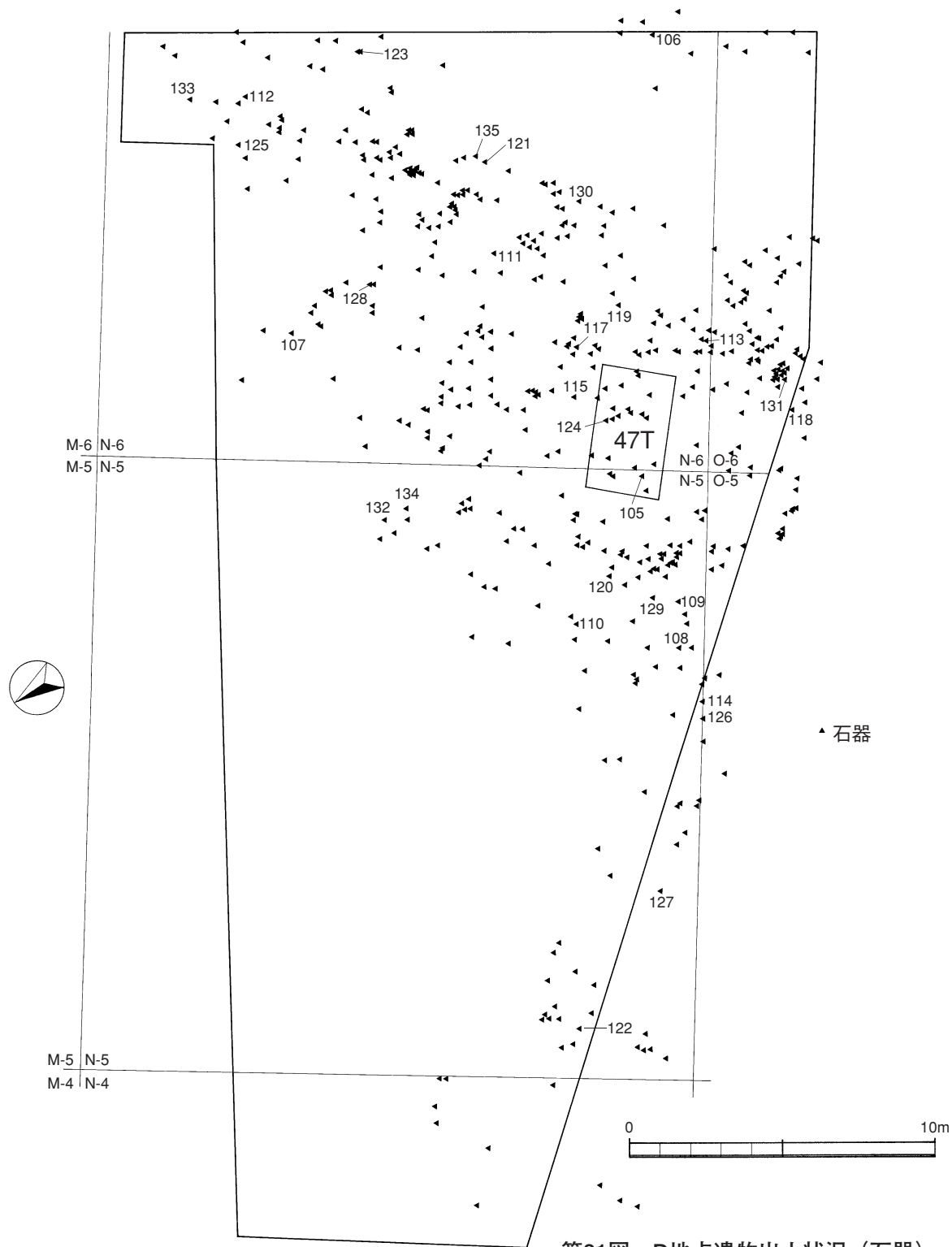
② 環状土坑

近代環状土坑 2（N－5区）

直径約3 m・深さ約40cm、中央に台形状の掘り残し部分があり、外側に長方形の張り出し部を持つ環状土坑である。A地点で検出されているものに類似する。



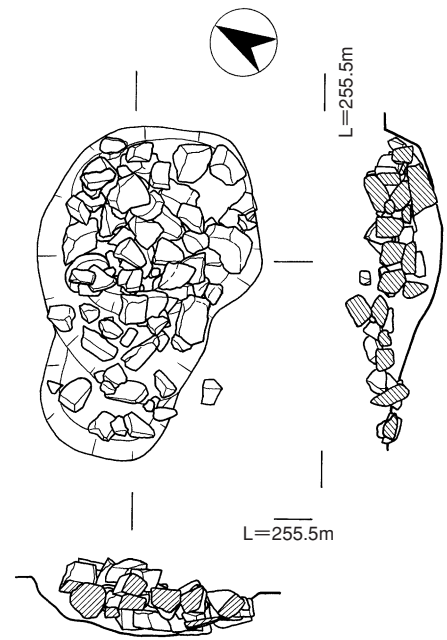
43～54は遺構埋土中より出土した遺物である。43は陶器である。産地・時期は明らかではないが、明治時代以降のものである可能性が高い。44はビール瓶である。右側よりかかれた『麒麟ビール』の記銘がみられる。45～48は縄文土器である。内外面に貝殻条痕がみられるものである。49～54は磨石・敲石・凹石などである。縄文時代のものであるとみられる。



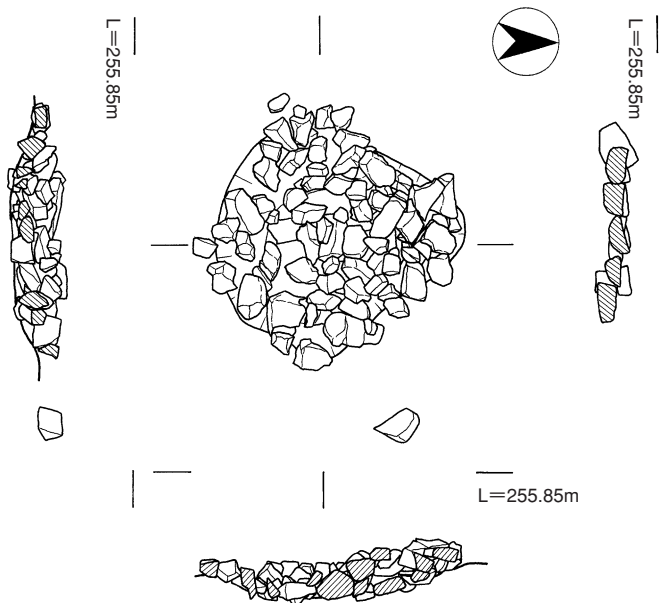
第31図 D地点遺物出土状況（石器）



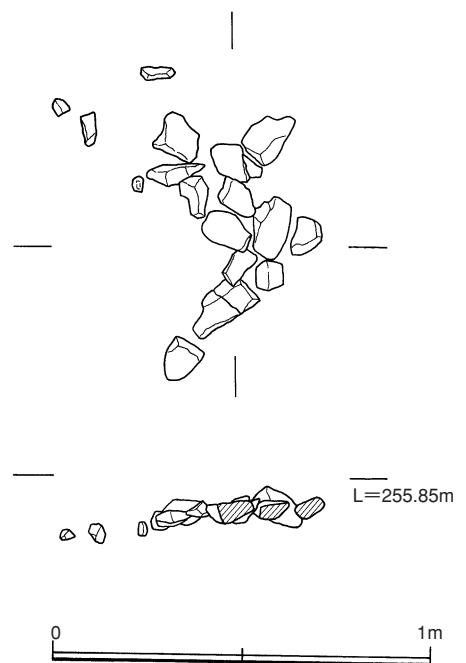
1号集石



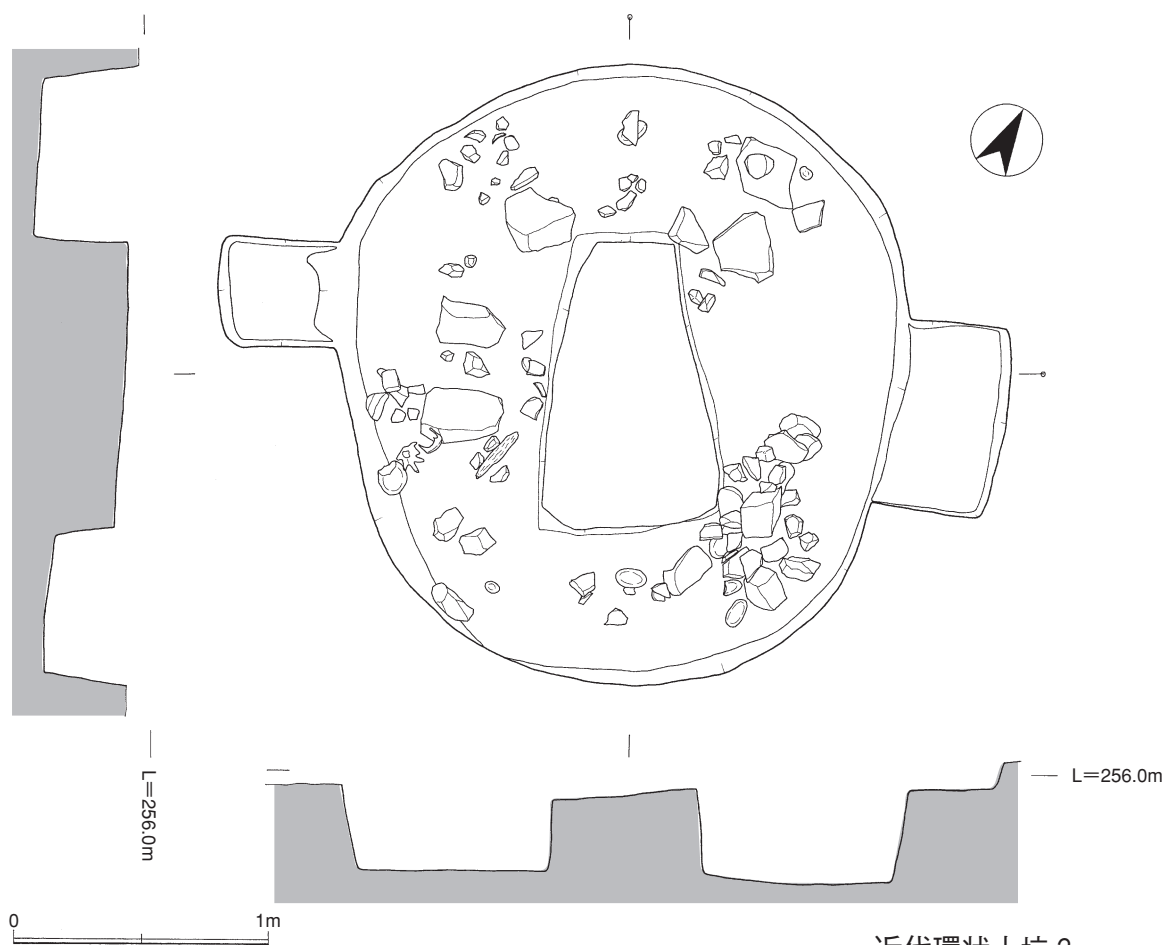
2号集石



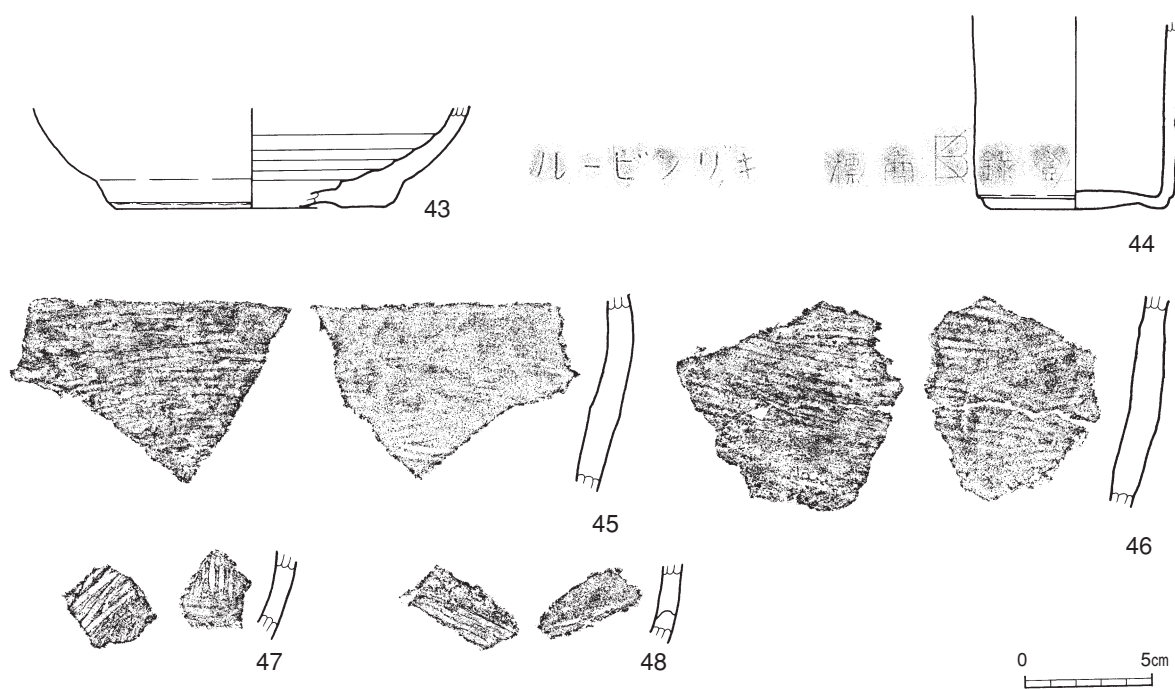
3号集石



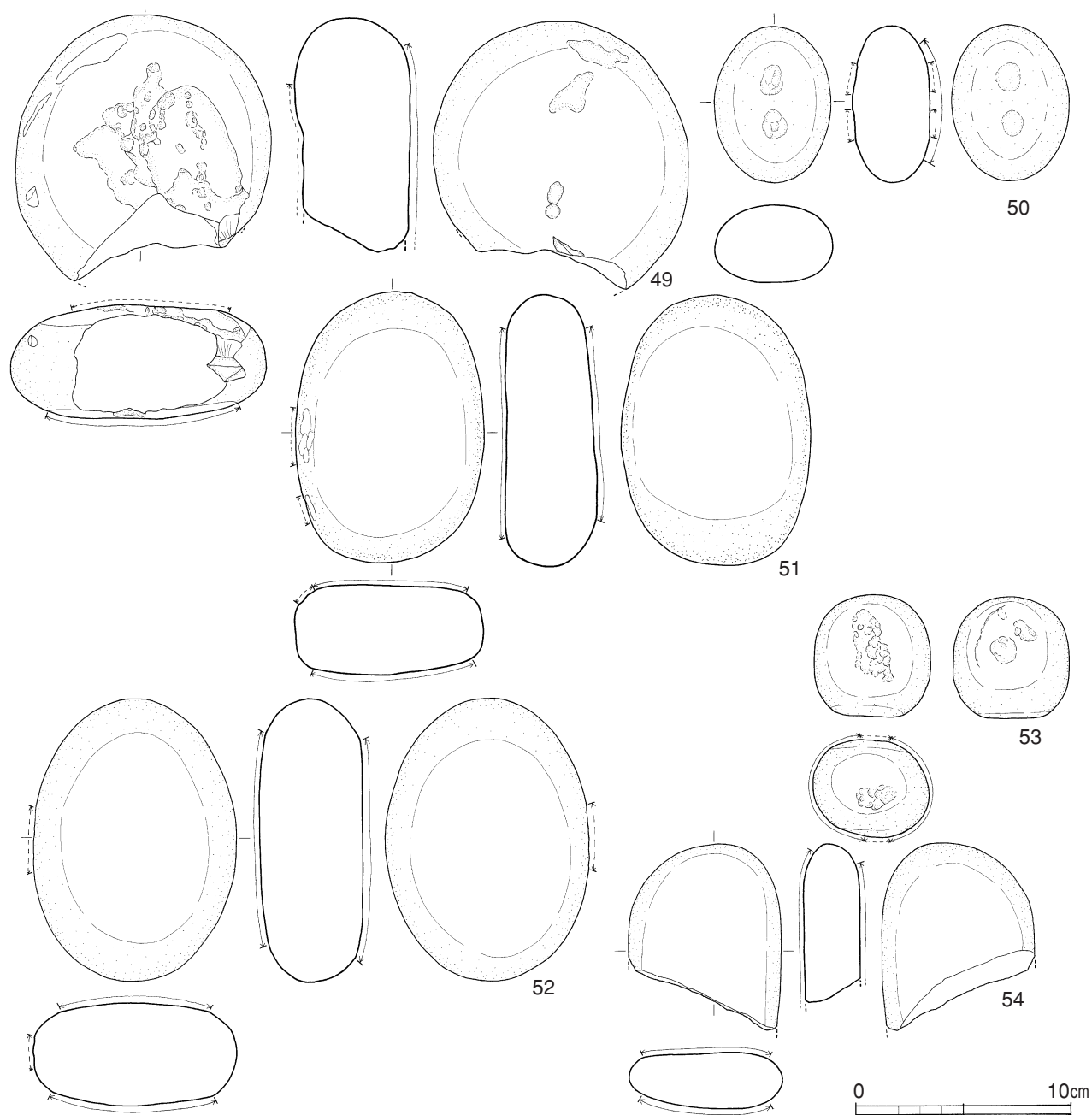
第32図 D地点の集石



近代環状土坑 2



第33図 D地点の近代環状土坑・遺構内遺物 (1)



第34図 D地点の遺構内遺物（2）

第8表 D地点 縄文時代早期の集石観察表

（単位cm）

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	時期	長さ	幅	礫数	石材	備考
32	1号集石	N-6	Ⅲ層	縄文早期	90	78	76	砂岩	掘り込みあり
	2号集石	N-6	Ⅲ層	縄文早期	90	59	81	砂岩	掘り込みあり
	3号集石	N-6	Ⅲ層	縄文早期	76	74	98	砂岩	掘り込みあり

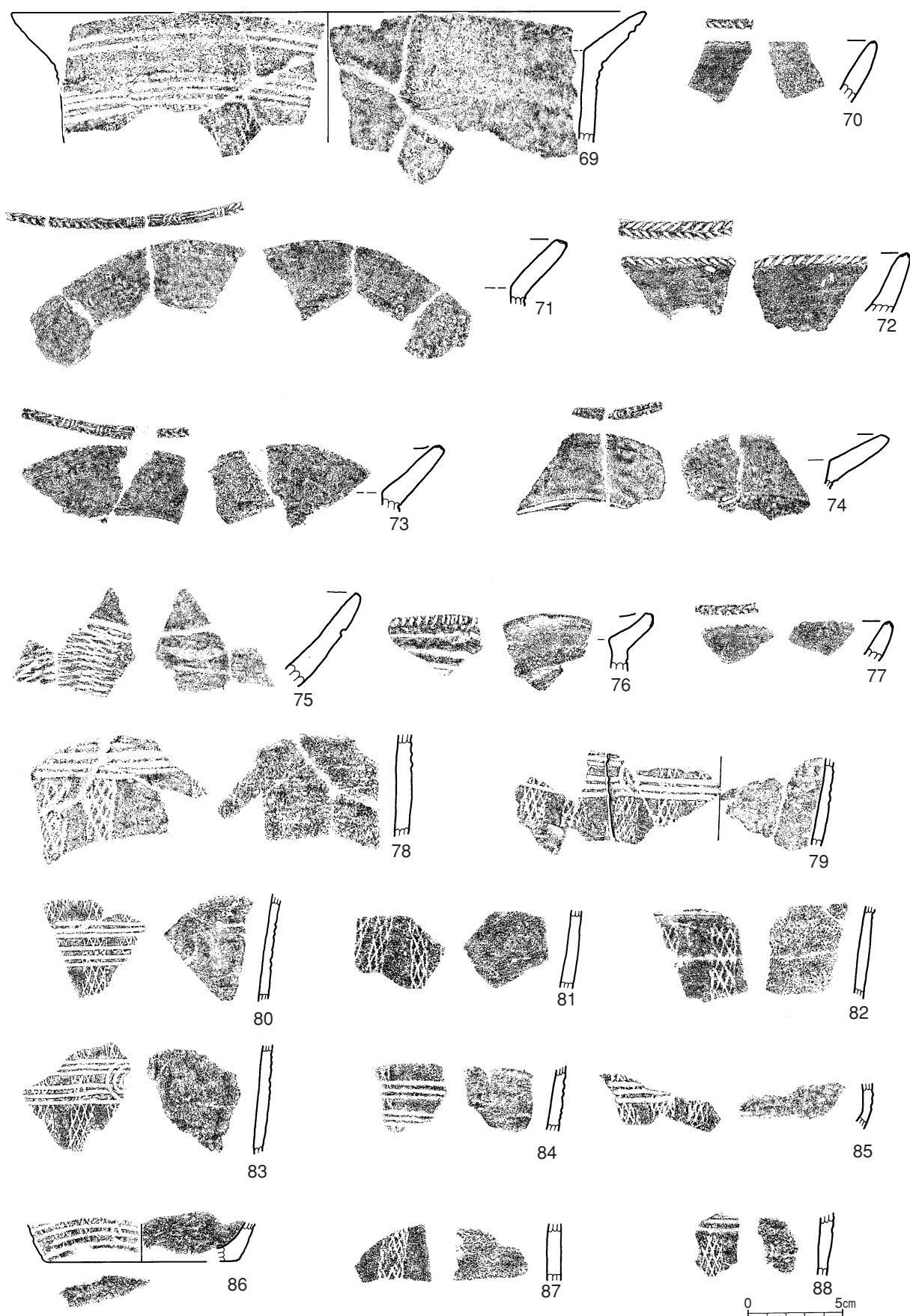
第9表 D地点 近代の土坑観察表

（単位cm）

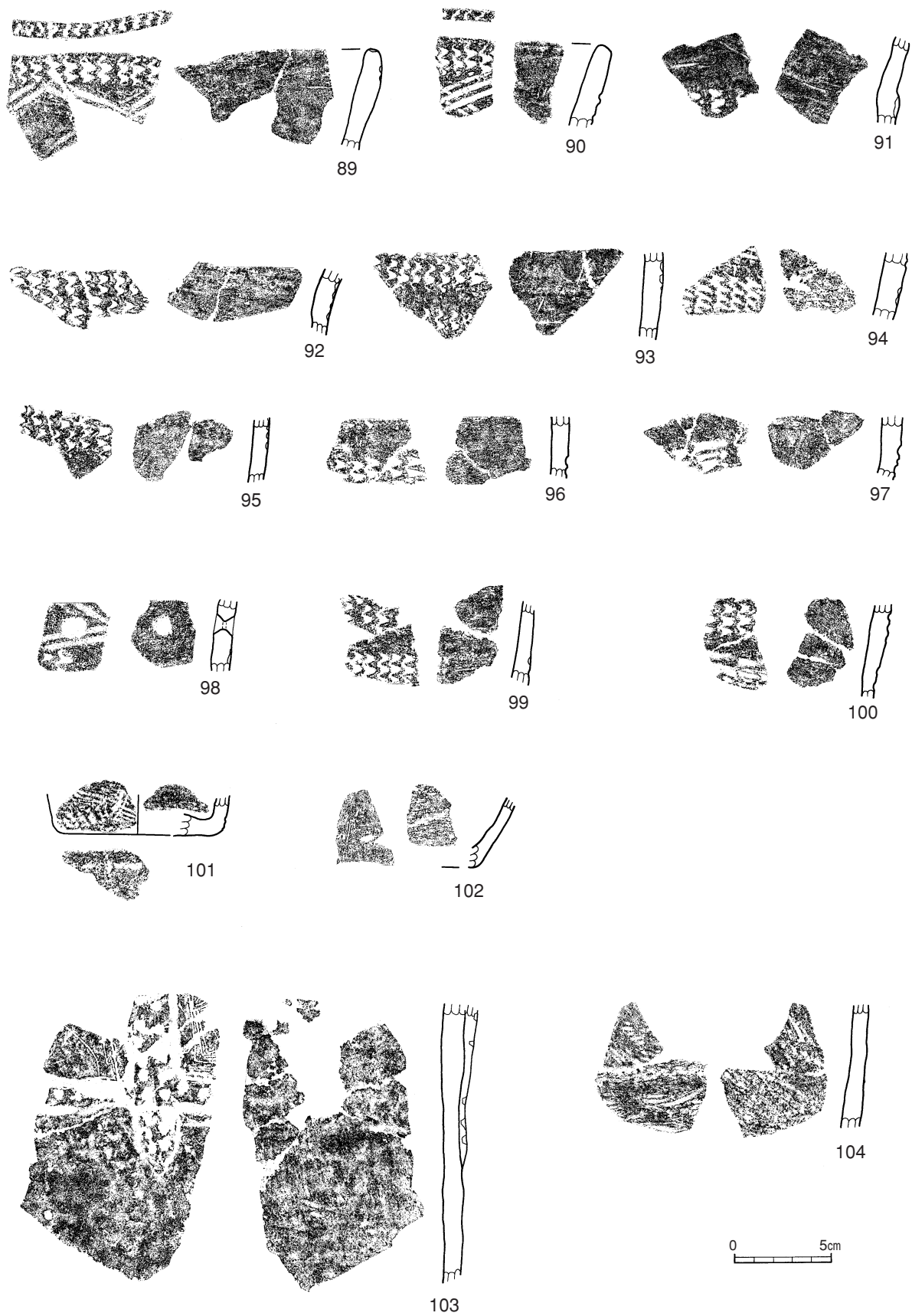
挿図番号	遺構名	検出区	検出面	長径	短径	深さ	小ピット	備考
33	環状土坑2	N-5	I層	312	244	36	なし	旧日本軍の遺構 （環状土坑1は平面図のみ）



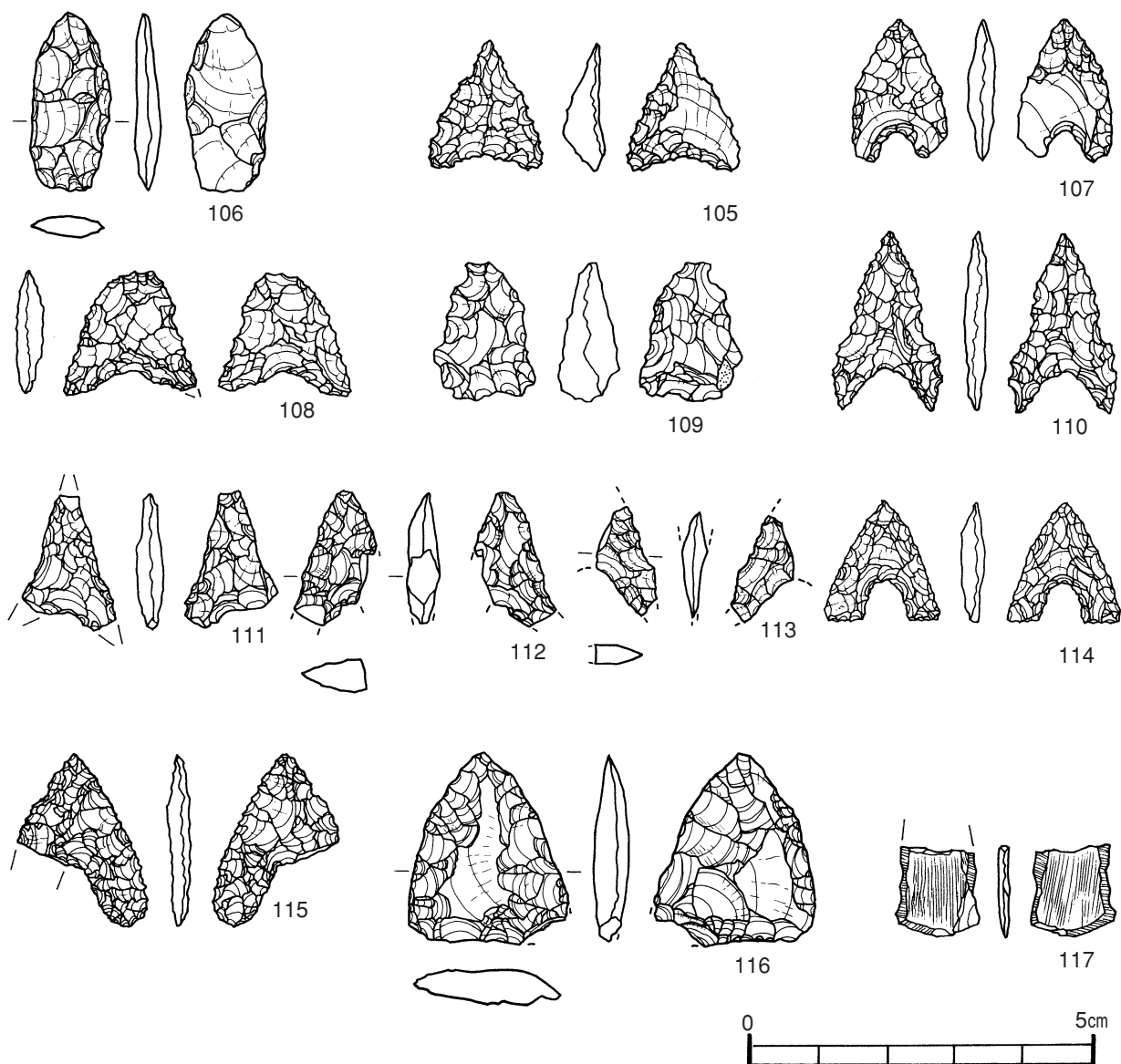
第35図 D地点出土の土器 (1)



第36図 D地点出土の土器 (2)



第37図 D地点出土の土器 (3)



第38図 D地点出土の石器 (1)

(2) 遺物 (Ⅲ層)

① 土器 (第35～37図 No.55～104)

55～57は第2群第2類土器に属する。55は口縁部である。角筒形の可能性があるが小破片であり、明らかでない。文様は、口唇部に刻目を施し、口縁部には横位の貝殻刺突文がめぐる。胴部には貝殻押引文が施され、底部付近には縦位の貝殻刺突文を施す。

58～60は第2群第4類土器に属する。いずれも口縁部から胴部屈曲部にあたる。口縁部が外反し胴部で屈曲する。底部は本遺跡では発見されていないが通常は若干底上げ状を呈する。文様は撚糸を回転施紋したものである。

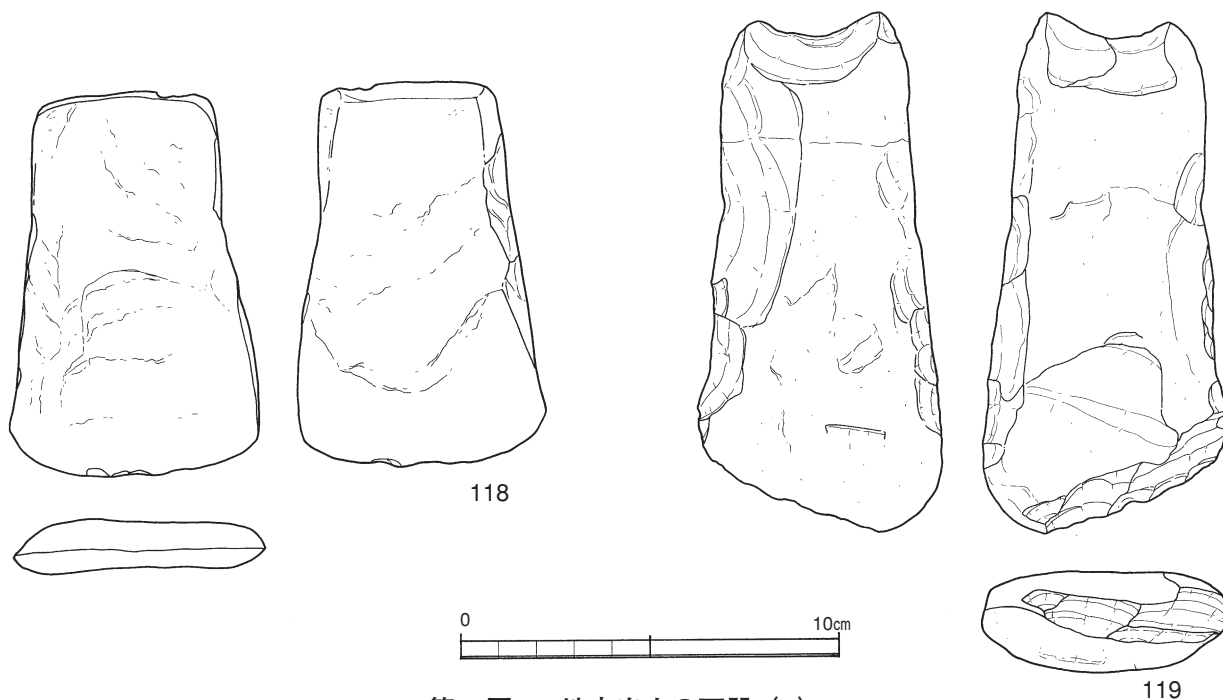
61～64は第2群第5類土器である。口縁部が外反するもので、口縁部や胴部に刺突をめぐらせ、部分的にフジツボ状の瘤状突起が付着する。文様は、沈線文・

刺突文を組み合わせた多様な文様パターンがみられる。62は壺形土器の可能性はある。

65～68は第2群第6類土器に属する。外反する口縁部を持つものである。口縁部外面に粘土紐を貼付するなどして肥厚させ、文様帯をつくりだしている。文様は、口縁部に沈線文を羽状に施し、胴部には結節縄文が施文されている。

69～88は第2群第7類土器に属する。口縁部はラッパ状に外反し、短筒状の胴部を呈する。文様は網目撚糸文を間隔を持って縦位に施すもの (69・78～88) と、幾何学的に撚糸文を施しその上下を沈線で区画するもの (75) の2つのタイプがみられる。69～77は口縁部である。口唇部が無紋のもの (69・75)、刻みを施すもの (70～74・76・77) の2種類がみられる。

89～102は第2群第8類土器に属する。口縁部が外



第39図 D地点出土の石器 (2)

反し胴部内面に稜線を残すものと口縁部が直行し胴部がわずかにふくらむものがある。文様は貝殻縁による刺突連点文を口縁部および胴部に施すものがみられる。91は瘤状の突起を設け、その部分に貝殻刺突を施すものである。98は補修孔がみられるもので菱形の格子状に施された沈線も観察できる。

103・104はその他の土器である。103は直行する胴部に十字状に交差する突帯を設け、その上に竹管状の施文具で刺突文を施したものである。胴部には幾何学的な沈線がみられる。類例がみられないもので検討を要する遺物である。104は第2群第9類土器に類似するものである。胴部に微隆起突帯を設け、それより上部の施文帯に貝殻腹縁による波状の押し引き文を施すものである。

② 石器

打製石鏃・磨製石鏃・磨製石斧・叩き石・磨石・使用痕剥片・剥片石器・礫器・有溝砥石・フレイク（剥片）・石核で構成される。

打製石鏃 (第38図 No.105～116)

12点出土し、全点を図化した。重量や挟りの状態などで細分される。105～107は主要剥離面を器面に残す。105は安山岩製で、比較的小型だが厚みがある。形態は正三角形に近く、浅い挟りが入る。106は頁岩製で、全体に調整が荒い。形態は僧帽状で挟りは見られない。107も頁岩製で、形態は木の葉型であり、深い挟りが入る。108・109は石鏃未製品である。108は安山岩製で、片側脚部先端が欠けているが浅い挟りが入る。頭部調整中に放棄されたものである。109は姫島産黒曜

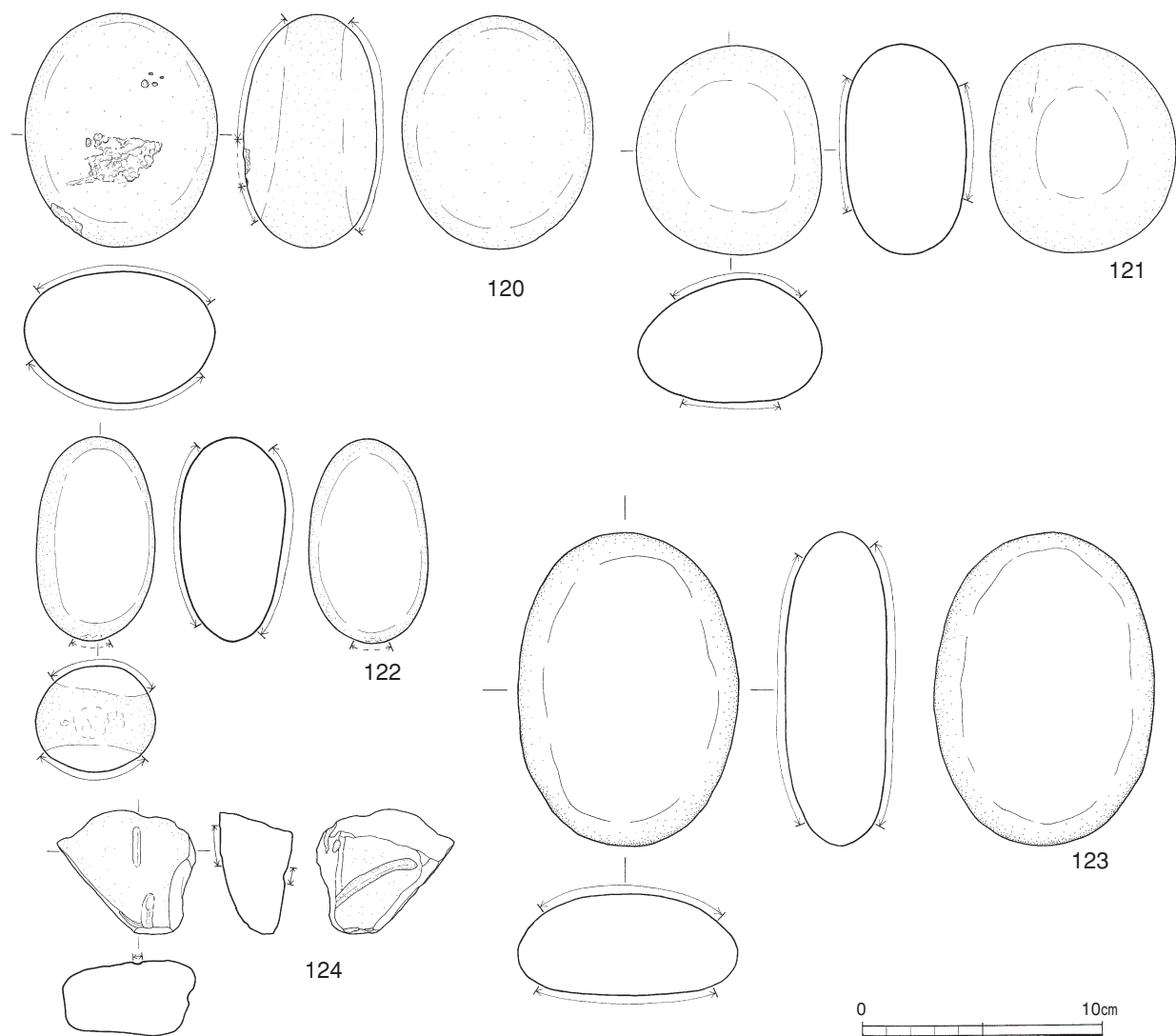
石製で、主要剥離面を器面に残す。小型の割に厚みがありすぎ、全体調整半ばで放棄されたものである。110も姫島産黒曜石製で、形態は種子島産の石鏃として特徴的な「鋏形」をしている。挟りの入れようで、脚部が踏ん張っているような張り出し方に見える。111～113は破損が激しい。111は安山岩製で、側縁に浅い挟りが入り、一部に鋸歯状の調整が見られる。112はチャート製で、側縁に挟りは見られない。113も安山岩製で、片側脚部のみであるが、脚部に直線的な挟りの入っていた様子がうかがえる。114も安山岩製で、正三角形に深い挟りが入る形態である。115は桑ノ木津留系の黒曜石製で、片側脚部を欠くがほぼ均一な剥離が施される。深い挟りが入り、脚部先端は丸く整形される。116は本地点最大の石鏃である。針尾系の黒曜石製で、一部に主要剥離面を残して調整が施されるものである。両脚部先端を欠くが、浅い挟りが入る様子が観察される。

磨製石鏃 (第38図 No.117)

1点117が出土した。中央部で折れ先端部を欠いているが、頁岩を使用し、全体に研磨されている。

磨製石斧 (第39図 No.118・119)

2点出土した。いずれもホルンフェルス製で、重量や仕上げの状態などで細分される。118は目に沿って割られたやや薄手の剥片を、荒い剥離によって整形後、刃部を研ぎ出している。刃部は薄く鉄斧的で、使用による刃こぼれが見られる。119は自然礫面が残り、縁辺に荒い剥離痕を残しつつ全体を敲打により整形後、刃部を研ぎ出している。頭部と刃部を大きく破損して



第40図 D地点出土の石器 (3)

いるが、使用法との関連が注目される。

磨石 (第40図 No.120～123)

4点出土した。いずれも砂岩製で、円形や楕円形の円礫を素材としており、磨面は2面である。120・121は円形で、120は敲打痕が3か所あるのに対して121は見られない。122・123は楕円形で、122は敲打痕が1か所あるのに対して123は見られない。

有溝砥石 (第40図 No.124)

1点出土した。軟質の砂岩製で、握り拳大の礫である。作業面である溝は幅3mmの細いもので、5条観察される。

使用痕剥片 (第41図 No.125)

1点出土した。砂岩製で、形態は石匙状である。刃部には使用痕が見られる。

剥片石器 (第41図 No.126)

1点出土した。砂岩製で、形態はナイフ状、刃部に調整痕を残す。

礫器 (第41・42図 No.127～128)

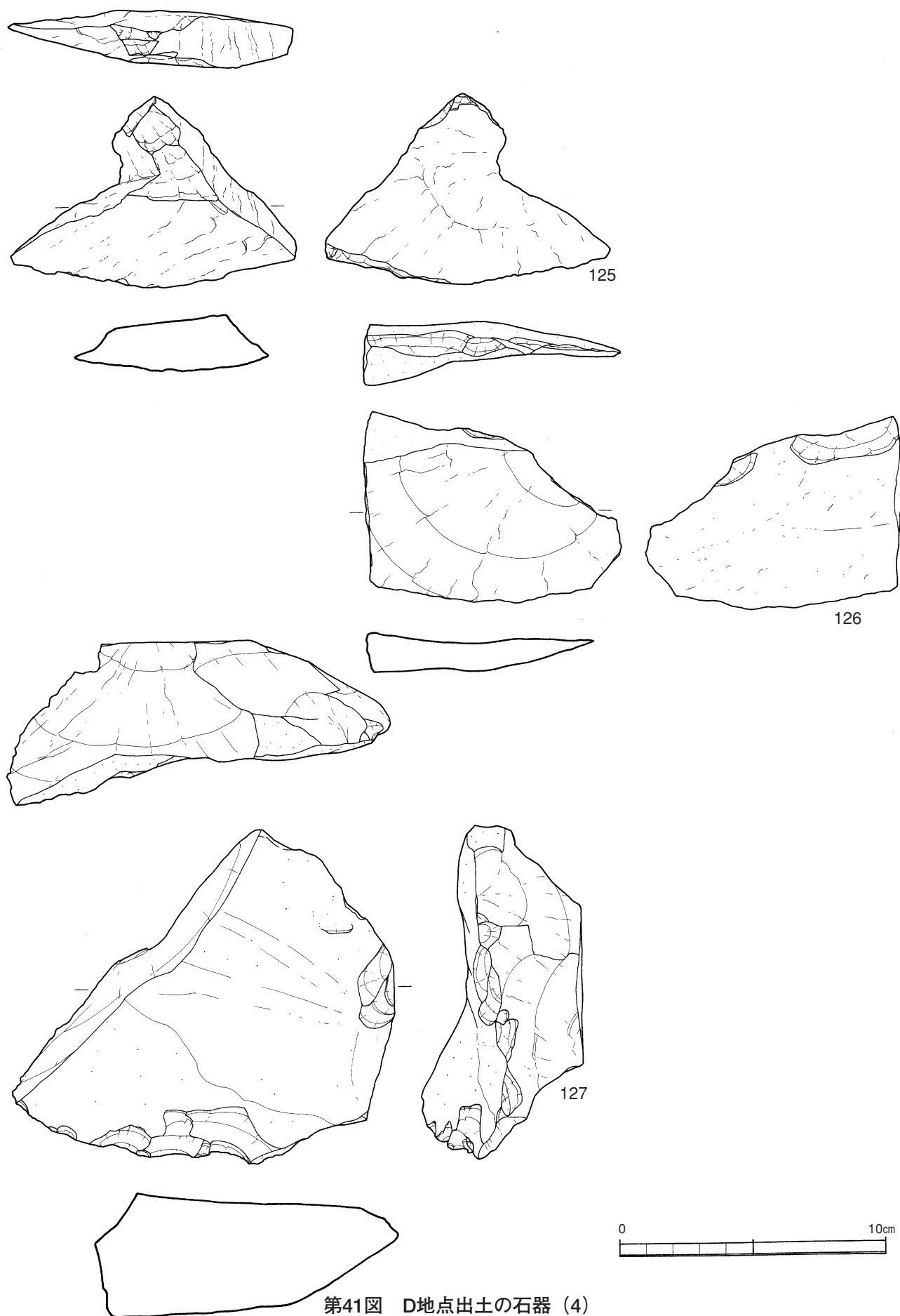
2点出土した。すべて砂岩製で、やや扁平なもの(127)、礫の形状が三角形状のもの(128)がある。いずれも刃部に調整痕を残す。

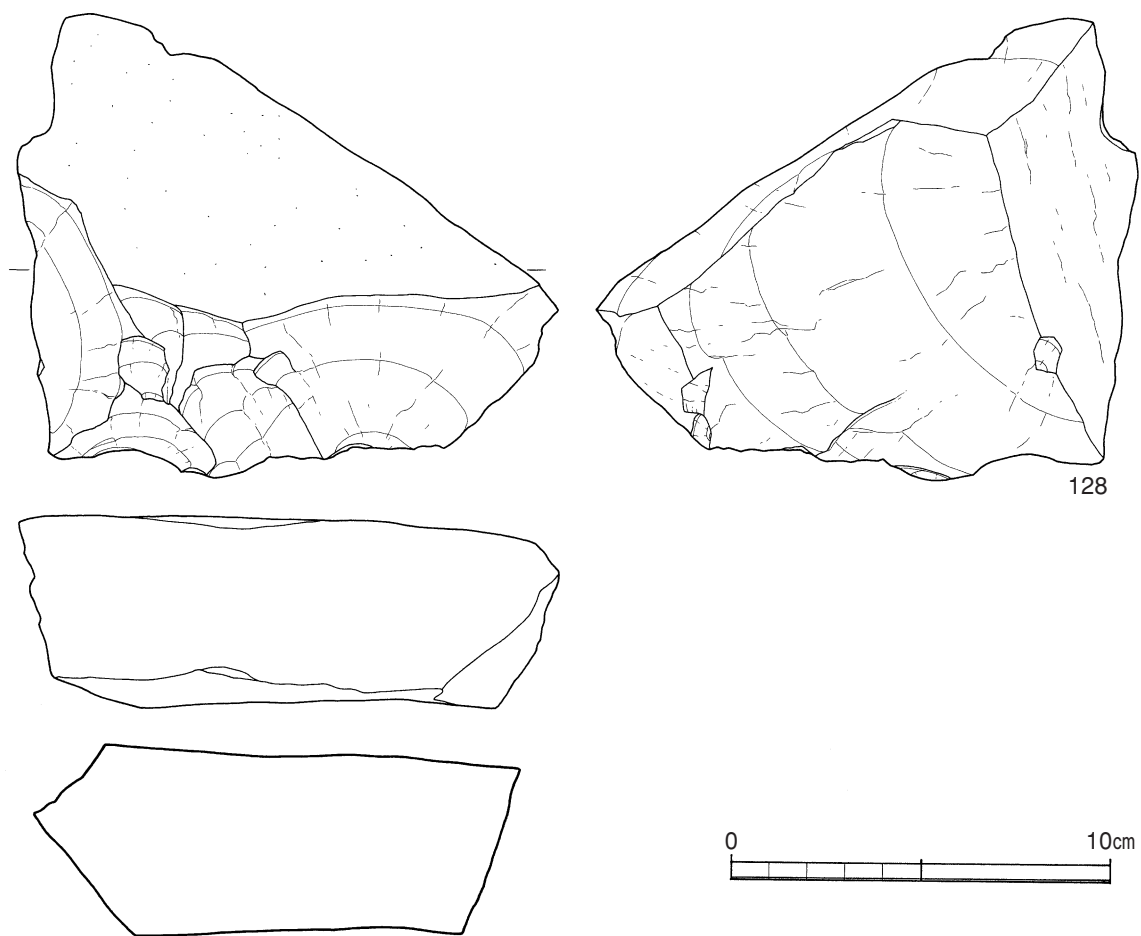
フレイク (剥片) (第43図 No.129～134)

数十点出土したが、この内5点を図化した。129・130はホルンフェルス製で、129は薄手の剥片だが風化が激しく、130は2か所の打撃痕が見られる。131～134は安山岩製で、131は薄手の剥片、132は一部に自然面を残す。133はチャート製で不純物が目立つ。134も安山岩製で、楔状であるが使用痕は見られない。一部に自然面を残す。

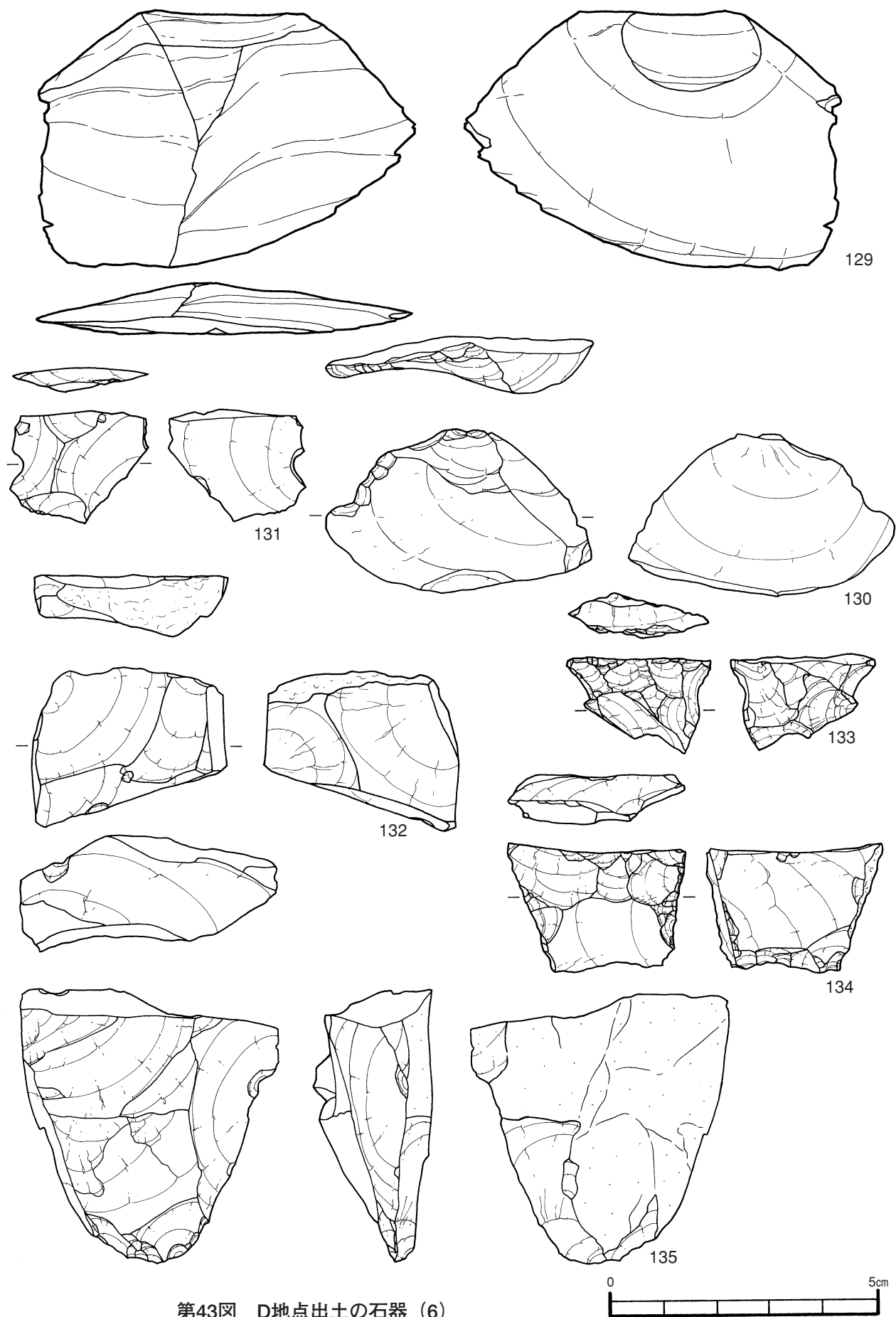
石核 (第43図 No.135)

1点が出土した。針尾系の黒曜石製で、楔状だが使用痕は見られない。剥離面の風化に違いが見られ、石器製作の途中で何らかの熱処理がなされた可能性がある。





第42図 D地点出土の石器 (5)



第43図 D地点出土の石器 (6)

第7節 E地点の調査

当遺跡の中でもっとも南側に位置する地点である。遺物は北西方向から南東方向に帯状に集中して出土している。特に完形復元した土器は中央に集中して出土していることが遺物出土状況ドット図からも判断できる。また、遺構と遺物の集中が重なることから、ここで出土した遺物は集石に伴うものである可能性が高い。

縄文時代早期(Ⅲ層)の調査

(1) 遺構

① 集石

当地点はもっとも集石の集中する地点であり、11基検出されている。内訳は掘り込みをもつものが3基、ないものが8基である。

1号集石(P-6区)

明確な掘り込みをもち、直径10～30cmの角礫が主体の、本遺跡では比較的大型の集石である。中央上部には石皿状の大型の角礫を置き、掘り込んだ床面に大型の扁平な礫がみられる。礫は赤化しており、もろくなっている。掘り込み下の土は黒変し、炭化物を含んでいる。2号集石はこの1号集石に付随するものと考えられる。

2号集石(P-6区)

直径10～15cmの角礫で構成されている。礫は赤化しており、もろくなっている。1号集石のすぐそばにあ

り、検出の状況からこれに付随するものと考えられる。

3号集石(P-6区)

明確な掘り込みをもち、大部分は直径5～15cmの角礫と熱破砕礫とで構成されている。礫は赤化しており、もろくなっている。

4号集石(P-6区)

明確な掘り込みをもち、大部分は直径5～25cmの角礫と円礫、熱破砕礫とで構成されている。礫は赤化しており、もろくなっている。本遺跡では比較的大型の集石である。

掘り込み下の土は黒変し、炭化物を多量に含んでいる。

5号集石(Q-6区)

大部分は直径5～20cm大の角礫と円礫、熱破砕礫とで構成されている。掘り込みは確認できなかった。

6号集石(P-6区)

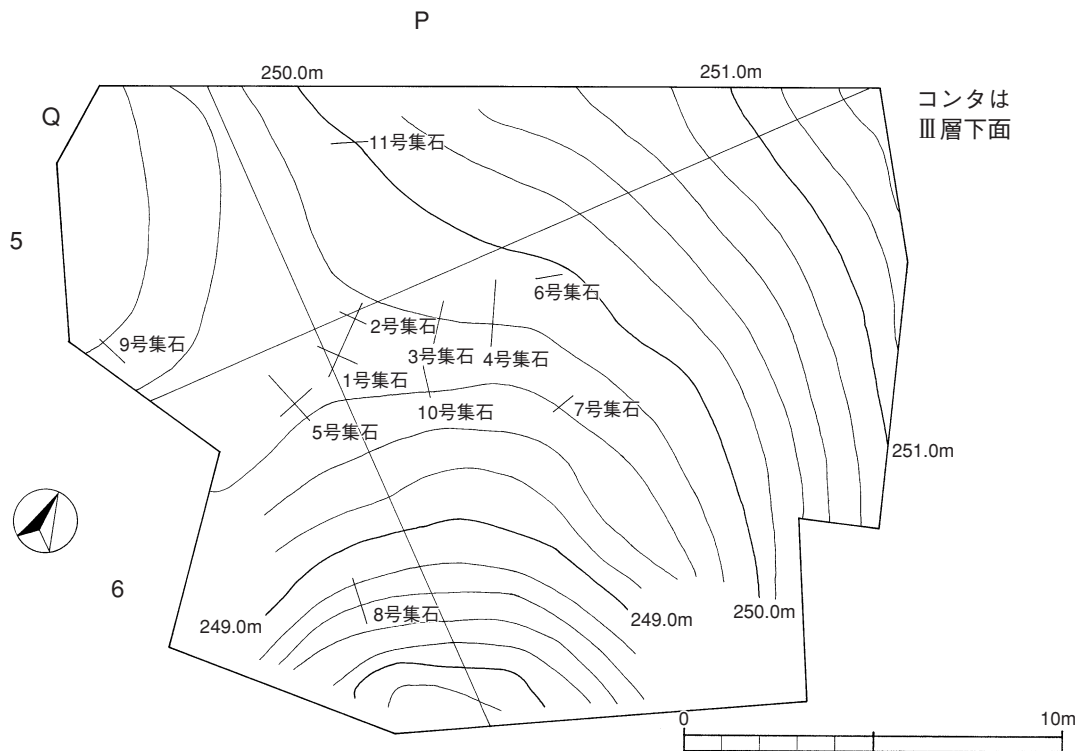
熱を受け赤化した直径5～20cmの角礫と円礫が大部分で、破砕礫は少ない。掘り込みは確認できなかった。

7号集石(P-6区)

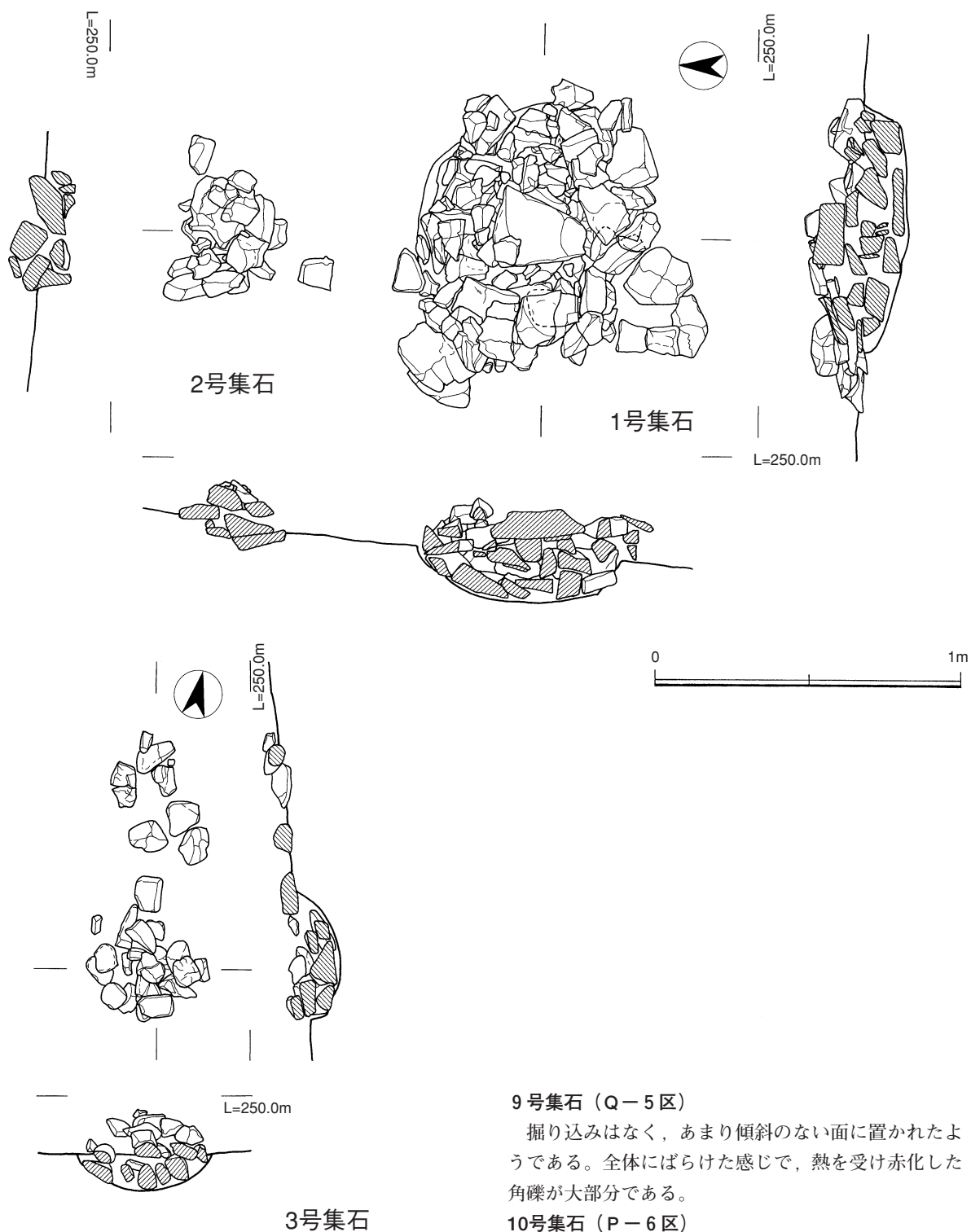
赤化した熱破砕礫が大部分である。本遺跡では比較的小規模で、こぢんまりした印象を受ける。掘り込みは確認できなかった。

8号集石(Q-6区)

直径5～15cmの角礫と円礫、熱破砕礫で構成され、礫が密な状態でまとまっている。礫は赤化しており、もろくなっている。掘り込みは確認できなかった。



第44図 E地点遺構配置図



9号集石 (Q-5区)

掘り込みはなく、あまり傾斜のない面に置かれたようである。全体にばらけた感じで、熱を受け赤化した角礫が大部分である。

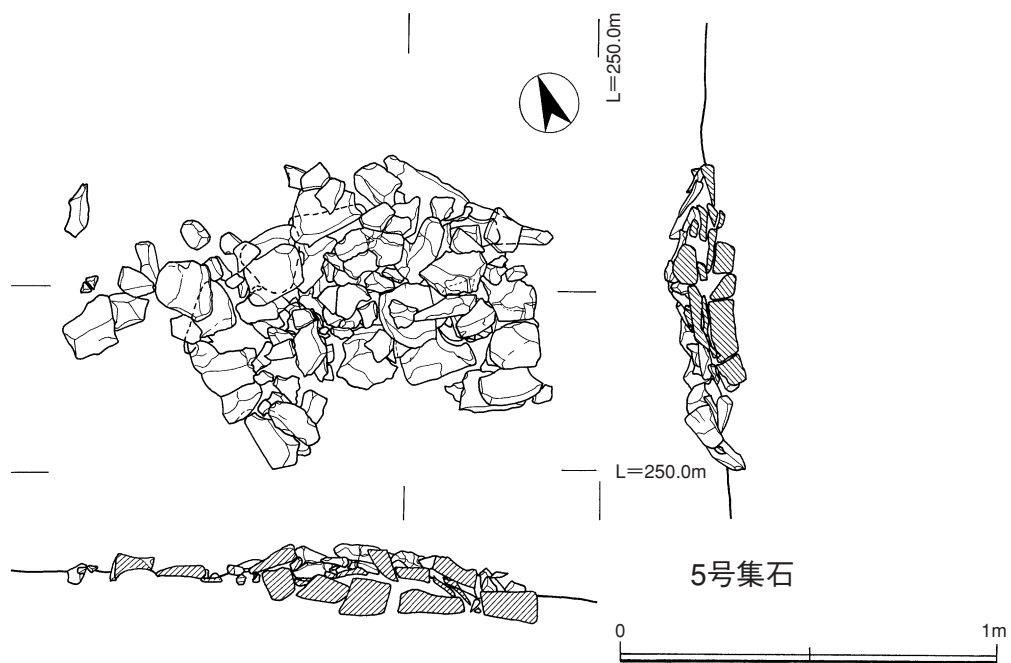
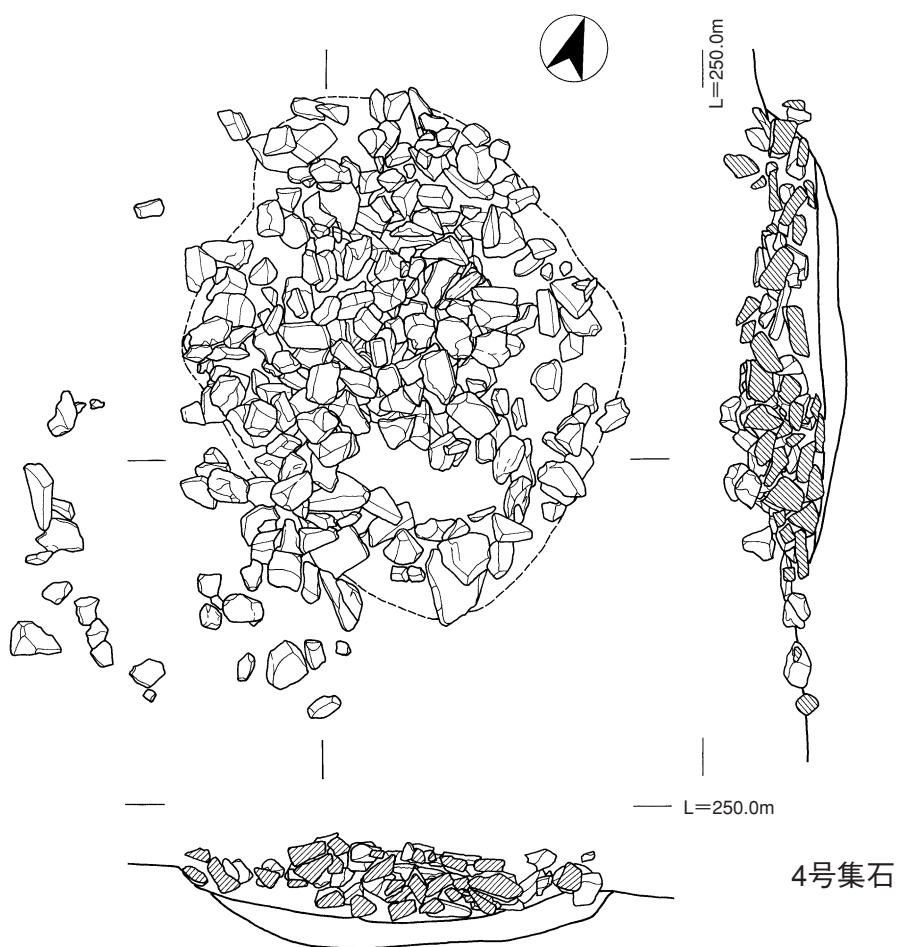
10号集石 (P-6区)

直径5～15cmの角礫と円礫、熱破碎礫で構成され、全体にばらけた感じである。礫は赤化しており、もろくなっている。掘り込みは確認できなかった。

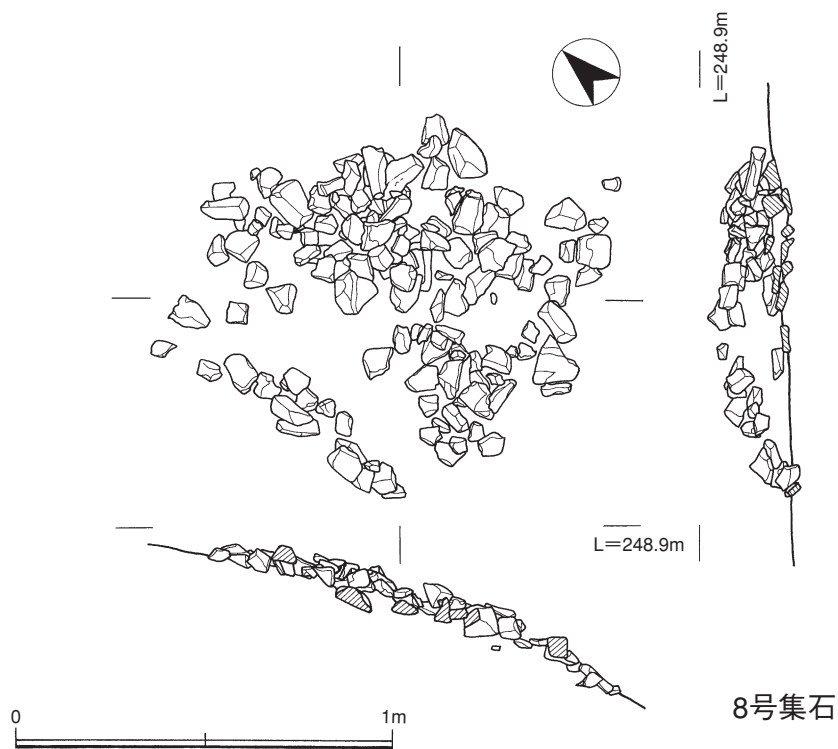
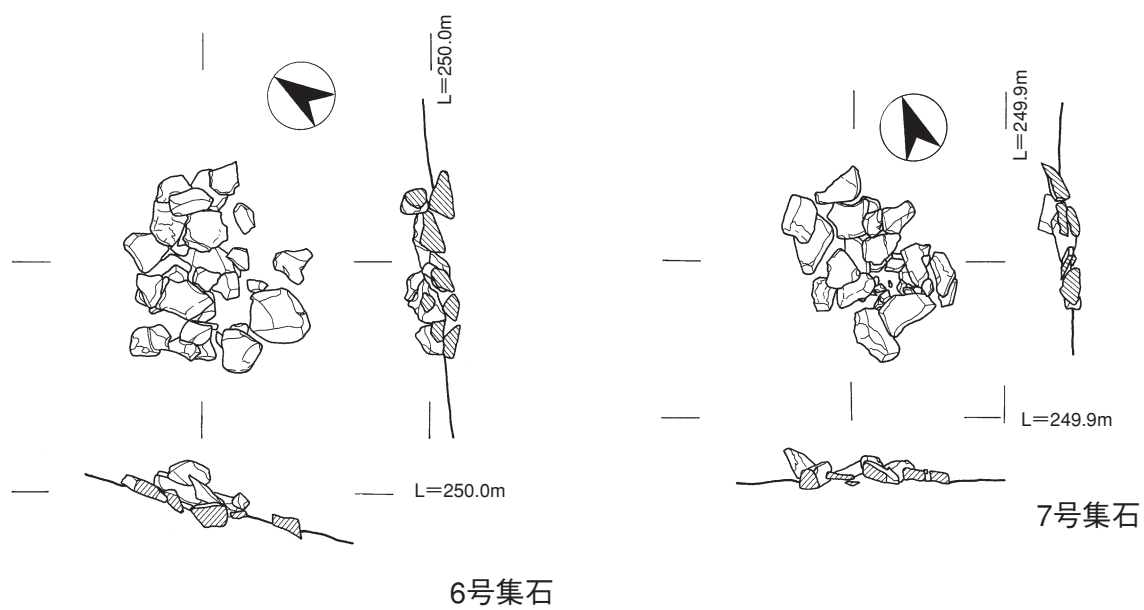
11号集石 (P-5区)

直径5～15cmの角礫と円礫、熱による破碎礫で構成され、全体にまばらな感じである。礫は赤化しており、もろくなっている。掘り込みは確認できなかった。

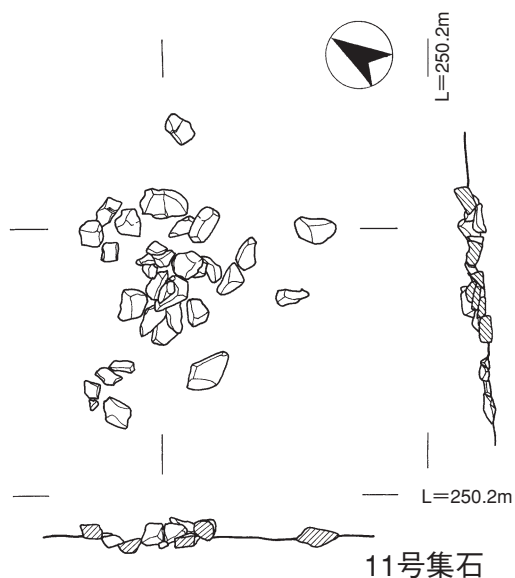
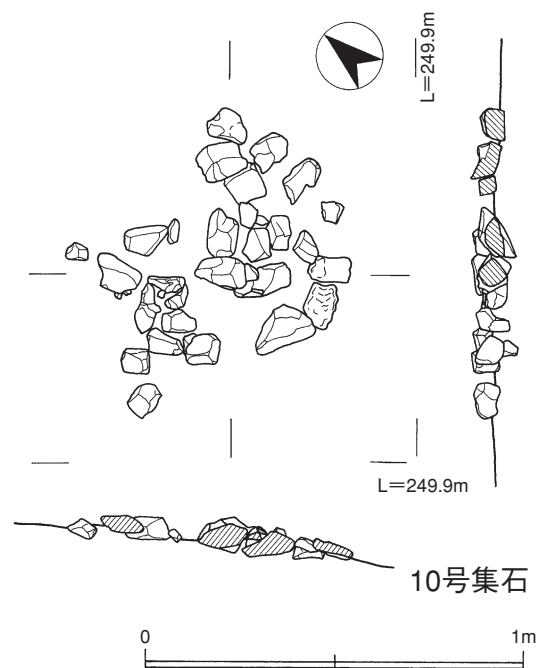
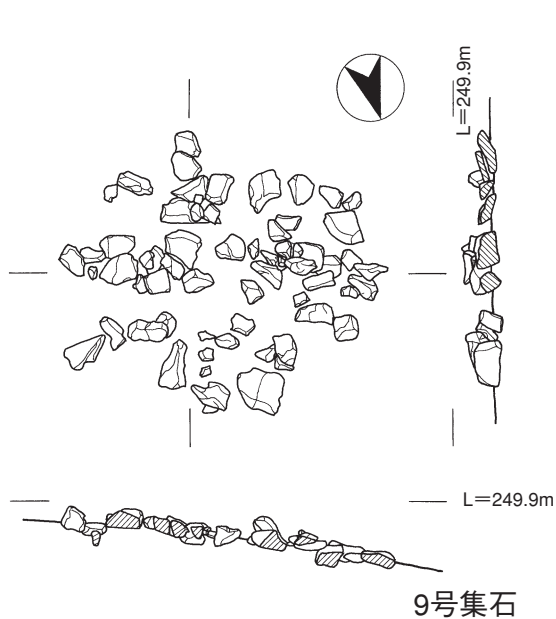
第45図 E地点の集石 (1)



第46図 E地点の集石 (2)



第47図 E地点の集石 (3)



(2) 遺物 (Ⅲ層)

① 土器 (第50～53図 No.136～168)

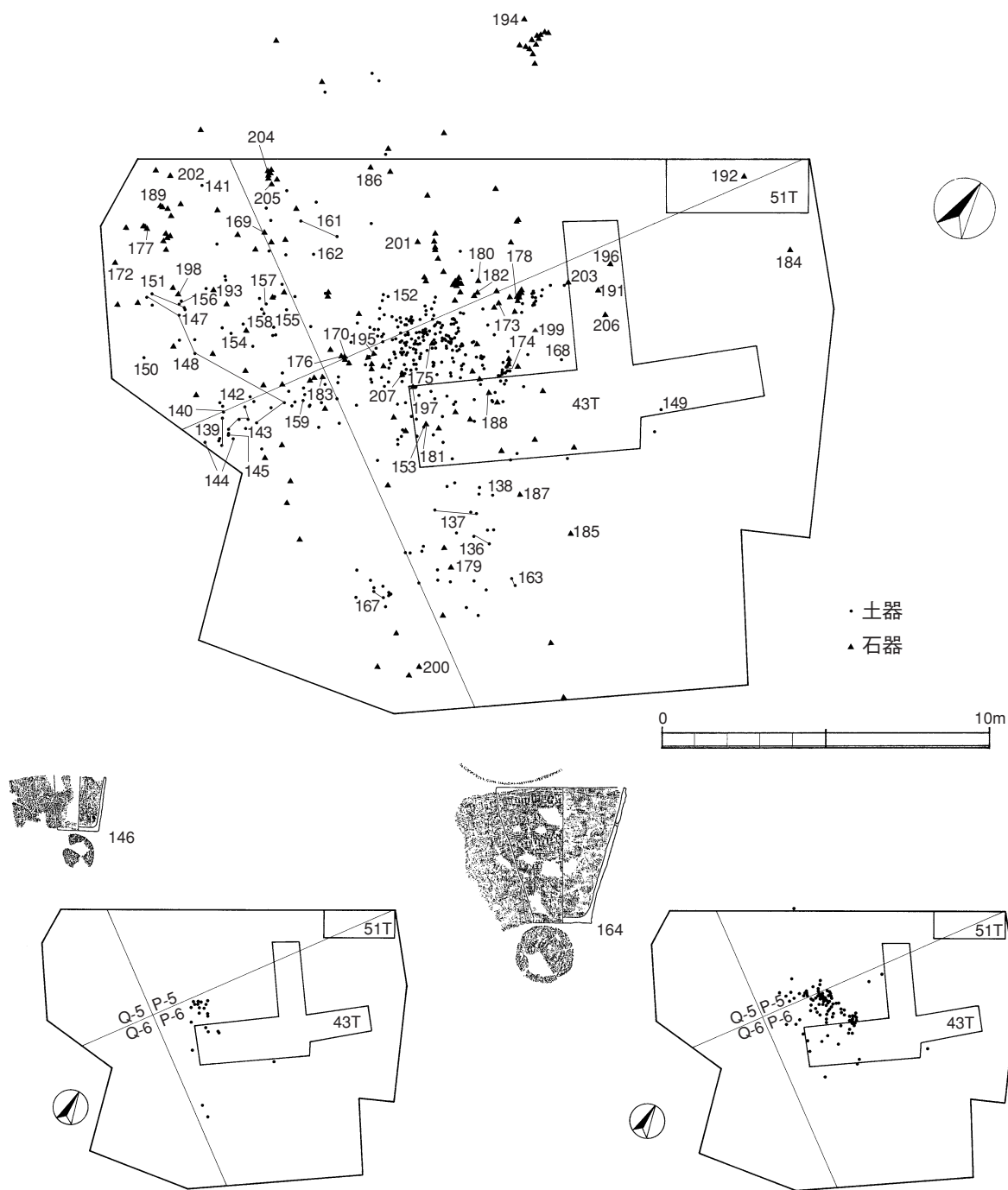
136～138は第2群第4類土器に属する。口縁部が外反し胴部で屈曲する。文様は山形押型文である。

139～142は第2群第5類土器である。口縁部が外反するもので、口縁部や胴部に刺突をめぐらせ、部分的にフジツボ状の瘤状突起が付着する。文様は、沈線文・刺突文を組み合わせた多様な文様パターンがみられる。141は口唇部に鋸歯状に沈線を施すものである。口縁部は内弯する。壺形土器と考えられる。

143～147は第2群第6類土器に属する。外反する口縁部をもつものである。口縁部外面に粘土紐を貼付するなどして肥厚させ、文様帯をつくりだしている。文様は、口縁部に沈線文を羽状に施し、胴部には結節縄文が施文されている。145は胴部で第7類土器に類似した器形(短筒状の胴部)であるが、紋様が異なるものである。6類とした。

148～163は第2群第7類土器に属する。口縁部はラッパ状に外反し、短筒状の胴部を呈する。文様は沈線を施すもの(148～151)・胴部屈曲部に刺突文を施すもの(152)・網目撚糸文を間隔をもって縦位に施すもの(153～158)などのものがみられる。底部は159～163のような平底のものがみられる。なお、148～151は上野原遺跡第10地点(第3工区)の報告書において「微隆帯文土器」とされたものに類似する。頸部

第48図 E地点の集石 (4)



第49図 E地点遺物出土状況

でラッパ状に屈曲するもので、口縁部は内弯状に外反しながら中程でさらに屈曲する「二重口縁」状を呈するもので、屈曲部には刻みを施した微隆帯が巡るものである。

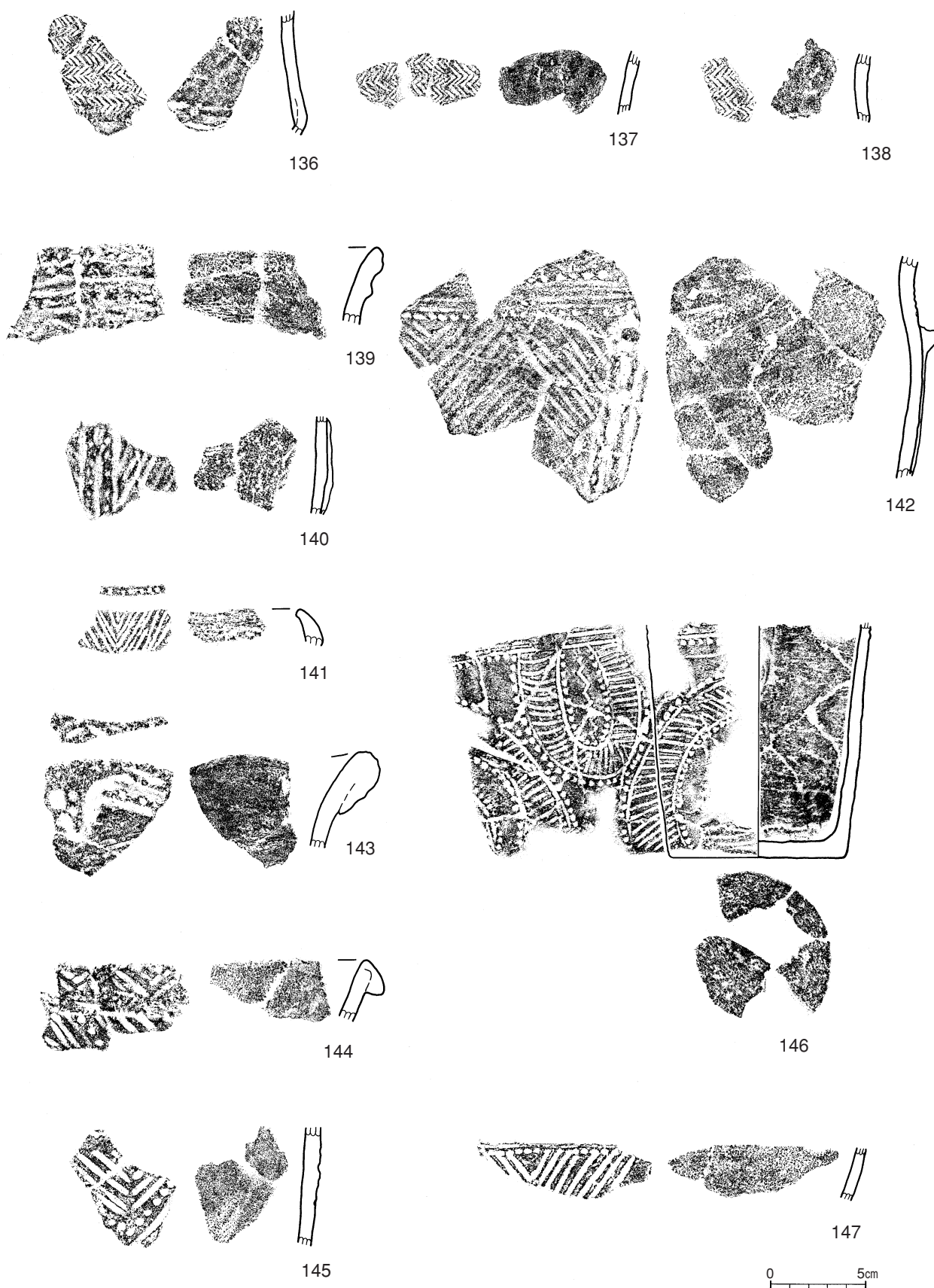
164はこの地点から出土した唯一の第2群第8類土器で完形品である。口縁部が直行し胴部がわずかにふくらむものである。文様は貝殻縁による刺突連点文と沈線文を口縁部および胴部に交互に施す。補修孔もみられる。

165・166は第11類土器に属する。器形は9類土器と

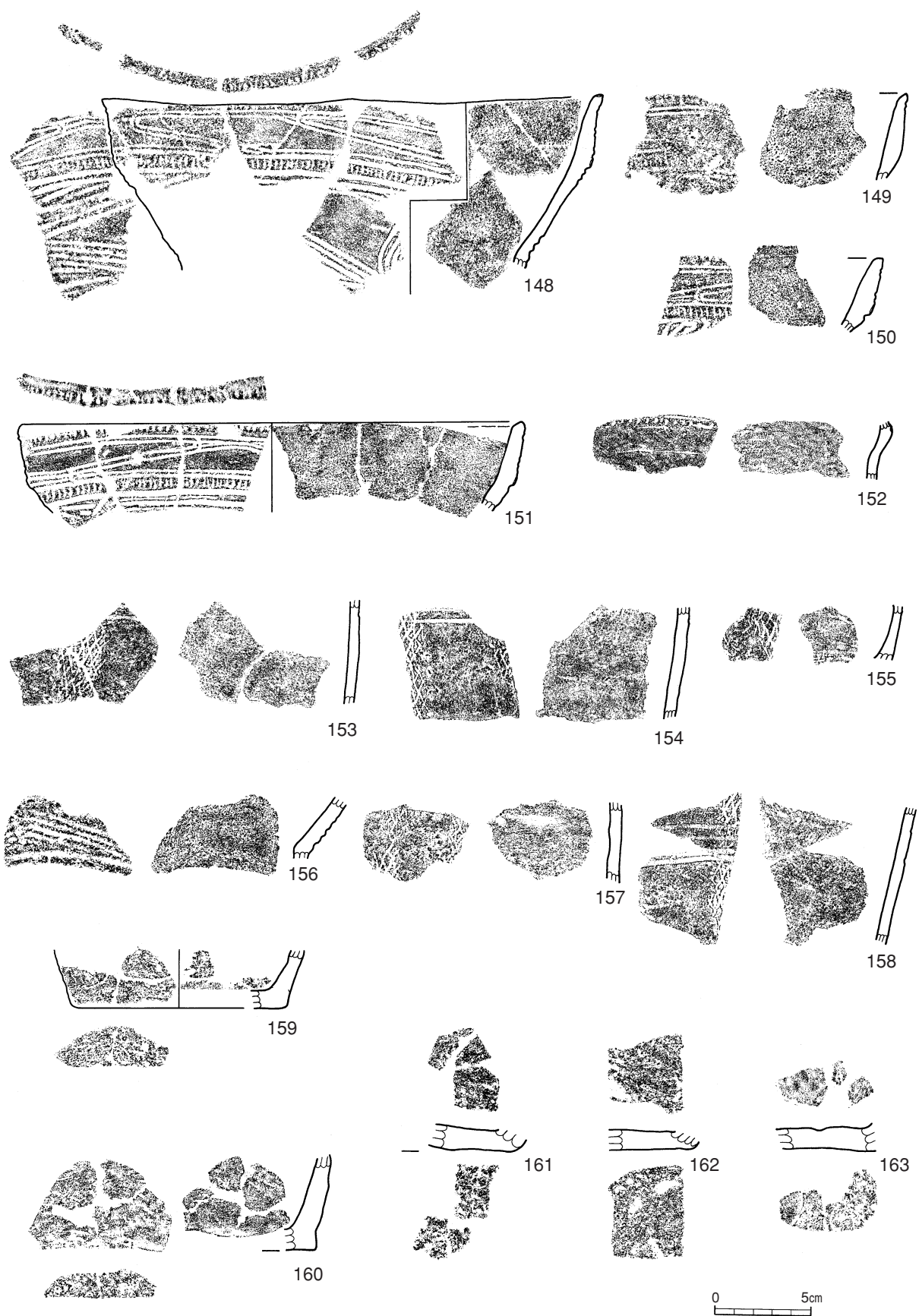
12類土器に類似するものがみられる。文様は直線状と波状の押引文を横位方向に交互に組み合わせたものである。

167は胴部外面はナデで、内面は貝殻腹縁で器面調整が施される土器で底部は平底を呈する。明確に分類できないものなので第13類土器とした。

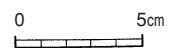
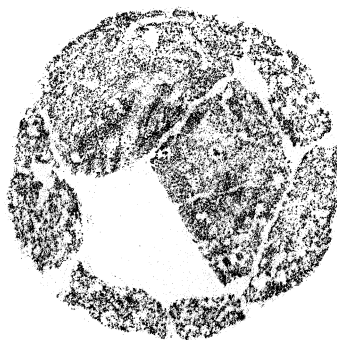
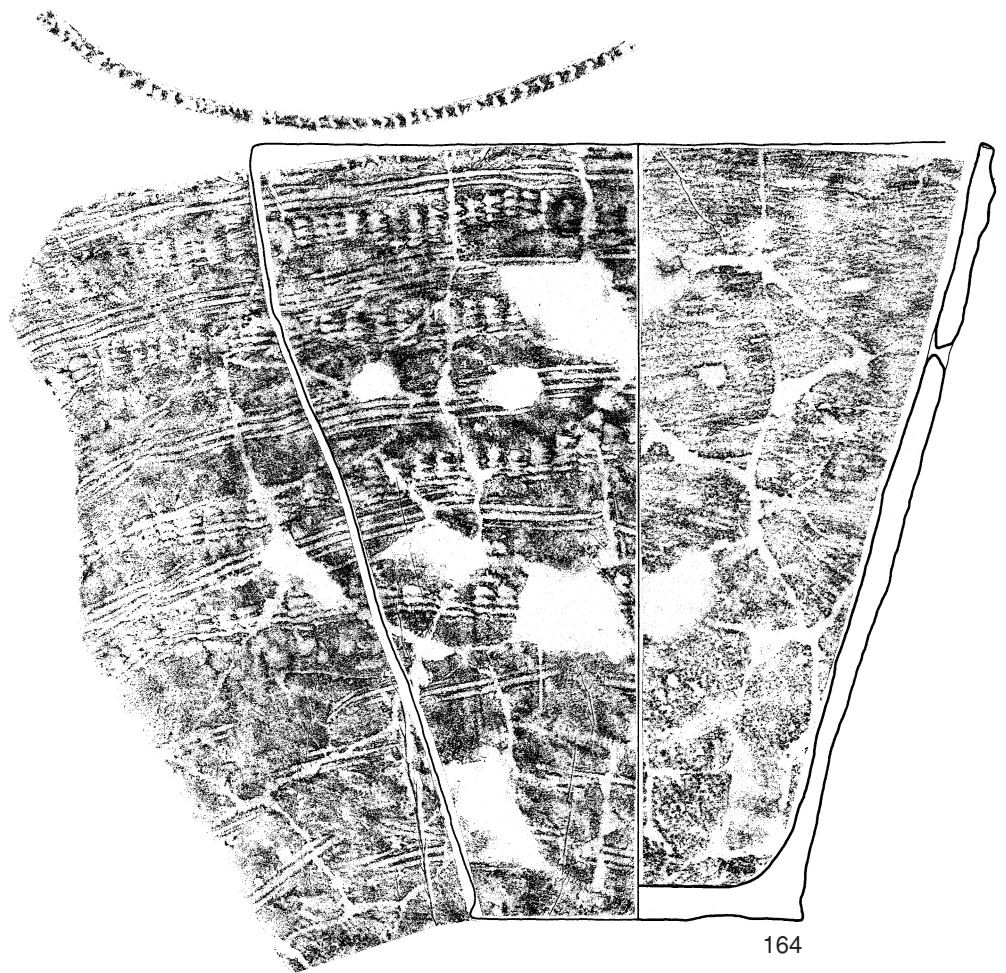
168は口縁部が外反するもので口縁は波状を呈する。第9類～第12類に類似するものであるが、明確に分類できないので第13類土器とした。



第50図 E地点出土の土器 (1)



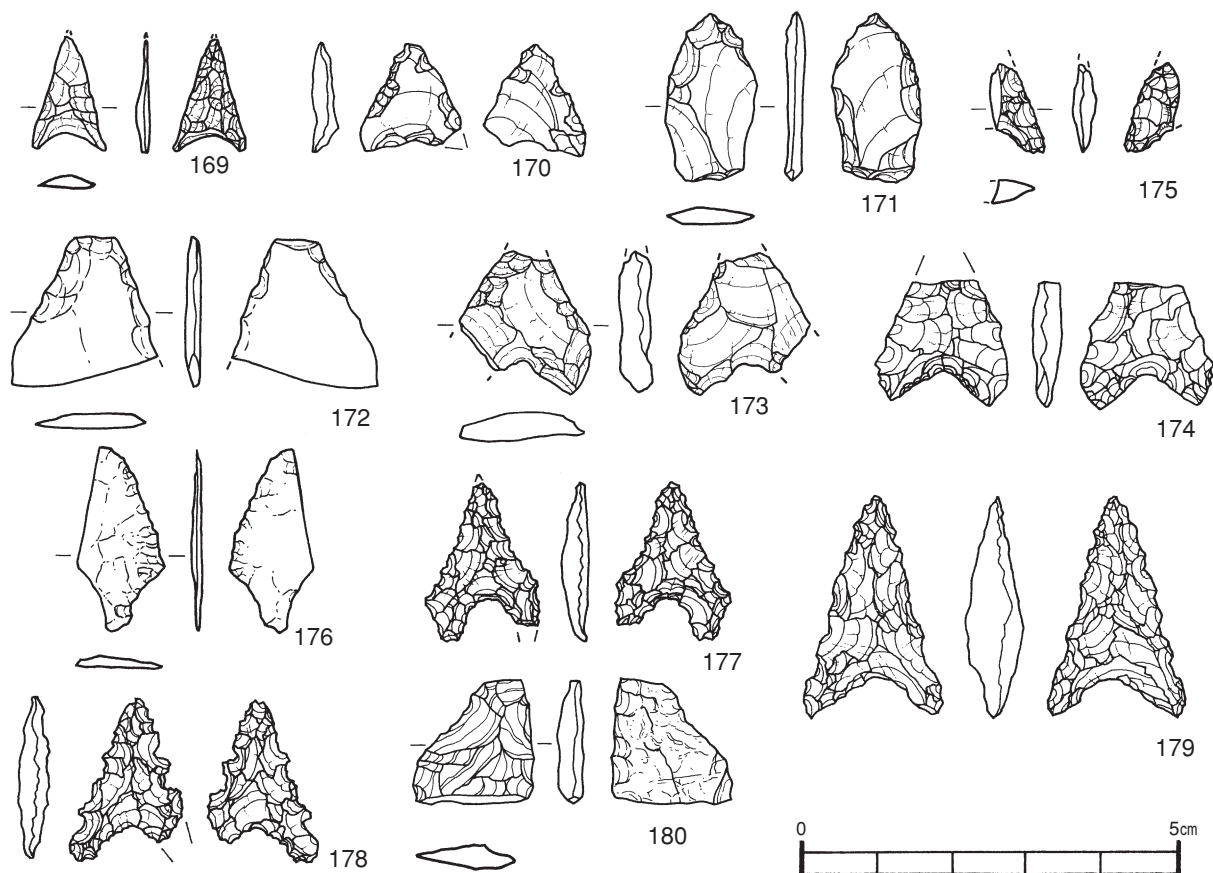
第51図 E地点出土の土器 (2)



第52図 E地点出土の土器 (3)



第53図 E地点出土の土器 (4)



第54図 E地点出土の石器 (1)

② 石器

土器と同様にⅢ層から出土した。打製石鏃・石匙・磨石・敲石・礫器・使用痕剥片・フレイク（剥片）・石核・垂飾品で構成される。

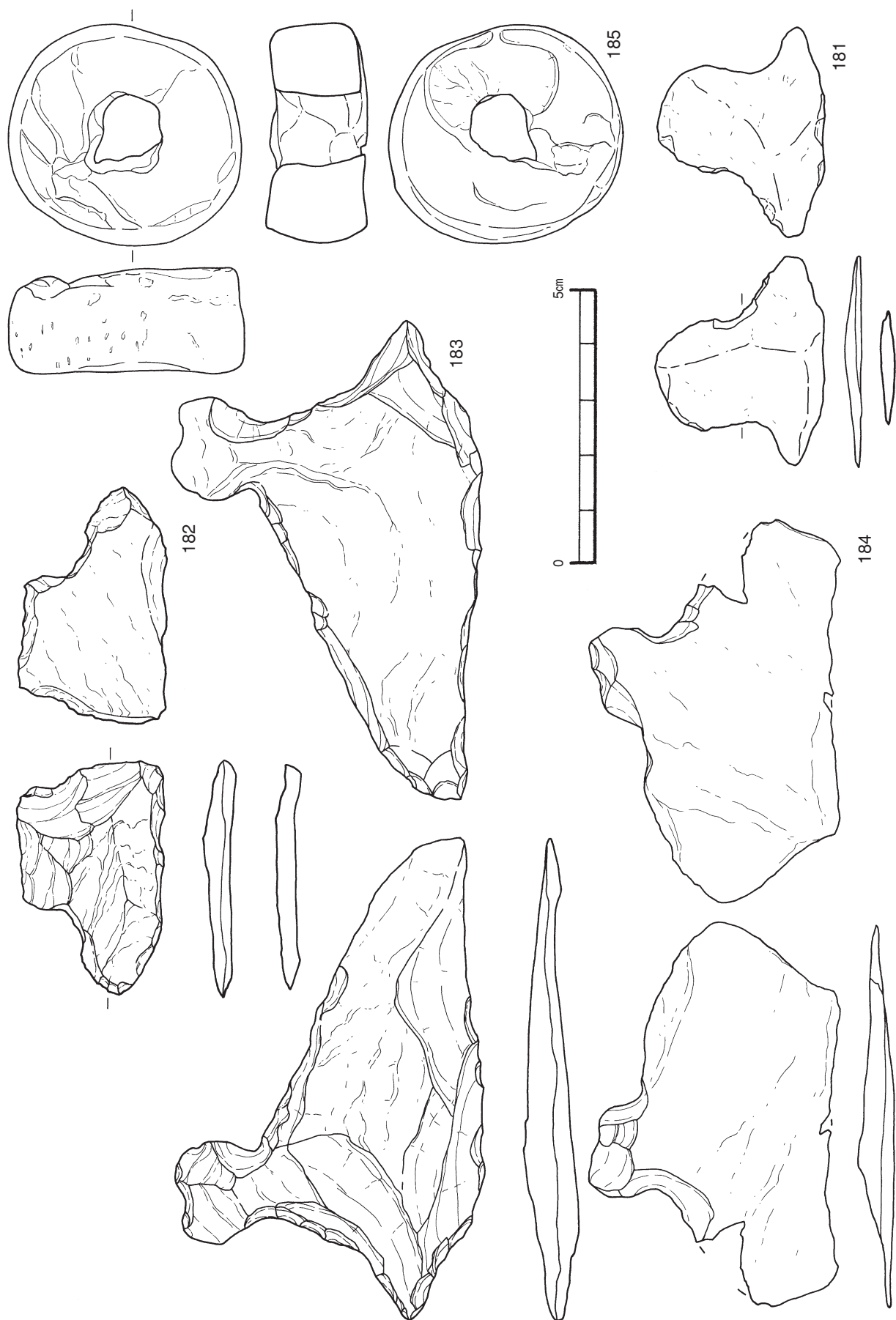
打製石鏃（第54図 No.169～180）

12点出土した。重量や挟りの状態などで細分される。169・170は比較的小型のものである。169はホルンフェルス製で風化が激しいが、細長い二等辺三角形で基部に挟りが入る。170～173は一部に主要剥離面を残す。170は姫島産黒曜石製で、比較的少ない調整で正三角形にしておき、わずかに挟りが見られる。171は頁岩製で、僧帽状を呈し挟りは見られない。172はホルンフェルス製で風化が激しく脚部も欠くが、側縁部に調整痕が観察される。173・174は一部を欠くが、直線的な挟りが入る。173は姫島産黒曜石製で、174は安山岩を素材としている。175は針尾産黒曜石製で、片側脚部のみであるが、均一な剥離が施され明確な挟りが見られる。176はホルンフェルス製で風化が激し

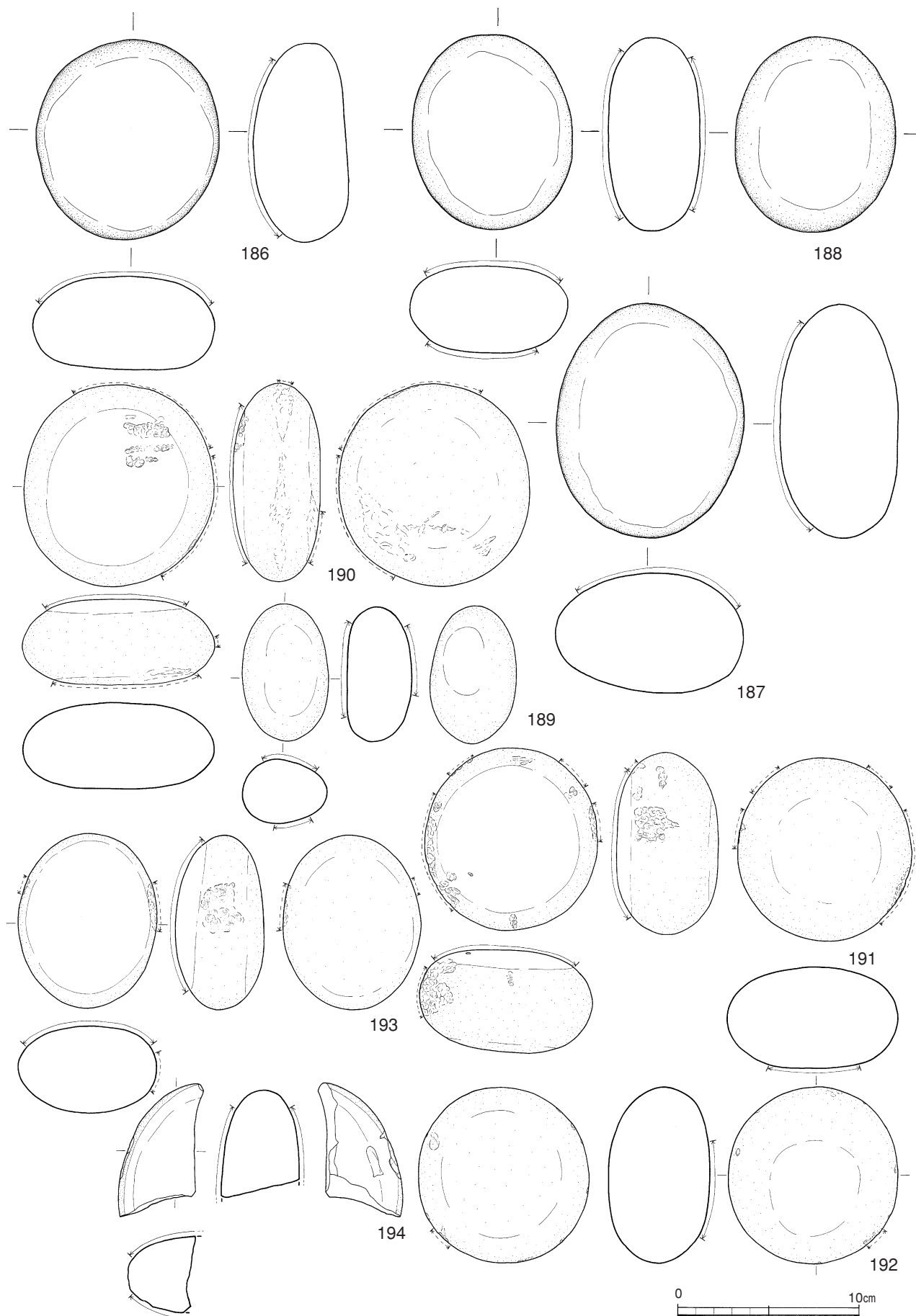
いが、側縁部に調整痕が観察される。177・178は姫島産黒曜石製で、深い挟りが見られる。177は「鋏形」で、178は側縁部が鋸歯状に調整される。179は安山岩製で、本地点中最大の石鏃である。厚手で、側縁部がやや鋸歯状に調整される。180はホルンフェルス製で風化が激しいが、調整中に放棄された未製品と思われる。

石匙（第55図 No.181～184）

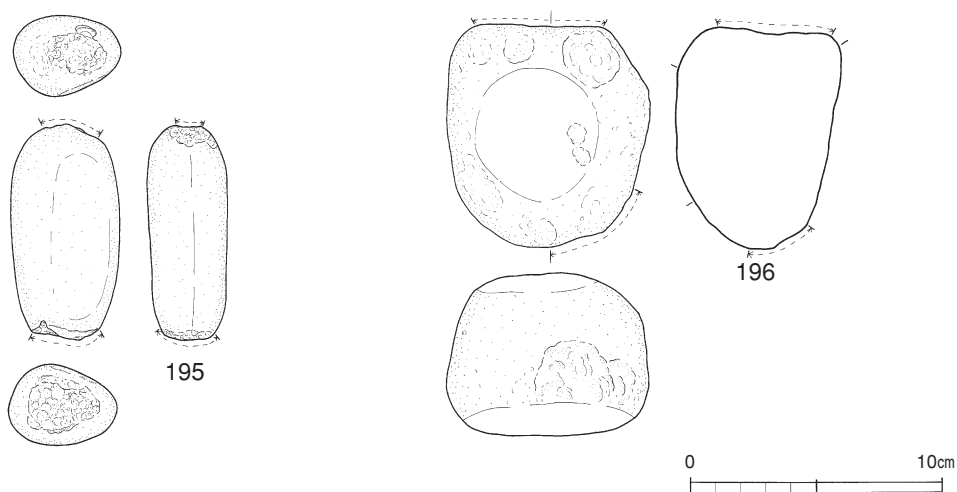
4点出土した。いずれもホルンフェルス製で風化が激しいが、形態的には横型に属する。重量や挟りの状態などで細分される。181は比較的小型のもので、刃部に比べて摘みが大きい。182は片側を欠損している。183は素材剥片には打面転移剥離技術が認められ、摘み部はU字状の挟りを対に設け、刃部は横刃を成し、急角度の刃部整形が見られる。184も破損著しいが、同じような形態だったと考えられる。



第55図 E地点出土の石器 (2)



第56図 E地点出土の石器 (3)



第57図 E地点出土の石器 (4)

磨石 (第56図 No.186～194)

9点出土した。すべて砂岩製で、円形や楕円形の円礫を素材とした磨石である。186～189は2面を使用しているが、186のみ側面にかすかな敲打痕が見られる。190～193は1面を使用しているが、側面などに敲打痕が見られる。194は破片であるが、2面を使用している。

敲石 (第57図 No.195～196)

2点出土した。いずれも砂岩製である。195は棒状で、両端部を使用している。196は不定形の礫を用いているが、7か所以上の敲打痕が認められ、側面の使用が目立つ。

礫器 (第58図 No.197)

1点出土した。砂岩製で、刃部に調整痕が見られる。

使用痕剥片 (第58図 No.198)

1点出土した。砂岩製で、刃部に使用痕とみられる欠けや稜線摩耗が見られる。

フレイク (剥片) (第58図 No.199～206)

数十点出土し、この内8点を図化した。いずれも調整や使用痕は見られない。199は砂岩製で、石匙状である。200はチャート製、201は安山岩製で、石錐状である。202・203は薄手のホルンフェルス製だが風化が

激しい。204～206は砂岩製で、少ない打撃で一気に作られた剥片である。206は特に厚みのある大型のものである。

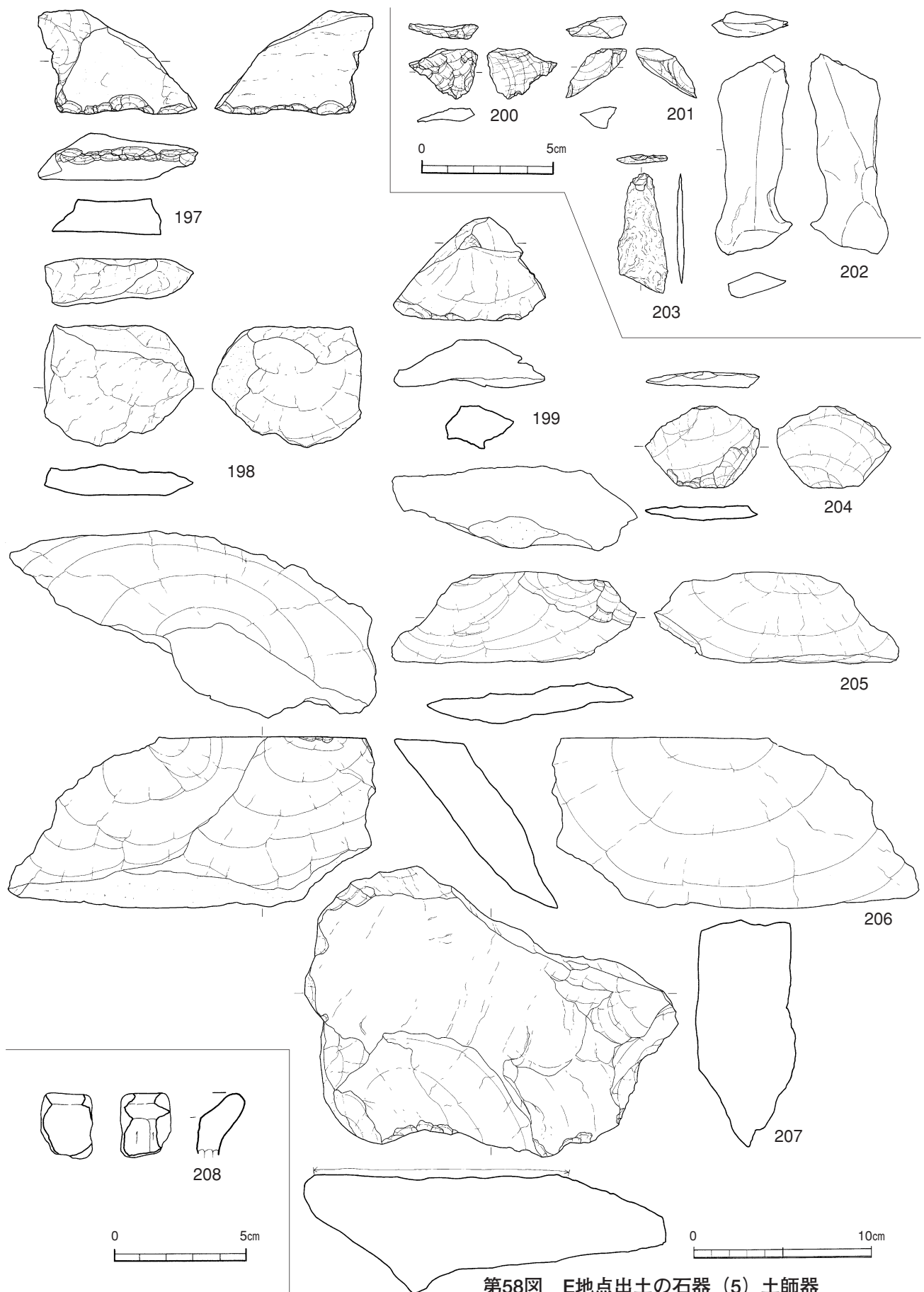
石核 (第58図 No.207)

1点出土した。厚みのある砂岩製で、何か所もの打撃痕が見られるが、磨面が1か所あり、石皿だった可能性がある。

③ その他の遺物

円盤形穿孔石製品 (垂飾品) (第55図 No.185)

1点出土した。頁岩製で、中央に方形の穿孔のある円盤状の石製加工品である。穿孔の縁に摩耗が見られるため、垂飾品と判断した。穿孔は海中生物生活痕の可能性があるが、一部に敲打痕を残すものの、円盤の側面と平面の稜部までは丁寧に研磨されている。平面の表裏は切断痕を残し、研磨は見られない。垂飾品の可能性があり、類似した遺物が榎田下遺跡 (鹿屋市)・上野原遺跡 (国分市)などで出土している。



第58図 E地点出土の石器 (5) 土師器

第8節 その他の調査

25トレンチの表土中から土師器甕の口縁部が4点出土している。そのうち1点を実測した。胴部内面の屈曲部からヘラ削りを行っている。小片のため明確な器形については明らかでない。

第9節 小結

三角山Ⅱ遺跡は本来は広範囲にわたる遺跡であったと考えられるが、土地の造成や地下げなどにより虫食い状態で遺跡が残存していたため、わずかに残存していたA・B・C・D・Eの5地点について調査が行われた。

A地点では縄文時代の土坑が3基発見された。このうち1基は円筒形、1基は長方形で底に逆茂木痕がみられるので落とし穴である可能性がある。他の遺構としてはD地点のものに類似した環状土坑が発見されている。出土遺物がないが、近代のものであろう。土器は縄文時代早期後半の遺物である7類・8類土器に類似した無紋土器が、石器は石鏃・礫器などが出土している。

B地点では縄文時代早期の集石が3基・縄文時代前期以降の集石と土坑が1基ずつ発見された。このうち縄文時代早期の集石からは耳栓状土製品・礫器などが出土している。また、中央部底面に2つの逆茂木状ピットが検出されており、落とし穴の可能性がある。

C地点では、縄文時代の集石と土坑が発見された。遺物は縄文時代の7類土器（塞ノ神A式）・石器およ

び古代の須恵器が出土した。

D地点では3基の縄文時代の集石と近代の遺物を伴う環状土坑が1基発見されている。出土遺物の中にビール瓶があり、右側から『キリンビール』と書かれているので、第2次世界大戦以前の遺構である可能性がある。この近辺の十六番には戦時中に兵舎があったとされていることと、高射砲の基礎があることから、この遺構は戦時中の軍事関係の遺構であった可能性がある。この遺構に類似するものとして上野原第10地点（第3工区）で発見されている探照灯がある。上野原遺跡のものはコンクリートの基礎や製造元のラベルなどがみられるのに対して当遺跡のものはそれらがまったくなく、探照灯であるとは断定できる状態ではないので可能性にとどめたい。

遺物は縄文時代早期前葉から後葉までの土器（2類【吉田式】・4類～8類【手向山・妙見～塞ノ神式の時期におさまるもの】）・石器が出土した。

E地点では集石が集中して11基検出されている。遺物は縄文時代早期中葉から後葉の土器（4類～8類）・石器が出土している。特に7類土器とした中に上野原遺跡第10地点で微隆帯文土器とされたものがみられるが、最近出土例が増加しており注目されるところである。また、頁岩製の円盤形穿孔石製品が1点出土している。類似の資料が榎田下遺跡（鹿屋市）・上野原遺跡第10地点で出土しており、これらと同様に石製垂飾品の可能性が考えられる。

第10表 E地点 縄文時代早期の集石観察表

（単位cm）

挿図 番号	遺構名	検出区	検出面	時 期	長さ	幅	礫数	石材	備 考
45	1号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	107	103	約100	砂岩	掘り込みあり
	2号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	55	53	20	砂岩	掘り込みなし
	3号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	94	40	34	砂岩	掘り込みあり
46	4号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	166	163	約300	砂岩	掘り込みあり
	5号集石	Q-6	Ⅲ層	縄文早期	130	84	約100	砂岩	掘り込みなし
47	6号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	56	50	29	砂岩	掘り込みなし
	7号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	52	47	32	砂岩	掘り込みなし
	8号集石	Q-6	Ⅲ層	縄文早期	124	106	131	砂岩	掘り込みなし
48	9号集石	Q-5	Ⅲ層	縄文早期	87	75	64	砂岩	掘り込みなし
	10号集石	P-6	Ⅲ層	縄文早期	82	75	36	砂岩	掘り込みなし
	11号集石	P-5	Ⅲ層	縄文早期	84	68	33	砂岩	掘り込みなし

第Ⅴ章 三角山Ⅲ遺跡の調査

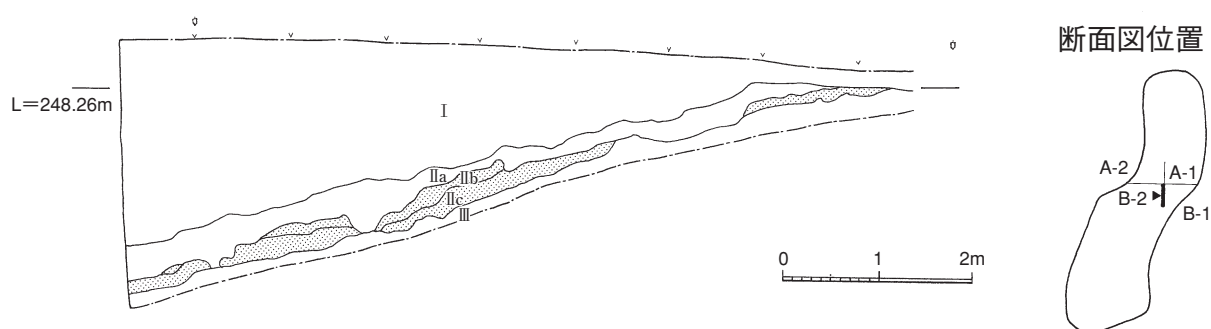
第1節 概要

三角山Ⅲ遺跡の調査は平成7年7月に行われた。

約2,200㎡を対象に7か所のトレンチを設定した結果、中央の3トレンチから縄文時代早期の土器が出土したが、他の6か所は削平を受けており遺構・遺物ともに発見されなかった。この事実から遺跡残存部分は3トレンチ周辺の200㎡であることが確認されたため、3トレンチを拡張して確認調査に引き続き本調査を実施した。

第2節 層位

層位は基本的に三角山遺跡群で共通である。ただし、地点ごとに遺構・遺物のみられる層が若干異なる。本遺跡では縄文時代早期の文化層であるⅢ層から遺物の出土がみられ、それ以外の層では遺構・遺物はみられなかった。



第59図 Ⅲ遺跡土層断面（B-2区 東側）

第3節 縄文時代早期（Ⅲ層）の調査

（1）遺物

① 土器（第61図 Na209～215）

土器は37点出土した。その中から比較的状態のよい7点（胴部4点【209～212】・底部3点【213～215】）について掲載した。胴部は無文でナデを施すものがみられ、底部は平底を呈する。これらは胎土や色調などの特徴と状態から同一個体、もしくは同一型式の土器の可能性がある。第2群中の9類土器・10類土器・11類土器（早期後半頃）のいずれかにあてはまるものと思われるが、ここでは13類土器としておく。小破片のものや風化の激しいものがほとんどであった。

② 石器（第61図 Na216・217）

石器は2点出土し、整理作業中に接合関係が確認された。216はフレイクだが砂岩製で刃部と考えられる部分があるのでスクレイパーである可能性がある。

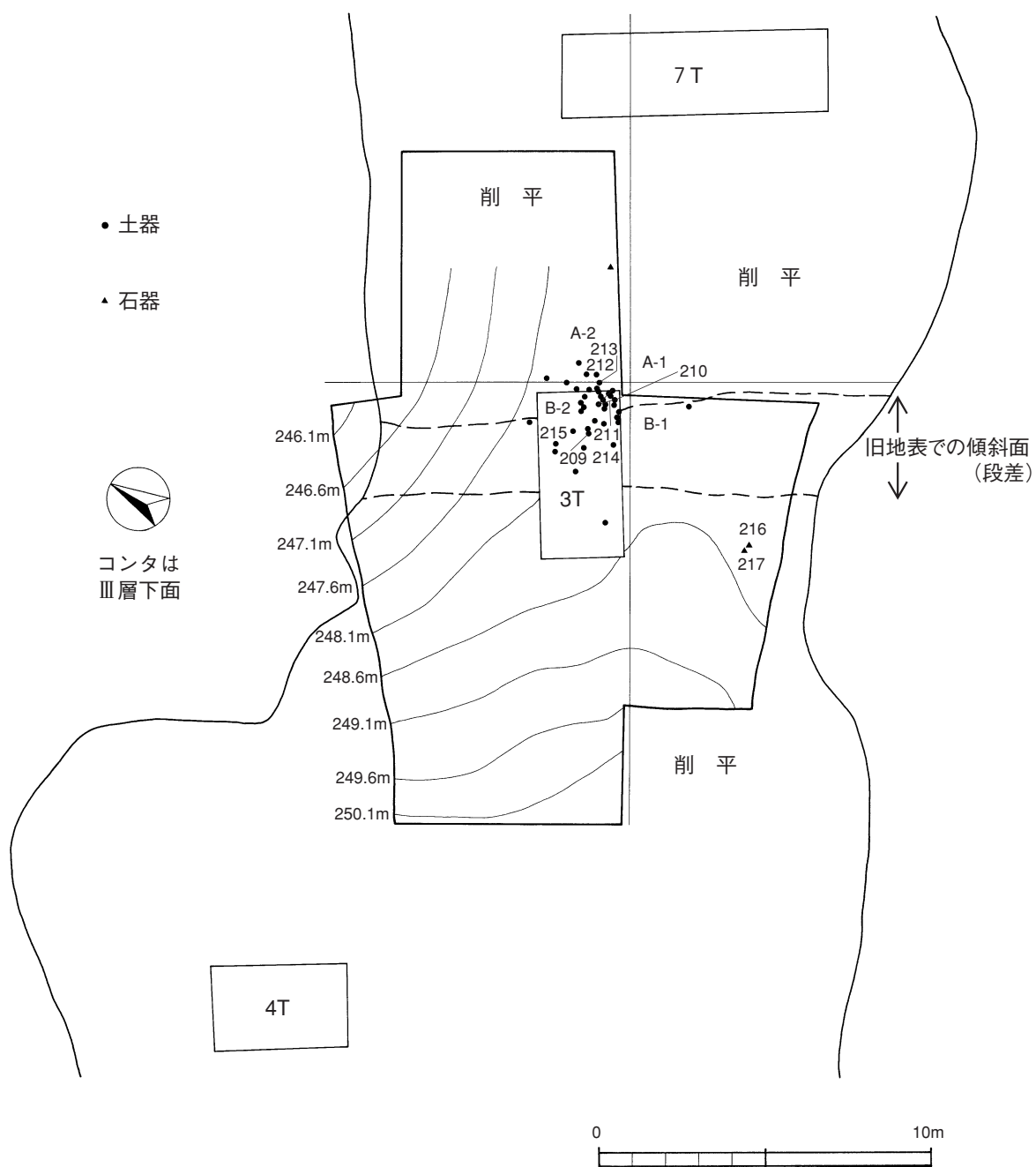
217は礫器で、断面が逆三角形である。粗い剥離で刃部加工を施している。

また、図化しなかったが造成土中より水晶片が1点出土している。加工痕などはみられないので、人為的なものではないと考えられる。

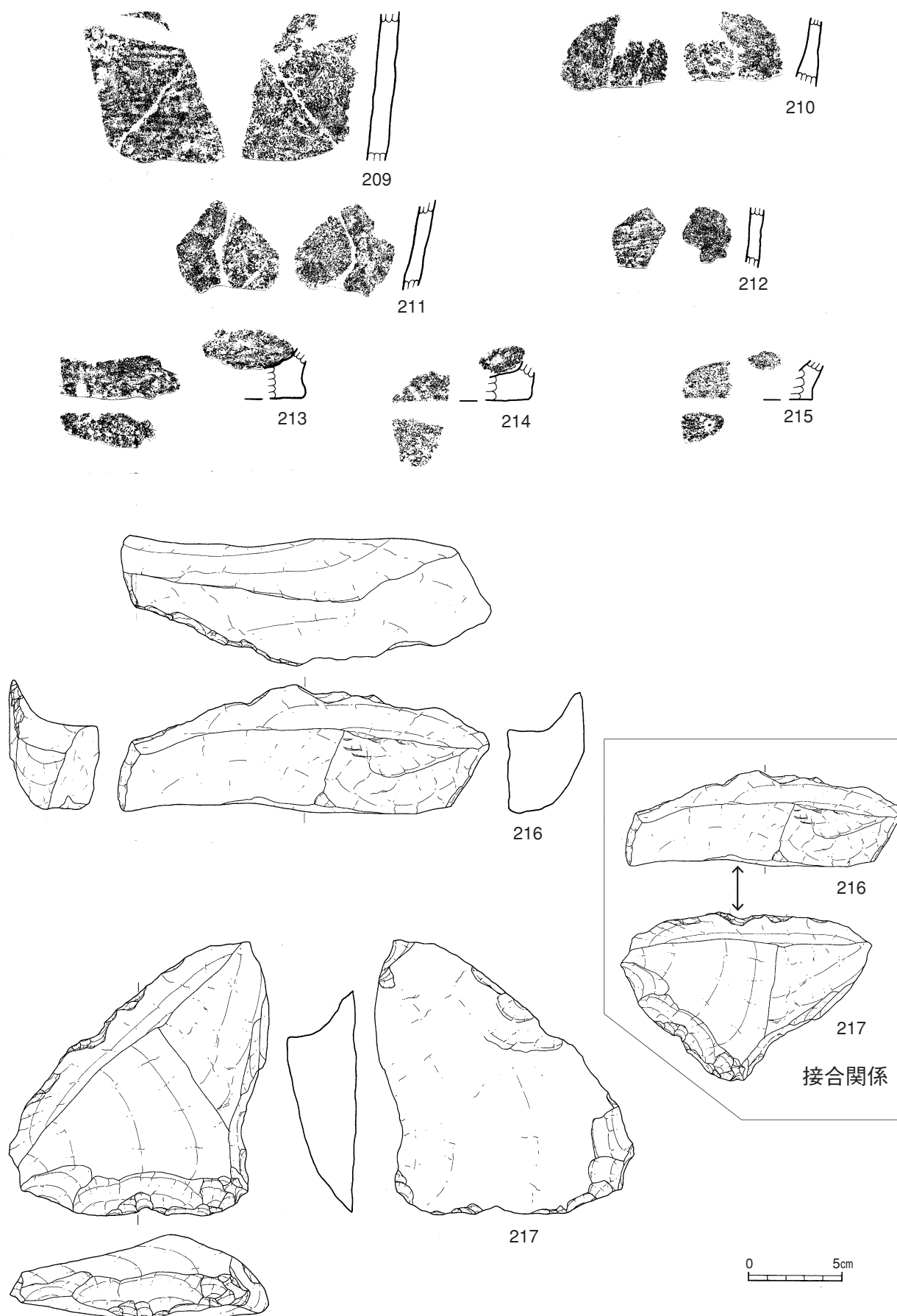
第4節 小結

三角山Ⅲ遺跡は周辺の地下げや攪乱などにより、結果として200㎡の範囲のみが残存していることが判明した。この部分は馬の背状の尾根となっているところであり、遺跡の立地としては申し分ないと考えられるが調査の結果としては40点の遺物が出土したのみであった。

出土遺物は縄文時代早期後半と考えられる土器、礫器で、遺構は発見されなかった。土器はほとんどが小破片であり、明確な時期の特定が可能なものはみられなかった。



第60図 Ⅲ遺跡遺物出土状況



第61図 Ⅲ遺跡出土の土器・石器

第Ⅵ章 三角山Ⅳ遺跡の調査

第1節 概要

三角山Ⅳ遺跡の確認調査は平成7年11月～12月の期間中に行われた。

平成8年度には当初3,000㎡の予定で本調査を開始したが、工事用道路の下にも遺物包含層が広がっていたので、最終的には4,000㎡に遺跡が広がった。

本調査は平成8年11月から平成9年3月まで行った。

第2節 層位

層位は基本的に三角山遺跡群で共通である。ただし、遺跡ごとに遺構・遺物のみられる層が若干異なる。本遺跡では3つの文化層から遺構・遺物が発見された。ほぼ表土に近い文化層であるⅠ層、縄文時代前期・中期の文化層であるⅡa層、縄文時代早期の文化層であるⅢ層である。なお、縄文時代草創期の文化層であるⅤ層からも土器が一点出土しているが確実ではない。

第3節 縄文時代早期(Ⅲ層)の調査

遺物は調査区のほぼ全面から出土しているが、強いというならば東西方向の帯状に遺物の集中がみられる。さらに土器のみでみると数箇所にブロック状に集中出土しており、数箇所の遺物集中地点は集石の位置と重なるものもみられるので集石と同時期である可能性も考えられる。

(1) 遺構

① 集石

8基検出された。石材は砂岩が主である。これは本遺跡の基盤岩である古第3紀の熊毛層群を形成するもので、礫の状態から谷部の露頭もしくは河原・海岸部より搬入されたものと考えられる。明確な掘り込みをもつものが3基、ないものが5基である。

以下に各集石ごとの説明を述べる。

1号集石(D-10区)

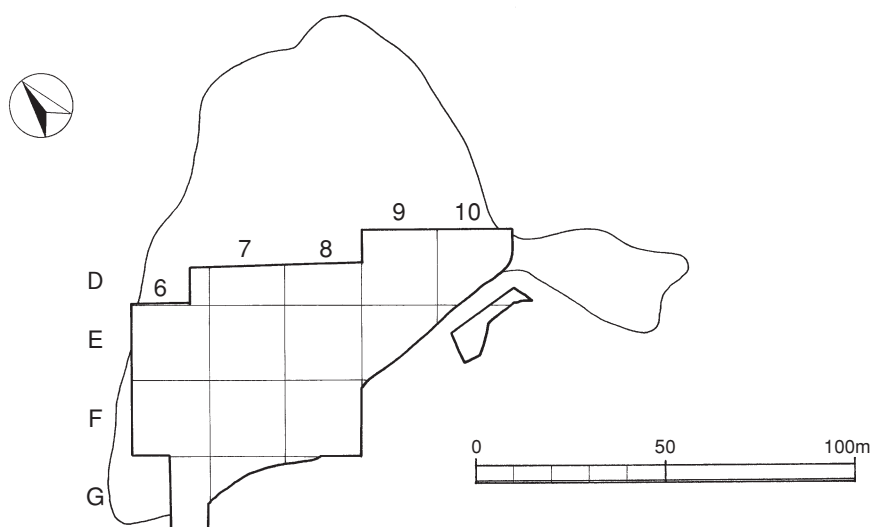
明確な掘り込みをもつもので、直径10～20cmほどの大きめの角礫の下に直径2～15cm・厚さ1～2cmほどの小さめの板状礫が敷かれたような状況で検出された。礫は熱を受けて赤化しており、もろくなっていた。なお、掘り込みの最下部には礫はみられないが、大きめの炭化物の入った灰褐色土がみられる。

2号集石(F-8区)

明確な掘り込みをもつもので、直径10～15cmほどの大きさの角礫と熱破碎礫とで構成される。これらの礫は赤化しており、もろくなっていた。礫は掘り込みより西に流れている。

3号集石(E-10区)

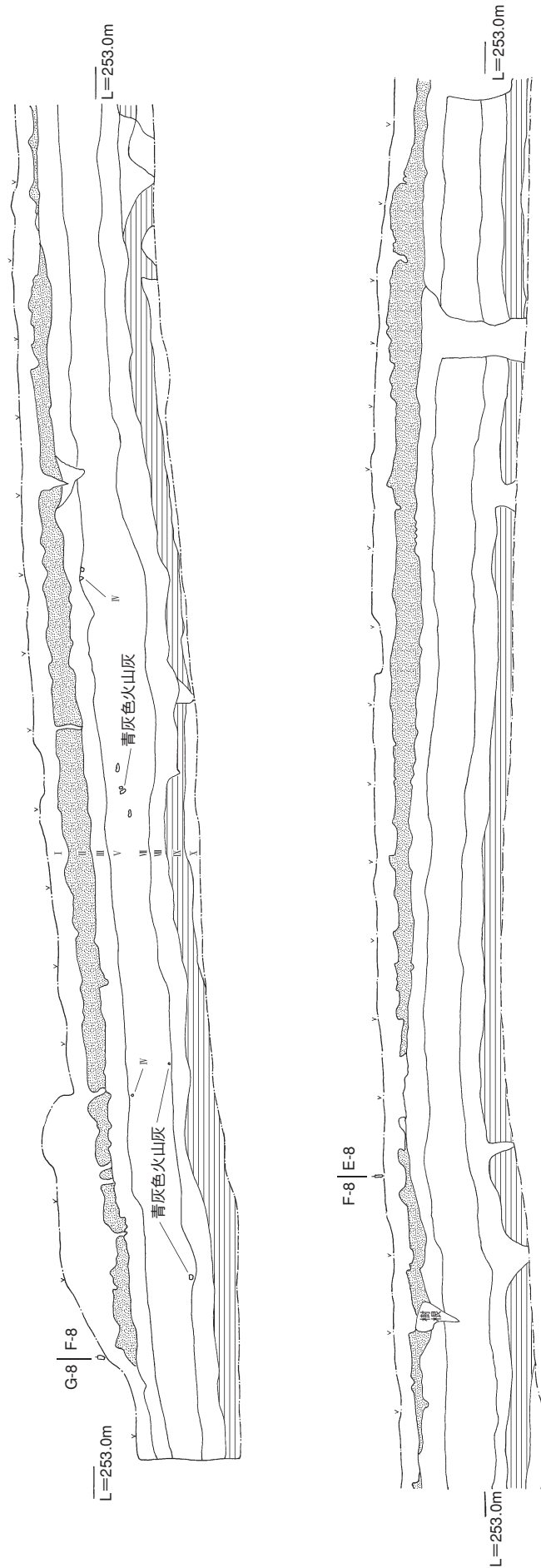
明確な掘り込みをもつもので、直径5～10cmほどの大きさの角礫と熱破碎礫とで構成される。これらの礫は赤化しており、もろくなっていた。



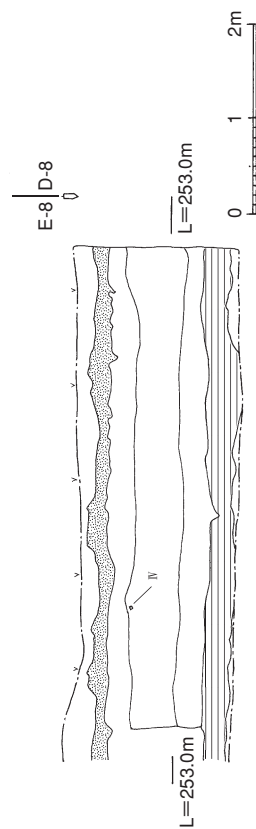
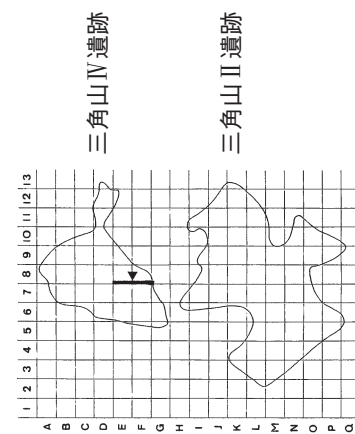
第62図 IV遺跡調査範囲



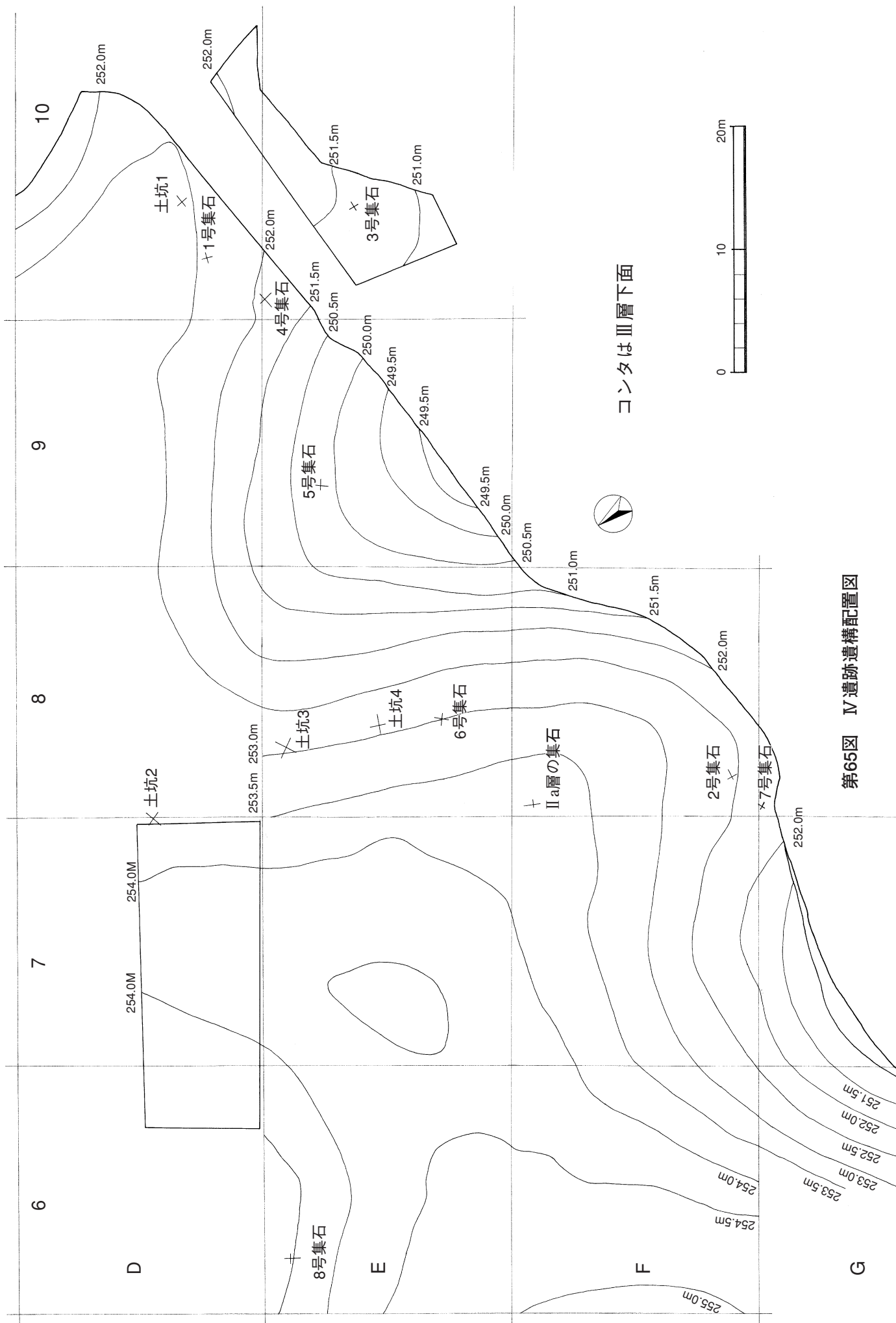
第63図 IV遺跡土層断面図 (1) (E-6~9区 北側)



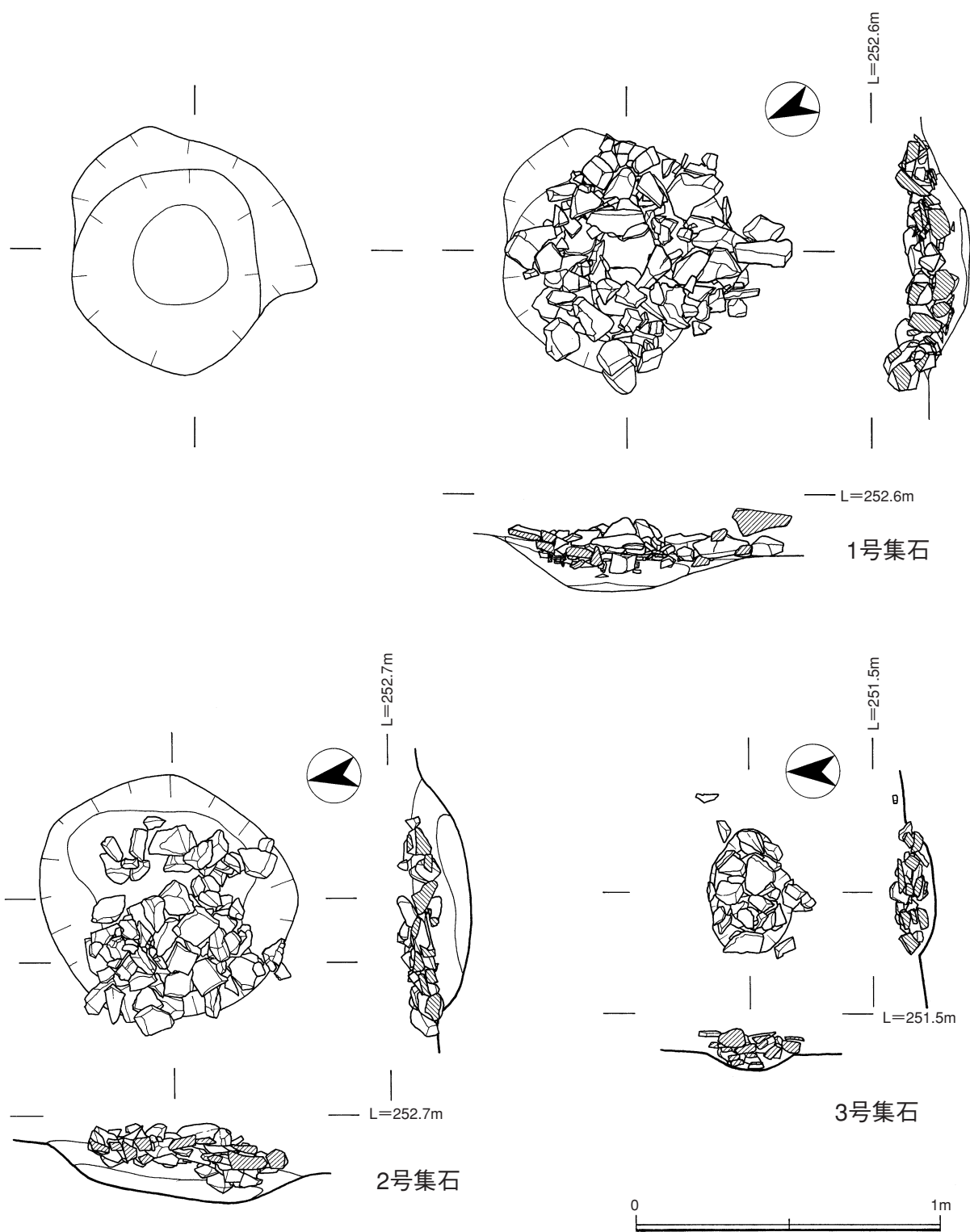
断面図位置



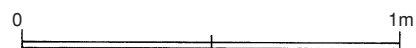
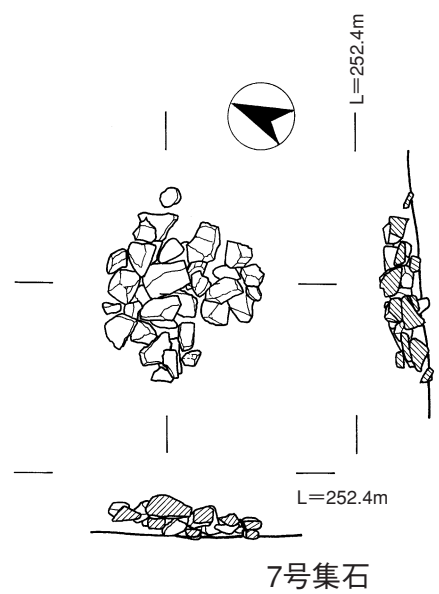
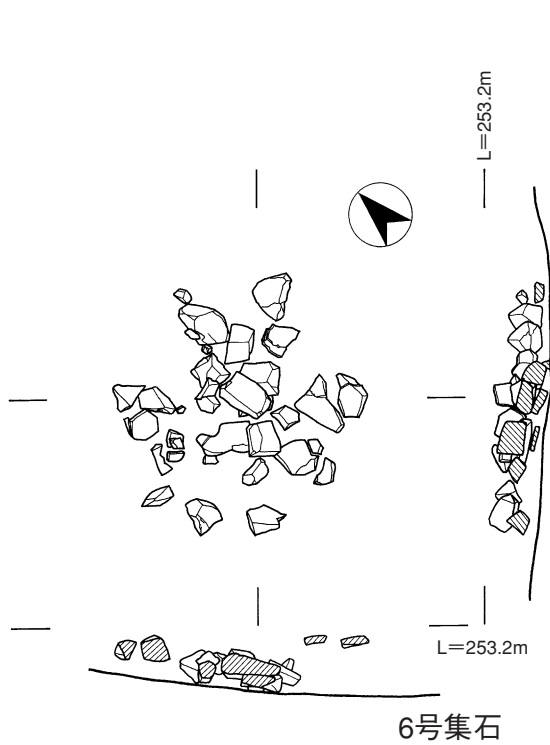
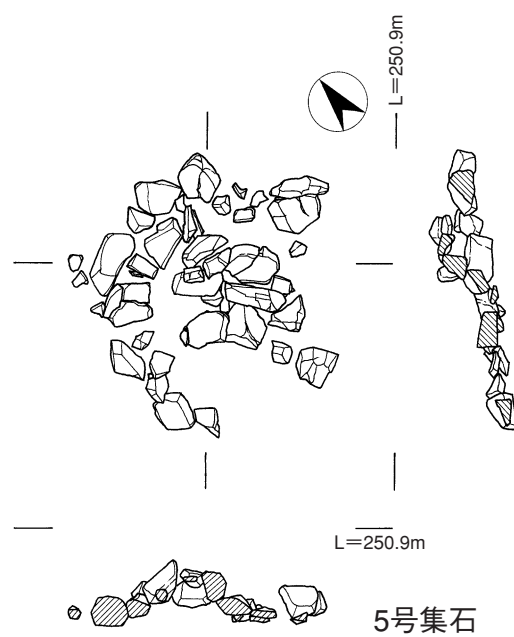
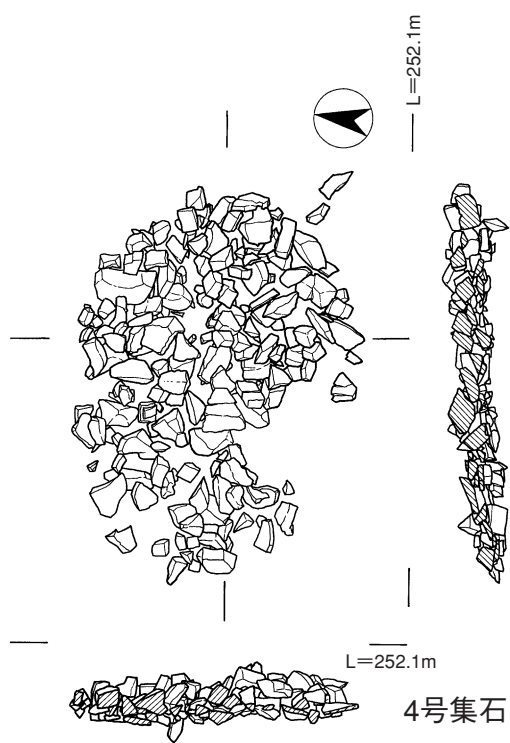
第64図 IV遺跡土層断面図 (2) (E~G-8区 西側)



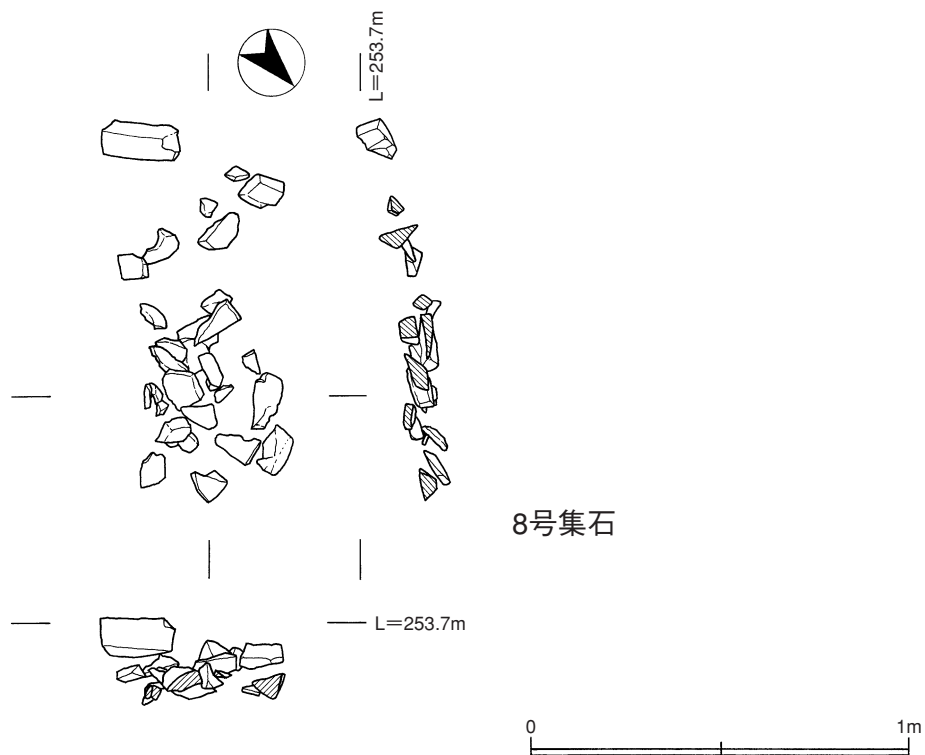
第65図 IV遺跡遺構配置図



第66図 IV遺跡の集石 (1)



第67図 IV遺跡の集石 (2)



第68図 IV遺跡の集石 (3)

4号集石 (D・E-10区)

直径10cmほどの大きさの礫が最大のものである。礫は熱を受けて赤化しており、もろくなっていた。小破片を除いた礫の総点数は約110点である。掘り込みは確認されなかった。

5号集石 (E-9区)

熱を受けて赤化した破碎礫がほとんどである。掘り込みは確認されなかった。

6号集石 (E-8区)

熱を受けて赤化した破碎礫がほとんどである。掘り込みは確認されなかった。

7号集石 (F-8区)

ほとんどの礫は赤化しており、もろくなっていた。掘り込みは確認されなかった。

8号集石 (E-6区)

他の集石より比較的硬質な砂岩が使用されている。ほとんどの礫は赤化しており、もろくなっていた。掘り込みは確認されなかった。

(2) 遺物

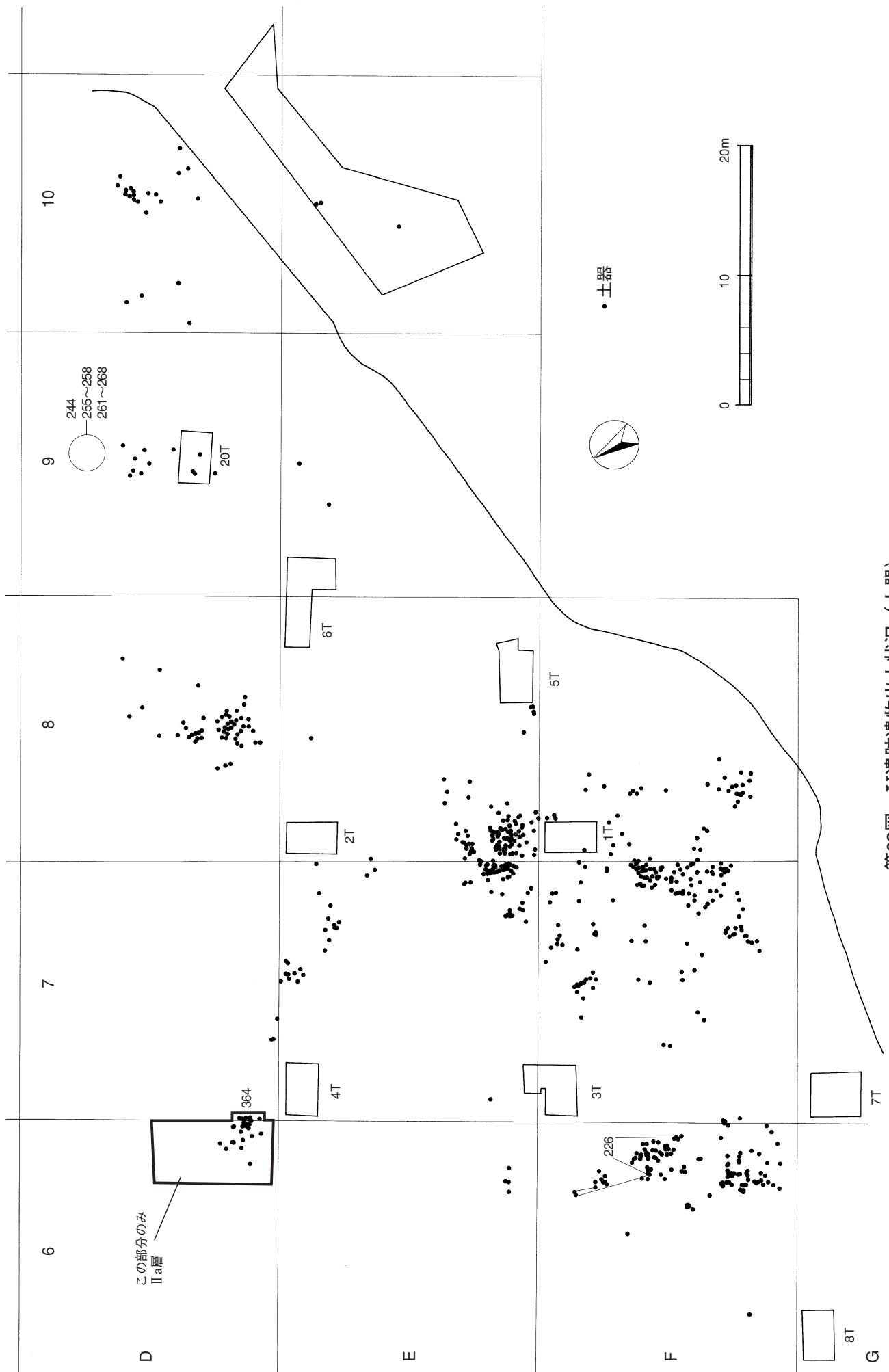
① 土器 (第71～83図 No.218～287)

土器は712点出土した。ここではそのうち64点について掲載した。ほとんどが早期後半の土器である。

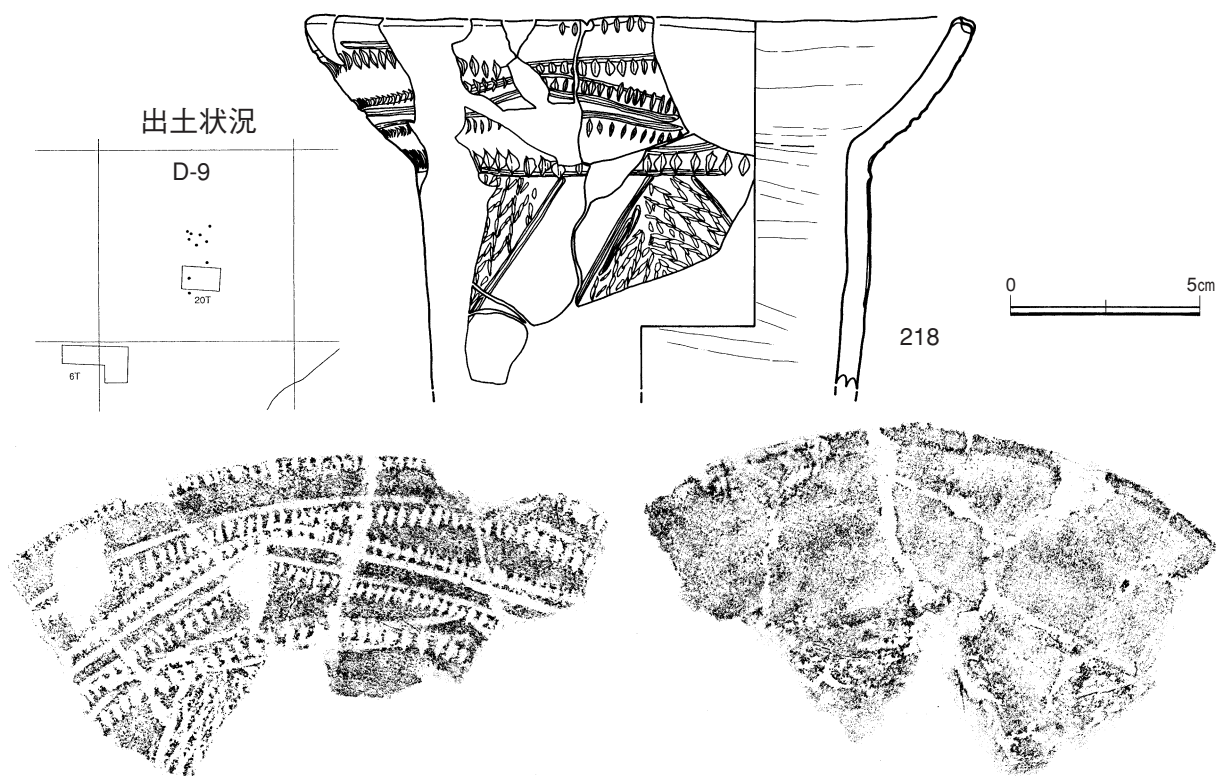
218は口縁部がラッパ状に外反し、短筒状の胴部を呈するものである。幾何学的に撚糸文を施しその上下を沈線で区画するもので第2群の第7類土器にあてはまる土器である。

219～221は第2群第8類土器に属するものである。器形は口縁部が外反し胴部内面に稜線を残すものと、口縁部が直直し胴部がわずかにふくらむものがある。文様は貝殻腹縁による刺突連点文、貝殻腹縁またはヘラ描きによる菱形格子文を口縁部および胴部に施すものなどがある。

222は第2群第9類土器に属する。口縁部は外反し、頸部はゆるくしまる。紋様は口縁部にヘラまたは貝殻腹縁による刻みを施し、胴部には貝殻による波状の条線文を施す。胴部には2条の微隆起突帯を巡らすもので、縦位にも短突帯をもつ。なお、この遺物に付着していた炭化物・煤については年代分析を行っている。



第69図 IV遺跡遺物出土状況（土器）



第71図 IV遺跡出土の土器 (1)

223は口縁部がやや内湾ぎみに直行するもので底部は平底を呈する。外面は貝殻刺突文を胴部外面に格子状に施し、内面は貝殻条痕による器面調整を行っている。

224・225は第2群第10類土器に属する。器形は9類土器に類似し、口唇部にはヘラまたは貝殻腹縁による刻みを施し、胴部には頸部の痕跡と考えられるゆるいしまりがわずかにみられる。文様は胴部（口縁部下施文帯）に棒状工具による鋸歯状文を施す。

なお、この中の完形復元できたものに付着していた炭化物・煤について年代分析を行っている。

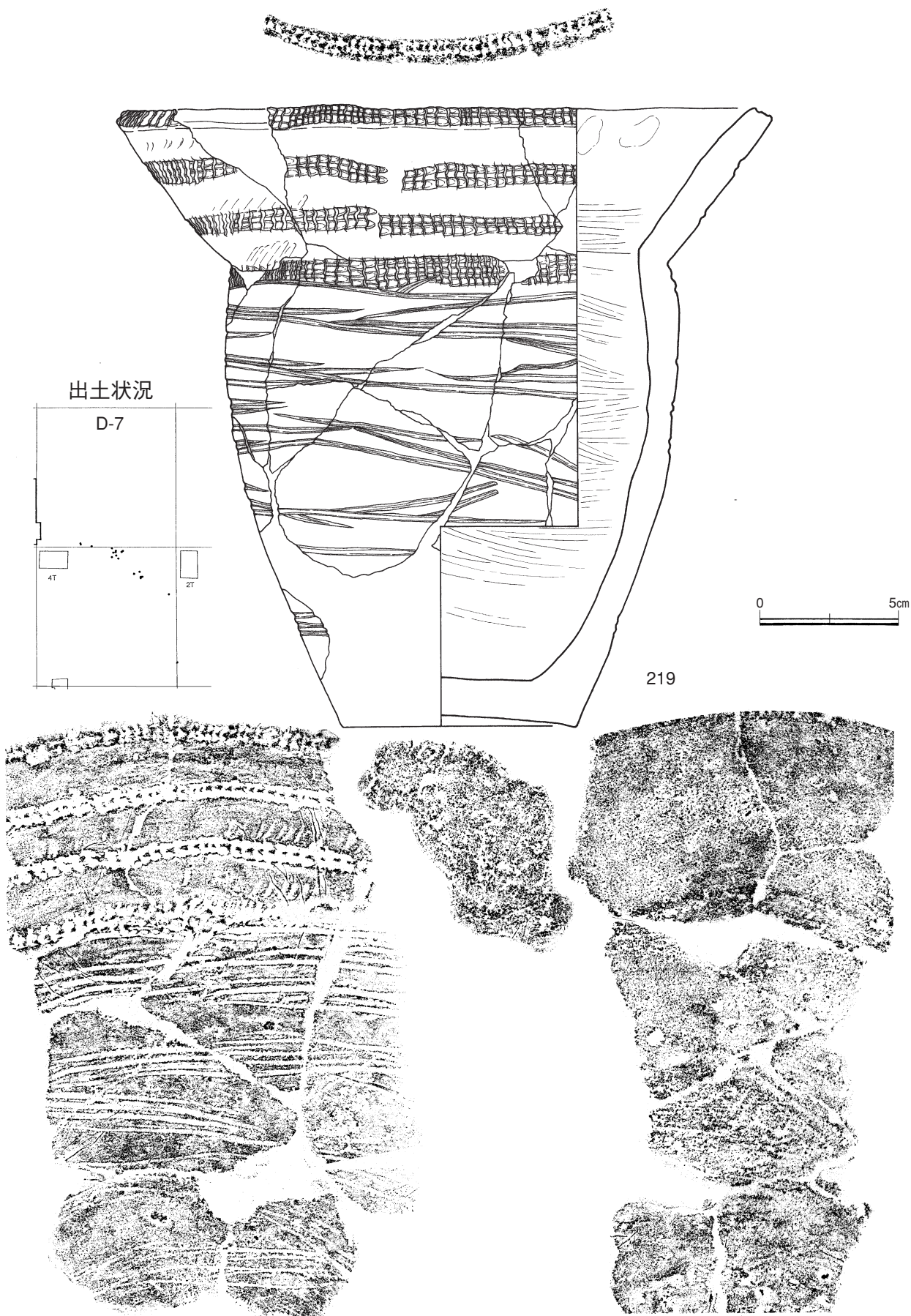
226の器形は口縁部がラッパ状に外反するものである。文様は幾何学的に刺突文を施しその上下を沈線で区画するものである。7類土器に属するものである。

227～241は8類土器に属するもので、器形は口縁部

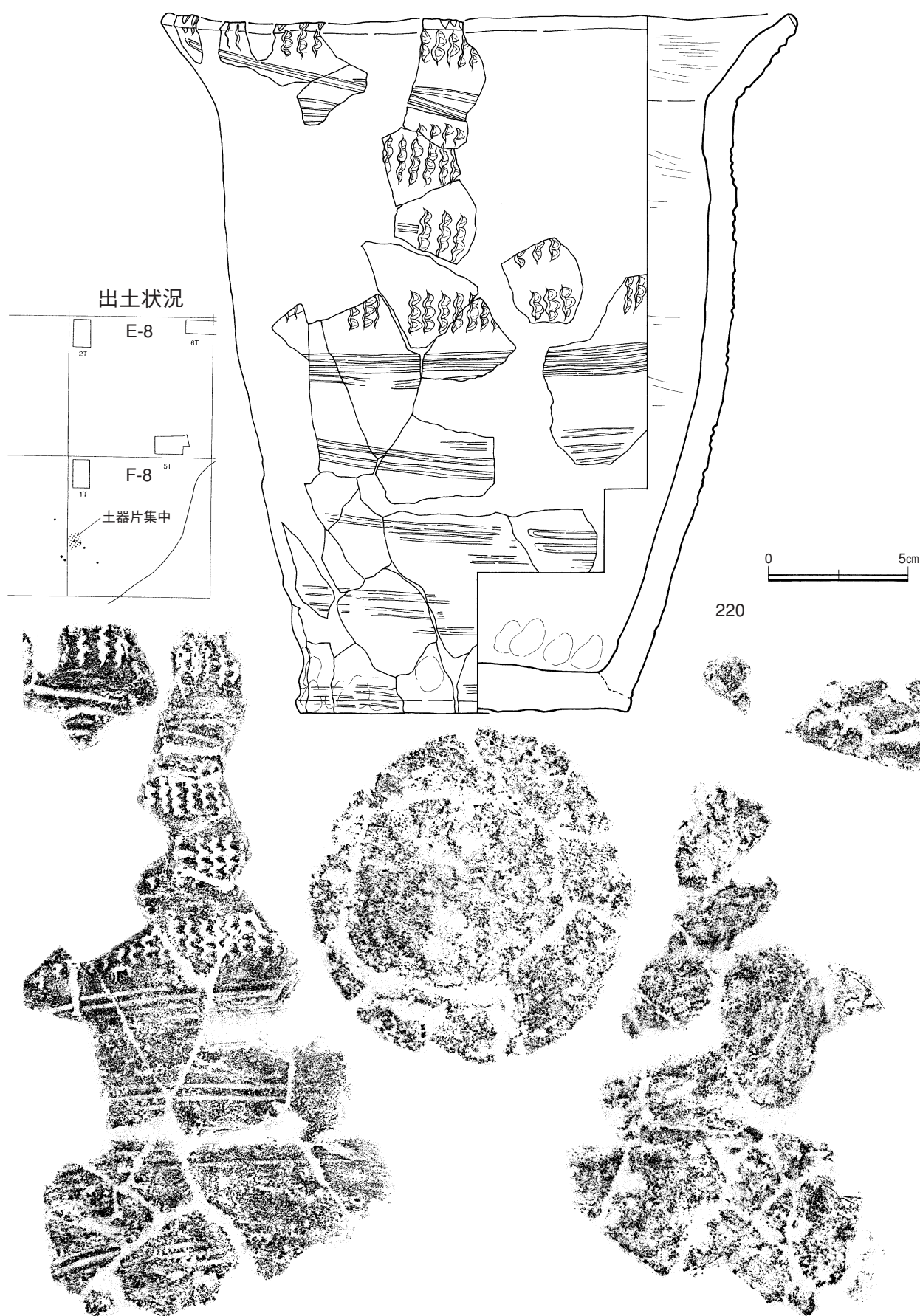
が外反し胴部内面に稜線を残すものと口縁部が直行し胴部がわずかにふくらむものがある。文様は貝殻腹縁による刺突連点文、貝殻腹縁またはヘラ描きによる菱形格子文を口縁部および胴部に施すものなどがある。

242～246は8類土器と胎土・色調などが類似するもので、これらの底部である可能性が高いものである。

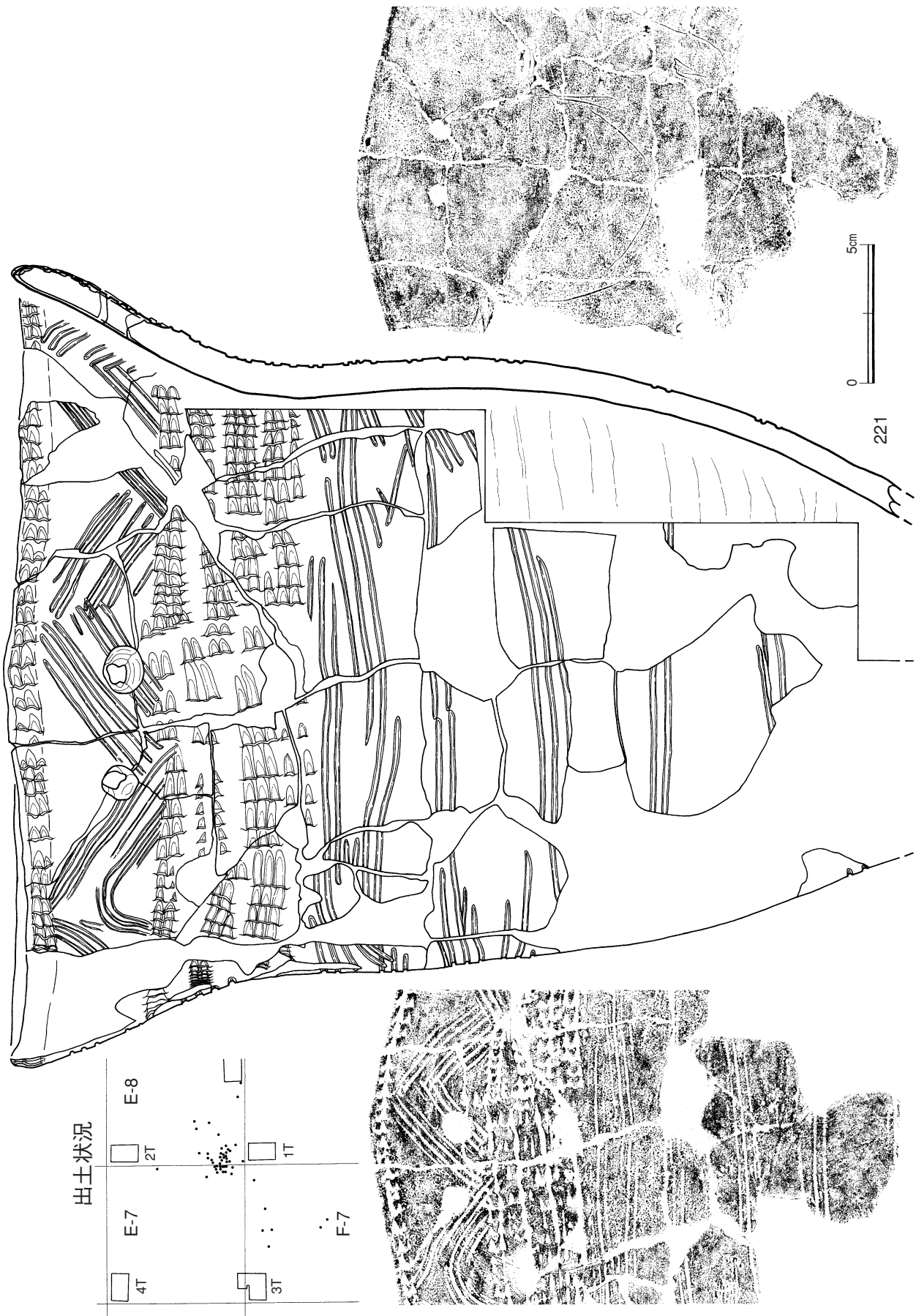
247～270は9類土器に属する。微隆起突帯を有することから本類に分類した。おおよそ2つ（247～253・254～270）に大別できる。器形は12類土器にも類似するものがみられる。247～253の文様は直線状と波状の押引文を横位方向に組み合わせたものである。254～270は口縁部が外反するものと内湾ぎみに直行するものがみられる。頸部はゆるくしまるものと直線的なものがみられる。文様は口縁部にヘラまたは貝殻腹縁



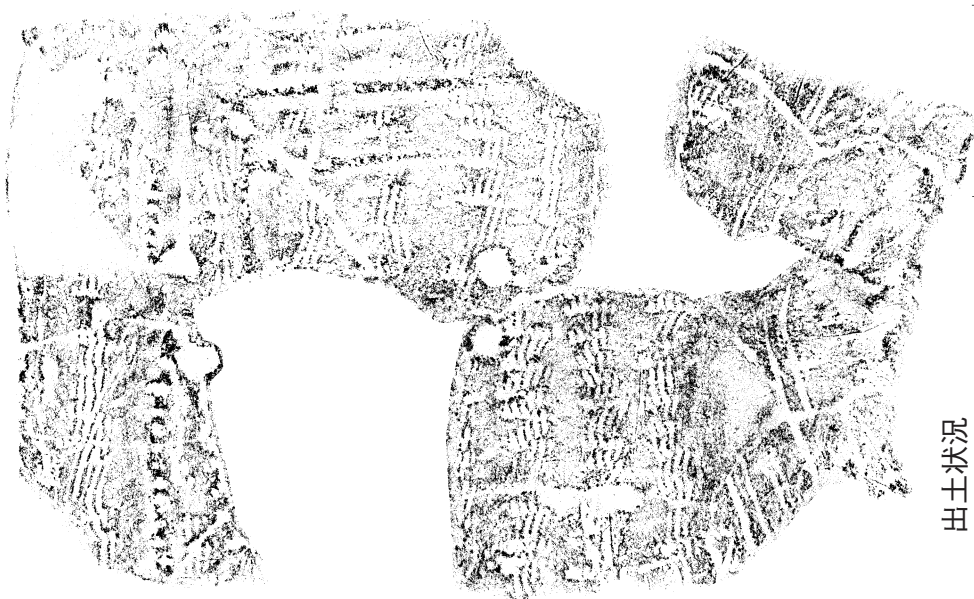
第72図 IV遺跡出土の土器 (2)



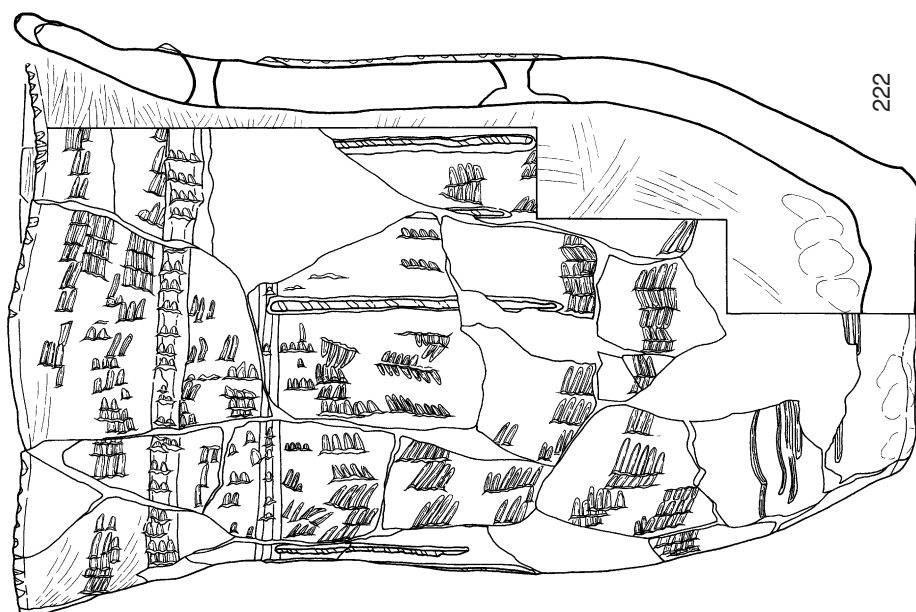
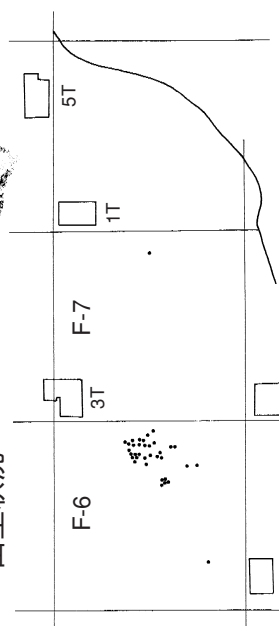
第73図 IV遺跡出土の土器 (3)



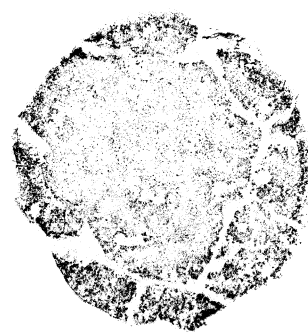
第74図 IV遺跡出土の土器 (4)



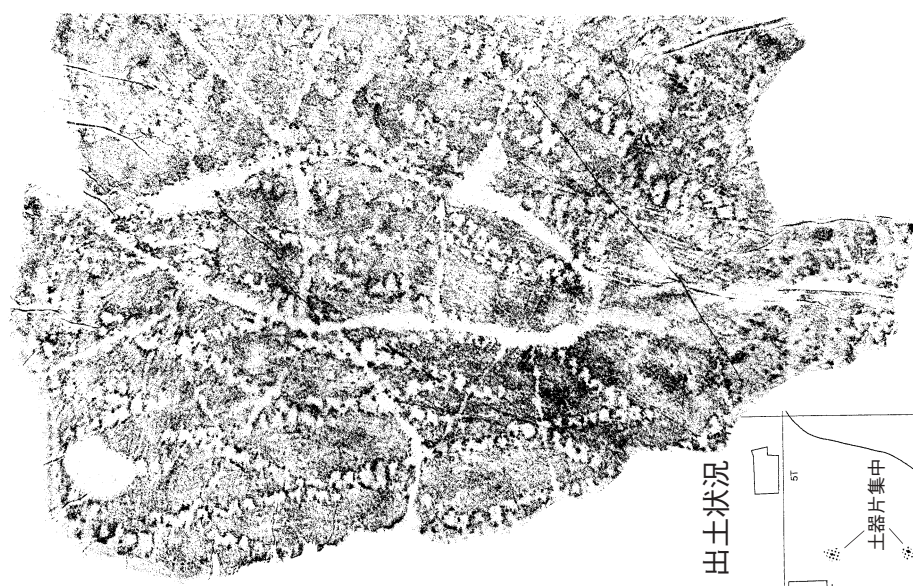
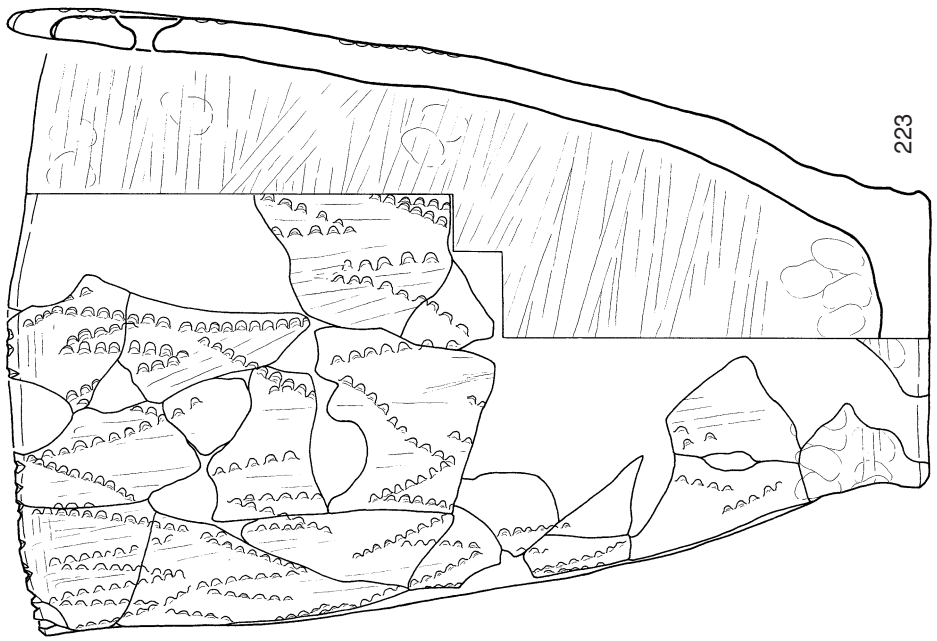
出土状況



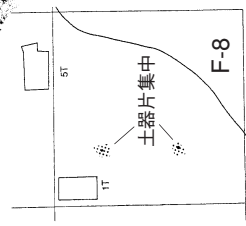
222



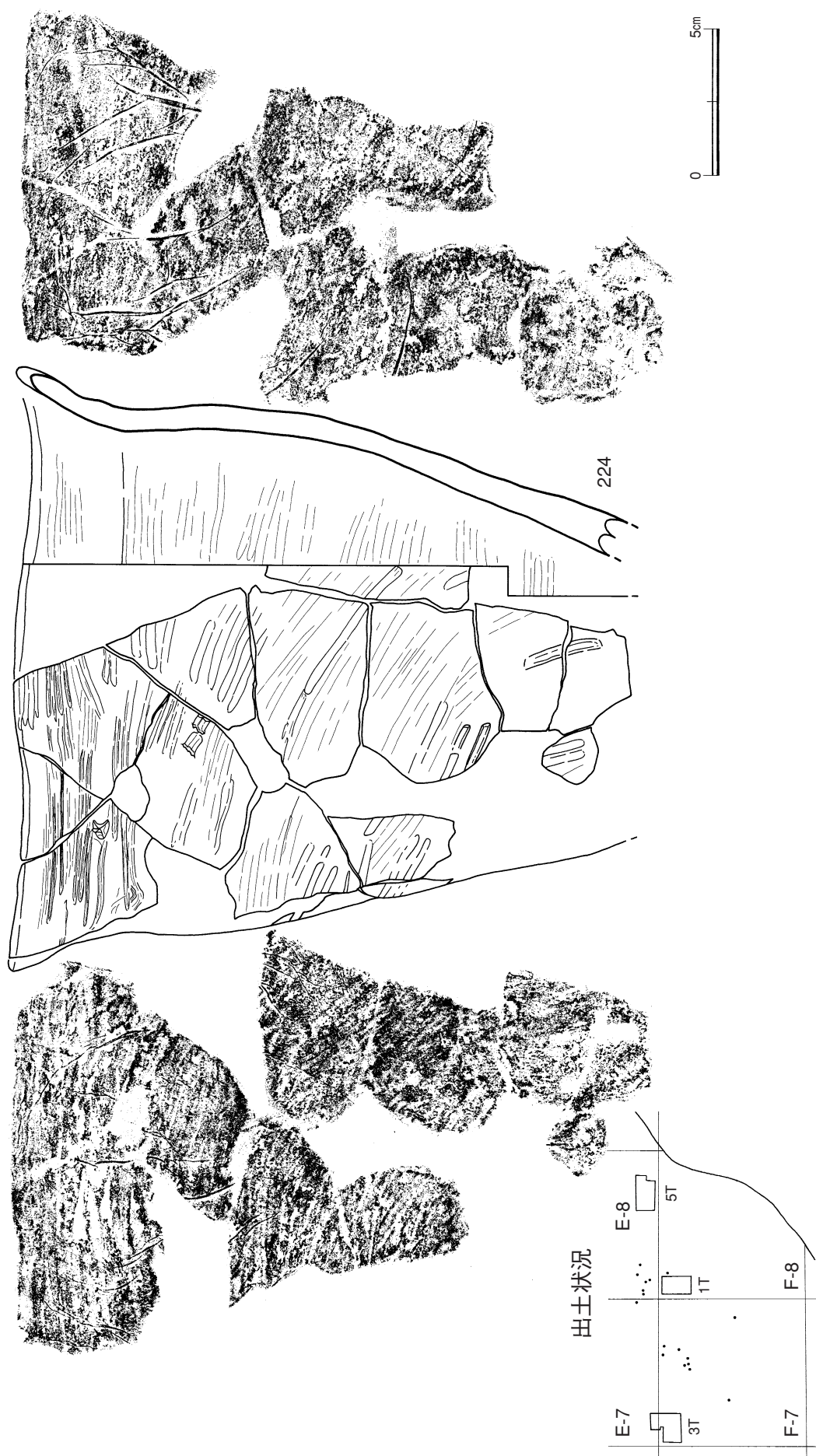
第75図 N遺跡出土の土器 (5)



出土状況

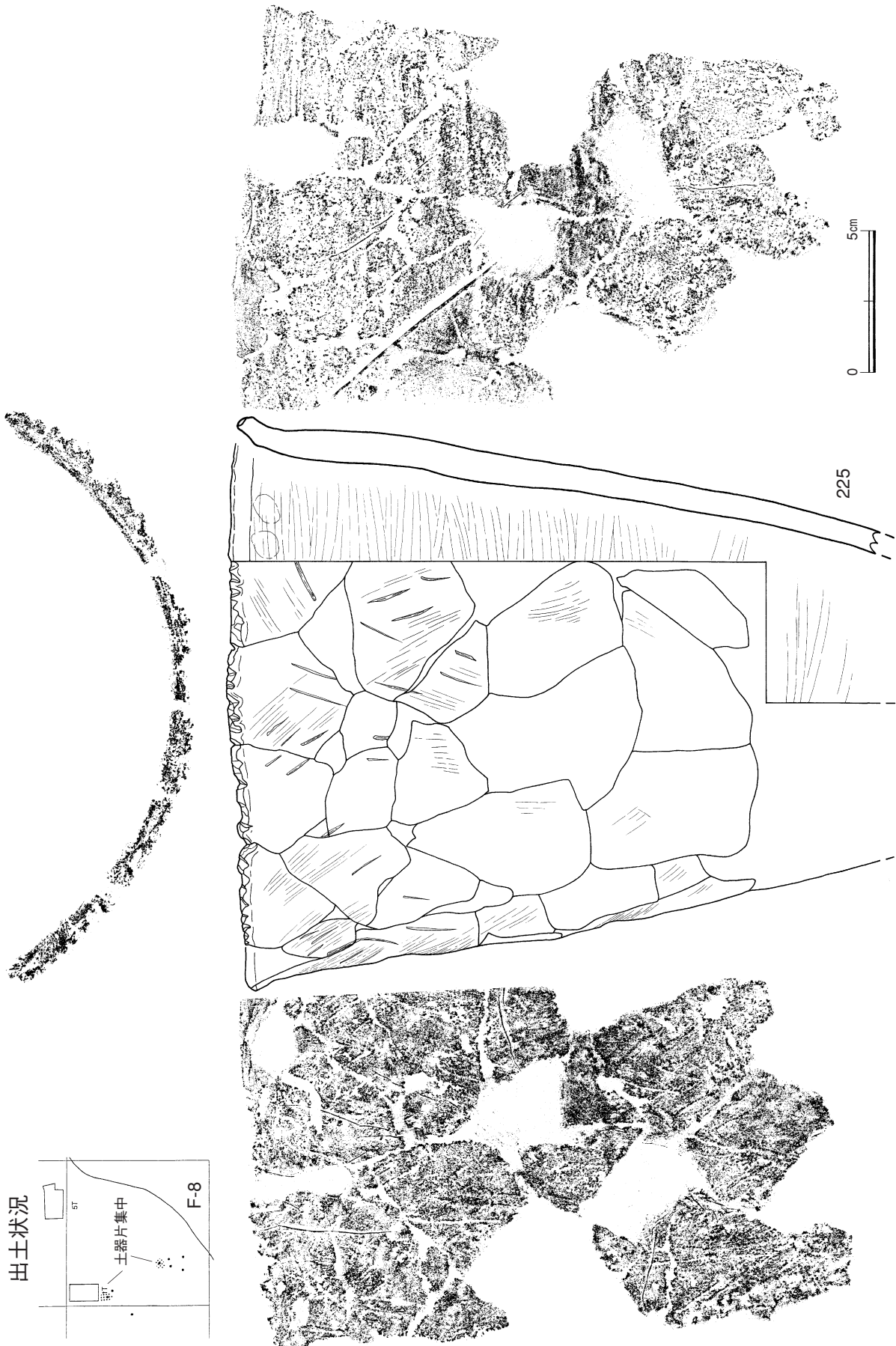
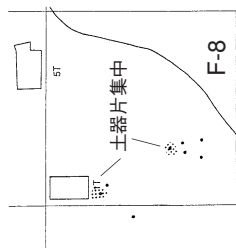


第76図 IV遺跡出土の土器 (6)

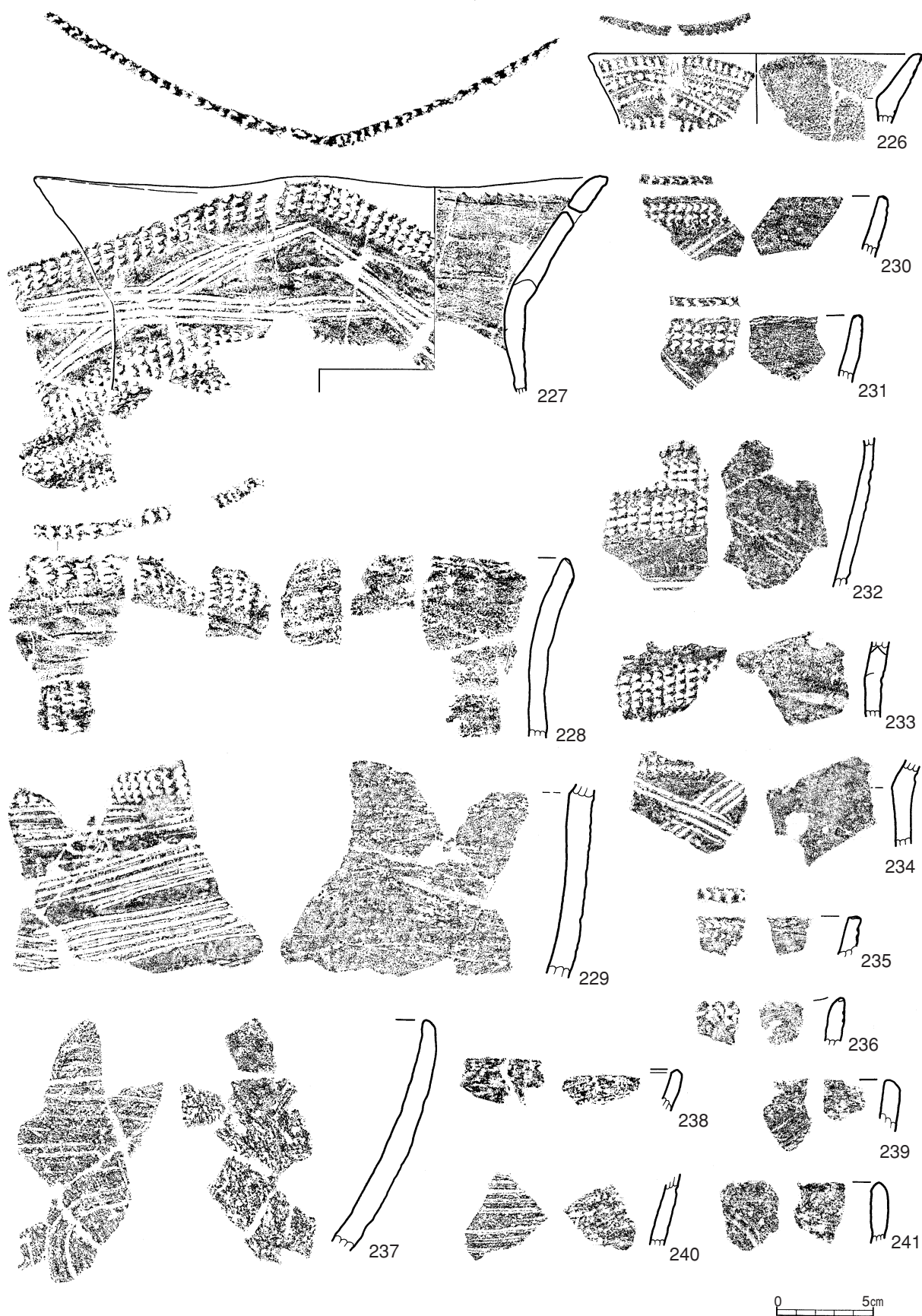


第77図 N遺跡出土の土器 (7)

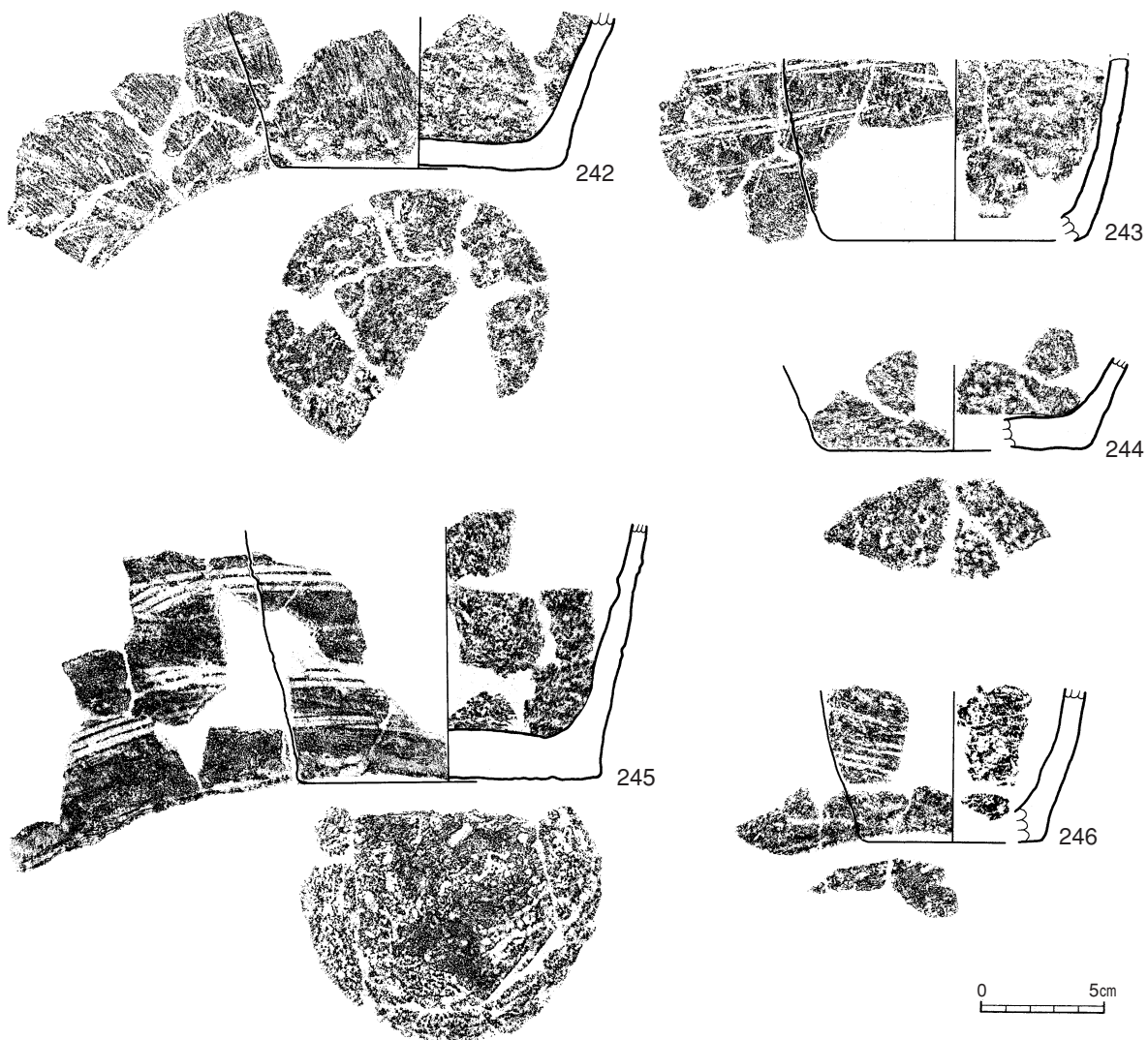
出土状況



第78図 IV遺跡出土の土器 (8)



第79図 IV遺跡出土の土器 (9)

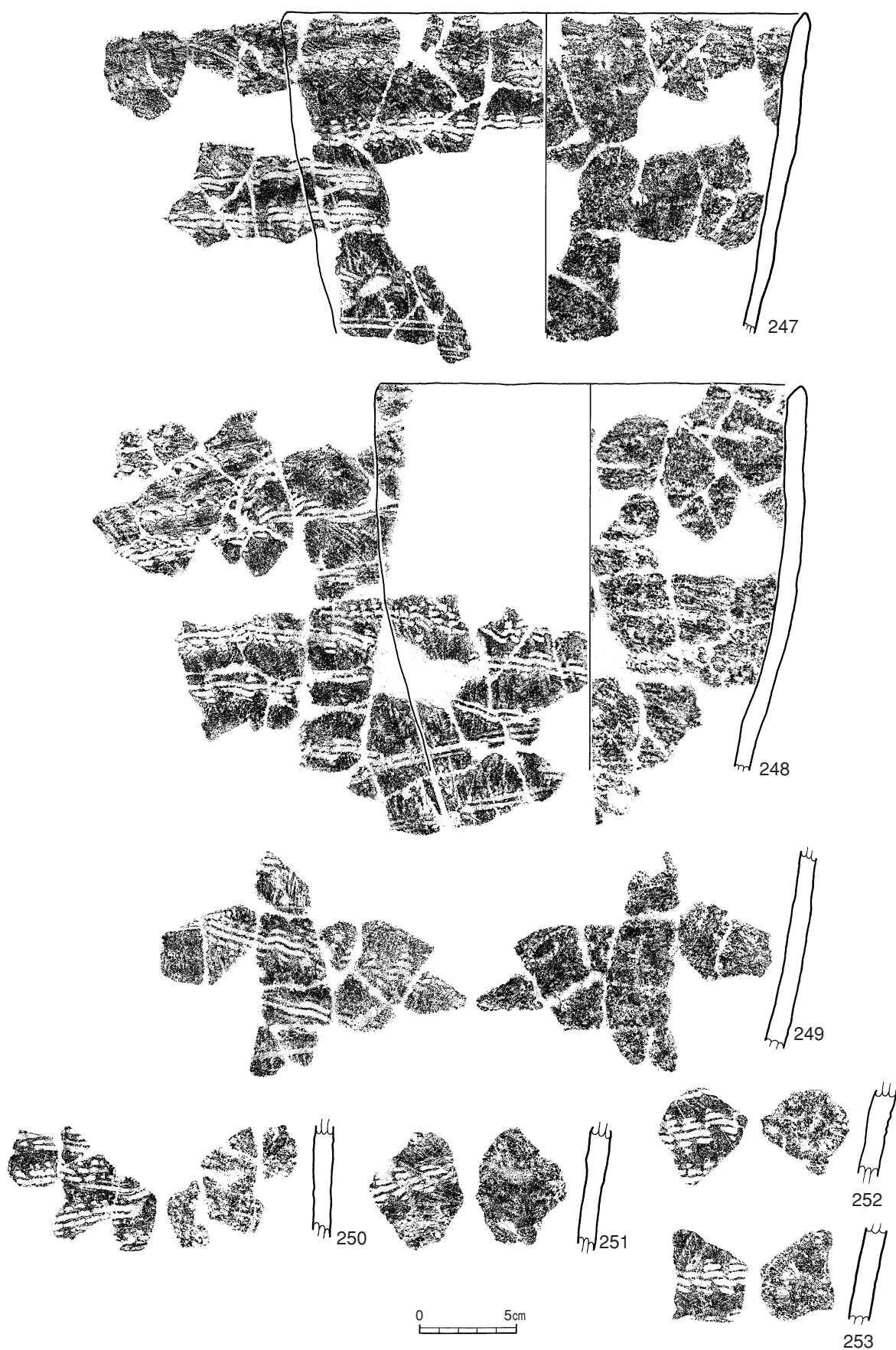


第80図 IV遺跡出土の土器 (10)

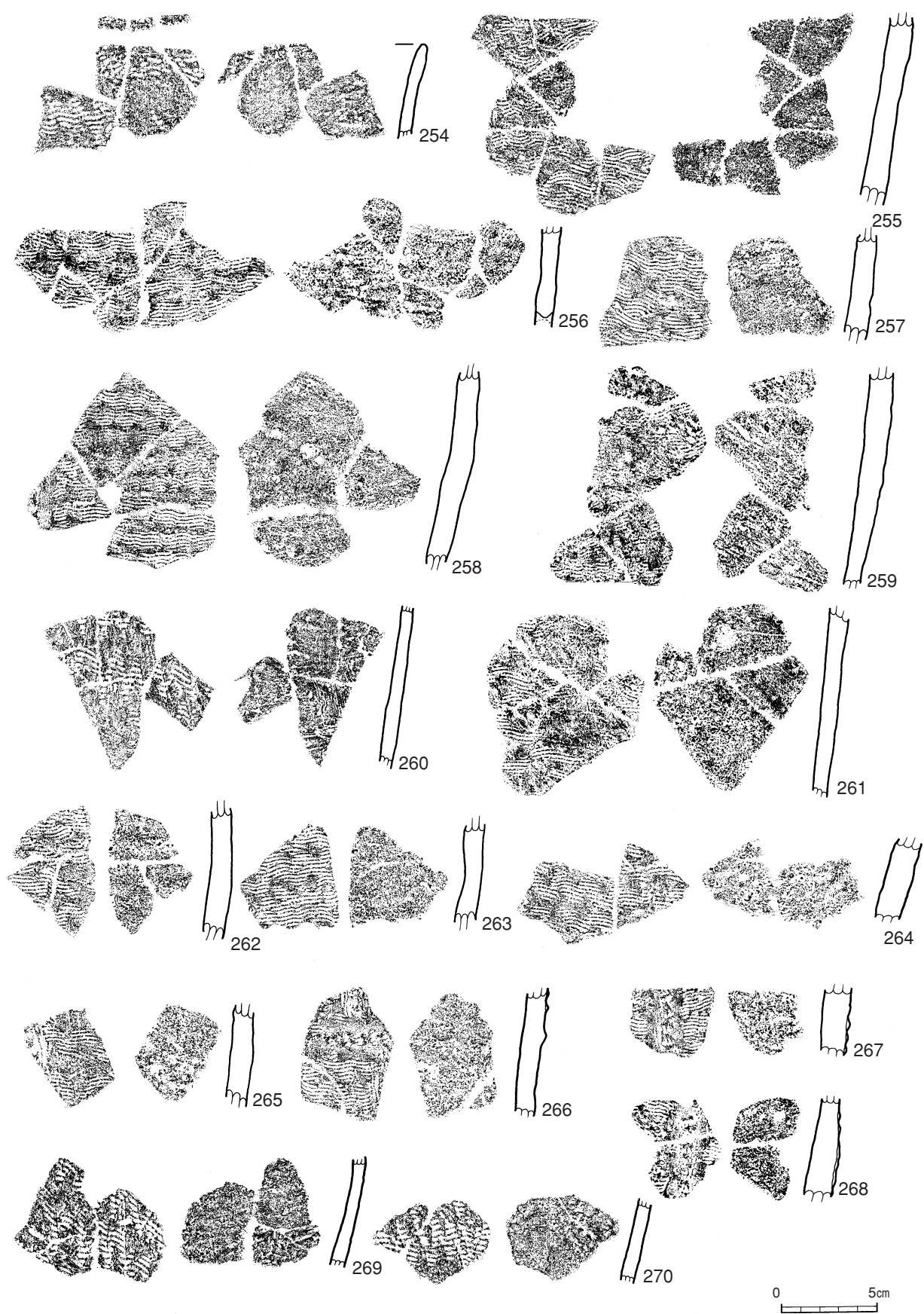
による刻みを施し、胴部には貝殻による直線または波状の条線文を施す。縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を持つ。

271～279は早期の土器で分類できなかったものを一括した。無文のものがほとんどである。

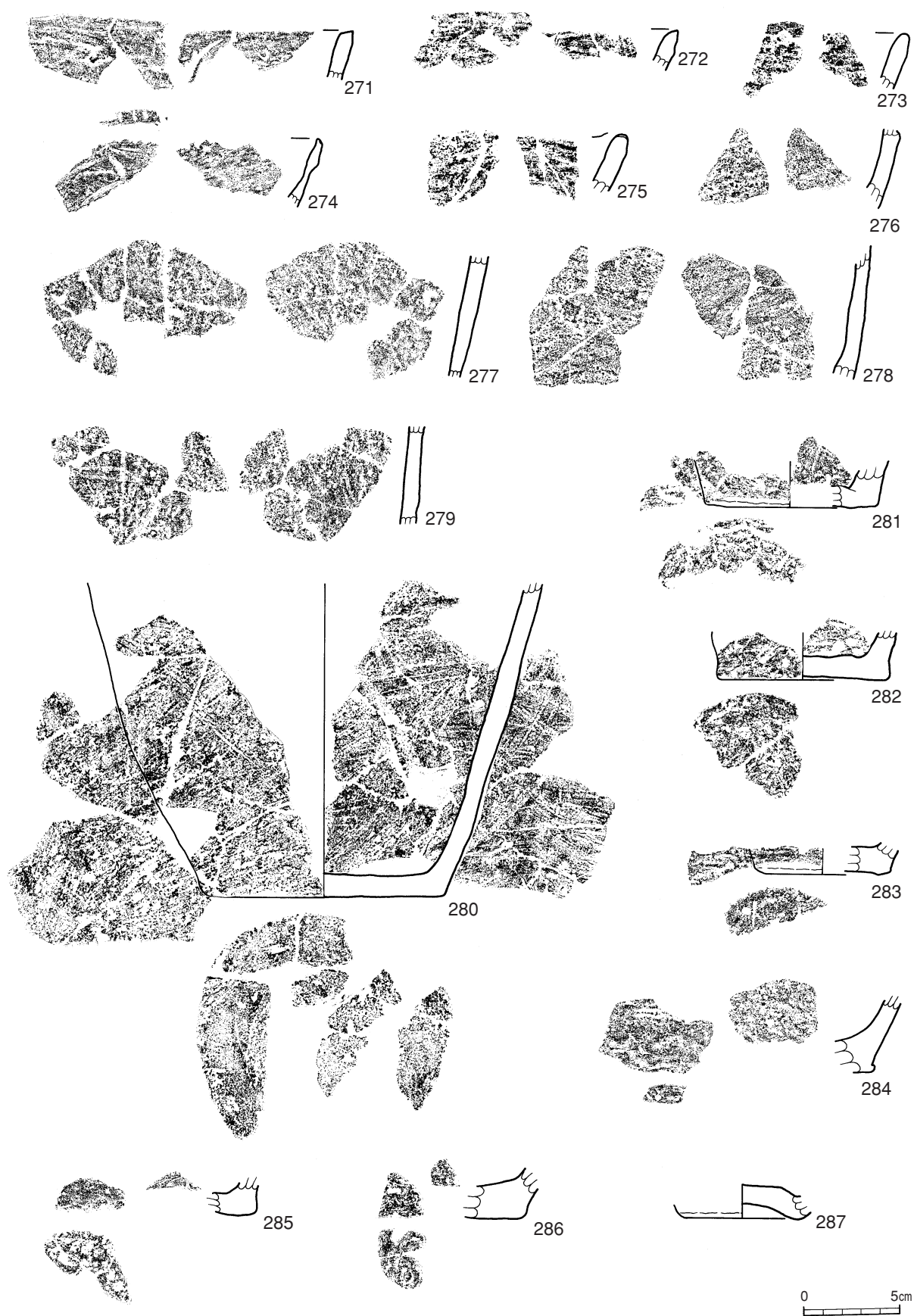
280～287は、早期の土器で分類できなかったものの底部を一括した。280は貝殻腹縁によって内外面に器面調整を施すものである。わずかに上げ底状を呈するもの（282・283）とほぼ完全な平底のもの（281）、および完全な上げ底のもの（287）とがみられる。この中で特に287は上げ底でかつ小型のものである。



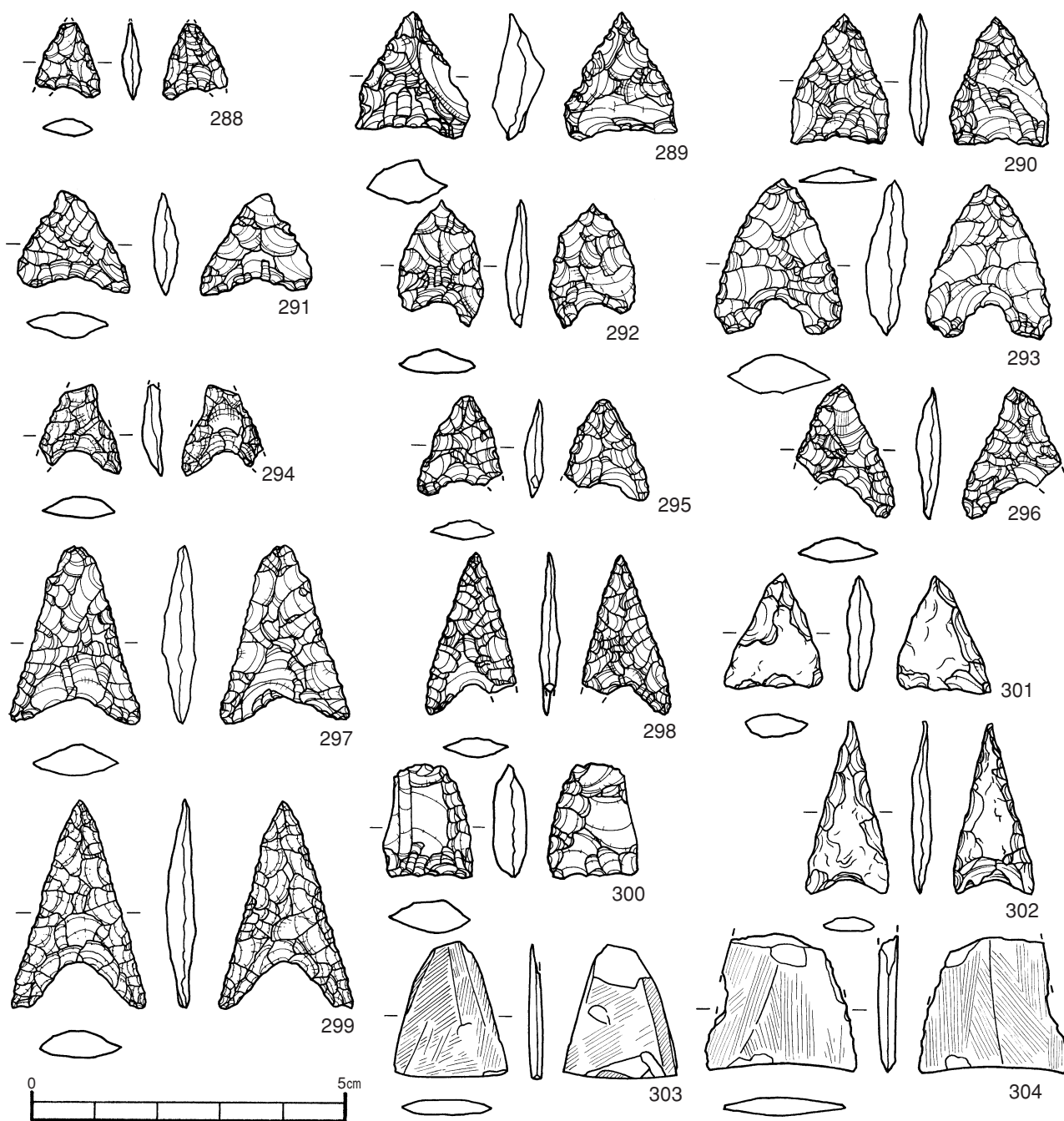
第81図 IV遺跡出土の土器 (11)



第82図 IV遺跡出土の土器 (12)



第83図 IV遺跡出土の土器 (13)



第84図 IV遺跡出土の石器 (1)

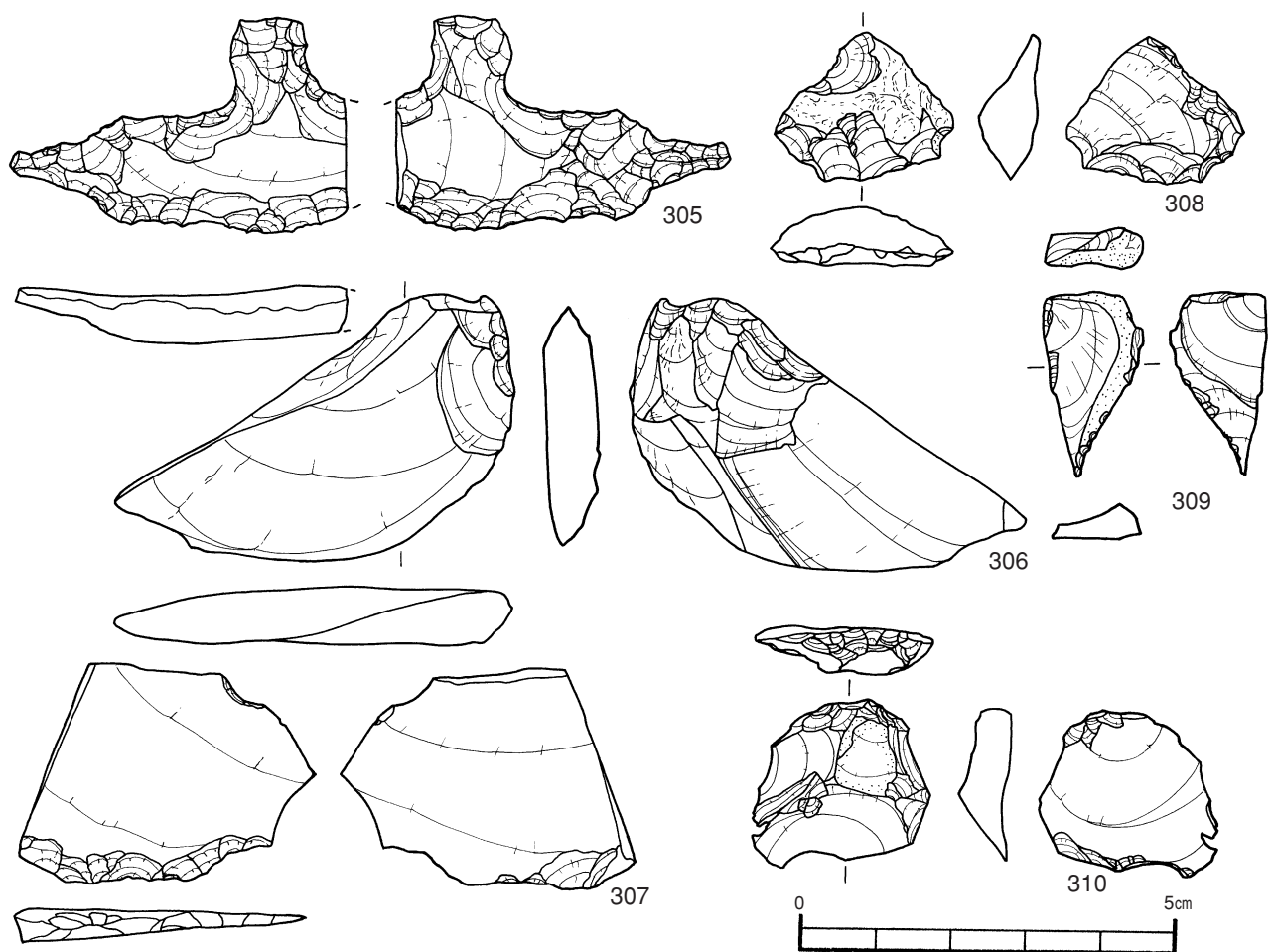
② 石器

Ⅲ層から出土した。打製石鏃・磨製石鏃・石匙・スクレイパー・使用痕剥片・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・有溝砥石・石皿・刃器・礫器・フレイク(剥片)・石核で構成される。

打製石鏃 (第84図 No.288～302)

18点出土し、17点を図化した。重量や挟りの状態などで細分される。288は姫島産黒曜石製のもので最も

小型のものである。一部破損しているがはっきりした挟りが入る。289・290は挟りは小さいが側縁の膨らみが顕著になり、主要剥離面を器面に残す。289は針尾系の黒曜石製のもので、290はチャート素材としている。291もチャート製で、頭部先端を欠くが脚部片側が長い。292・293は木の葉状で深い挟りが入る。292は黒曜石製で、脚部先端が尖る。293は針尾系黒曜石製で、脚部先端は丸く整形される。294は安山岩製



第85図 IV遺跡出土の石器 (2)

で、かなり破損しているが、やや深い抉りが入る。295はチャート製で、一部破損しているがはっきりした抉りが入る。296は針尾系黒曜石製で、片側が欠けているが脚部の長い形態である。297・298は、一部に主要剥離面を残して均一な剥離が施されるものである。形態は直線的な側縁で、細長い二等辺三角形状であり、明快な抉りが入る。299は表採品であるが、石材や形状等で早期と判断した。最も深い抉りが入る。300は姫島産黒曜石製で、製作中に放棄された未完成品である。縁辺部から調整していった様子が観察される。301・302は、ホルンフェルス製で風化が激しいが、側縁に調整痕を残すなど、形態の違いは見て取れる。

磨製石鏃 (第84図 No.303・304)

2点出土した。抉りの状態で細分される。破損しているが、いずれも頁岩を使用し、2点とも異なる形状

に仕上げている。303は基部がやや膨らみ、304では浅い抉りが入る。

石匙 (第85図 No.305・306)

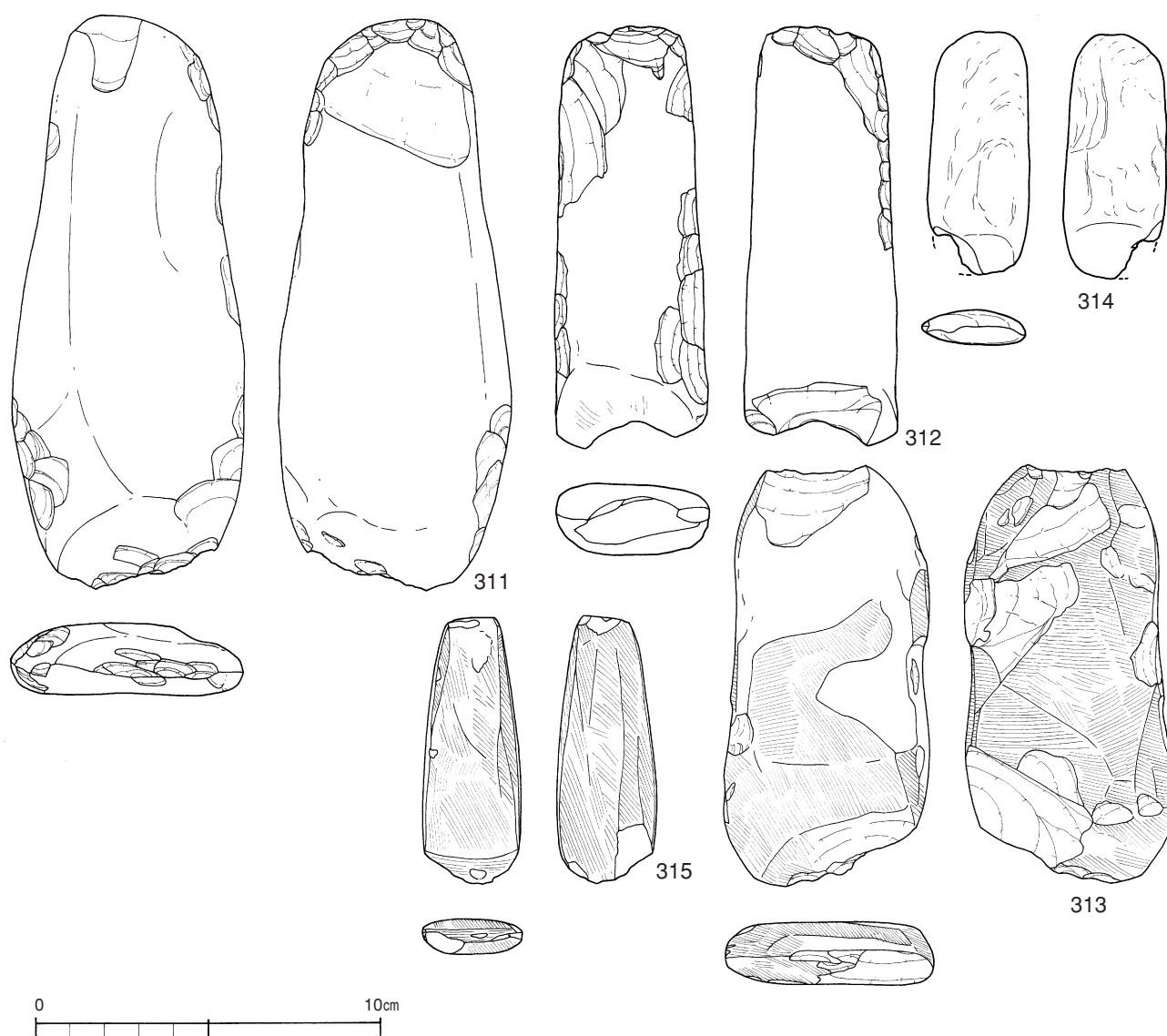
2点出土した。いずれも安山岩製で、重量や抉りの状態などで細分される。305は片側が破損しているものの、形態的には横型に属する。摘み部はU字状の抉りを対に設け、刃部は横刃を成し、急角度の刃部整形が見られる。306はナイフ状の剥片を利用し、摘み部を作り出さずに調整ですませたものである。

スクレイパー (第85図 No.307・308)

2点出土した。いずれも安山岩製で、307は薄手の剥片を利用し、308は自然面を残しつつ刃部を作り出している。

使用痕剥片 (第85図 No.309・310)

2点出土した。309は針尾産黒曜石製で、310は上牛鼻



第86図 IV遺跡出土の石器 (3)

産黒曜石製である。いずれも一部に自然面を残し、刃部に使用痕が見られる。

打製石斧 (第86図 No.311・312)

2点出土した。いずれもホルンフェルス製で、重量や仕上げの状態などで細分される。311は手頃な自然礫を利用し、やや粗い調整と敲打で全体を整形したものである。刃部は使用による摩耗と刃こぼれが見られる。312も調整と敲打で全体を整形しているが、刃部裏面が窪んでおり丸ノミ形石斧の可能性がある。頭部と刃部は使用により破損している。

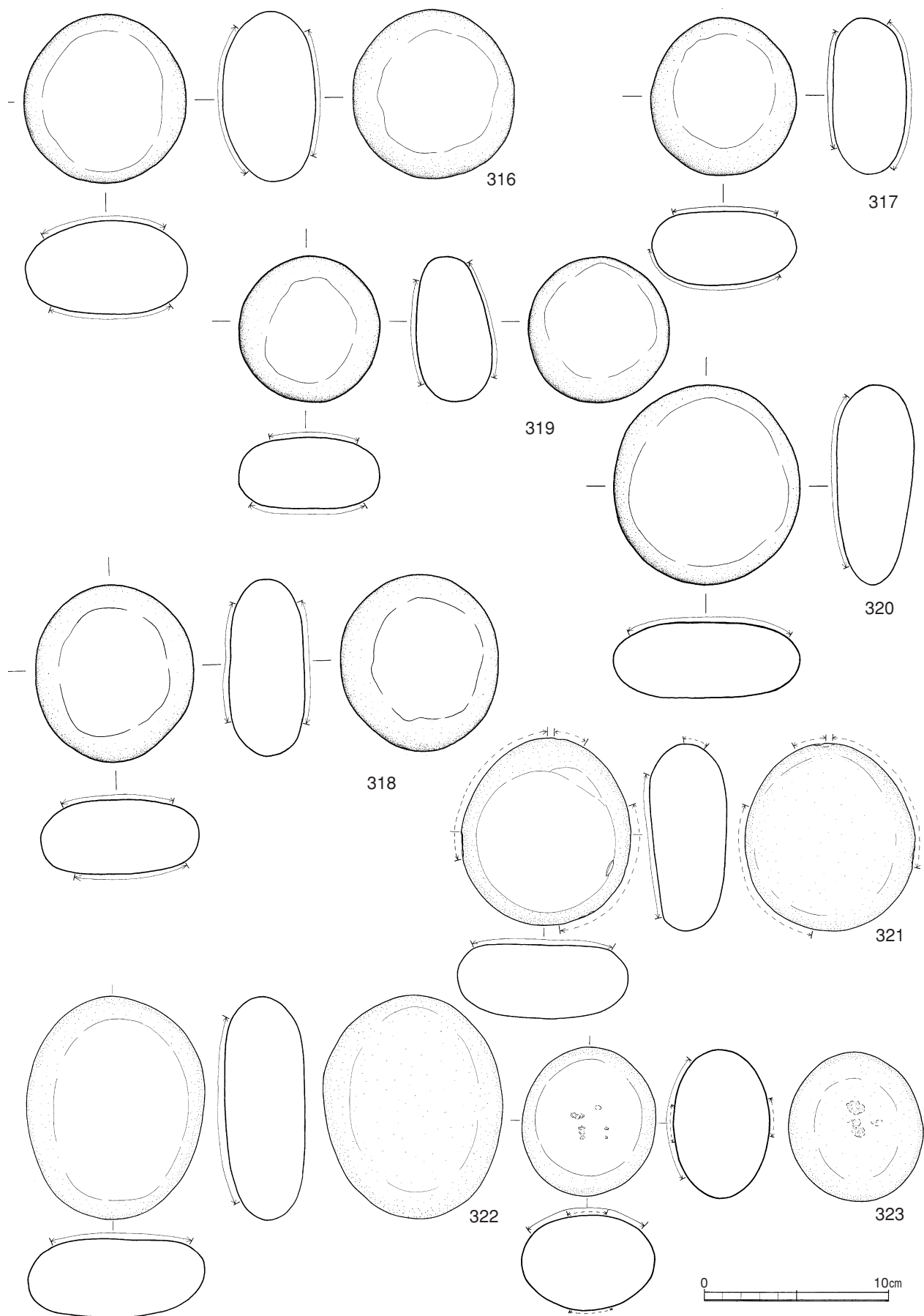
磨製石斧 (第86図 No.313～315)

3点出土した。重量や仕上げの状態などで細分される。313は粗い調整で全体を整形した後、全体をざっと磨り上げたもので一部に自然面を残す部分磨製石斧

である。チャート製で、頭部と刃部は使用により破損している。314は薄手のホルンフェルス製で、やや粗い調整の後全体を磨り上げたものである。刃部は使用により破損している。本遺跡で最も小型の石斧である。315は頁岩製で、ほとんど調整の跡を残さずに丹念に磨り上げたものである。刃部には使用によるとみられる欠けが見られる。

磨石 (第87・88図 No.316～331)

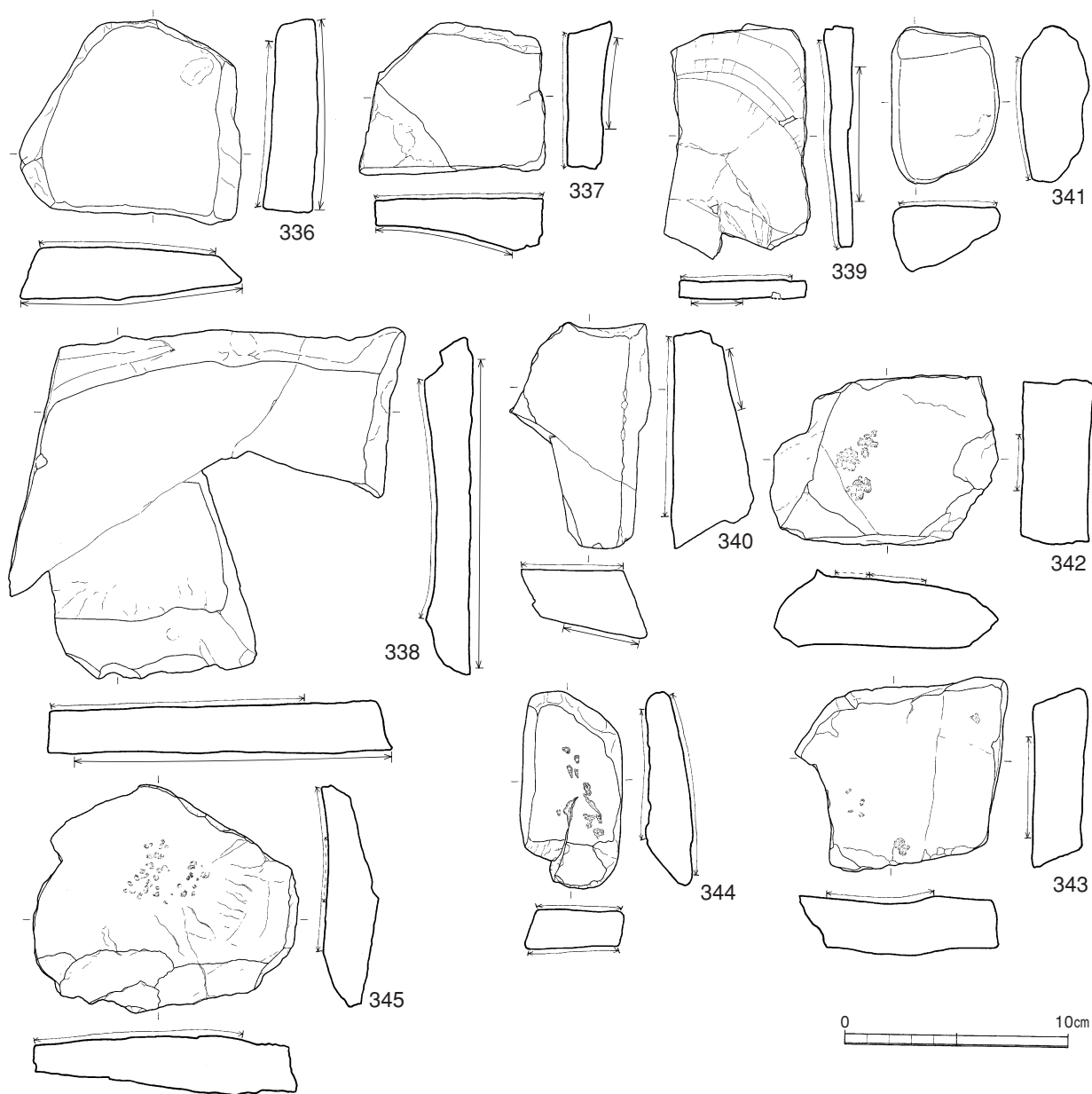
16点出土した。ほとんどが円形や楕円形の砂岩製円礫を素材とした磨石である。316～319は2面を磨面に使用し、敲打痕はない。320～323は1面を磨面に使用している。321は側面に敲打痕がある。323・324は側面だけでなく磨面にも敲打痕がある。325は1面を磨面に使用しているが、敲打痕はかすかである。326・



第87図 IV遺跡出土の石器 (4)



第88図 IV遺跡出土の石器 (5)



第89図 IV遺跡出土の石器 (6)

329は円礫でなく、形がいびつである。326は2面を磨面に使用しているが、327は1面を磨面に使用し側面に敲打痕がある。328は表採品であるが、石材や形状等で早期と判断した。凹石で敲打痕は約8か所あり、かなり使い込まれている。329～331は破損している。329は2面を磨面に使用し、側面に敲打痕がある。330は磨面が1面、側面に敲打痕がある。331は磨面が2面である。

敲石 (第88図 No.332～334)

3点出土した。いずれも棒状で、端部を使用して

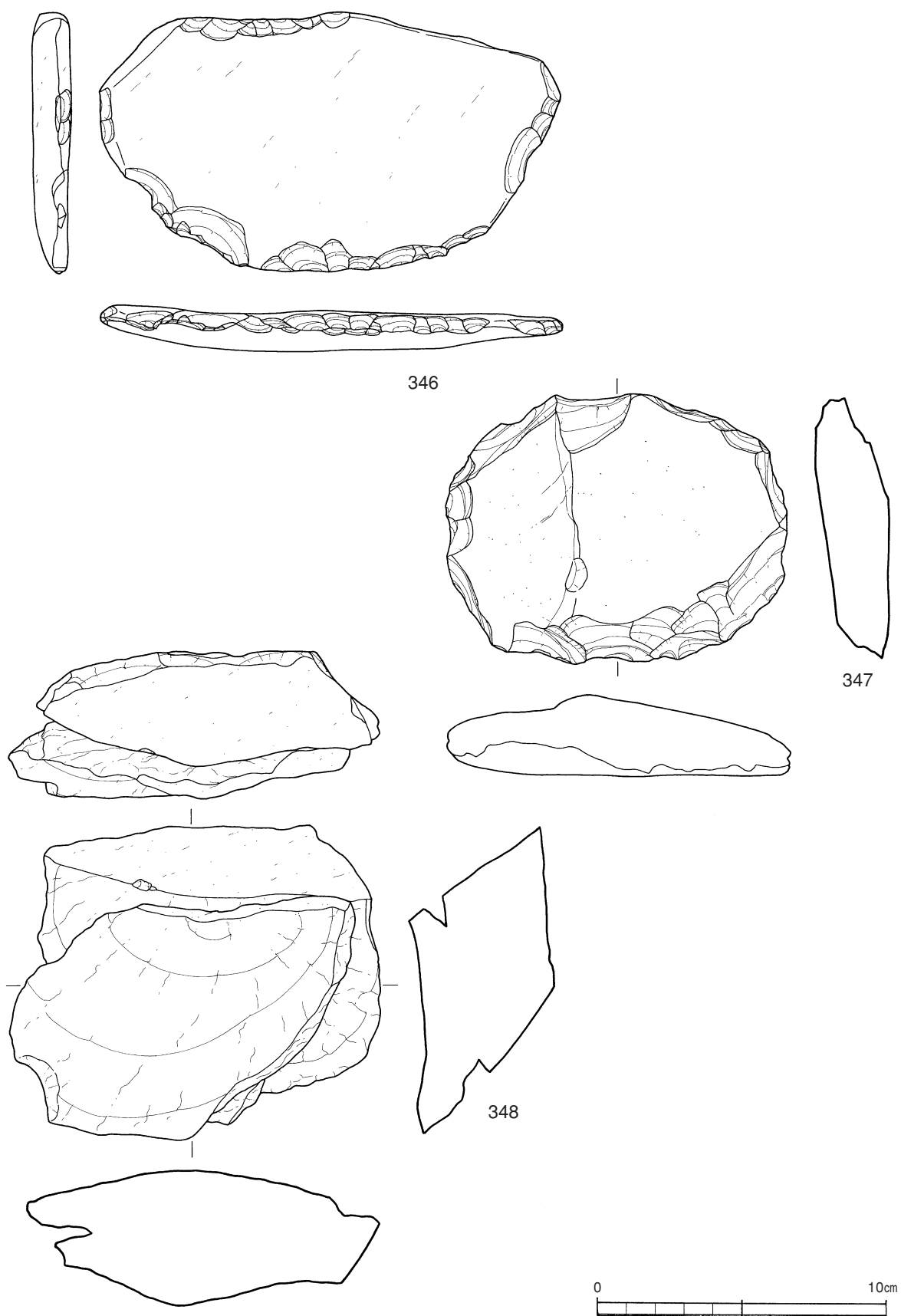
いる。安山斑岩製の332は両方、砂岩製の333・334は片方のみ使用している。

有溝砥石 (第88図 No.335)

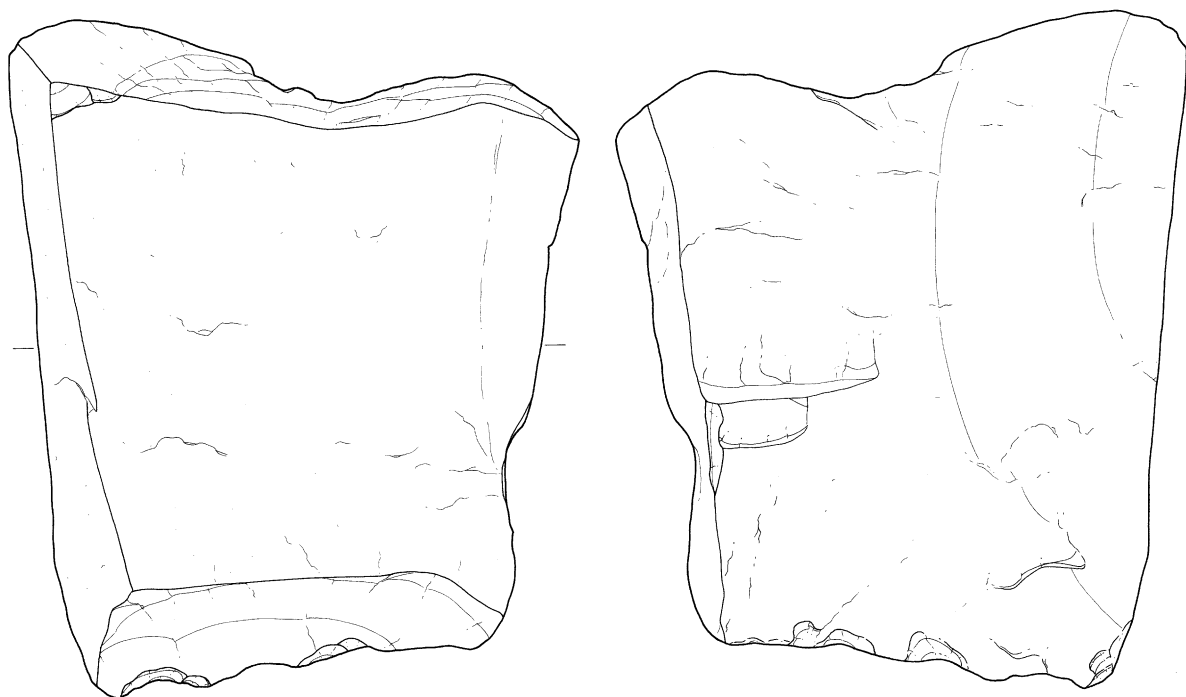
1点335が出土した。軟質の砂岩製で、作業面である溝の幅は3mmの細いものと2cmを超える広いものの2種類である。

石皿 (第89図 No.336～345)

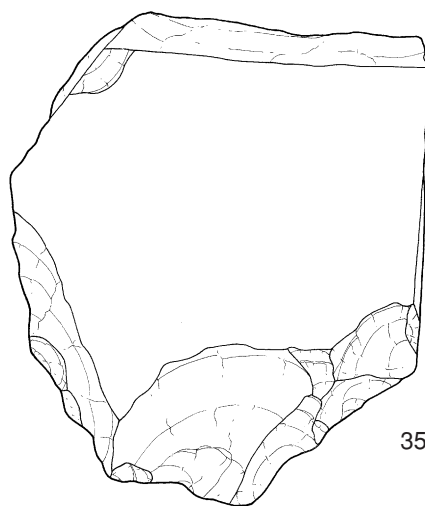
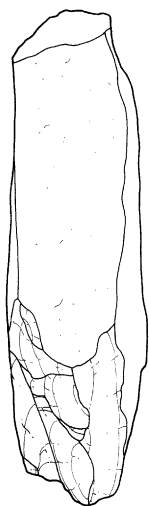
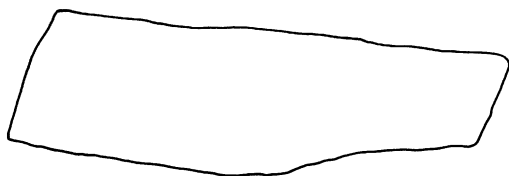
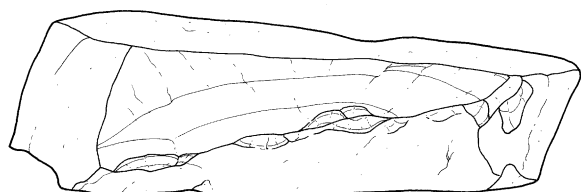
12点出土し、この内10点を図化した。いずれも砂岩製で、断面が長方形の板石を利用したものが多い。336～340は表裏2面を磨面に使用している。



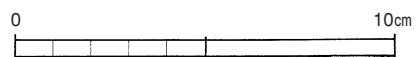
第90図 IV遺跡出土の石器 (7)



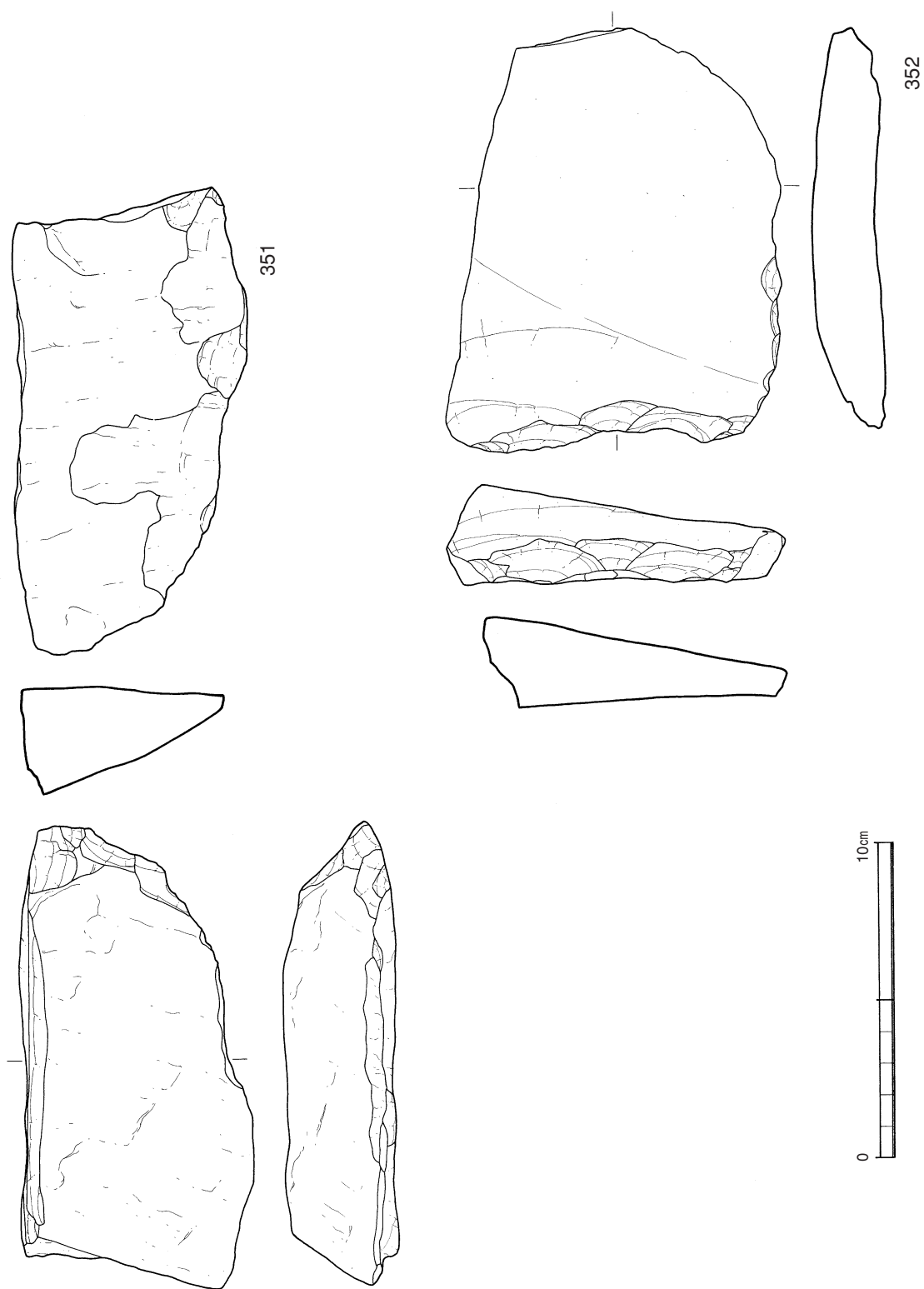
349



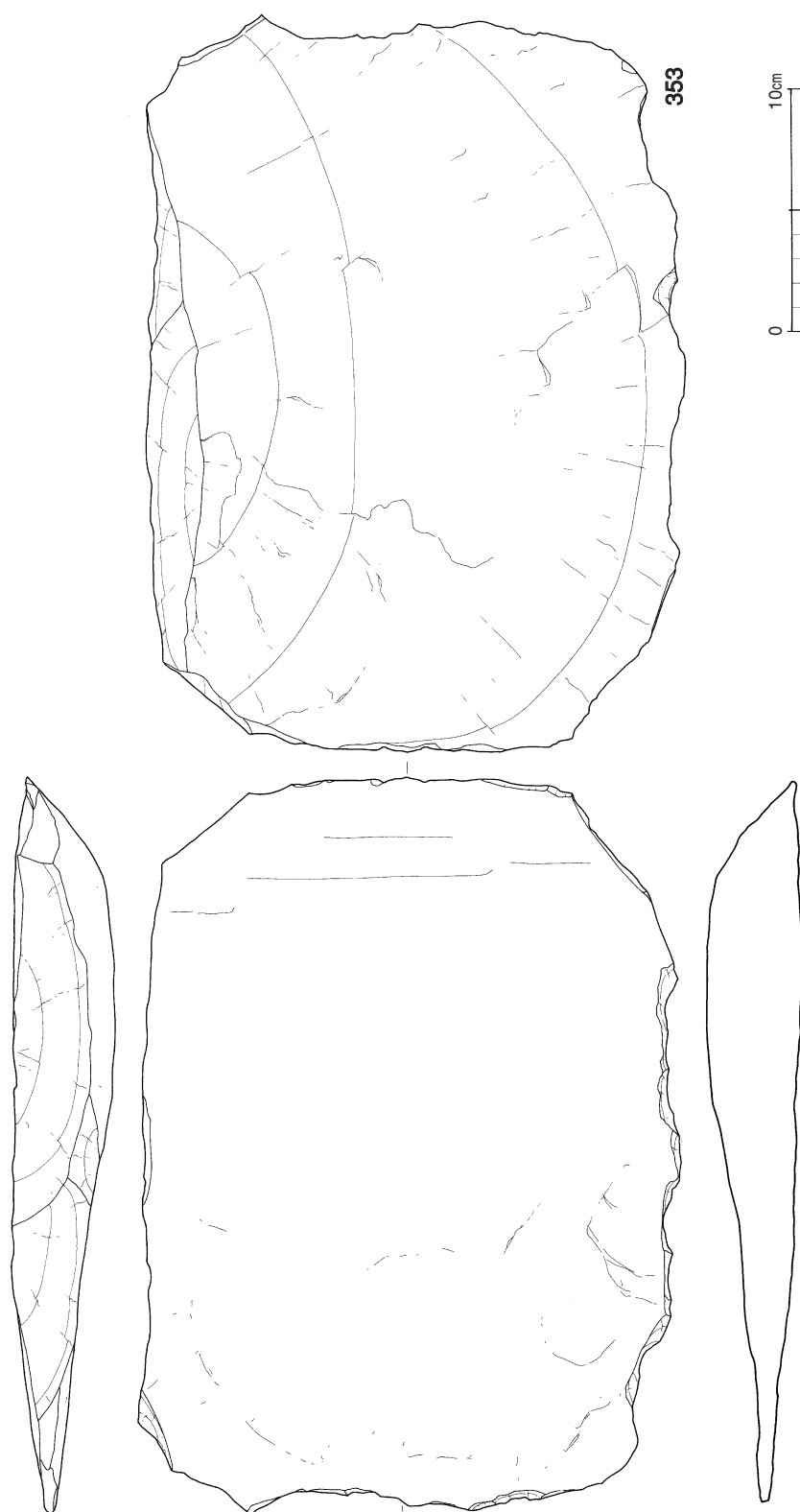
350



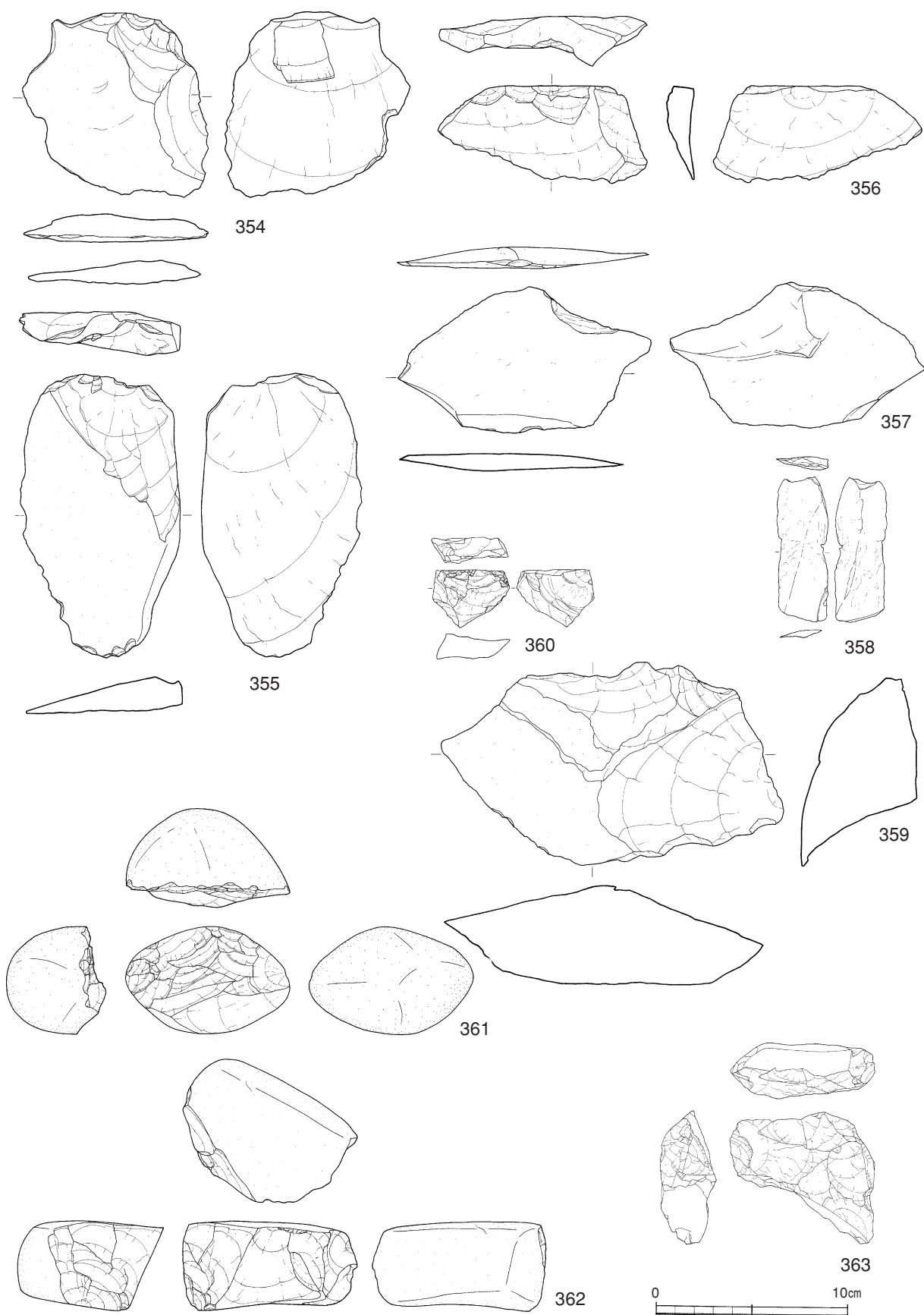
第91図 IV遺跡出土の石器 (8)



第92図 IV遺跡出土の石器 (9)



第93図 IV遺跡・出土の石器 (10)



第94図 IV遺跡出土の石器 (11)

341は1面のみの使用である。342～345は磨面に加えて敲打痕がある。総じて使用面があまり使い込まれず、大型のものは破損している状況から、刃器や礫器に転用されたものが多いと考えられる。

刃器（第90図 No.346）

1点346が出土した。薄手の粘板岩に調整にて刃部加工を施したものである。

礫器（第90～92図 No.347～352）

十数点出土し、この内6点を図化した。347は粘板岩製で、粗い剥離で刃部加工を施したもので、打製石斧の可能性がある。348～352は大型の砂岩製で、断面がほぼ扁平なもの（349・350）と、はっきりした逆三角形のもの（351・352）がある。いずれも粗い剥離で刃部加工を施したものである。なお348は接合資料である。

フレイク（剥片）（第93・94図 No.353～358）

出土した数十点の内6点を図化した。353は砂岩製の大型方形剥片である。石皿状であるが使用痕は見られない。354～356は砂岩製で、数回の打撃で生じたやや薄手の剥片である。357・358は薄手のホルンフェルス製で、風化が激しい。

石核（第94図 No.359～363）

5点出土した。359は砂岩製で、360は安山岩製である。どちらも、一方向から繰り返し打撃を受けている。361・362は硬質の砂岩製で、破断面は1つだけだが、剥離面が多数あり繰り返し剥片を作り出した様子が見られる。363はチャート製で、破損して半分になった表採品だが、剥離を繰り返した様子が観察される。

第4節 縄文時代前期以降（Ⅱa層）・その他の調査

Ⅱa層（縄文時代前期以降の遺物包含層）で検出された遺構は集石と土坑の2種類があり、土器が出土している。またⅤ層からも土器が出土しているが確実なものではないため一括して扱うことにした。

（1）遺構

① 集石（F-8区）

明確な掘り込みをもっているが、上部が耕作と削平で攪乱されていた。掘り込みの下部だけが残ったものであろう。直径10～15cm大の角礫と熱による破碎礫とで構成されている。礫は赤化したものが多く、もろくなっていた。

② 土坑

4基検出された。いずれもⅢ層上面で検出されている。

土坑1（D-10区）

長径86cm、短径78cm、深さ20cmで平面形はほぼ円形をなす。覆土にはアカホヤにみられる豆石が含まれる。

土坑2（D-7・8区）

長径104cm、短径88cm、深さ100cmで平面形は楕円形をなす。覆土は粘質土でアカホヤに見られる豆石が含まれる。

土坑3（E-8区）

長径100cm、短径82cm、深さ52cmで平面形は楕円形をなす。覆土は淡いベージュで、まだらに乳褐色土が入る。

土坑4（E-8区）

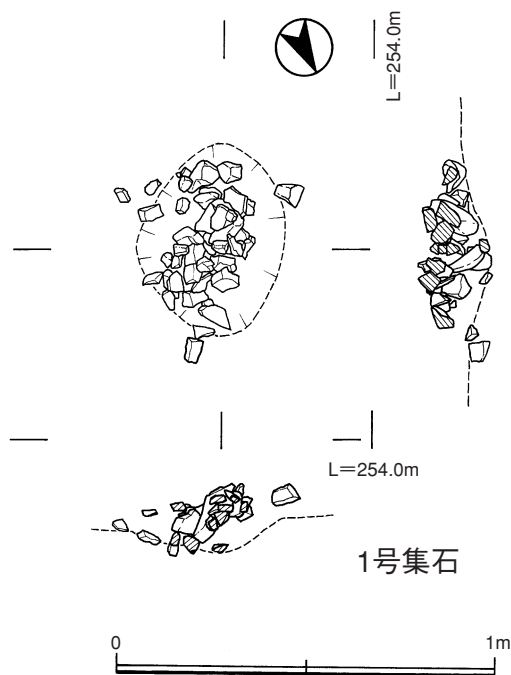
長径125cm、短径92cm、深さ68cmで平面形は円形をなす。覆土はアカホヤに見られる豆石が含まれる。

（2）遺物

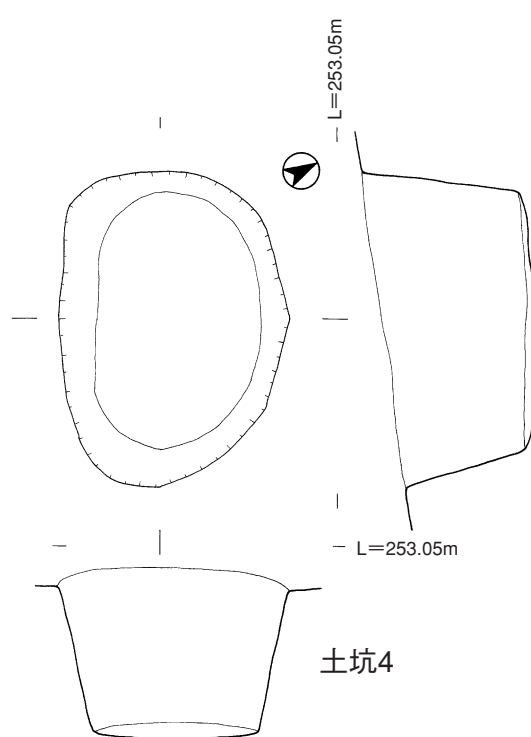
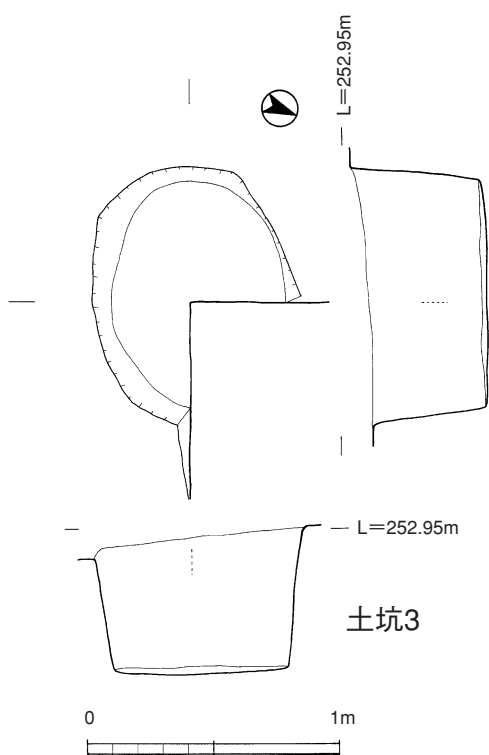
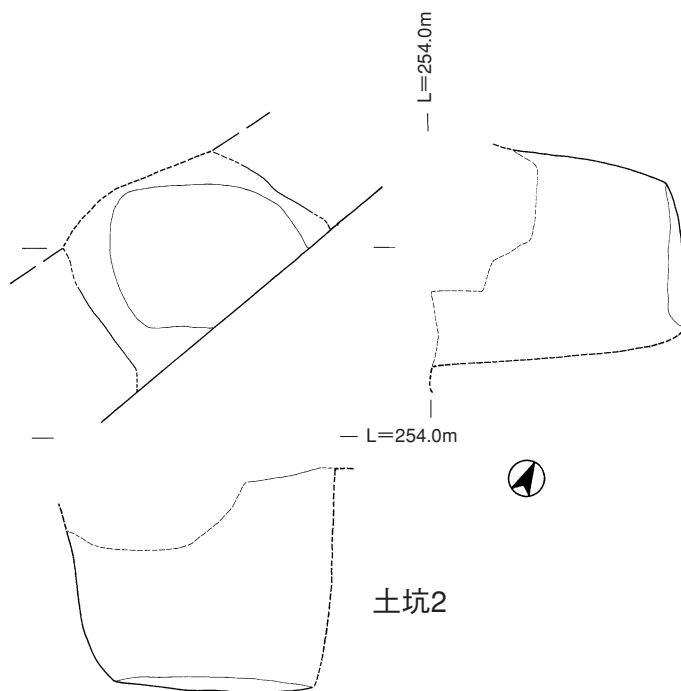
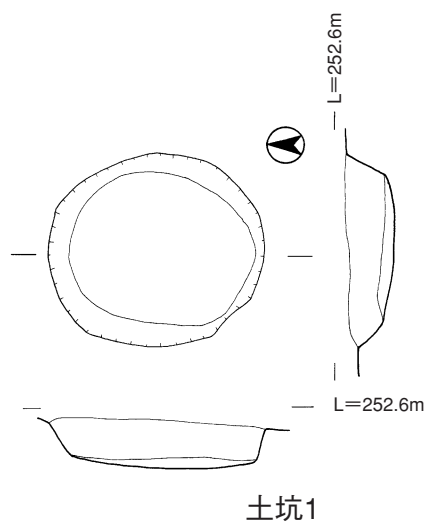
① 土器（第97図 No.364～366）

364はⅡ層より出土した土器である。縄文時代中期のもので第3群土器に属する。キャリパー状の器形を呈する。内外面ともに貝殻腹縁による条痕で器面調整が行われている。口縁部には棒状工具による幾何学的な沈線文を施すものである。

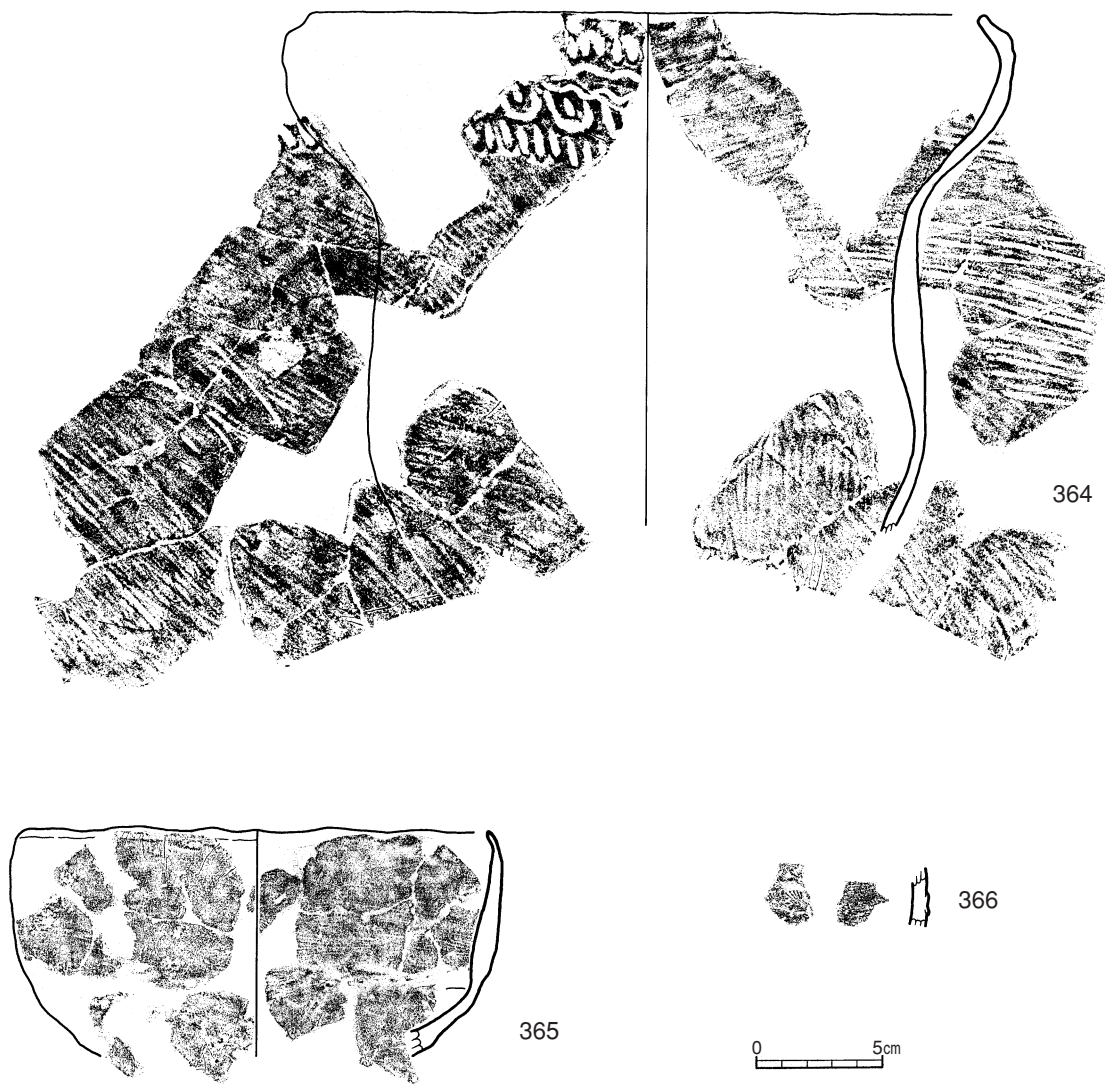
365・366はともに縄文時代草創期の遺物である可能性が高いが、確実でないためその他（13類土器）として一括した。365はⅤ層（三角山Ⅰ遺跡では縄文時代草創期遺物包含層）出土の土器である。「ハケナデ」によく似た丁寧な内面調整がみられる。その丁寧なつくりから一見すると草創期の遺物とは考えにくいものである。この時期に特徴的な隆帯文もみられず、他に類例のみられない土器であるため、ここでは草創期の可能性のある土器としておきたい。366は表土中から出土した隆帯文土器である。隆帯上には小さな巻き貝による押圧を施している。



第95図 Ⅳ遺跡縄文時代前期以降の集石



第96図 IV遺跡縄文時代前期以降の土坑



第97図 IV遺跡出土の土器（14）

第5節 小結

三角山Ⅳ遺跡の出土遺物は、縄文時代早期後半のものが中心である。7類土器（撚糸文系の塞ノ神式土器－塞ノ神A式系）、8類土器（貝殻文系の塞ノ神式土器－塞ノ神B式系）、9類土器（苫浜式土器）と、それに近い時期であるとみられる10類土器・11類土器が存在する。

13類土器は明確でない土器を一括したものである。この中には隆帯文土器に類似した土器が含まれているが、出土層・様相などが明確でなく、検討を要する。

調査および記録は行わなかったが、戦時中のものと考えられる濠が2基発見されている。Ⅱ遺跡では戦時中の遺構の可能性のある環状土坑が発見されているが、関連している可能性もある。

(単位cm)

(単位cm)

– 114 –

第13表 土器観察表 II 遺跡 (含 土師器・須恵器・陶器・ガラス器)

挿図番号	種類	型式等	器種	部位	地	出土区	層	遺物番号	標高	色調		胎土				焼成	備考		
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃			他	
14	1	8類土器	塞ノ神式B		口縁部	A	M-4	Ⅲ	773	255.43	明赤褐色	にぶい褐色	砂有		○	○	白色粒有	普	無文
	2	8類土器	塞ノ神式B		口縁部	A	M-4	Ⅲ	841	253.83	灰黄褐色	明赤褐色	砂有		○	○	白色粒有	良	無文
	3	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	口縁部	A	M-4	Ⅲ	763	255.45	にぶい褐色	明褐色	砂少		○	○	白色粒有	普	無文
	4	8類土器	塞ノ神式B		口縁部	A	M-4	Ⅲ	748	255.435	黒褐色	黒褐色	砂有		○	○	白色粒有	良	無文
	5	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	頸部	A	M-4	Ⅲ	698	255.375	赤褐色	褐灰色	砂有		○	○	白色粒有	普	無文
	6	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	頸部	A	M-4	Ⅲ	703	255.35	明褐色	にぶい褐色	砂有	○	○	○		普	無文
	7	8類土器	塞ノ神式B		口縁部	A	M-4	Ⅲ	398	255.437	にぶい黄褐色	明赤褐色	砂有		○	○	白色粒有	良	無文
	8	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	胴部	A	M-4	Ⅲ	688・689・712・714・724・744・747・749・764	255.265	にぶい褐色	明褐色	砂少	○	○	○	白色粒有	普	無文
	9	8類土器	塞ノ神式B		頸部	A	M-4	Ⅲ	774・837・838	255.34	にぶい褐色	明赤褐色	砂無	○	○		白色粒有	普	無文
	10	8類土器	塞ノ神式B		胴部	A	M-4	Ⅲ	620・750・761・839	255.475	黒褐色	明赤褐色	砂無	○	○		白色粒有	普	無文
	11	8類土器	塞ノ神式B		胴部	A	M-4	Ⅲ	380・389・659・1388	255.161	にぶい黄褐色	明赤褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	良	無文
	12	8類土器	塞ノ神式B		胴部	A	M-4	Ⅲ	384・385	255.621	にぶい黄褐色	明赤褐色	砂有		○		白色粒有	普	無文
	13	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	底部	A	M-4	Ⅲ	768	255.8	灰褐色	にぶい褐色	砂有	○	○		白色粒有	脆い	無文
	14	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	底部	A	M-4	Ⅲ	844	255.305	赤褐色	明赤褐色	砂無		○	○	白色粒有	普	無文
	15	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	底部	A	M-4	Ⅲ	715・717・752	255.52	にぶい褐色	にぶい褐色	砂無		○	○	白色粒有	普	無文
27	36	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	C	J-10	Ⅲ	423	250.414	橙色	にぶい黄橙色	砂多	○	○	○	白色粒有	普	貝片有
28	41	第3群	須恵器	甕	胴部	C	J-10	Ib			灰色	灰色	砂無	○	○		白色小石有	硬	同一個体
	42	第3群	須恵器	甕	底部	C	J-10	Ib			灰色	灰色～赤褐色	砂無	○	○		白色小石有	硬	同一個体
33	43	第3群	陶器		底部	D	N-5	I	近代環状土坑2		褐色	黒褐色	砂無				茶色釉薬	硬	明治以降?
	44		ビール瓶	瓶	底部	D	N-5	I	近代環状土坑2								キリンビール		戦時中
	45				胴部	D	N-5	I	近代環状土坑2		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂多	○	○	○	白色粒有	良	貝殻条痕
	46				胴部	D	N-5	I	近代環状土坑2		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂多	○	○	○	白色粒有	良	貝殻条痕
	47				胴部	D	N-5	I	近代環状土坑2		灰黄褐色	褐灰色	砂有	○			白色粒有	良	沈線文?
	48				胴部	D	N-5	I	近代環状土坑2		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂有		○	○	白色粒有	良	貝殻条痕
35	55	2類土器	吉田式	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1074	255.701	にぶい褐色	橙色	砂無	○	○	○	白色粒少	良	角筒?
	56	2類土器	吉田式	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1247	255.615	黄褐色	にぶい黄褐色	砂無	○		○		良	
	57	2類土器	吉田式	深鉢	底部	D	N-6	Ⅲ	1241・1242	255.74	赤黒色	にぶい赤褐色	砂無	○		○		良	
	58	4類土器	手向山式	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1000・1258・1351	255.93	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有 貝片有	良	撚糸文
	59	4類土器	手向山式	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1014・1015・1205	255.949	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有 貝片有	良	撚糸文
	60	4類土器	手向山式	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1020・1024	255.848	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有 貝片有	良	撚糸文
	61	5類土器	妙見式	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1101・1122・1123・1124・1127・1272・1273・1179	255.411	にぶい黄褐色	橙色	砂多	○	○		白色粒多	普	
	62	5類土器	妙見式	壺か	胴部	D	N-6	Ⅲ	1102・1103	255.564	赤褐色	明赤褐色	砂少	○	○		白色粒少	普	
	63	5類土器	妙見・天童ヶ尾	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1126	255.381	灰黄褐色	にぶい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	64	5類土器	平祐A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1110	255.554	明赤褐色	明赤褐色	砂少	○	○		白色粒有	普	
	65	6類土器	平祐C 前畑タイプ	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1130・1274	255.38	にぶい黄褐色	橙色	砂多	○	○		白色粒有 金雲母有	普	
	66	6類土器	平祐C 前畑タイプ	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1133	255.365	にぶい黄褐色	にぶい橙	砂少	○	○		白色粒有	普	
	67	6類土器	平祐A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1095・1096	255.665	赤褐色	赤褐色	砂少	○	○	○	白色粒少	普	
	68	6類土器	妙見・天童ヶ尾	深鉢	胴部	D	O-6	Ⅲ	1374	255.12	にぶい褐色	褐灰色	砂有	○	○		白色粒多	普	
36	69	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	D	N-4	Ⅲ	863・864・871・879・1225	255.996	橙色	にぶい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	地	出土区	層	遺物番号	標高	色調		胎土				焼成	備考	
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃			他
36	70	7類土器	塞ノ神無文	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1251	255.73	にぶい黄褐色	にぶい橙色	砂無	○	○	○	白色粒少	良	口縁刻目
	71	7類土器	塞ノ神無文	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1046・1078・1252	255.725	にぶい橙色	にぶい橙色	砂少	○	○	○	白色粒少	良	口縁刻目
	72	7類土器	塞ノ神無文	深鉢	口縁部	D	N-5	Ⅲ	935	255.861	橙色	橙色	砂無	○	○	○	白色粒少	良	口縁刻目
	73	7類土器	塞ノ神無文	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1041・1077	255.742	灰褐色	灰褐色	砂少	○	○	○	白色粒少	良	口縁刻目
	74	7類土器	塞ノ神無文	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1045・1049	255.744	にぶい黄褐色	にぶい橙色	砂少	○	○		白色粒有	良	口縁刻目
	75	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1379・1380	254.925	明赤褐色	橙色	砂有	○	○	○	白色粒多	普	
	76	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	D	N-5	Ⅲ	1213	255.75	黒褐色	にぶい黄褐色	砂少	○	○		白色粒少	良	口縁刻目
	77	7類土器	塞ノ神無文	深鉢	口縁部	D	N-6	Ⅲ	1263	255.07	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂少	○	○		白色粒少	良	口縁刻目
	78	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	970・1091・1185	255.6	黒褐色	橙色	砂多	○	○	○	白色粒有	良	
	79	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1040・1050・1099	255.731	橙色	橙色	砂少	○	○	○	白色粒有	良	
	80	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1039・1050	255.846	橙色	橙色	砂少	○	○	○	白色粒少	良	
	81	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-4	Ⅲ	868	255.991	褐灰色	にぶい黄褐色	砂無	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	82	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	O-6	Ⅲ	1377	254.91	暗オリーブ褐色	にぶい黄褐色	砂多	○	○		白色粒有	良	
	83	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1036	255.675	橙色	橙色	砂少	○	○	○	白色粒有	良	
	84	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-4	Ⅲ	876	255.922	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂無	○	○		白色粒有	やや脆い	
	85	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	底部付近	D	N-6	Ⅲ	1034・1287	255.68	橙色	橙色	砂極少	○	○	○	白色粒少	良	
	86	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	底部	D	N-4	Ⅲ	867	255.964	橙色	灰黄褐色	砂無	○	○		白色粒有	やや脆い	
	87	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1249	254.59	暗オリーブ褐色	明黄褐色	砂多		○	○	白色粒少	良	
	88	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1090	255.705	明赤褐色	橙色	砂少	○	○		白色粒有	普	
37	89	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	口縁部	D	N-5	Ⅲ	962・1344	255.81	褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	90	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	口縁部	D	N-5	Ⅲ	1231	255.78	褐灰色	にぶい褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	普	
	91	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-6	Ⅲ	1371	255.775	灰黄褐色	にぶい橙色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	92	8類土器	塞ノ神式B		頸部	D	N-5	Ⅲ	893・894	255.975	にぶい褐色	褐灰色	砂多 小石有	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	普	
	93	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	892・914	256	にぶい褐色	褐灰色	砂有 小石有	○	○	○	白色粒有	普	
	94	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-6	Ⅲ	1156	255.281	赤褐色	暗褐色	砂多	○	○	○	白色粒多	やや脆い	
	95	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	912・961	255.865	にぶい褐色	にぶい褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	96	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	1358・1359	255.74	にぶい褐色	褐灰色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	97	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	897	255.985	にぶい褐色	褐灰色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	98	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	925	255.813	褐色	灰黄褐色	砂多	○	○	○	白色粒有	普	
	99	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	956・1192	255.893	にぶい褐色	褐灰色	砂多	○	○	○	白色粒有	普	
	100	8類土器	塞ノ神式B		胴部	D	N-5	Ⅲ	890・898・901	255.995	にぶい褐色	褐灰色	砂多	○	○	○	白色粒 黒曜石有	普	
	101	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	底部	D	N-6	Ⅲ	991	255.89	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	砂少	○	○	○	白色粒少	普	
	102	8類土器	塞ノ神式B	深鉢	底部	D	N-6	Ⅲ	1072	255.691	にぶい黄褐色	にぶい橙色	砂少	○	○	○	白色粒少	普	
	103	13類土器		深鉢	胴部	D	47 T	Ⅲ	555・560・584	255.538	褐色	黒褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	やや脆い	十字状突帯
	104	9類土器	苦浜式系	深鉢	胴部	D	N-6	Ⅲ	1151・1157	255.416	明褐灰色	にぶい褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
50	136	4類土器	手向山式	深鉢	胴部	E	P-6	Ⅲ	536・539	249.05	褐色	褐色	砂有	○	○	○	白色粒多	良	山形押型文
	137	4類土器	手向山式	深鉢	胴部	E	P-6	Ⅲ	540・549	249.28	にぶい褐色	褐色	砂有	○	○	○	白色粒多	良	山形押型文
	138	4類土器	手向山式	深鉢	胴部	E	P-6	Ⅲ	185	249.175	にぶい褐色	黒褐色	砂有	○	○	○	白色粒多	良	山形押型文
	139	5類土器	妙見式	深鉢	口縁部	E	Q-6	Ⅲ	219・221	249.815	灰黄褐色	にぶい黄色	砂少	○	○	○	白色粒少	やや脆い	
	140	5類土器	妙見式	深鉢	胴部	E	Q-6	Ⅲ	205・222	249.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	141	5類土器	妙見式	壺か	口唇部	E	Q-5	Ⅲ	253	249.605	暗褐色	灰褐色	砂有	○	○	○	白色粒有 金雲母有	普	

種図番号	種類	型式等	器種	部位	地	出土区	層	遺物番号	標高	色調		胎土				焼成	備考		
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃			他	
50	142	5類土器	妙見式	深鉢	胴部	E	Q-6	Ⅲ	211・213・214・218・436	249.755	にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂有 小石有	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	143	6類土器	平椀A	深鉢	口縁部	E	Q-6	Ⅲ	215	249.84	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	砂有	○	○		白色粒有	やや脆い	
	144	6類土器	平椀C 前畑タイプ	深鉢	口縁部	E	Q-6	Ⅲ	216・305	249.88	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂多	○	○		白色粒有 金雲母有	やや脆い	
	145	6類土器	平椀	深鉢	胴部	E	Q-6	Ⅲ	218・435	249.787	にぶい黄色	にぶい黄褐色	砂多	○	○		白色粒有 金雲母有	普	
	146	6類土器	平椀A	深鉢	胴部復元	E	P-6	Ⅲ	2・21・45・47・51・55・ 60・65・169・172・ 173・178・196・200・ 298・299・425・426・ 529・545・554・558	249.745	灰褐色	灰褐色	砂有 小石有	○	○	○	白色粒多	普	器形が7類 に似る
	147	6類土器	平椀	深鉢	胴部	E	Q-5	Ⅲ	237	249.52	オリーブ褐色	にぶい褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	平椀
51	148	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	E	Q-5・6	Ⅲ	210・226・230・235・ 237・304	249.695	黒褐色	にぶい黄褐色	砂多	○	○	○	白色粒多	普	刻み隆帯
	149	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	E	P-6	Ⅲ	296	250.25	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂有 小石少	○	○	○	白色粒有	やや脆い	刻み隆帯
	150	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	E	Q-5	Ⅲ	229	249.465	褐色	橙色	砂有	○	○		白色粒有	やや脆い	刻み隆帯
	151	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	口縁部	E	Q-5	Ⅲ	231・235・236・237	249.485	灰黄褐色	橙色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	152	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	頸部	E	P-5	Ⅲ	276	249.95	にぶい黄褐色	橙色	砂少	○	○	○	白色粒有	普	列点文
	153	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	E	P-6	Ⅲ	241・552	249.59	灰黄褐色	にぶい黄褐色	砂少	○	○	○	白色粒有	普	
	154	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	E	Q-5	Ⅲ	240	249.63	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	良	
	155	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	底部付近	E	Q-5	Ⅲ	247	249.735	にぶい黄褐色	にぶい橙	砂有 小石少	○	○	○	白色粒有	普	
	156	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	頸部	E	Q-5	Ⅲ	234	249.47	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂有	○	○		白色粒有	やや脆い	
	157	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	E	Q-5	Ⅲ	567	249.655	明黄褐色	明黄褐色	砂少		○		白色粒有	普	
	158	7類土器	塞ノ神式A	深鉢	胴部	E	Q-5	Ⅲ	243・568	249.65	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂有	○	○		白色粒有	普	
	159	7類土器	塞ノ神式A		底部	E	Q-6	Ⅲ	301	249.77	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	砂少	○	○		白色粒有	やや脆い	
	160	7類土器	塞ノ神式A		底部	E	Q-6	Ⅲ	215・218	249.77	暗灰黄色	暗灰黄色	砂有 小石少	○	○		白色粒有	普	
	161	7類土器	塞ノ神式A		底部	E	P-5	Ⅲ	259・275	249.98	にぶい黄褐色	にぶい橙	砂少	○	○		白色粒有	やや脆い	
	162	7類土器	塞ノ神式A		底部	E	P-5	Ⅲ	260	249.94	にぶい黄褐色	明赤褐色	砂少		○	○	白色粒有	やや脆い	
	163	7類土器	塞ノ神式A		底部	E	P-6	Ⅲ	534・535	248.97	褐灰色	にぶい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
52	164	8類土器	塞ノ神B	深鉢	完形復元	E	P-5・6	Ⅲ	6・30・33・36・37・38・ 40・41・52・58・59・ 61・62・63・67・70・ 73・75・76・80・81・ 82・84・85・88・89・ 91・92・94・95・98・ 99・100・101・102・ 103・104・105・106・ 108・109・110・111・ 112・113・115・118・ 125・130・140・141・ 142・143・144・145・ 148・149・151・152・ 153・160・161・170・ 171・176・179・180・ 183・184・189・263・ 264・267・269・270・ 274・278・282・284・ 286・287・289・293・ 294・295・297・308・ 423・424・439・446・ 447・449・450・452・ 484・556・557	249.882	灰黄褐色	灰黄褐色	砂多	○	○	○	白色粒有	普	
53	165	11類土器		深鉢	口縁部	E	P-6	Ⅲ	10	248.635	にぶい黄褐色	橙色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	166	11類土器		深鉢	復元	E	P-5・6	Ⅲ	1・9・11・13・14・15・ 20・22・23・24・25・ 26・27・31・32・34・ 42・43・46・48・49・ 50・53・57・64・66・ 68・71・74・87・96・ 120・121・122・124・ 126・127・128・131・ 132・134・135・137・ 138・146・147・150・ 155・156・157・159・ 163・166・167・168・ 174・175・177・181・ 265・266・271・272・ 278・283・285・291・ 420・427・428・429・ 430・437・451	249.82	褐灰色	橙色	砂多		○	○	白色粒有	普	
	167	13類土器		深鉢	胴部	E	Q-6	Ⅲ	507・512	248.66	にぶい赤褐色	赤褐色	砂少	○	○		白色粒有	普	
	168	13類土器			口縁部	E	P-6	Ⅲ	117	248.985	にぶい橙色	にぶい黄褐色	砂多 小石有		○		白色粒有	やや脆い	
58	208	第3群	土師器甕	甕	口縁部	E	J-11	表	一般		赤褐色	にぶい赤褐色	砂無 小石少	○	○	○		普	

Ⅲ 遺跡

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高	色調		胎土					焼成	備考
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃	他		
61	209	13類土器			胴部	B-2	Ⅲ	301・303・304	248.37	灰黄褐色	橙色	砂多 小石有	○	○	○	白色粒多	普	
	210	13類土器			胴部	B-2	Ⅲ	301・310・324	248.34	灰黄褐色	橙色	砂多 小石有		○	○	白色粒多	やや 脆い	
	211	13類土器			胴部	B-2	Ⅲ	307・343	248.345	灰褐色	橙色	砂有 小石少	○	○		黒曜石少	やや 脆い	
	212	13類土器			胴部	B-2	Ⅲ	329	248.32	灰褐色	橙色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	213	13類土器			底部	B-2	Ⅲ	328	248.34	灰褐色	しだい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	やや 脆い	
	214	13類土器			底部	B-2	Ⅲ	317	248.618	灰褐色	しだい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	やや 脆い	
	215	13類土器			底部	B-2	Ⅲ	314	248.142	灰褐色	しだい黄褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	やや 脆い	

Ⅳ 遺跡

挿図番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高	色調		胎土				焼成	備考		
									内面	外面	状態	石英	長石	角閃			他	
71	218	12類土器	塞ノ神Aa	深鉢	完形復元	D-9	Ⅲ	3・6・7・8・10・11・ 12・13・16・20	252.89	灰黄褐色	灰黄褐色	砂少	○	○	○	白色粒有	普	
72	219	8類土器	塞ノ神B	深鉢	完形復元	D・E-7	Ⅲ	155・446・466・470・ 471・472・474・475・ 477・478・479・480・ 481・483・971・972・ 973・974・977	253.71	にぶい黄褐色	橙色	砂多 小石有	○	○	○	白色粒有	普	年代分析 4
73	220	8類土器	塞ノ神B	深鉢	完形復元	F-7・8	Ⅲ	700・708・715・925・ 985・988	253.302	褐灰色	橙色	砂多	○	○	○	白色粒有	普	
74	221	8類土器	塞ノ神B	深鉢	完形復元	E-7・8 F-9	Ⅲ	161・431・439・443・ 444・446・449・451・ 456・460・461・464・ 465・518・524・538・ 540・542・622・707・ 774・775・779・785・ 786・789・793・794・ 806・810・814・815・ 816・817・818・819・ 822・824・826・834・ 836・839・842・857・ 862・866・904・956・ 962・965・967・981	253.565	にぶい褐色	にぶい褐色	砂多 小石有	○	○	○	白色粒有	普	
75	222	9類土器	苦浜	深鉢	完形復元	F-6・7	Ⅲ	197・214・218・255・ 256・258・259・260・ 261・262・263・264・ 265・266・267・268・ 272・273・275・277・ 278・282・285・286・ 293・294・298・300・ 301・302・303・306・ 307・308・313・345・ 600	253.925	褐灰色	灰黄褐色	砂多 小石有	○	○	○	白色粒有	普	年代分析 3
76	223	13類土器		深鉢	完形復元	F-8	Ⅲ	725・732	253.505	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	砂有 小石有	○	○	○	白色粒有	良	格子状刺突
77	224	10類土器	塞ノ神B	深鉢	完形復元	D-8 E-7・8 F-7・8	Ⅲ	106・441・508・515・ 525・526・527・529・ 530・532・737・795・ 798・827・828・851・ 853・955・987・990・ 992	253.28	褐灰色	にぶい橙色	砂多	○	○		白色粒有	普	年代分析 2
78	225	10類土器		深鉢	完形復元	F-7・	Ⅲ	604・714・724・725・ 726・740・741	253.54	灰褐色	にぶい黄橙色	砂多	○	○		白色粒有 黒曜石有	普	年代分析 1
79	226	7類土器	塞ノ神Aa	深鉢	口縁部	F-6	Ⅲ	193・194・195・ 271・299	254.39	橙色	橙色	砂有		○	○	白色粒有 黒曜石有	やや 脆い	
	227	8類土器	塞ノ神B	深鉢	口縁部	F-7・8	Ⅲ	541・575・580・581・ 583・590・601・733・ 738・739・746・772・ 928・940・942・944	253.52	明赤褐色	にぶい褐色	砂有	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	良	
	228	8類土器	塞ノ神B	深鉢	口縁部	E-6・7	Ⅲ	118・119・120・486	254.61	にぶい黄橙色	褐灰色	砂極少		○	○	白色粒多 黒曜石有	やや 脆い	
	229	8類土器	塞ノ神B	深鉢	頸部	D-10	Ⅲ	29	252.56	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	砂多 小石有	○	○	○	白色粒有	普	
	230	8類土器	塞ノ神B	深鉢	口縁部	F-8	Ⅲ	736	253.63	赤褐色	明赤褐色	砂少	○	○		白色粒多	普	
	231	8類土器	塞ノ神B	深鉢	口縁部	F-8	Ⅲ	735	253.625	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	砂極少	○	○	○	白色粒少	良	
	232	8類土器	塞ノ神B	深鉢	口縁部	F-7	Ⅲ	613・650	253.315	にぶい褐色	にぶい褐色	砂少	○	○		白色粒有	普	
	233	8類土器	塞ノ神B	深鉢	頸部	F-7	Ⅲ	559	253.005	にぶい褐色	にぶい褐色	砂少		○	○	白色粒少	良	補修孔有
	234	8類土器	塞ノ神B	深鉢	頸部	F-8	Ⅲ	441	253.86	明赤褐色	褐灰色	砂少 小石有	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	良	
	235	8類土器	塞ノ神B		口縁部	F-7	Ⅲ	949	253.735	灰褐色	にぶい褐色	砂少 小石有	○	○	○	白色粒有	良	大きめの 小石

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高	色調		状態	胎土				焼成	備考
										内面	外面		石英	長石	角閃	他		
79	236	8類土器	塞ノ神B		口縁部	E-7	Ⅲ	963	253.86	にぶい赤褐色	黒褐色	砂少	○	○	○	白色粒少	良	
	237	8類土器	塞ノ神B		口縁部	E-6・7	Ⅲ	420・421・422・970	254.12	褐灰色	にぶい黄橙色	砂多	○	○		白色粒多	普	
	238	8類土器	塞ノ神B		口縁部	F-6	Ⅲ	295・296	254	褐灰色	褐灰色	砂少	○	○		白色粒有	良	無文
	239	8類土器	塞ノ神B		口縁部	F-7	Ⅲ	535	253.915	褐灰色	にぶい黄橙色	砂多	○	○		白色粒有 金雲母有	普	
	240	8類土器	塞ノ神B	深鉢	胴部	D-10	Ⅲ	32	252.7	褐灰色	橙色	砂多 小石有		○		白色粒有 金雲母有	良	
	241	8類土器	塞ノ神B		口縁部	F-7	Ⅲ	521	253.945	褐灰色	にぶい黄橙色	砂多	○	○		白色粒有	普	
80	242	8類土器	塞ノ神B	深鉢	底部	D-8	Ⅲ	70・90・99・100・102・103・104	252.83	にぶい褐色	にぶい褐色	砂有 小石有	○	○	○	白色粒有	普	
	243	8類土器	塞ノ神B	深鉢	底部	D-10	Ⅲ	28・32・38・42	252.66	褐灰色	橙色	砂少	○	○	○	白色粒多	普	
	244	8類土器	塞ノ神B	深鉢	底部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	普	
	245	8類土器	塞ノ神B	深鉢	底部	E・F-7	Ⅲ	416・424・425・427・560・568・582・584・586・597・708・932・952	253.115	にぶい褐色	にぶい褐色	砂有	○	○	○	白色粒有	良	
	246	8類土器	塞ノ神B	深鉢	底部	D-10	Ⅲ	31	252.565	にぶい褐色	褐灰色	砂少		○	○	白色粒少	普	
81	247	9類土器	苦浜式	深鉢	口縁部	D-8	Ⅲ	68・70・82・84・87・88・92・96・一般	252.58	にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂有 小石有		○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	248	9類土器	苦浜式	深鉢	口縁部	D-8	Ⅲ	64・65・70・74・93・94・95・184・185	252.82	にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂有 小石有	○	○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	249	9類土器	苦浜式		胴部	D-8	Ⅲ	70・184・一般	252.6	にぶい褐色	にぶい褐色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	
	250	9類土器	苦浜式		胴部	D-8	Ⅲ	70・71	252.72	にぶい黄褐色	褐灰色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	251	9類土器	苦浜式		胴部	D-8	Ⅲ	70	252.72	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂極少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	252	9類土器	苦浜式		胴部	D-8	Ⅲ	70	252.72	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	253	9類土器	苦浜式		胴部	D-8	Ⅲ	67	252.615	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂少	○	○	○	白色粒有	普	
82	254	9類土器	苦浜式		口縁部	F-6	Ⅲ	216・218・219・221	253.615	灰褐色	橙色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	普	
	255	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多		○	○	白色粒有	普	
	256	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	褐灰色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	257	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	普	
	258	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多		○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	259	9類土器	苦浜式		胴部	D-8・9	Ⅲ	一般		にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	普	
	260	9類土器	苦浜式		胴部	F-6・7	Ⅲ	223・239・243・964	253.6	灰褐色	橙色	砂有	○	○	○	白色粒有	普	
	261	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多		○	○	白色粒有 黒曜石有	普	
	262	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	普	大きめの小石
	263	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	普	炭化物付着
	264	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多		○	○	白色粒有	普	
	265	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石少	○	○	○	白色粒有	普	
	266	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有 黒曜石有	普	
	267	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石有		○	○	白色粒有 黒曜石有	普	突帯
	268	9類土器	苦浜式		胴部	D-9	Ⅲ	2(一般)	252.3	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂多 小石多		○	○	白色粒有 黒曜石有	普	突帯
	269	9類土器	苦浜式		胴部	F-6	Ⅲ	203	253.62	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂有 小石少	○	○		白色粒有	普	
	270	9類土器	苦浜式		胴部	F-6	Ⅲ	229・230	253.44	にぶい赤褐色	橙色	砂少	○	○		白色粒有	普	
83	271	その他			口縁部	F-7	Ⅲ	695・935	252.7	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂有	○	○		白色粒有	普	
	272	その他			口縁部	F-7	Ⅲ	598・953	253.425	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	
	273	その他			口縁部	F-8	Ⅲ	938	253.36	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	
	274	その他			口縁部	F-7	Ⅲ	632	253.085	にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂多 小石多	○	○	○	白色粒有	普	
	275	その他			口縁部	F-7	Ⅲ	615	253.485	褐灰色	褐灰色	砂少 小石有		○	○	白色粒有	普	

挿図	番号	種類	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高	色調		胎土				焼成	備考	
										内面	外面	状態	石英	長石	角閃			他
83	276	その他			胴部	E-10	Ⅲ	52	251.66	橙色	橙色	砂極少	○	○		白色粒極少	良	
	277	その他			胴部	F-7	Ⅲ	556・924	252.7	褐灰色	橙色	砂有小石有		○	○	白色粒有	やや脆い	
	278	その他			胴部	E-10	Ⅲ	50	251.78	にぶい、橙色 ～ 黒褐色	橙色	砂極少	○	○		白色粒有	普	炭化物付着
	279	その他			胴部	F-7	Ⅲ	545・555・711・ 一般	252.91	にぶい、黄褐色 ～ 黒褐色	にぶい、橙色	砂有小石少	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	280	実測№9 13類土器		深鉢	底部	F-8	Ⅲ	516・517・560・561・ 571・572・710・717・ 719・720・723・724・ 725・729・730・950	253.04	にぶい、黄褐色 ～ 黒褐色	にぶい、黄褐色	砂多 小石多		○	○	白色粒有	普	
	281	13類土器			底部	E-8	Ⅲ	713・809	252.545	褐灰色	褐灰色	砂少 小石少	○	○		白色粒有	やや脆い	
	282	13類土器			底部	F-7	Ⅲ	556	252.7	にぶい、橙色	にぶい、橙色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	283	13類土器			底部	D-10	Ⅲ	30	252.565	褐灰色	にぶい、黄褐色	砂極少	○	○	○	白色粒有	普	
	284	13類土器			底部	D-10	Ⅲ	57	252.915	褐灰色	にぶい、橙色	砂少 小石少	○	○	○	白色粒有	普	
	285	13類土器			底部	F-7	Ⅲ	987	253.11	明赤褐色	明赤褐色	砂有				白色粒有	普	
97	286	13類土器			底部	D-10	Ⅲ	41	252.655	にぶい、黄褐色	にぶい、橙色	砂少	○	○	○	白色粒有	普	
	287	13類土器			底部	E-9	Ⅲ	912	251.26	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	砂少	○	○	○	白色粒有	やや脆い	
	364	第3群	春日式	復元	口縁・胴部	D-6	IIa	157・158・160・161・ 164・165・167・169・ 170・171・172・175・ 178・180・181・182・ 183・194	254.1	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色 ～ 黒褐色	砂少	○	○	○	白色粒少	普	炭化物付着
	365	第1群	無文	鉢	口縁・胴部	D-8	V	一般		赤褐色	赤褐色	砂無	○	○		白色粒少	良	ハケナデ状
	366	第1群	隆帯文		口縁近辺	F-7		表面採集		明褐色	明褐色	砂無	○	○	○	白色粒有	普	貝殻押圧

第14表 石器観察表 II 遺跡 (含 土製品)

挿図	番号	器種等	胎	出土区	層	遺物番号	標高	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
15	16	打製石鏃	A	M-4	Ⅲ	677	255.67	ホルンフェルス	2.9	1.15	0.15	0.99	縁辺部に調整痕
	17	打製石鏃	A	M-4	Ⅲ	361	253.375	安山岩	1.8	1.7	0.5	0.76	先端欠2カ所
	18	打製石鏃	A	M-4	Ⅲ	641	255.51	安山岩	2.7	1.65	0.5	1.13	片方脚部先端欠
	19	磨製石鏃	A	M-4	Ⅲ	601	258.809	頁岩	3.48	1.13	0.55	1.87	穿孔跡2カ所で破損
	20	磨石	A	M-4	Ⅲ	404	255.634	砂岩	11	9.7	5	685	磨面2・7トレンチ出土
	21	有溝砥石	A	M-4	Ⅲ	352	255.45	軟質砂岩	15.8	20	6.5	1635	溝8条・7トレンチ出土
	22	礫器	A	M-3	Ⅲ	973	255.741	砂岩	10.3	15.1	3.6	565	
17	23	有溝砥石	B	K-9	Ⅲ	集1-42	254.035	軟質砂岩	7.5	7.6	4.8	275	溝1条・1号集石内
	24	耳栓状土製品	B	K-9	Ⅲ	857	253.406	土製品	径5.9	高5.3	中央0.35	39	円形・一部破損
	25	礫器	B	K-9	Ⅲ	配石1-9	253.67	砂岩	15.7	13	3.8	820	刃部使用痕・稜線摩耗
21	26	打製石鏃	B	L-9	Ⅲ	779	253.325	姫島産黒曜石	2.35	1.65	0.45	1.11	明瞭な挟り
	27	打製石鏃	B	L-9	Ⅲ	784	253.63	針尾産黒曜石	3.4	2.8	1.05	7.58	調整中に放棄
	28	磨製石鏃	B	L-9	Ⅲ	781	253.305	頁岩	3.1	1.5	0.25	1.62	側縁に調整痕・先端破損
22	29	使用痕剥片	B	L-9	Ⅲ	785	253.99	砂岩	9.1	11	3.8	306	刃部1辺に使用痕
	30	使用痕剥片	B	L-8	Ⅲ	794	254.28	砂岩	7	5	2.2	63	刃部周辺に使用痕
	31	砥石	B	L-8	Ⅲ	812	254.465	砂岩	7.9	3.3	1.6	76.68	3面が磨面
	32	有溝砥石	B	L-9	Ⅲ	787	254.295	軟質砂岩	5.9	3.7	4.2	80	溝2条・2面が磨面
	33	礫器	B	L-9	Ⅲ	776	254.17	砂岩	10.1	12.1	3.9	410	調整により刃部形成・他2片有
	34	フレイク	B	L-8	Ⅲ	807	254.229	砂岩	8.6	7.1	4	160	自然面に磨痕・石皿破砕片?
	35	フレイク	B	盛土中		一般		針尾産黒曜石	2.5	2.95	0.7	5.49	

挿図	番号	器種等	魁	出土区	層	遺物番号	標高	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
27	37	使用痕剥片	C	J-10	Ⅲ	1318	251.036	砂岩	6.7	6.6	3	150	刃部に欠けと摩耗
	38	フレイク	C	J-10	Ⅲ	1310	252.534	砂岩	7.6	8.8	3.3	155	使用された可能性あり
	39	フレイク	C	J-10	Ⅲ	1327	251.345	砂岩	8.2	10.8	3.7	250	使用された可能性あり
	40	フレイク	C	J-10	Ⅲ	1317	251.149	砂岩	10	7.9	1	125	
34	49	磨石(凹石)	D	N-5	I	近代62		砂岩	11.7	11.9	5.25	1010	磨面2・敲打9・破損・近代環状土坑内出土
	50	磨石(凹石)	D	N-5	I	近代65		砂岩	7.3	5.5	3.55	194.54	磨面1・敲打4・近代環状土坑内出土
	51	磨石	D	N-5	I	近代66		砂岩	12.5	8.9	4.3	740	磨面2・敲打2(側面)・近代環状土坑内出土
	52	磨石	D	N-5	I	近代67		砂岩	13.3	9.5	4.8	920	磨面2・敲打1(側面)・近代環状土坑内出土
	53	磨石	D	N-5	I	近代68		砂岩	5.7	5.4	4.5	206.9	全体研磨・敲打5・近代環状土坑内出土
	54	磨石	D	N-5	I	近代69		砂岩	7.9	7.2	2.55	225.53	磨面2・破損・近代環状土坑内出土
38	105	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	558	255.669	安山岩	1.83	1.6	0.5	0.99	正三角形・38トレンチ出土
	106	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	1383	256.855	粘板岩	2.55	1.25	0.4	1.29	僧帽状
	107	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	986	255.83	頁岩	2.15	1.39	0.45	0.83	木の葉形・抉り
	108	打製石鏃	D	N-5	Ⅲ	1206	255.665	安山岩	1.75	1.9	0.45	1.01	下部先端欠・頭部調整後破棄
	109	打製石鏃	D	N-5	Ⅲ	946	255.721	姫島産黒曜石	1.93	1.35	0.75	1.77	下部先端欠・厚い
	110	打製石鏃	D	N-5	Ⅲ	932	255.858	姫島産黒曜石	2.55	1.55	0.33	0.75	鍼形・抉り
	111	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	1079	255.717	安山岩	1.9	1.35	0.4	0.72	鋸状調整・先端欠3カ所
	112	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	1238	255.685	チャート	1.95	0.9	0.5	0.82	下半分欠
	113	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	1165	255.355	安山岩	0.8	1.57	0.4	0.3	脚部片側残存
	114	打製石鏃	D	N-5	Ⅲ	1194	255.715	安山岩	1.75	1.65	0.4	0.61	脚部先端欠・抉り
	115	打製石鏃	D	N-6	Ⅲ	1183	255.74	桑ノ木津留産黒曜石	2.4	1.8	0.35	0.79	脚部片側欠
	116	打製石鏃	D	造成土	Ⅲ	一般		針尾産黒曜石	2.8	2.33	0.55	3.32	木の葉形・脚部欠2カ所
	117	磨製石鏃	D	N-6	Ⅲ	1300	255.55	頁岩	1.25	1.21	0.15	0.31	中央で破損
39	118	磨製石斧	D	N-6	Ⅲ	1292	255.195	ホルンフェルス	6.55	10.3	1.45	130.27	刃部使用痕
	119	磨製石斧	D	N-6	Ⅲ	1118	255.467	ホルンフェルス	14	6.3	2.7	323.05	頭部と刃部先端破損
40	120	磨石	D	N-5	Ⅲ	940	255.798	砂岩	9.8	8	5.55	590	磨面2・敲打痕3
	121	磨石	D	N-6	Ⅲ	1369	255.64	砂岩	8.7	7.8	5.1	470	磨面2
	122	磨石	D	N-5	Ⅲ	882	255.99	砂岩	8.1	5	4.4	249.31	磨面2・敲打痕1
	123	磨石	D	N-6	Ⅲ	1246	255.64	砂岩	13.1	9.2	4.25	790	磨面2
	124	有溝砥石	D	N-6	Ⅲ	570	255.665	軟質砂岩	6.3	4.5	3.1	77	溝5条・38トレンチ出土
41	125	使用痕剥片	D	N-6	Ⅲ	1271	255.82	砂岩	10.9	7.1	2.2	98	石匙状・刃部に使用痕
	126	剥片石器	D	N-5	Ⅲ	1189	255.765	砂岩	6.4	9.6	2	100	刃部調整1辺
	127	礫器	D	N-5	Ⅲ	1188	255.795	砂岩	14.1	10.9	5.4	715	刃部調整1辺
42	128	礫器	D	N-6	Ⅲ	1018	255.874	砂岩	14.8	11.8	5.2	860	刃部調整1辺
43	129	フレイク	D	N-5	Ⅲ	941	255.798	ホルンフェルス	4.7	7.05	0.9	28.3	風化が激しい
	130	フレイク	D	N-6	Ⅲ	1375	255.23	ホルンフェルス	3	4.7	1	11.58	打撃痕2
	131	フレイク	D	N-6	Ⅲ	1289	255.13	安山岩	2.15	2.6	0.45	2.23	
	132	フレイク	D	N-4	Ⅲ	1234	256.09	安山岩	2.6	3.95	0.95	12.32	打撃痕8
	133	フレイク	D	N-6	Ⅲ	1237	255.62	チャート	1.75	2.6	0.8	2.87	
	134	フレイク	D	N-6	Ⅲ	1286	256.065	安山岩	2.4	3.2	0.95	8.22	楔状
	135	石核	D	N-6	Ⅲ	1368	255.696	針尾産黒曜石	5.05	4.75	2.1	43.16	楔状・1面はほぼ自然面

挿図	番号	器種等	地	出土区	層	遺物番号	標高	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
54	169	打製石鏃	E	P-5	Ⅲ	374	249.755	ホルンフェルス	1.55	1	0.2	0.21	先端欠・風化が激しい
	170	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	342	249.8	姫島産黒曜石	1.45	1.37	0.25	0.35	片側脚部先端欠・挟り
	171	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	422	249.777	頁岩	2.2	1.2	0.15	0.72	僧帽状
	172	打製石鏃	E	Q-5	Ⅲ	357	249.23	ホルンフェルス	1.85	2	0.25	0.91	先端と下部欠・風化激しい
	173	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	333	250.01	姫島産黒曜石	1.85	1.7	0.45	1.02	端部破損2カ所・角形挟り
	174	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	422	249.777	安山岩	1.7	1.79	0.45	0.96	頭部欠・角形挟り
	175	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	555	247.865	針尾産黒曜石	0.55	1.3	0.35	0.16	下部片側残存
	176	打製石鏃	E	Q-6	Ⅲ	417	247.795	ホルンフェルス	2.45	1.2	0.2	0.54	中央で破損・風化激しい
	177	打製石鏃	E	Q-5	Ⅲ	364	249.36	姫島産黒曜石	2.05	1.52	0.42	0.67	鍬形・下部先端欠
	178	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	330	250.11	姫島産黒曜石	2.13	1.45	0.4	0.63	鋸歯状調整・脚部先端欠
	179	打製石鏃	E	P-6	Ⅲ	523	248.91	安山岩	2.78	1.75	0.7	2.21	厚手・鋸歯状調整
	180	打製石鏃	E	P-5	Ⅲ	391	250.1	ホルンフェルス	1.65	1.65	0.45	1.27	調整中放棄・風化激しい
55	181	石匙	E	P-6	Ⅲ	321	249.65	ホルンフェルス	3.08	3.7	0.4	2.9	横型・風化激しい
	182	石匙	E	P-5	Ⅲ	388	250.025	ホルンフェルス	2.8	4.27	0.5	6.09	横型・風化激しい・片側欠
	183	石匙	E	Q-6	Ⅲ	343	249.76	ホルンフェルス	5.65	8.7	0.95	26.76	横型・切り出しナイフ状
	184	石匙	E	P-5	Ⅲ	416	249.44	ホルンフェルス	4.55	7	0.7	14.55	横型・風化激しい・折損
	185	石製垂飾品	E	P-6	Ⅲ	550	249.54	頁岩	4.3	3.9	2	47.99	中央に四角穴・全体摩耗
56	186	磨石	E	P-5	Ⅲ	405	250.145	砂岩	11	10.1	5.15	835	磨面2・側面に敲打痕
	187	磨石	E	P-6	Ⅲ	317	248.33	砂岩	12.9	10.4	6.55	1195	磨面2・43トレンチ出土
	188	磨石	E	P-5	Ⅲ	598	351.025	砂岩	10.8	8.8	4.75	680	磨面2・43トレンチ出土
	189	磨石	E	Q-5	Ⅲ	366	249.435	砂岩	7.5	4.8	3.7	176.32	磨面2
	190	磨石	E	Q-5	Ⅲ	349	249.735	砂岩	11.2	10.5	4.75	800	磨面1・敲打7
	191	磨石	E	P-6	Ⅲ	314	249.27	砂岩	10	9.7	5.6	770	磨面1・敲打7(内側面2)
	192	磨石	E	P-5	Ⅲ	415	249.33	砂岩	9.7	9.3	5.6	690	磨面1・敲打1(側面)
	193	磨石	E	Q-5	Ⅲ	355	249.51	砂岩	9.6	7.7	4.81	485	磨面1・敲打2(側面)
	194	磨石	E	P-5	Ⅲ	413	253.248	砂岩	6.4	4.4	4.2	137.61	磨面2・破損
57	195	敲石	E	P-6	Ⅲ	337	249.875	砂岩	8.5	4.4	3.2	177.3	両頭部に敲打痕
	196	敲石	E	P-6	Ⅲ	470	250.437	砂岩	8.9	8.8	6.45	684	敲打痕7
58	197	礫器	E	P-6	Ⅲ	335	249.72	砂岩	8	5.5	2.9	99	刃部調整痕1辺
	198	使用痕剥片	E	Q-5	Ⅲ	465	249.472	砂岩	8.3	6.8	2.4	139	刃部に使用痕
	199	フレイク	E	P-6	Ⅲ	440	250.042	砂岩	5.8	8.4	2.6	75.03	石匙状
	200	フレイク	E	Q-6	Ⅲ	504	247.96	チャート	1.9	2.5	0.55	1.93	
	201	フレイク	E	P-5	Ⅲ	401	250.075	安山岩	2	2	0.8	1.76	三角錐状
	202	フレイク	E	Q-5	Ⅲ	369	249.47	ホルンフェルス	7.75	2.8	0.7	16.41	風化が激しい
	203	フレイク	E	P-6	Ⅲ	315	250.215	ホルンフェルス	4.5	1.8	0.45	3.17	風化が激しい
	204	フレイク	E	P-5	Ⅲ	455	249.847	砂岩	6.4	4.7	0.9	25	
	205	フレイク	E	P-5	Ⅲ	460	249.817	砂岩	6.7	11.1	2.2	165	
	206	フレイク	E	P-6	Ⅲ	469	250.252	砂岩	11.6	20.3	8.7	970	
	207	石核	E	P-6	Ⅲ	432	249.832	砂岩	18.5	14.7	8.7	2000	磨面1・打撃2

Ⅲ 遺跡

挿図	番号	器種等	出土区	層	遺物番号	標高	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
61	216	フレイク	B-2	Ⅲ	341	248.495	砂岩	19.9	7.6	4.9	550	縦長の剥片
	217	礫器	B-2	Ⅲ	340	248.495	砂岩	18.1	12.3	45.5	752	刃部調整2辺

Ⅳ 遺跡

挿図	番号	器種等	出土区	層	遺物番号	標高	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
84	288	打製石鏃	F-8	Ⅲ	753	253.7	姫島産黒曜石	1.18	1	0.4	0.26	脚部片側破損
	289	打製石鏃	F-6	Ⅲ	315	253.87	針尾産黒曜石	2	1.85	0.7	1.62	全面片側に1次剥離面
	290	打製石鏃	D-9	Ⅲ	23	252.75	チャート	2.05	1.55	0.3	0.9	裏面に剥片時の面を残す
	291	打製石鏃	E-9	Ⅲ	913	252.72	チャート	1.75	1.75	0.3	0.72	先端破損
	292	打製石鏃	D-7	Ⅲ	156	253.98	黒曜石	2.03	1.38	0.4	0.81	脚部片側に未調整部分
	293	打製石鏃	D-8	Ⅲ	111	252.875	針尾産黒曜石	2.45	1.95	0.65	2.16	木の葉形・挟り
	294	打製石鏃	F-8	Ⅲ	747	252.9	安山岩	1.45	1.33	0.35	0.45	先端等破損
	295	打製石鏃	E-9	Ⅲ	495	251.08	チャート	1.65	1.35	0.35	0.48	脚部片側破損・6トレンチ出土
	296	打製石鏃	F-7	Ⅲ	704	252.63	針尾産黒曜石	2.03	1.63	0.4	0.7	脚部片側破損
	297	打製石鏃	D-8	Ⅲ	110	253.17	針尾産黒曜石	2.8	2.1	0.5	1.96	先端破損
	298	打製石鏃	E-7	Ⅲ	506	253.905	姫島産黒曜石	2.63	1.4	0.33	0.71	脚部片側破損
	299	打製石鏃	表採		一般		安山岩	3.3	2.17	0.45	1.9	
	300	打製石鏃	E-6	Ⅲ	133	253.99	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.55	1.39	未完成品
	301	打製石鏃	F-8	Ⅲ	751	253.4	ホルンフェルス	1.9	1.58	0.45	1.09	縁辺部に調整痕・風化激しい
	302	打製石鏃	E-10	Ⅲ	55	251.56	ホルンフェルス	2.75	1.35	0.32	0.92	縁辺部に調整痕・風化激しい
	303	磨製石鏃	E-7	Ⅲ	501	254.445	頁岩	2.18	1.83	0.25	1.15	先端破損・全面研磨
	304	磨製石鏃	E-8	Ⅲ	870	252.485	頁岩	2.18	2.49	0.32	2.03	先端破損・全面研磨
85	305	石匙	E-7	Ⅲ	497	254.465	安山岩	2.9	4.48	0.7	7.25	横型・つまみ部で破損
	306	石匙	E-8	Ⅲ	445	253.426	安山岩	3.8	5.1	0.8	13.12	2トレンチ出土
	307	スクレイパー	E-8	Ⅲ	446	253.87	安山岩	3	3.85	0.45	4.63	2トレンチ出土
	308	スクレイパー	E-7	Ⅲ	637	253.14	安山岩	2	2	0.7	2.59	一部に自然面が残る
	309	使用痕剥片	E-8	Ⅲ	868	253.855	針尾産黒曜石	2.4	1.3	1	1.13	一部に自然面が残る・刃部使用痕
	310	使用痕剥片	D-8	Ⅲ	112	252.095	上牛鼻産黒曜石	2.2	2.55	0.7	2.81	一部に自然面が残る・刃部使用痕
86	311	打製石斧	F-7	Ⅲ	463	254.209	ホルンフェルス	16.8	6.55	2	330.24	先端破損・3トレンチ出土
	312	打製石斧	F-8	Ⅲ	481	251.89	ホルンフェルス	12.1	4.2	2.05	165	先端中央破損・1トレンチ出土
	313	磨製石斧	F-7	Ⅲ	640	253.595	チャート	12.1	5.99	1.95	191.14	部分磨製・先端片側破損
	314	磨製石斧	F-6	Ⅲ	318	254.37	ホルンフェルス	6.1	3	1.15	29.12	先端片側破損
	315	磨製石斧	D-9	Ⅲ	18あ	252.84	頁岩	7.7	2.8	1	31.17	先端破損・全面研磨
87	316	磨石	E-6	Ⅲ	127	245.5	砂岩	9.2	8.8	5.1	570	磨面2
	317	磨石	D-9	Ⅲ	21	252.725	砂岩	8.5	7.9	3.95	380	磨面2
	318	磨石	F-8	Ⅲ	756	253.43	砂岩	9.6	8.6	4.05	470	磨面2
	319	磨石	D-9	Ⅲ	25	252.585	砂岩	7.8	7.6	4.1	334.67	磨面2
	320	磨石	D-10	Ⅲ	56	252.65	砂岩	10.9	10.1	4.15	645	磨面1
	321	磨石	E-7	Ⅲ	491	254.19	砂岩	10.3	9.2	4.1	541	磨面1・側面に敲打痕3
	322	磨石	E-7	Ⅲ	490	254.23	砂岩	12	9.7	4.25	710	磨面1
	323	磨石	F-7	Ⅲ	579	252.86	砂岩	8	7.2	5.1	393	磨面1・敲打痕2

挿図	番号	器種等	出土区	層	遺物番号	標高	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
88	324	磨石	E-7	Ⅲ	488	254.565	砂岩	9.5	7.6	5.4	520	磨面2・敲打痕6
	325	磨石	E-7	Ⅲ	507	254	砂岩	9.5	6.3	4.6	314.56	磨面1・敲打痕
	326	磨石	F-7	Ⅲ	993	252.77	砂岩	9.7	8.5	5.95	700	磨面2
	327	磨石	F-6	Ⅲ	316	254.055	砂岩	10.7	8.5	4.7	610	磨面1・敲打痕6
	328	磨石(凹石)	表採		一般		砂岩	7	5.5	4.1	208.44	敲打痕8(内側面6)
	329	磨石	F-8	Ⅲ	757	253.37	砂岩	10.8	10.9	5.9	750	磨面2・側面に敲打痕2
	330	磨石	E-6	Ⅲ	135	254.105	砂岩	5.6	7.4	2.2	145	磨面1・側面に敲打痕・破損
	331	磨石	D-8	Ⅲ	113	252.39	砂岩	5.7	12.7	3.15	303.1	磨面2・破損
	332	ハンマー	F-7	Ⅲ	643	253.835	安山斑岩	6.3	3.8	2.7	100.21	両頭に敲打痕
	333	ハンマー	D-8	Ⅲ	116	252.605	砂岩	8.6	2.9	1	61.98	片方に敲打痕
	334	ハンマー	D-9	Ⅲ	19・20	252.655	砂岩	8.3	4.4	1.8	99.99	片方に敲打痕
	335	有溝砥石	F-6	Ⅲ	326	254.84	軟質砂岩	12.1	17.5	3.8	240	溝2条
89	336	石皿	D-9	Ⅲ	22	252.705	砂岩	26.3	30	9.1	9000	磨面2
	337	石皿	E-7	Ⅲ	355	254.34	砂岩	25.7	20	7.7	5000	磨面2・台石か・折損
	338	石皿	E-7	Ⅲ	386	254.525	砂岩	48.5	47	7.8	19800	破損
	339	石皿	E-10	Ⅲ	54	251.425	砂岩	19.3	30.2	4.9	3100	磨面2・破損
	340	石皿	F-7	Ⅲ	667	254.19	砂岩	18.4	29	12.9	6100	磨面3
	341	石皿	D-8	Ⅲ	114	252.57	砂岩	14.7	21.1	9.9	3700	磨面1
	342	石皿	F-7	Ⅲ	703	254.115	砂岩	29.8	22.5	12.1	11100	磨面2・敲打痕1
	343	石皿	F-7	Ⅲ	675	253.665	砂岩	19.5	28	9	8900	敲打痕のある磨凹面1
	344	石皿	D-8	Ⅲ	115	252.39	砂岩	13.7	26.6	6.8	3200	磨面2・敲打痕1
	345	石皿	表採		一般		砂岩	34.5	30	9.5	9700	敲打痕のある磨面1
90	346	刃器	F-7	Ⅲ	999	253.855	粘板岩	9	16	1.2	236.52	
	347	礫器	F-8	Ⅲ	755	253.5	粘板岩	9.1	1.8	2.7	335	打製石斧の可能性あり
	348	礫器	F-6	Ⅲ	319・332	254.86	砂岩	9.7	12.8	5.3	630	接合資料・1方向から複数打撃
91	349	礫器	F-6	Ⅲ	328	254.8	砂岩	18	14.5	5.1	1360	
	350	礫器	F-7	Ⅲ	997	253.39	砂岩	10.8	2.5	3.5	700	
92	351	礫器	D-9	Ⅲ	27	252.425	砂岩	7.5	13.6	3.7	410	刃部つぶれ
	352	礫器	F-8	Ⅲ	759	253.475	砂岩	12.3	10	3.1	500	刃部調整1辺
93	353	フレイク	E-7	Ⅲ	505	254.44	砂岩	22.4	29.8	4.9	3400	大型剥片
94	354	フレイク	E-6	Ⅲ	140	254.07	砂岩	11.4	8.6	1.5	107	木の葉形
	355	フレイク	F-6	Ⅲ	314	253.58	砂岩	14.1	8.4	2.5	200	縦長剥片
	356	フレイク	E-6	Ⅲ	146・147	253.84	砂岩	5.1	10.9	1.4	75	
	357	フレイク	E-6	Ⅲ	130	254.48	ホルンフェルス	7.6	13.3	1	88.8	横長剥片
	358	フレイク	E-6	Ⅲ	128・129	254.49	ホルンフェルス	7.6	2.6	0.5	11.03	横長剥片
	359	石核	E-6	Ⅲ	141・148	253.905	砂岩	12.4	12.2	6	840	1方向から繰り返し打撃
	360	石核	D-8	Ⅲ	117	252.64	安山岩	3	4	1.2	16.75	打撃痕数カ所
	361	石核	F-8	Ⅲ	752	253.15	硬質砂岩	5.4	8.3	4.8	280	破断面を複数回打撃
	362	石核	E-7	Ⅲ	1000	253.785	硬質砂岩	6.4	9	4.6	400	自然面を残す
	363	石核	表採		一般		チャート	5.4	8.65	2.7	127.55	半分破損

第Ⅷ章 科学分析結果

以下は平成8・10・14年度に行った分析の結果である。なお、ここには、あわせて行った三角山Ⅰ遺跡の分析結果も含まれている。

平成8年度 鹿児島県、三角山遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．三角山遺跡における放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試料名	遺跡名・地点・層準	種類	前処理・調整	定法
No.1	三角山Ⅰ，2号集石	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.2	三角山Ⅰ，3号集石	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.2	三角山Ⅰ，4号集石	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.4	三角山Ⅰ，5号集石	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.5	三角山Ⅰ，6号集石	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.6	三角山Ⅰ，7号集石	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.7	三角山Ⅰ，F-5区Ⅴ層	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
No.8	三角山Ⅱ，A地点土坑1	炭化材 (ヤブツバキ)	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法

2. 測定結果

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 交点（1 σ ）	測定No. (Beta-)
No.1	8810±70	-23.7	8830±70	BC7930 (BC7970～7885) (BC7795～7730)	105037
No.2	6870±60	-23.6	6890±60	BC5710 (BC5760～5670)	105038
No.3	6790±60	-24.2	6800±60	BC5635 (BC5690～5600)	105039
No.4	11080±80	-24.0	11100±80	—	105040
No.5	11030±80	-24.6	11040±80	—	105041
No.6	11110±80	-23.4	11140±80	—	105042
No.7	12040±80	-20.3	12120±80	—	105043
No.8	930±40	-23.9	950±40	AD1040 (AD1025～1165)	105044

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

Ⅱ．三角山遺跡から出土した炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、三角山Ⅱ遺跡のA地点土坑1から出土した炭化材である。これは、放射性炭素年代測定（第Ⅰ章）に用いられた試料No.8と同一物である。

2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

分析の結果、ツバキ科のヤブツバキ（*Camellia japonica* L.）と同定された。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。照葉樹林の主要構成樹木の一つである。材は強靱で、耐朽性強く、建築、器具、彫刻などに用いられる。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

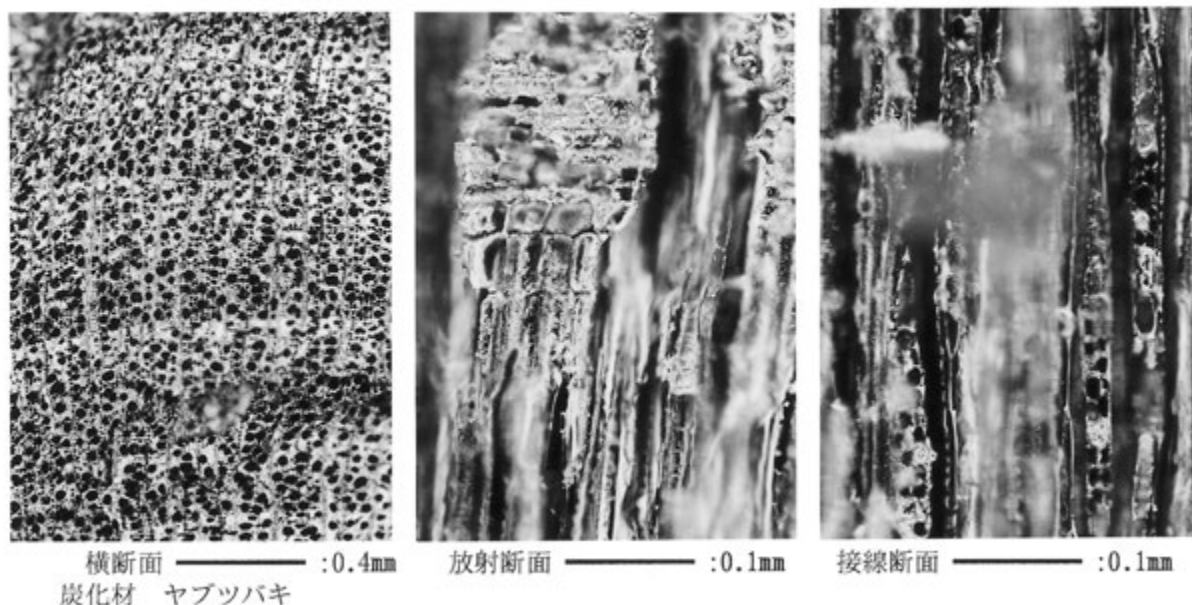
放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，P.49-100.

三角山遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



平成10年度 鹿児島県，三角山遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	遺跡名・地点・層準・遺構	種類	前処理・調整	測定法
N _a 1	三角山 I F-5 V 土器	土器付着煤	酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 2	三角山 I B-8 V 土器	土器付着煤	酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 3	三角山 I D-12 V 集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 4	三角山 I D-13 III 1号集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 5	三角山 I III 6号集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 6	三角山 I G-11 III 集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 7	三角山 II P-6 III 3号集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 8	三角山 II P-6 III 7号集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
N _a 9	三角山 I II a 3号集石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代	測定N _a (Beta-)
N _a 1	12230±50	-23.2	12260±50	交点：—	125372
N _a 2	11820±50	-26.4	11800±50	交点：—	125373
N _a 3	11000±120	-25.4	10990±120	交点：—	125374
N _a 4	8790±80	-25.2	8790±80	交点：BC7910 1 σ：BC7955～7695 2 σ：BC8000～7580	125375
N _a 5	8730±80	-25.8	8720±80	交点：BC7700 1 σ：BC7915～7590 2 σ：BC7960～7545	125376
N _a 6	8740±70	-23.0	8770±70	交点：BC7895,7775,7745 1 σ：BC7940～7685 2 σ：BC7975～7580	125377
N _a 7	9420±100	-26.3	9400±100	交点：BC8425 1 σ：BC8555～8355 2 σ：BC8915～8780,BC8685～8160	125378
N _a 8	8900±80	-25.9	8890±80	交点：BC7965 1 σ：BC8010～7920 2 σ：BC8055～7855,BC7830～7710	125379
N _a 9	4640±70	-27.5	4600±70	交点：BC3355 1 σ：BC3490～3455,BC3375～3325 2 σ：BC3520～3090	125380

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。

1σ （68%確率）・ 2σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

平成14年度 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

1. はじめに

三角山遺跡より検出された土器付着物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、三角山Ⅳ遺跡から出土した土器より採取した付着物4点である。

これら試料は、酸洗浄を施して不純物を除去、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値 -25.0% ）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。ただし、PLD-2012の試料については、試料の量が少なかったことから、同位体分別効果の補正を行っていないため、 $\delta^{13}\text{CPDB}$ 値は -25.0% と等価であり、同位体分別効果による測定誤差を補正していない ^{14}C 年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{CPDB}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-2010 (AMS)	土器付着物 No.1 三角山Ⅳ遺跡 (No.225)	-25.6	6745 ± 35	cal BC 5660 cal BC 5650 cal BC 5640	cal BC 5705 - 5685 (25.4%) cal BC 5665 - 5625 (74.6%)
PLD-2011 (AMS)	土器付着物 No.2 三角山Ⅳ遺跡 (No.224)	-23.9	7000 ± 35	cal BC 5870 cal BC 5860 cal BC 5840	cal BC 5970 - 5955 (13.9%) cal BC 5895 - 5840 (67.1%) cal BC 5825 - 5810 (13.8%)
PLD-2012 (AMS)	土器付着物 No.3 三角山Ⅳ遺跡 (No.222)	—	6570 ± 50	cal BC 5510 cal BC 5500 cal BC 5485	cal BC 5605 - 5590 (13.9%) cal BC 5555 - 5545 (10.5%) cal BC 5540 - 5480 (75.6%)
PLD-2013 (AMS)	土器付着物 No.4 三角山Ⅳ遺跡 (No.219)	-22.8	7450 ± 35	cal BC 6365 cal BC 6340 cal BC 6310 cal BC 6295 cal BC 6260	cal BC 6380 - 6330 (49.7%) cal BC 6320 - 6285 (31.1%) cal BC 6270 - 6250 (19.2%)



13類土器（223）出土状況（F－8区）

第四章 まとめ

三角山遺跡群は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡に分けられている。本報告では、このうちのⅡ・Ⅲ・Ⅳ遺跡について報告する。なお、個々については各章の小結において既にまとめを行っているので、ここでは特徴的なものと総括的な事柄について述べたい。

第1節 三角山Ⅱ遺跡

三角山Ⅱ遺跡は本来は広範囲にわたる遺跡であったと考えられるが、畑地の造成や地下げなどにより残存状況は虫食い状であった。そのため、わずかに残存していたA・B・C・D・Eの5地点について調査が行われた。ここでは各遺構・遺物について述べる。

1 土坑

土坑は縄文時代早期のもの2基、前期のもの2基が検出された。円形のもの1基、長方形のもの3基である。いずれも性格や目的が明らかではないが、特にA地点の長方形のものは逆茂木痕がみられることから落とし穴であると考えられる。他の3基の土坑も貯蔵穴などの可能性も否定できないが、ここでは落とし穴の可能性が高いものとした。

2 集石

集石は、縄文時代早期のもの18基が検出された。掘り込みは、ないものと顕著なものがある。特にE地点では、集中して11基の集石が検出されている。ここでは、出土状況から早期中葉から後葉の土器（4類～8類）（第49図）と、集石（第44図）が重なる状態を読みとることができる。このことから、集石と土器は同時に使用された可能性が高いといえよう。

3 近代の環状土坑

環状土坑は、A地点とD地点において1基ずつ計2基検出された。この2基の埋土は、同様であるのでほぼ同時期に埋まったものであるとみられる。特に、三角山Ⅱ遺跡D地点の環状土坑が注目される。この環状土坑は、ビール瓶の銘（右側から書かれている）により昭和12年以降から終戦の頃までのものであることが判明した^(註)。

この2つの遺構は、形状から太平洋戦争中に計画施工された旧日本軍関連施設跡の可能性があり、対空用の施設跡の可能性がもっとも高い。

しかしながら、具体的には探照灯か対空砲のどちらであるかは不明である。十六番在住の池田八千代氏（昭和5【1930】年生）によると、戦時中十八番には兵舎があり、高射砲を作りかけていたが途中で終戦になったとのことである。おそらくは施設は未完成に終わり、終戦後に埋め立てられたものと思われる。

これらの遺構に類似するものとして、上野原第10地

点（第3工区）で発見されている探照灯がある。

4 土器

A地点では7類・8類土器に類似した無文土器が、C地点では、遺物は縄文時代の7類土器（塞ノ神A式）および古代の須恵器が、D地点では縄文時代早期前葉から後葉までの土器（2類【吉田式】・4類～8類【手向山・妙見～塞ノ神式の時期におさまるもの】）が出土した。E地点では縄文時代早期中葉から後葉の土器（4類～8類・11類）が出土した。

7類には、上野原遺跡第10地点で微隆帯文土器とされたものを含んでいるが、資料数が少ないため7類として一括した。

また、11類土器に類似した土器は、南種子町横峯遺跡などでも出土している。この土器は縄文時代早期後葉の土器の変遷を考えるうえで重要である。

また、岩本式に類似した土器（167）が出土している。これは三角山P地点出土の円筒形土器に類似するものである。底部内面と胴部下半外面の器面調整が類似する。

出土状況図（第12・30・49図）は、それぞれA・D・E地点について示したものである。これらの図から土器の分布域について次の特徴が認められた。

A地点では、土器が一箇所に集中して出土している様子がみられる。

D地点では、第6類（平椀式）土器と第7類（塞ノ神A式）土器の分布域がほぼ重なる。

E地点では、おおまかには、第6類（平椀式）土器の分布域と、第7類（塞ノ神A式）土器と第8類（塞ノ神B式）土器の分布域が重なるところの2つのエリアにわけられる。

以上の結果は、土器の年代観にも影響する可能性があるが、ここでは事実のみを示すにとどめたい。

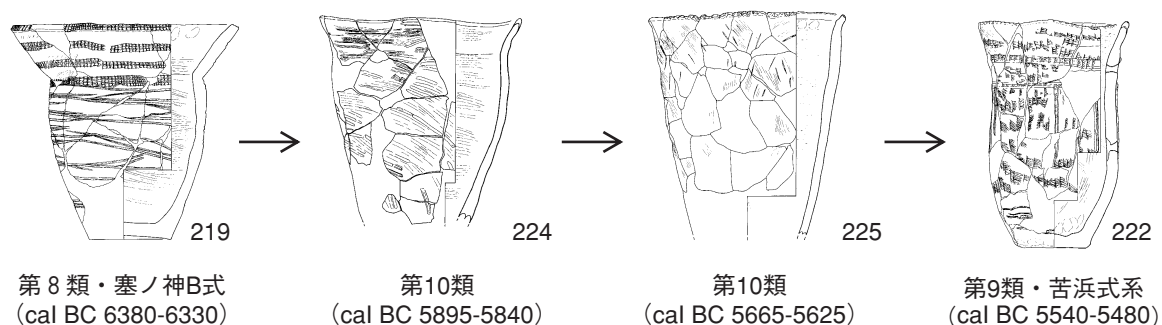
5 石器（円グラフ参照）

石器の構成（明確な石器のみ取り上げたもの）を円グラフでみると、D地点では狩猟具（石鏃）が調理具（磨石）の倍以上の割合なのに対して、E地点では狩猟具（石鏃）と調理具（磨石・敲石など）の割合にはあまり差がない。単純に石器構成でみた場合には、D地点とE地点は性格が異なる可能性がある。

6 特殊遺物

B地点では耳栓状土製品が、E地点では頁岩製円盤形穿孔石製品が出土している。円盤形穿孔石製品については類似の資料が榎田下遺跡（鹿屋市）・上野原遺跡第10地点で出土している。これらは石製垂飾品の可能性が考えられている。

隣接遺跡である三角山Ⅰ遺跡でも、縄文時代早期後半の珧状耳飾が出土している。これらの資料は縄文時代早期の装飾品（もしくはその可能性の高いもの）を



第98図 年代分析の結果を参考とした土器の変遷

考えるうえで重要な資料であるといえよう。

第2節 三角山Ⅲ遺跡

遺構は発見されなかったが、40点の遺物が出土した。遺物は、縄文時代早期の条痕文土器と砂岩製の礫石器である。この遺跡では尾根部分に小範囲に遺物がみられるのみであった。

第3節 三角山Ⅳ遺跡

1 土坑

土坑は、Ⅱa層（縄文時代前期以降）において4基検出された。上面観が楕円形を呈するものである。底部に逆茂木痕などはみられなかった。

2 集石

集石は縄文時代早期のもの8基、前期以降のものが1基検出された。掘り込みのないものと顕著なものがある。

早期は掘り込みが顕著なものが3基みられた。礫の密度は1基を除き比較的密である。

前期以降のものは伴伴遺物がないので時期は確定できない。掘り込みは顕著で礫も比較的密にまとまっているが、他と比較すると小規模である。

3 土器

土器は、縄文時代早期後半が主体である。塞ノ神A式系・塞ノ神B式系（Bc式・貝殻またはヘラによる条痕文で区画内を充当）・苦浜式系土器と、これらに近い時期のものとみられる土器が存在する。これらの土器は付着炭化物から年代分析を行っている。

以下に各土器のAMS補正値を古い順にあげる（第98図参照）。

No219（第8類・塞ノ神Bc式）がcalBC6380-6330、

No224（第10類）がcalBC5895-5840、

No225（第10類）がcalBC5665-5625、

No222（第9類・苦浜式系）がcalBC5540-5480の値を示す。これは土器付着遺物からの年代であり、土器

そのものが使用された年代を示す可能性が高い。

ここでは、特に器形に重点をおいて着目し、分析結果について検討したい。ここで注目されるのは直口する頸部のない形態である。この形態の土器について河口貞徳氏は塞ノ神Bd式の時期に出現するもので、これは塞ノ神式土器終末期のゆれを示す現象で次に発生する土器文化への胎動であるとする（河口1985）。

また、堂込秀人氏は苦浜式土器は塞ノ神式土器に続く早期後半終末であり、「器形は口縁部が外反し、頸部がゆるくしまり、胴部が膨らみ平底の底部に至るものと、頸部がゆるくしまり、口縁部が直立気味に立ち上がるもの、口縁部が内湾気味に立ち上がり、直線的に平底の底部に至るものと有る。」「胴部には貝殻による直線または波状の条線文を施す。縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を持つ。」「口縁部に貝殻腹縁による刻目が入る」などの特徴がみられる（堂込1994・1998）としている。

さらに、新東晃一氏は、直口形態を円筒形の塞ノ神式土器とし、苦浜式土器とは時間的に近い関係にあると考えている（新東1998）。ただし、年代観は河口氏・堂込氏とは異なる。

これらの先行研究を参考に、器形の新旧を想定すると①くびれを明瞭に持つ器形 → ②くびれはあるが明瞭でない器形 → ③くびれのほとんどない円筒形に近いずん胴の器形」といった流れが考えられる。

しかしながら、第98図は、（塞ノ神B式土器 → 無文土器 → 苦浜式系土器）という流れである。これは①→②→③→②となり器形からみた系譜の想定とは異なっている。特にNo225は、③のくびれのほとんどない円筒形に近いずん胴の器形を呈する。これは、堂込氏が苦浜式土器の特徴の一つとした口縁部刻目を有するものである。

この分析結果が妥当かは、今後の資料増加を待つよりほかにない。今後、出土状況を加味した型式学的な検討と科学分析による検討が必要であるといえよう。

なお、No224については器形と器面調整などの特徴から無文の塞ノ神式土器の可能性がある。

この他には、13類土器及び第3群の土器（中期の春日式土器）が特徴的なものとしてあげられる。

13類土器は、明確でない土器を一括したものである。この中には、隆帯文土器・岩本式土器それぞれに類似した土器が含まれているが、出土層・様相が明確でないものなどを含むため検討を要する。特に、Ⅴ層から出土した無文土器は器形が明らかなものとして重要である。この土器は、三角山Ⅰ遺跡で出土している隆帯文土器と製作技法などが類似するが、隆帯が施されていない。当該時期のものでは類例が少ないので、ここでは他の土器と一括した。

第3群土器（No364）は、1点のみ図化した。これは、口縁部に文様が集約されること・強いキャリパー状の器形を呈することの2点の特徴から春日式土器の前谷段階にあたるものである。近隣では、中種子町宮田遺跡で出土している。

出土状況図（第69・71～78図）は、それぞれの土器の出土状況について示したものである。これらの図からは、1つの土器集中ブロックが、ある一個体の分布域を示す場合がいくつかみうけられた。特に完形復元を行った土器についてはその傾向が強い。おおよその傾向としてそれぞれの土器の分布域は独立している状況といえるであろう。

4 石器

本遺跡は、三角山Ⅱ・Ⅲ遺跡と比較して遺物包含層の保存状態が良好であった。そのため、縄文時代早期の石器は図化したものだけでも77点上り、まとまった資料を得ることができた。石材も豊富で、三角山Ⅱ遺跡D地点と同様、目的に応じた石材の選択がなされている。特に、石皿の完形品は三角山Ⅱ・Ⅲ遺跡では出土していないため、磨石・敲石の使用目的を考察する上で重要である。

また、円グラフからは調理具（磨石・石皿）が狩猟具（石鏃）の倍近くの割合でみられることが理解される。

5 その他

調査および記録は行わなかったが、戦時中のものと考えられる濠が2基発見されている。Ⅱ遺跡の環状土坑と一連の可能性もある。

註

鹿屋市西原掩体濠跡で類似の資料が出土している。

参考文献

堂込秀人1994「熊毛諸島の縄文早期土器の一型式―苦浜式土器の認定―」『考古学ジャーナル』No378 ニューサイエンス

社

堂込秀人1998「苦浜式土器からみた塞ノ神式土器」『九州縄文土器編年―諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―』九州縄文研究会

鹿児島県教育委員会1990『中ノ原遺跡（Ⅱ）・中原山野遺跡・西原掩体濠跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2000『上野原遺跡（第10地点）（第1分冊～第3分冊）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（27）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2001『上野原遺跡（第10地点）（第4分冊～第10分冊）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『三角山Ⅰ遺跡（P地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（46）

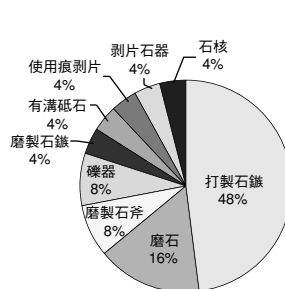
河口貞徳1972「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第6号 鹿児島考古学会

河口貞徳1985「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』第19号 鹿児島考古学会

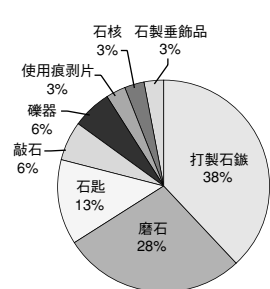
新東晃一1998「早期後葉の土器型式の諸問題―塞ノ神式様式・平椀式様式の二系統を中心に―」『九州縄文土器編年―諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―』九州縄文研究会

東和幸 1994「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会

三角山Ⅱ遺跡D地点石器構成



三角山Ⅱ遺跡E地点石器構成



三角山Ⅳ遺跡石器構成

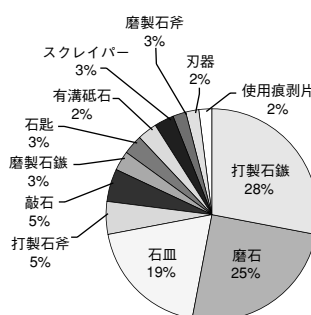


図 版

三角山Ⅱ遺跡



P 1 II 遺跡確認調査 1 トレンチ



P 2 II 遺跡確認調査 6 トレンチ



P 3 II 遺跡確認調査 7 トレンチ



P 4 II 遺跡確認調査 7 トレンチ



P 5 II 遺跡確認調査 8 トレンチ土層断面

図版2



P 6 II 遺跡確認調査 10トレンチ



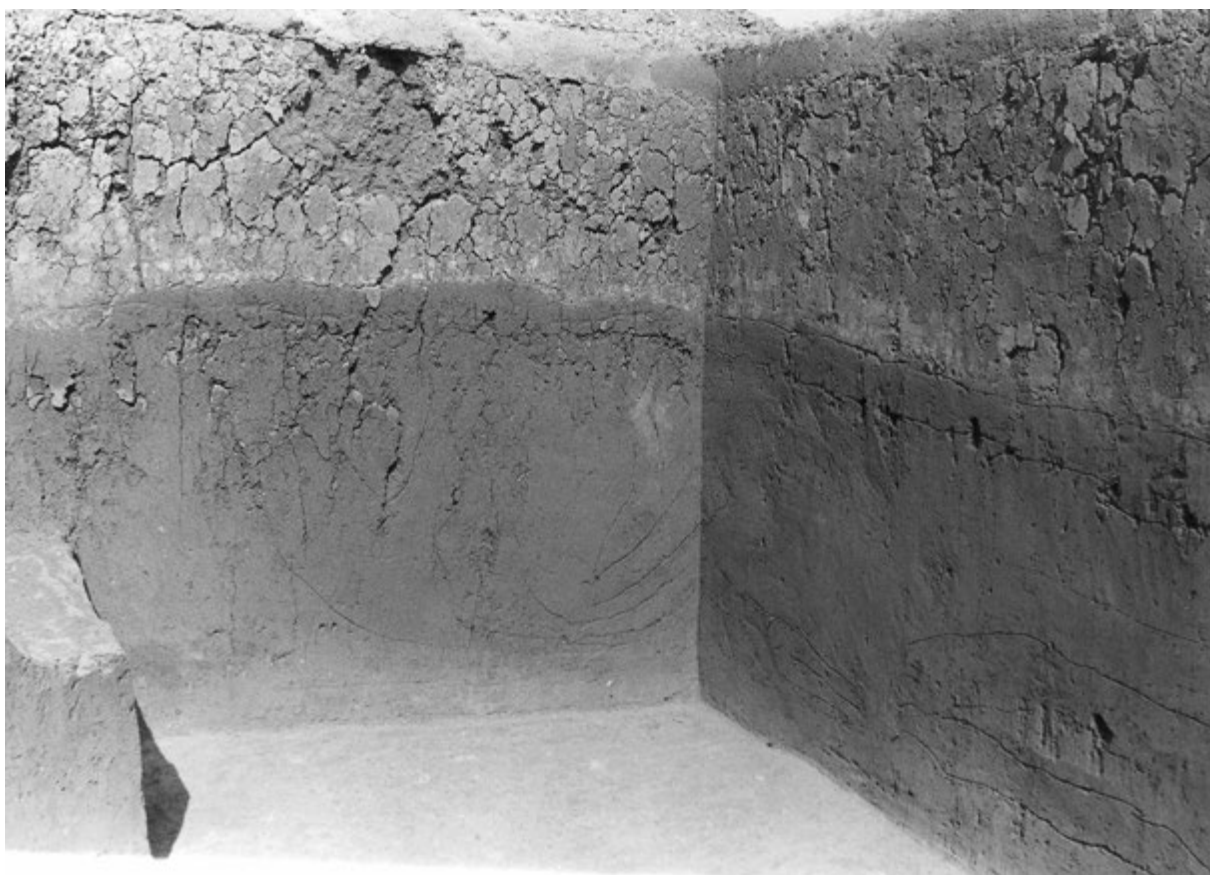
P 7 II 遺跡確認調査 11トレンチ



P 8 II 遺跡確認調査 17トレンチ



P 9 II 遺跡確認調査 43トレンチ



P 10 II 遺跡確認調査 32トレンチ土層断面



P 11 A地点土層断面



P 12 A地点近代環状土坑（M－3区）



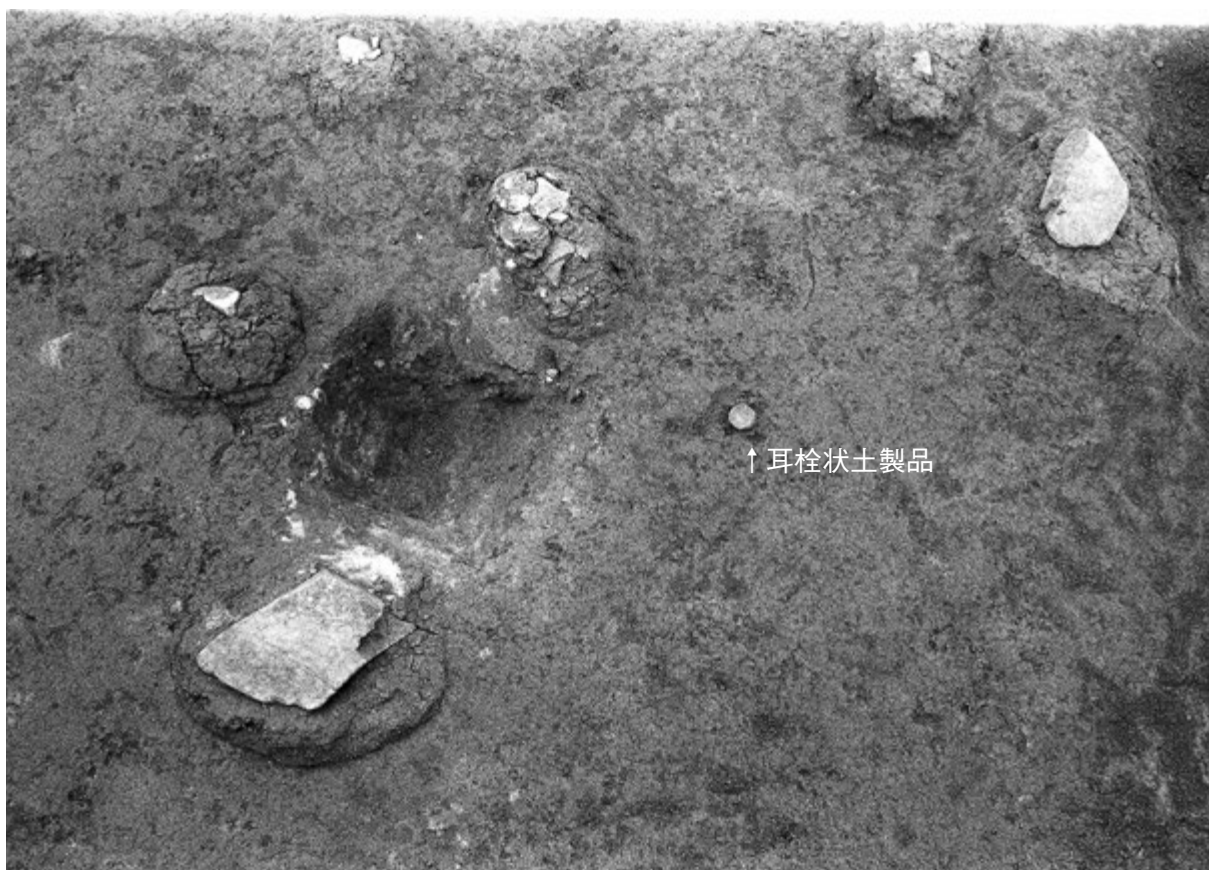
P 13 A地点Ⅰ層検出土坑3 (M-3区)



P 14 A地点完掘状況 (L・M-3・4区)



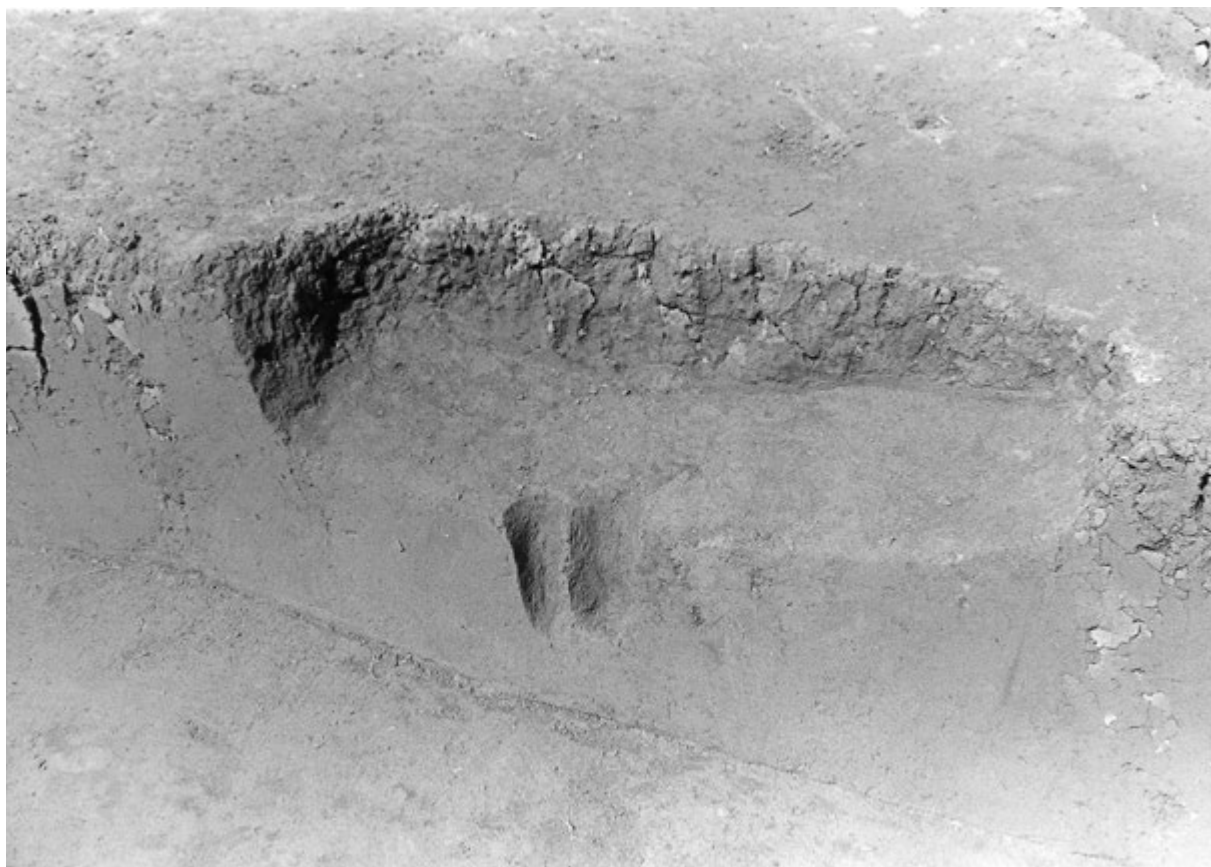
P 15 B地点Ⅲ層遺物出土状況 (K - 9 区)



P 16 B地点3号集石 (配石遺構) (K - 9 区)



P 17 B地点Ⅲ層検出土坑1（1）（K—9区）



P 18 B地点Ⅲ層検出土坑1（2）（K—9区）



P 19 C地点Ⅲ層遺物出土状況 (J-10区)



P 20 D地点土層断面 (N-4・5区)



P 21 D地点 近代環状土坑 (N—5区)



P 22 D地点Ⅲ層遺物出土状況(1)(N—5・6区)



P 23 D地点Ⅲ層遺物出土状況 (2)



P 24 D地点Ⅲ層土器出土状況 (N—6区)



P 25 D地点Ⅲ層石斧出土状況



P 26 D地点 1 号集石 (N — 6 区)



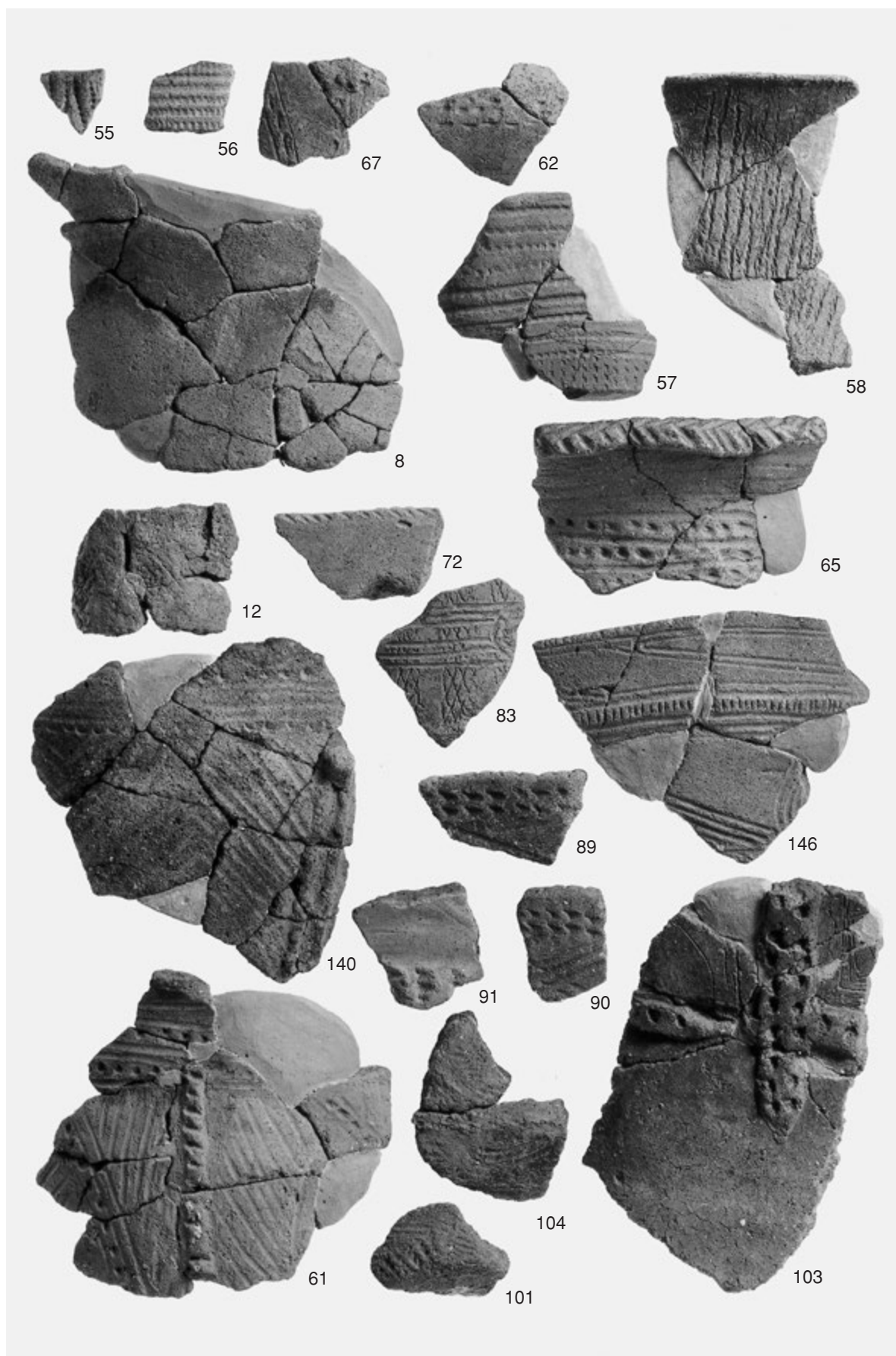
P 27 D地点 3 号集石 (E — 10 区)



P 28 E地点Ⅲ層遺物出土状況 (P・Q—6区)



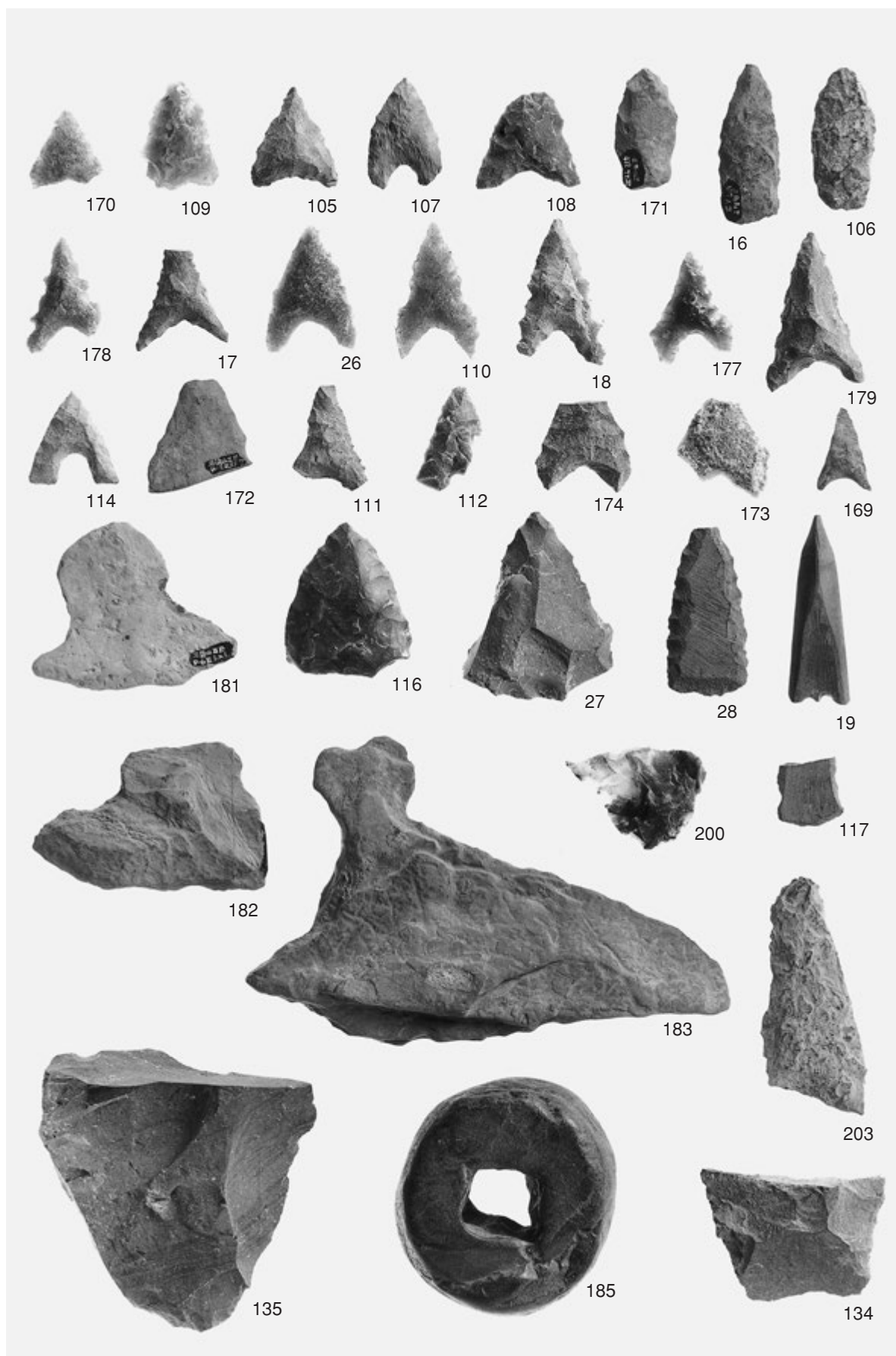
P 29 E地点1・2・5号集石 (P・Q—6区)



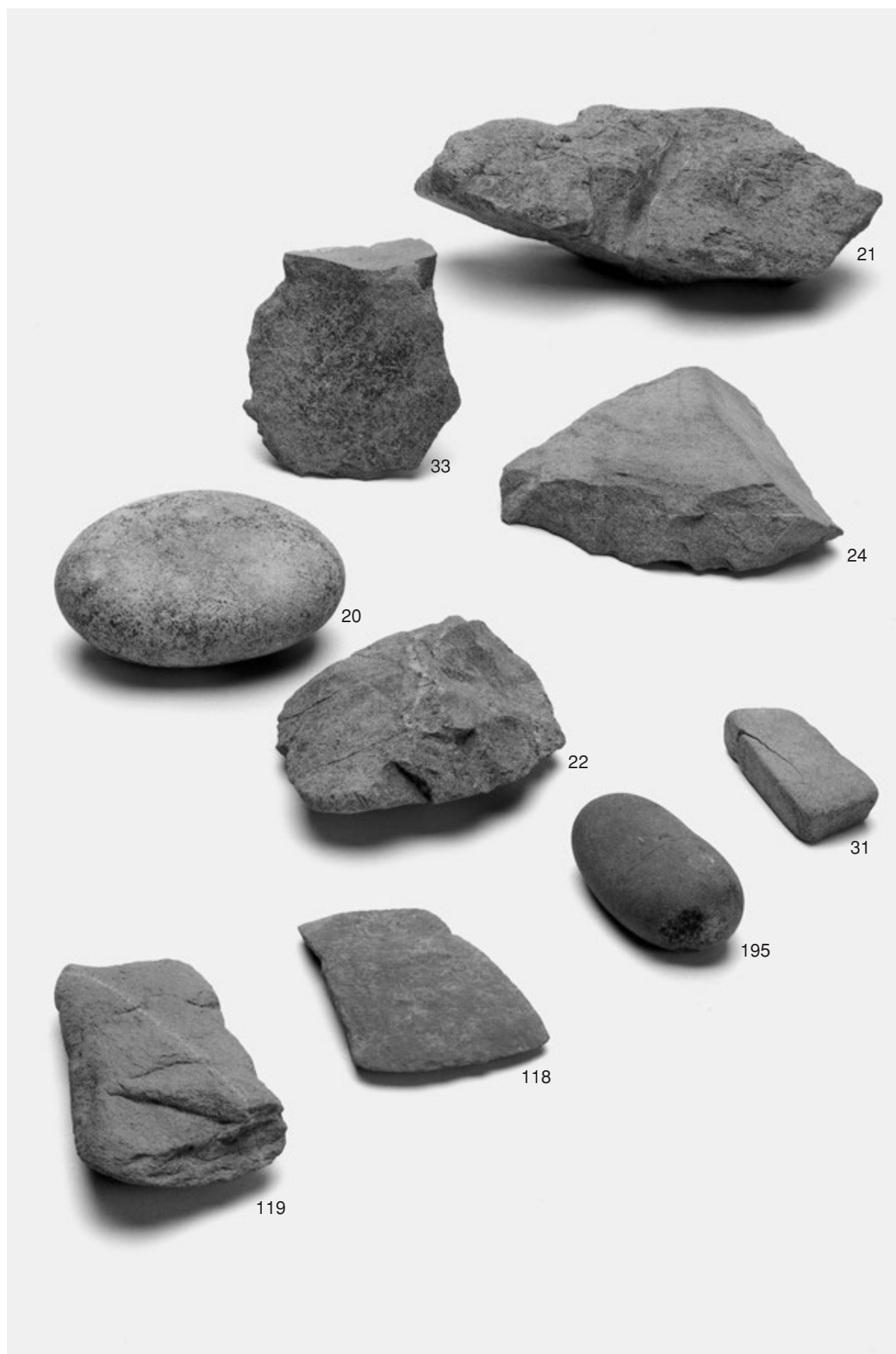
P 30 II 遺跡出土の土器（1）



P 31 II 遺跡出土の土器（2）他



P 32 II 遺跡出土の石器 (1)



P 33 II 遺跡出土の石器 (2)

図 版

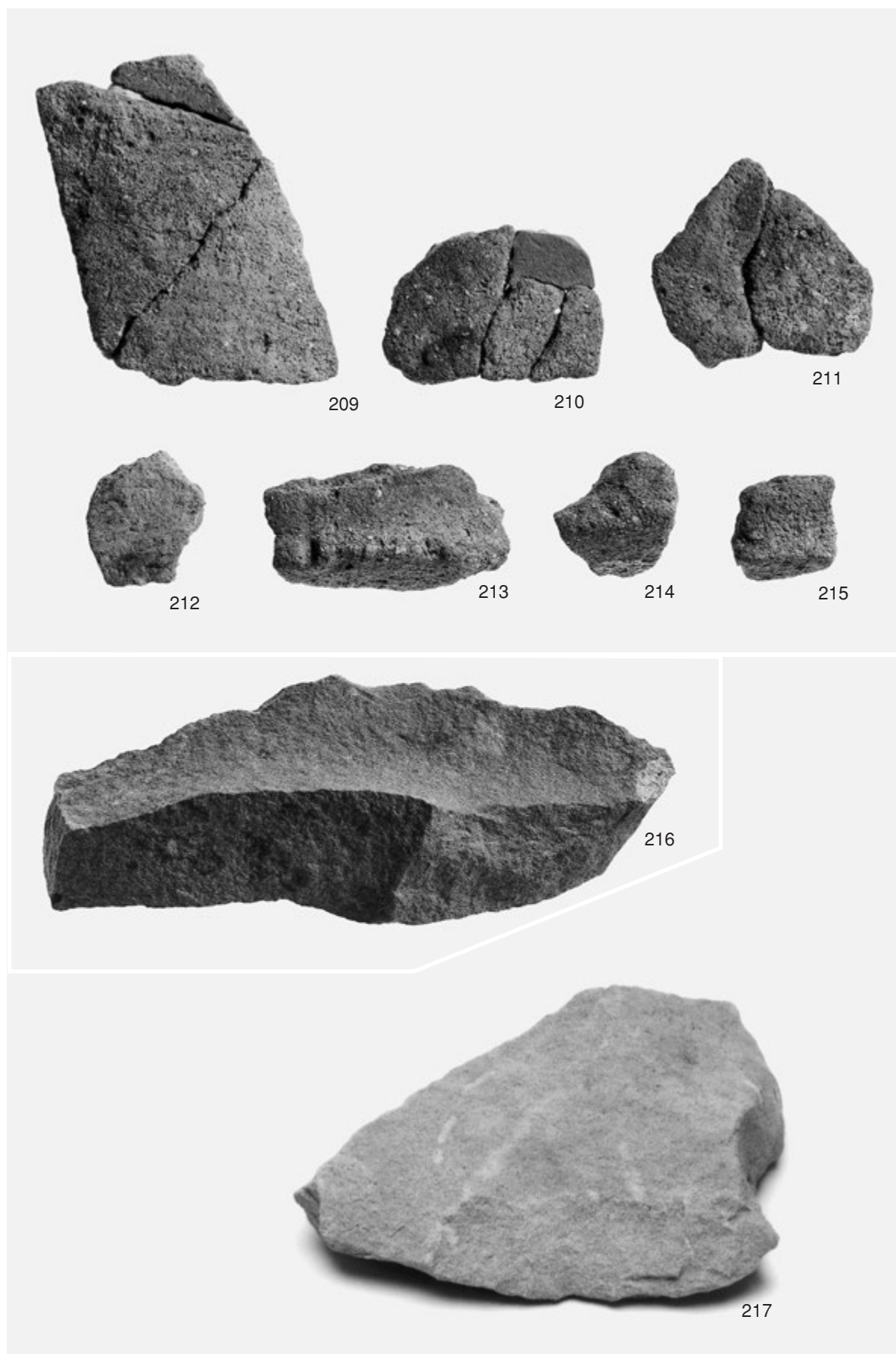
三角山Ⅲ遺跡



P 34 Ⅲ遺跡発掘作業風景



P 35 Ⅲ遺跡完掘状況 (B - 2 区よりA - 1 区方向を望む)



P 36 Ⅲ遺跡出土の土器・石器

図 版

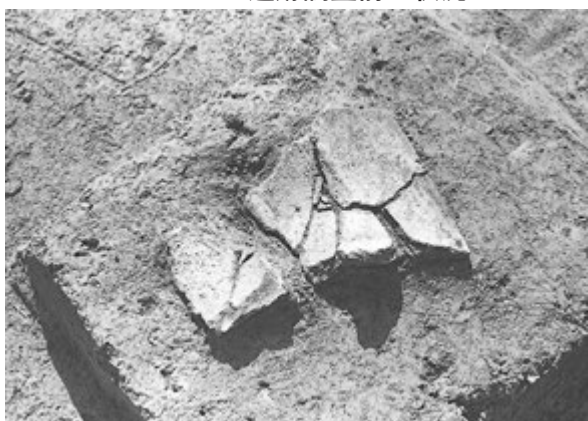
三角山Ⅳ遺跡



P 37 IV遺跡調査前の状況



P 38 IV遺跡トレンチ作業風景



P 39 IV遺跡土器出土状況 (1)



P 40 IV遺跡土器出土状況 (2)



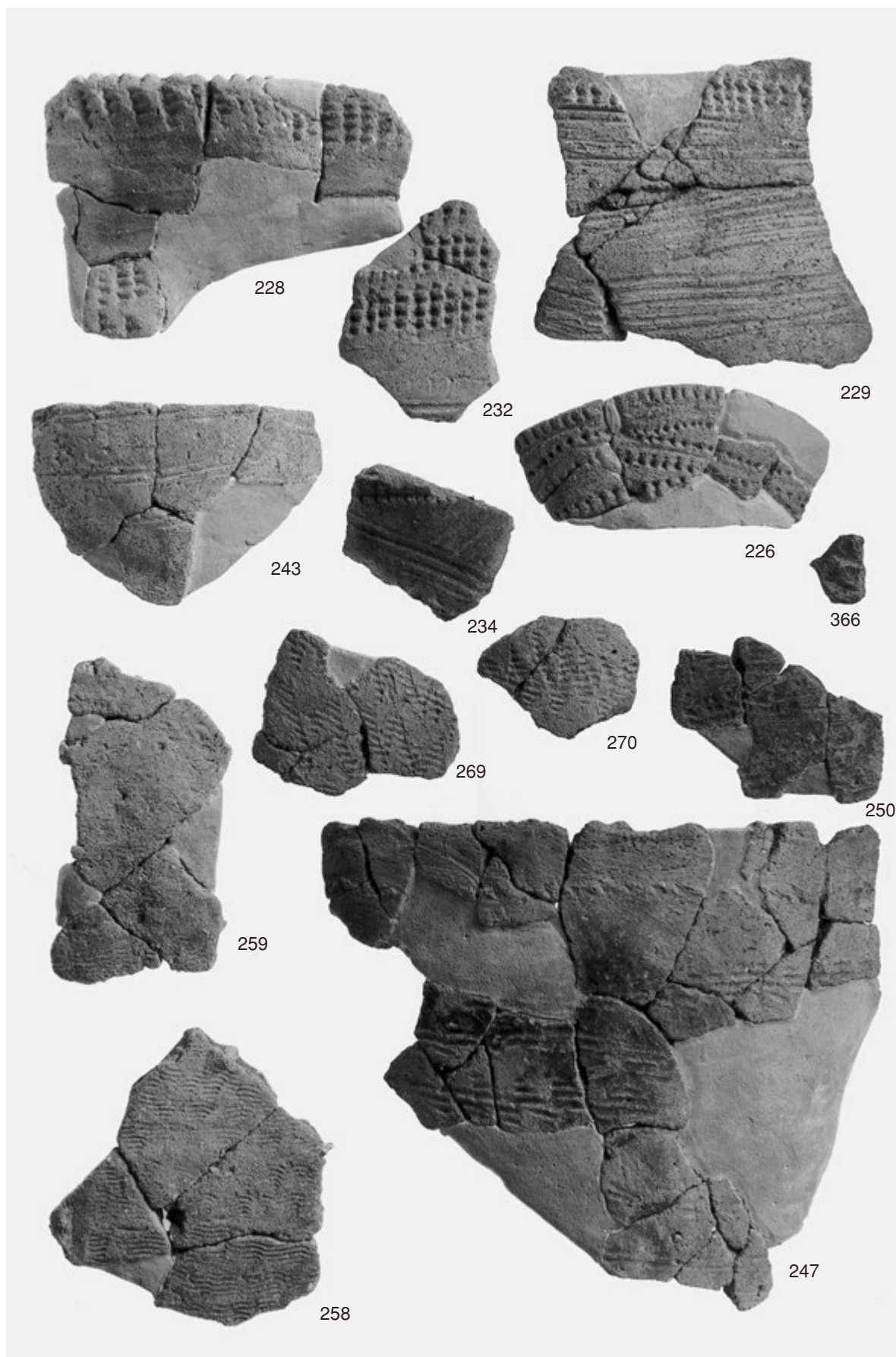
P 41 IV遺跡発掘作業風景 (E-10区よりD-6区方向を望む)



P 42 IV遺跡 1号集石 (D-10区)



P 43 IV遺跡 8号集石 (E-6区)



P 44 IV遺跡出土の土器（1）



P 45 IV遺跡出土の土器（2）



227



223



225

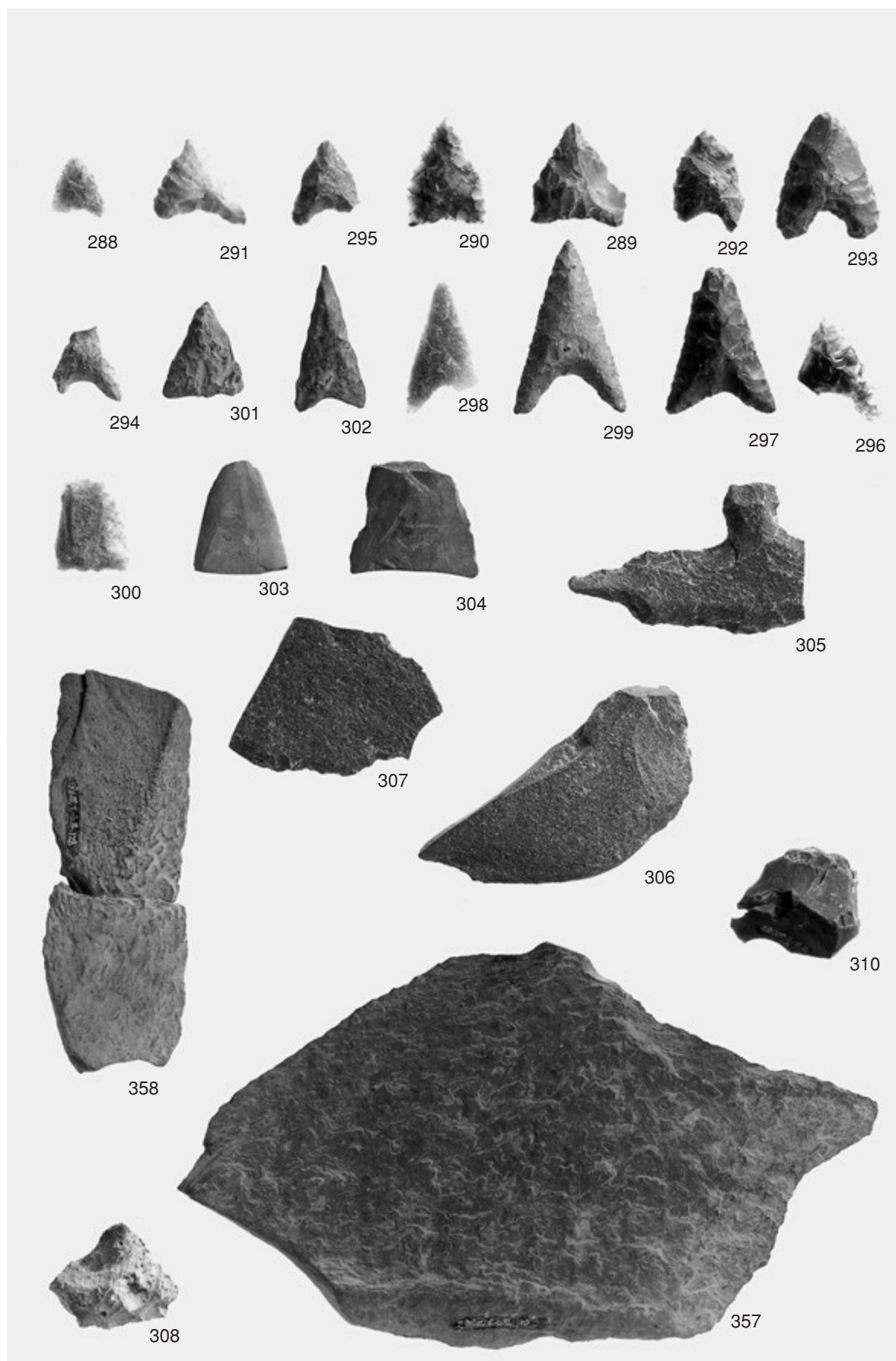


224

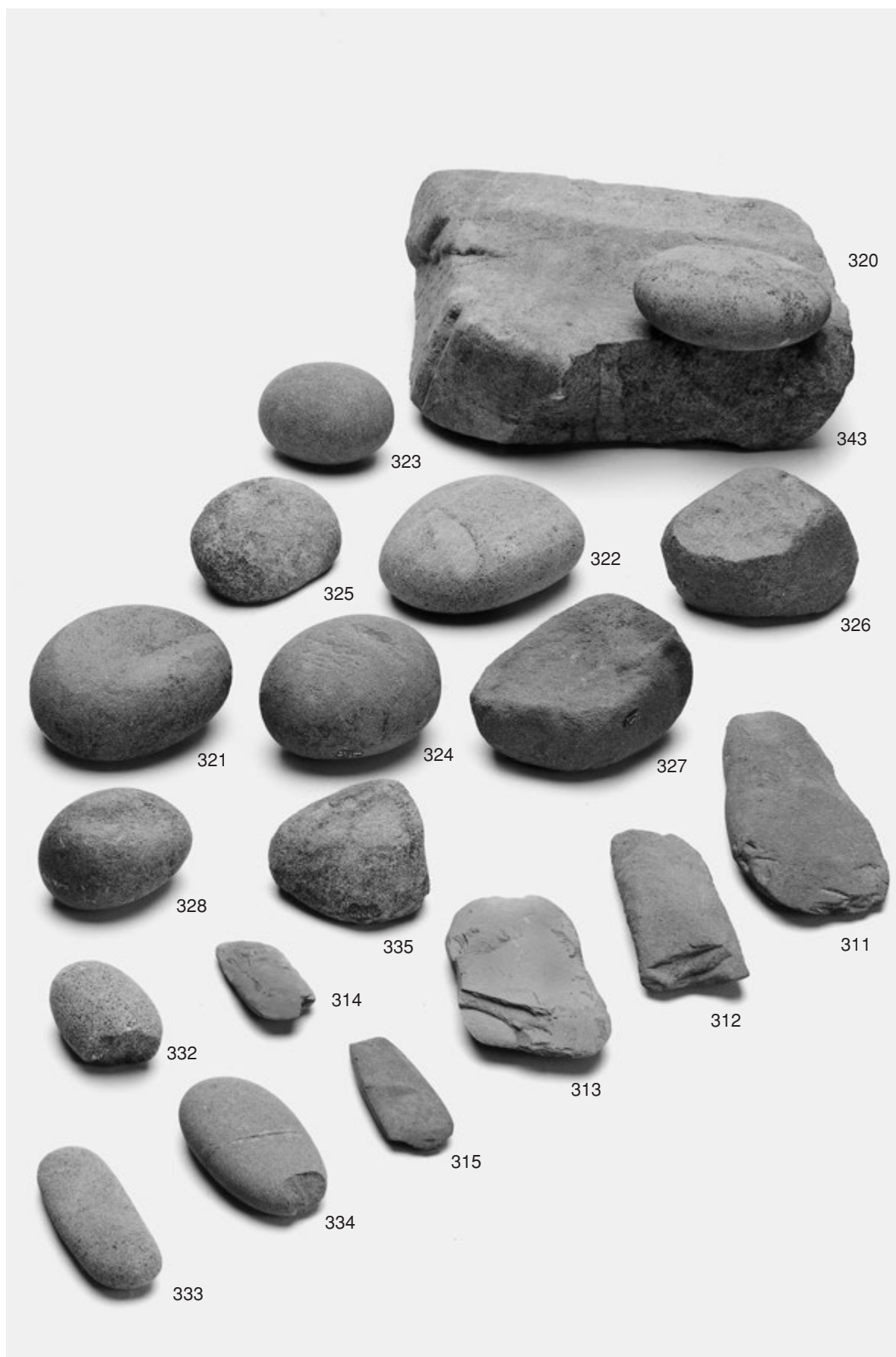


364

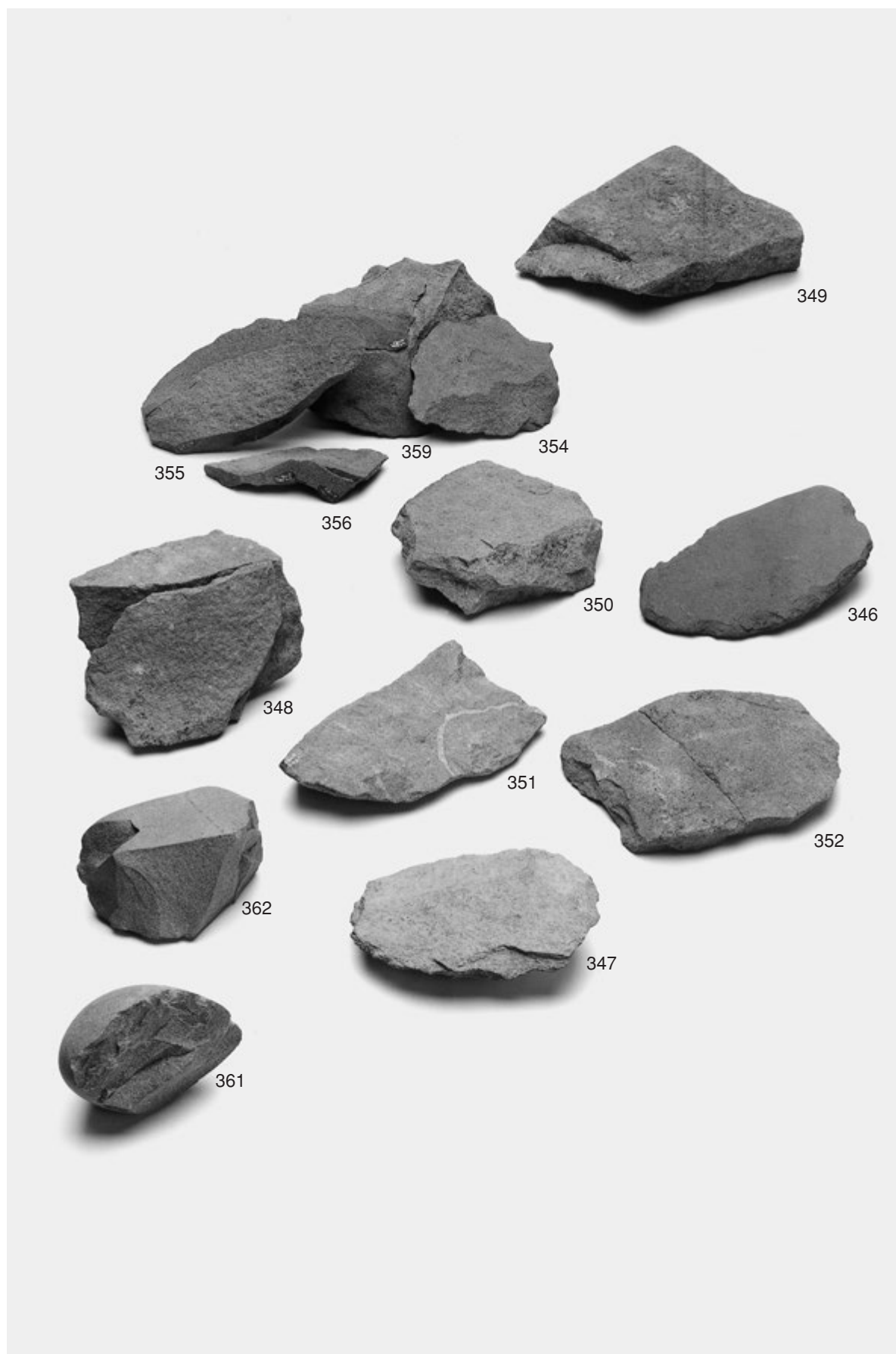
P 46 IV遺跡出土の土器（3）



P 47 IV遺跡出土の石器（1）



P 48 IV遺跡出土の石器（2）



P 49 IV遺跡出土の石器（3）



353



339



343



345

P 50 IV遺跡出土の石器（4）



P 51 発掘作業員（平成7年度）



P 52 三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡全景（空撮）

あとがき

「屋久島が見えると雨になる」

地元の作業員さんの言葉である。なるほど、隣の島でありながら神秘のベールはなかなか厚く、めったに全景は見られない。しかし何ヶ月もの発掘調査期間中には、何回か洋上アルプスのごとき絶景をながめることができた。そして決まって天候が崩れるのである。

雨が降ると作業が遅れる。でも屋久島を背景にした遺跡写真はすばらしい。限られた期間内に調査を終えなければならぬ我々にとって、痛し痒しだ。

太古の人々にとっては、どんな意味を持っていたのだろうか。雨が降ると体がぬれて熱を奪う。森の木々から原始のにおいが一斉に解き放たれ、狩人の体臭を覆い隠す。草間から、木の葉ごしに屋久島を仰ぎみたとき、人は何を思ったか、今は想像するしかない。

大勢の人々の協力で、残されたものを精一杯集めて、記録して、調べて、この報告書をまとめることができた。歴史の営みを後世に伝えるために・・・。

(M・F)

前任者からの引き継ぎでこの報告書の編集を担当した。はじめの頃は悩むばかりで、自分は果たしてこの遺跡のことをどれだけ知っているのだろうか？そして自分にはやり遂げることができるだろうか？と考えていた。なんとかかんとかここまでやり遂げることができたのも周りの方々の協力と叱咤激励(?)のおかげである。それでも課題は多く残った。

特に砂岩製の石器の製作過程の解明については、やり遂げることができなかった問題である。この問題についてはこれから追求しなければならない。どのような用途のために母岩として砂岩を用いたのか。種子島の縄文時代早期の生活のありかたを考えるうえで重要な問題である。浅学な私にとって、これから追求していきたい課題の一つとなった。

ところで、平成15年1月で、平成7年1月から続いた新種子島空港建設に伴う三角山遺跡の発掘調査も完全に終了した。なかには今回でちょうど規定年齢に達した作業員さんもおり、感慨深いものがあった。調査終了日の現場終了挨拶は本当に「涙」「涙」であった。思い返せばキリがないが、たくさんの方々にさらにたくさんの協力を得た調査であったことをそのとき改めてかみしめたものである。

繰り返すが、種子島ではもっとも天に近い場所の一つである三角山遺跡で多くの人々が9年にわたって調査に携わった。このことはこれまで刻まれた歴史のなかではほんの一瞬にしかすぎないかもしれないが、私的には何かを残せたようなそんな気になっている。当分この大きな勘違い(?)による達成感はいくせになりやみつきになりそうである。

(M・U)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(63)

新種子島空港建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

三角山遺跡群(2) (三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡)

2004年1月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175-1
印刷所 株式会社 秀巧社印刷
〒890-0072 鹿児島市新栄町25-7